女人藝術



附錄 女人大衆


資生堂化粧品
各地資生堂チエインストアーにあり
日焦け防きクリーム
ウビオリン
夏季の御外出や
海水浴に
お用ひになれは
日焦けを
完全に防ぎます
（七十錢）
東京 資生堂 銀座

日英米佛專賣特許
池田理學博士發明

天狗になるのぢや
ないけれど、味の素の
調味は事實うまいから
うまいと云ふのさ……

味の素



宮内省御用達　味の素本舗　鈴木商店



女人藝術創刊一週年記念七月號 目次

—禁轉載—

附錄 女人大衆

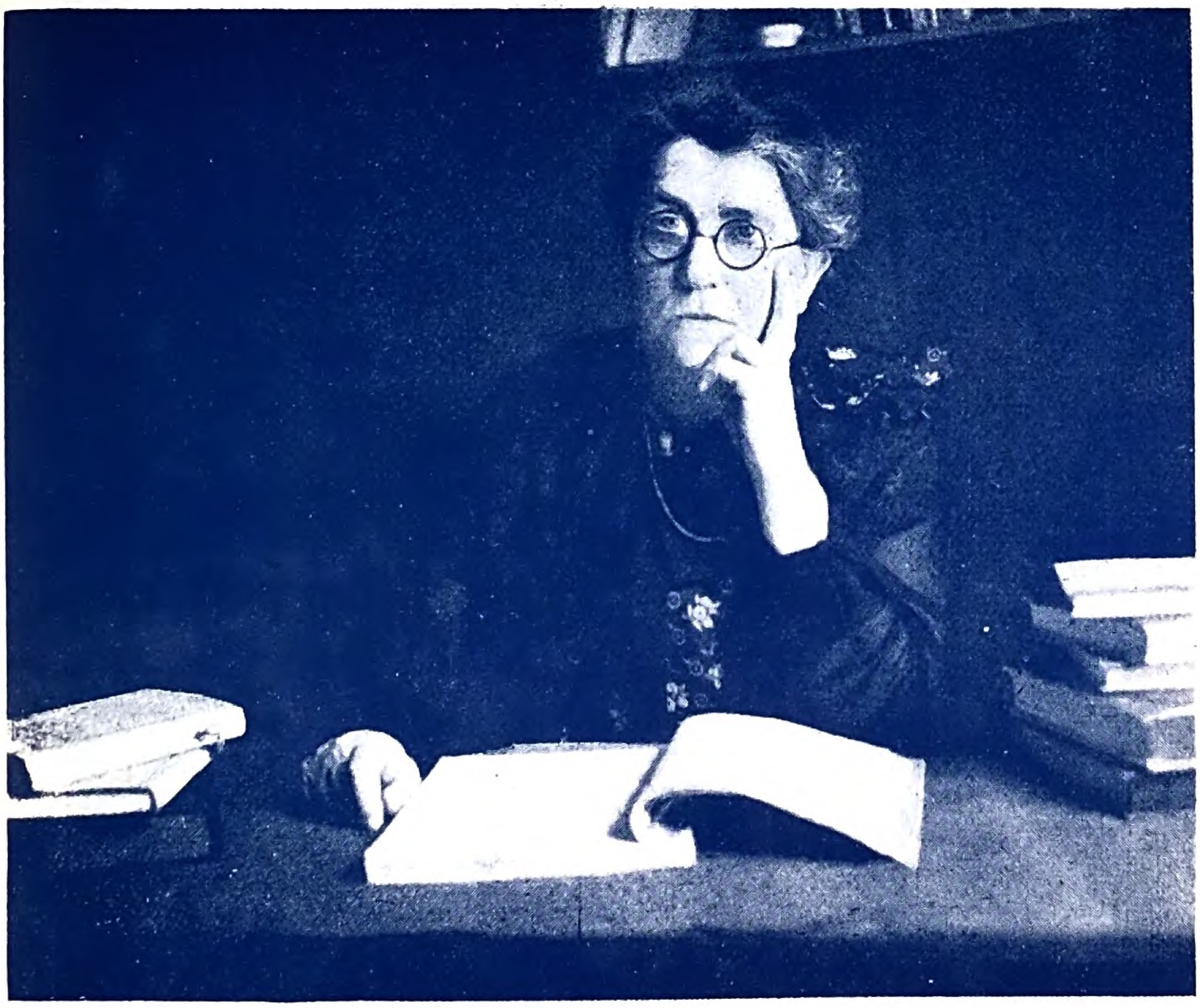
公開狀





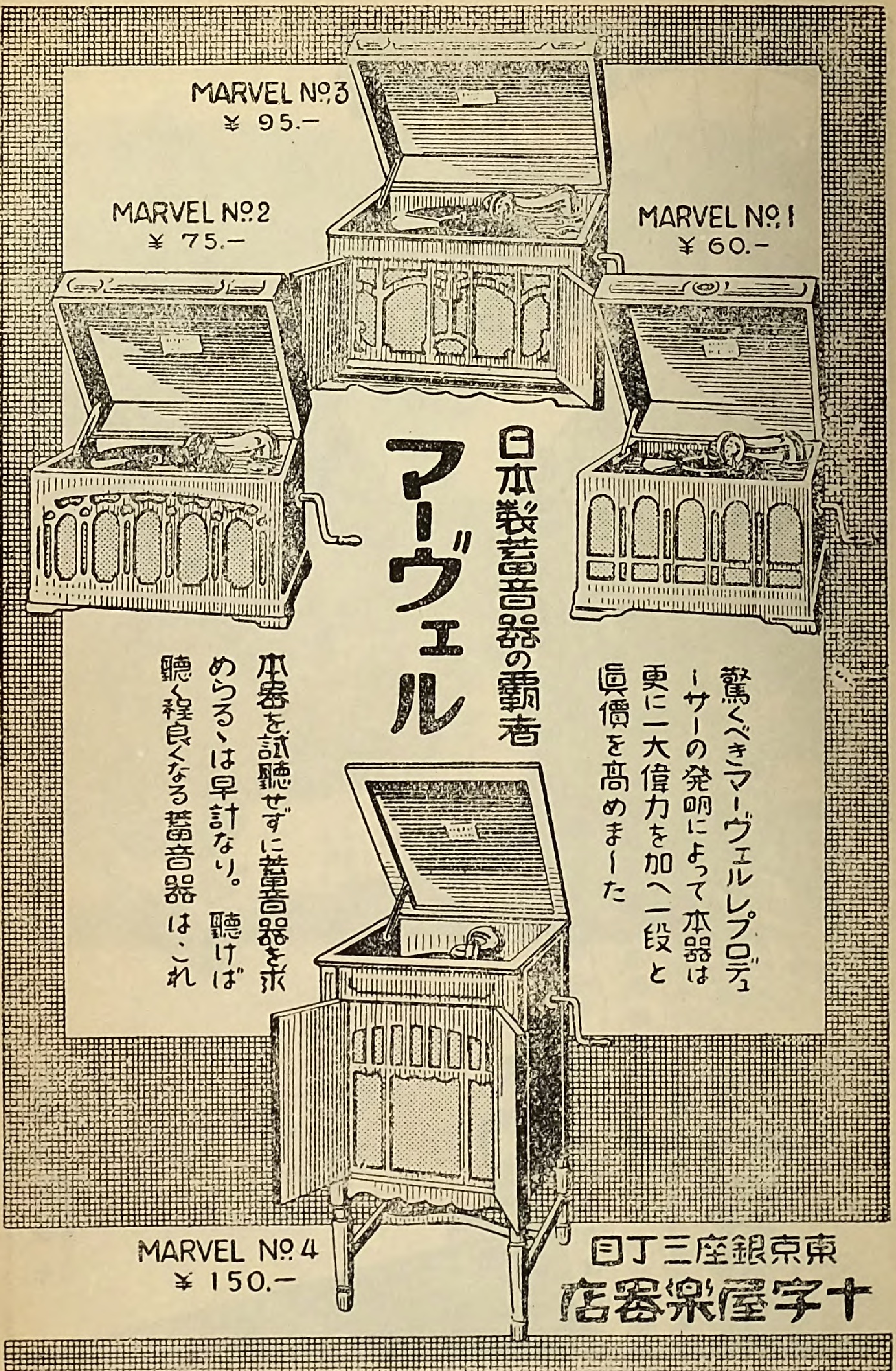
ほんの
わづかでよい
いろいろの人が
私をみるやうに
私も
いろいろの人が
みるやうに私を
みてみたい。

—富本一枝—



ロシアが生んだ多くのアナキストの中に一つの輝きをもつエマ・ゴールドマンの近影――彼女はいま佛蘭西のサン・ツローペにありアナキズムの國際的機關誌フリーダム及びロード・ツ・フリーダムに執筆して闘ひつゝ、その夫である伯林のアナキスト・インタナショナルの書記局主腦ベルクマンの事業を援けてゐる。

十九世紀末の帝政ロシアを席捲した恐怖時代を少女期にすごして十六歳の時姉と共にアメリカ合衆國へ移民として渡つてからコルセット工場に默々として働くうち彼女はいつか一人の無政府主義者であつた。幾度かの牢獄生活、そして世界大戰の際に起した有名な非戰運動――ロシア革命の年百三十人の同志と牢獄から追放されて故國へと歸つてきた。彼女はいま自叙傳の前半を書き終り、スペインの旅から歸らうとしてゐる。


MARVEL No.3
¥ 95.-
MARVEL No.2
¥ 75.-
MARVEL No.1
¥ 60.-
日本製蓄音器の覇者
マーヴェル
驚くべきマーヴェルレプロデューサーの発明によって本器は更に一大偉力を加へ一段と眞價を高めました
本器を試聽せずに蓄音器を求めらるゝは早計なり。聽けば聽く程良くなる蓄音器はこれ
MARVEL No.4
¥ 150.-
東京銀座三丁目
十字屋樂器店


潑剌たる青春の象徴！
お化粧水
ヘチマコロン
常に若々しく美しきお肌は
日やけを防ぎ色を白くし
きめを細かにする
ヘチマコロン御愛用の賜！
お化粧下に
おしろいのとき水に
御寝みになる前の
御化粧に
お髭剃の後に好評
定價 大瓶五十錢 小瓶三十錢
本舗 天野源七
東京日本橋檜山町



新らしき女性の力



東京養育院少年音樂隊の練習——井の頭公園にて

三上於菟吉・長篇小說集 第二卷（新刊出來）

惡魔の戀

黑髮
颶風

「惡魔の戀」は僕が、二十七八歳になつて始めて人生の苛辣な姿に憤怒を感じたころ書いた長篇だ。僕は總ゆる醜惡と野卑とを、奥齒を嚙み締め乍ら、その中に叩き込んだことを覺えてゐる。大向うは大分受けた。「黑髮」は前者に比較すれば大分落付いた三十五歳の作で、愛慾の解剖に於いては、僕半生を通じて最も成功し得たと信じてゐる。この二作は各々異つた意味で作者偏愛の作と言つてもいい。「颶風」は淫蕩な女性の生活史だ。よくもこんな淫らな世界を描いたと自分でも呆れてゐる。が、ある讀者の興味を繫ぐだけの力は持つてゐるだらう。總紙數一千數百枚。いづれも心血は注いであると自信する。（作者）

▼四六判特製
▼六百四十頁
▼壹圓八拾錢
▼送料拾貳錢

第一卷 激流

著者が心血を吐露せる大長篇傑作である。

▼價壹圓七拾錢
▼郵送料拾貳錢

東京牛込 新潮社 振替東京一七四二

プロレタリア

大衆

娯樂雜誌

愈々完成した七月特輯號

◎小説と講談

自由黨秘聞 加波山（大長篇）……落合三郎 目黒ウマル畫

霧のアパートメント……林房雄 一刀研二畫

◎特別讀物

支那革命秘話 燃ゆる上海……藤枝丈夫 支健二畫

錦閨悲戀 鴻池福子夫人……時雨

農村婦人三型……神近市子

あの客この客……城しづか

實話

蛇と踊る女……青木純三

同志K子の死……宇田刈俊

女人懺悔……三原司綾

桃色漫談

宵闇迫れば……秋葉勝雄 村田書

男爵と地震……眞田勘三 一刀研二畫

◇逆說後藤新平傳……井東憲

◎映畫と探偵小説

ソフ・キノ製作 革命映畫物語 一日間……佐々元十 一刀研二畫

連載 フローレンス奇談（デスベリー作）……辻恒彦譯 村山知義畫

英國總選擧……鈴木厚

露領漁區自由出漁問題のからくり……芝山曉鐘

マルクス・エンゲルス雜話……鈴木厚

芝公園十號の四

振替東京八〇五〇一番

大衆社

定價三十錢

長谷川時雨著

近刊

定價金壹圓參拾錢

長篇 處女時代

裝幀 三上於菟吉氏
口繪 池田輝方氏
挿繪 池田蕉園女史
挿繪 廣嶋晃甫氏

內容
處女時代
呪の家

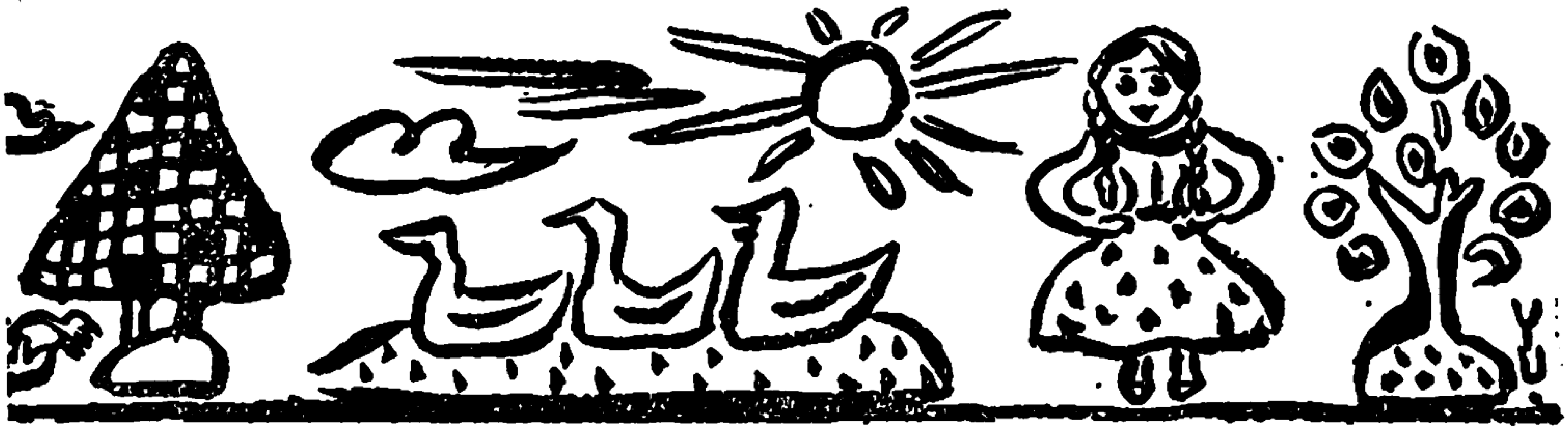
「呪の家」――は古き時代の奇しき戀愛葛藤を描き、
「處女時代」――は現代の哀切なる悲戀を描く。

東京市麴町區下六番町十 平凡社發行 振替東京二九六三九 電話九段一六六四

女人藝術

7 月 號





藝術祭豫告!!

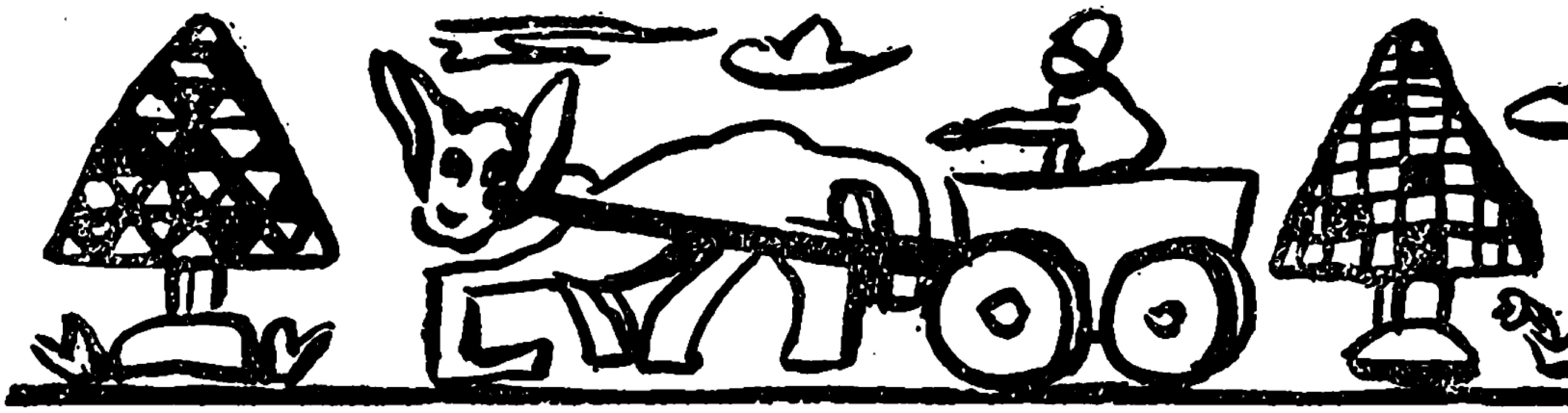
一於日比谷公園音樂堂
一六月廿二日(土曜日)午後六時開場(雨天の節は廿五日)
一入場券——五十錢◆團體券 學生券——卅五錢

入場券賣場 銀座・十字屋樂器店・山野樂器店・プレイガイド・レストラン エスキーモ 新宿・紀の國屋書店 白山上・南天堂 赤坂表町二丁目・しよび苑
當日・音樂堂入口札賣場にて

第一部

講演

題未定　神近市子
新劇運動雜感　上田文子
女人よ何處に行くか?　望月百合子
白帆を呼ぶ　林芙美子
女流作家の社會的地位　中本たか子
無産婦人と廢娼　松村喬子
感想　平林たい子



（休憩）

第二部

舞踊（小曲・三）

1「マツルカ」ドビッユッシイ曲
2「歌のない子守唄」ブラームス曲
2「光は躍る」グリーク曲

石井小浪

音楽

A セキデイリアの唄
B カルタの唄
C ジプシーの唄

アルト　四谷文子
ピアノ　井口愛子

演劇

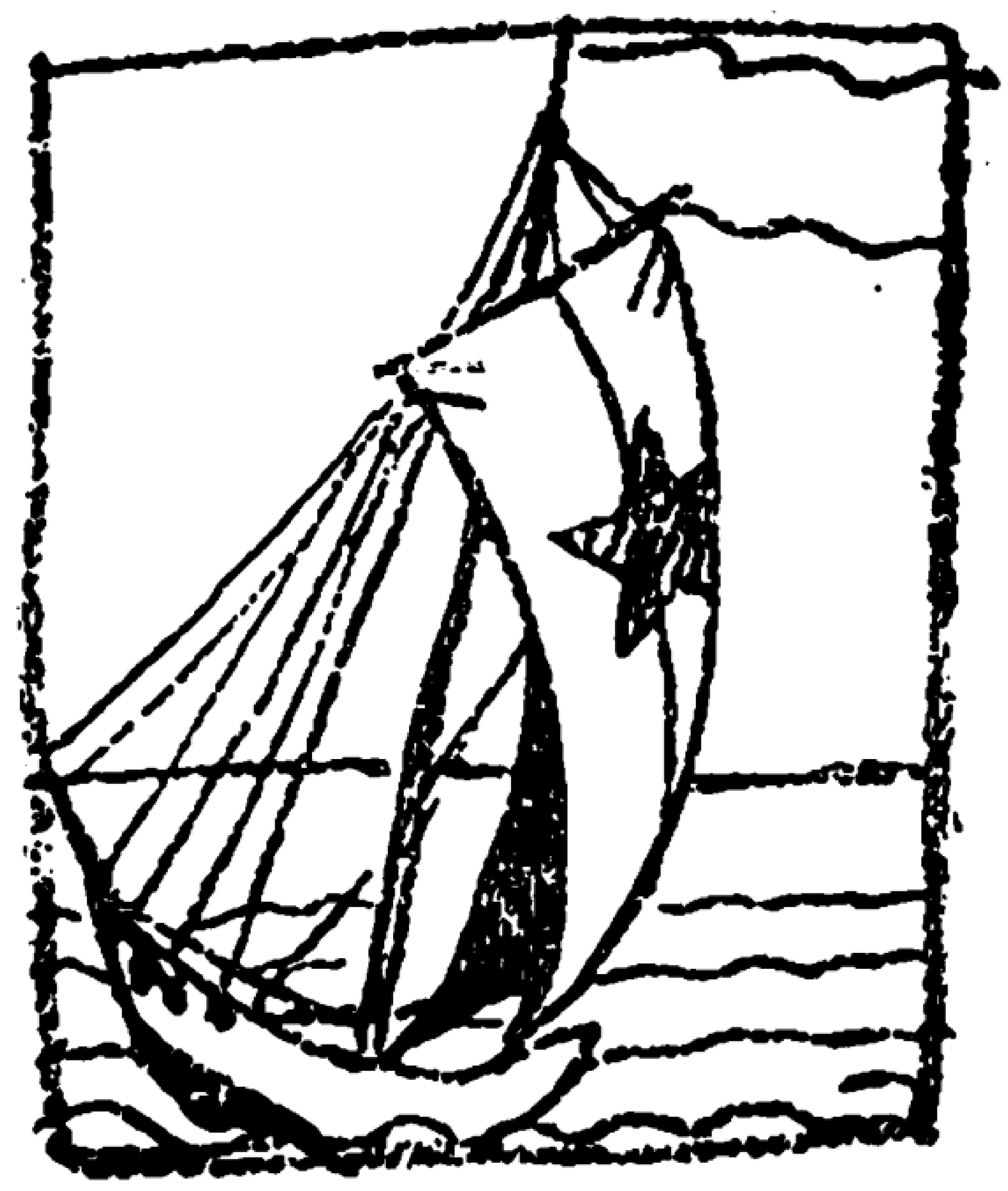
金子洋文氏作
「牝鶏」――一幕

新築地劇團

配役

東助	丸山定夫
とき	高橋豊子
お銀	山本安英
よし	細川ちか子
謙吉	伊藤晃一
舞臺装置	吉田謙吉
舞臺照明	神尾耕三
舞臺効果	宮本虎夫
演出	土方與志

本誌創刊一週年紀念!!



星加雪乃

夜明けに吸はれた煙草

—一九二九年の夢—

富本一枝

私はこんな夢を見た。一九二九年六月の或る夜明であつた。私の親しい友人達は屢々こんなにも不思議で長い夢を見る私の癖と言へばよいか一種特別な夢の病を歎きながらも眞にうけてくれる。しかし大方の未知の人人は恐らく私の夢を眞にうけてはくれまい。それほど私は不思議にも巧く綴りがついて消し去りたくても失くしきれない記憶をはつきりと殘す夢に襲はれてゐる。私はこれから書かうとする夢が未知の人々に對してどう働きかけてゆくだらうなど氣にかけはじめたなら、おそらく書くことを最初に斷念するより仕方がない。

しかし、私のやうに夢について性格をもつてゐる人々はこれから語られてゆく話がいかさまものであるか、それとも眞の夢であるか、夢でなければ見ることの出來ない夢であることを容易に見わけることが出來やう。意味のない英字で頭文字を使ふことは私の本意ではないが、そんな面白くないやり方には充分不服ではあるが、もしも變な人間の誤謬が與へられるやうな事でもあつては、と言ふ心づかひが私にあへて常套な方法をとるやうにしひた。

K、M、H、N、I、O、これらの諸氏はいづれも當代の人々で、みな私の親しく感じる友人である。

唯、夢である。一九二九年六月、千歳村の夜明けのことであつた。

大きく仕切られた鏡にむいて、なんのしなとてない至つて愛想のない姿の私が立つてゐた。

鏡は大變質のよいものと見えて粟粒ほどの空氣孔もない。厚さも餘程ある。鏡のふちが七色のプリズムで美しい輝やきがあつた。鏡であつたものが實は室であつた。友人の幾人かが中央に置かれた卓の周圍に集つてなにかしきりに話してゐる。その話がまるで聞へてもよい位置にある私の耳に、耳からはすこしも聞えてはこないのに、私には話の種類がよく解る。私が小説をかくと言ふことだが小説を書けるやうな人間だらうか。もし小說を書くといふことで相談をうけたら、それに賛成してよいかどうか、それをしきりと話

しあつてゐる、そう言ふことが解つてゐた。
友人のなかで煙草好きなI氏が私とむき合つた場所でしきりと煙草を吸つてゐるのに煙草の烟(けむ)がちつともたゝない。それにもかかはらず隣席のK氏とM氏はさも煙つぽいと言ふ顔で時々手で煙りを追ひはらふやうな格好をする。それが可笑しいために私は法外な笑ひ聲をたてたが誰一人として私に關心するものもゐなかつた。いつたいこゝは室のなかであるのだらうか、それとも私の立つてゐる場所は室の外であるのか、

「小説をかく？ それには先づ態度を決める必要がある。あなたがプロ派に屬すか、必然的に崩壞の道程に現に置かれてゐるブル派に屬して仕事を始めるか、この問題が肝心な點だと私は思ひますが——御本人はいつたいそのどちらを撰ぶつもりです!?」

私がそれに答へもしないのに話はどしどし進行する。K氏——問題を私に與へたのはK氏である——は苦い顔をして

「そりやいけない！」と叫んだ。

「なにがいけない？ 利口でない方がいけないとおつしやるの？」

M氏だ。あんなことを言ひ出すのはまづいなあ、と思ふと、M氏は私のそばに飛んできて耳朶をひつぱりよせるなり低い低い聲でこんなことをきかせる。

「あの方のお利口屋さんだと云ふことを御存知？」

「知りませんね、誰でもがそんな風に思つてゐるのでせうか？ 知らないのは私一人ですつて!?」

「早變りの曲藝!!」

K氏の眼は強く光つた。私はあはてゝ耳をふたしたが、M氏はますます強く私の耳朶をひつぱりよせてなにやら饒舌つた。

いつのまにこんなに澤山の人々が集つたのだらう。大きい卓は面(つら)の眞中だけ見えるだけである。人だかりは眞黑で誰が誰だか見境へが出來ない。

「百姓の生活描寫、工場に働くものゝ描寫、プロレタリヤ藝術は有産階級文學の如く墮落してはゐない。プロレタリヤ藝術は社會本位の思想にあつて價値を生じる。輕蔑すべき個人主義は吾等にとつては明かに過去の産物にすぎない。ニイチエの毒は今も未だ人間の正しい生活、社會本位の生活の發展を阻害する。 個人的生活を否定し、個人本位の害毒を取除かない限りブル的なものは飛躍し得ずに自滅の底に深く埋沒されてゆかう自我とはそれほど守本尊にしてよいものであらうか？ 賴むにたらぬものに死守してゐるブル共よ！ 唯物的な原則！ 機械的法則！ 花が咲いた、花はしぼんだ！ これにも自我の絶對威力がありますか？ マルクス・エンゲルス二人の顔に冷笑の浮ぶを見ることの出來ないブル的近代人よ。 見て御覧！ そらそこに唯物主義(マテリアリズム)が横たはつて諸君の進路を見事にぶちきつてしまつた！」

K氏だ。解つたやうで解らない事を饒舌るなど一寸感心出來ない。K氏はもつと論理が整然とたつのに今日は出來がまづい。

私はそれでもさかんな拍手を送つてゐたら、いきなりN夫人が卓の上に跳ねあがつて

「流行児マルクスのことでは食傷しきつてゐる。マルクスだつてエンゲルスだつて恐れるものですか！ マルクスに藝術のことがわかると思ふのは馬鹿者である。私はマルキストがプウシキンを知ることを要求します。藝術の爲めの藝術、絶對藝術的傾向の熾烈だつた彼プウシキンが露西亞の國民に共鳴を感じさせなかつたか、彼程その當時の國民性に觸れ國民の感情を搖り動かしてやまなかつた事實を忘れるやうな愚かものは話すに

足らぬ。プウシキンが露西亜の國民文學に不變の基礎を据へたことを近代のマルキストに想起さすことを私は強く要求する。更に提言します。K氏はマルクス主義を咀嚼する才幹あることは承認します。しかし、それだからと言つて藝術を解す人では絶對にない。K氏は、流俗の首長が適任であらうと考へられます。以上！」

かう話しながら何度か拳をつくつて卓をたゝきつけた。N夫人は亢奮のあまり唇をぶるぶる顫はせてK氏の席をにらみつけるやうにして見へなくなつた。

窓が見へた。高いたかいところに幅ばかりあつて高さのない。五月の風がつぎつぎに水色の空にかがやいた日光をめがけて吹きすぎてゆく。色も形も雲と同じものが五月の風だといふ。

私は自分のたつてゐる足もとがゆるくゆれてゐるのが恐ろしく思はれた。風が私の足許を吹きぬけてゐるのである。私のそばに近よつてくる二つの影がある。男であるのか女であるのか、それは解らぬ。これが妖精だなと思つた。影の人間がいふ。

「K氏はともかく目下の狀態から見るとたしかにアブノルマアルではないやうだね？」

「マルキストの精神狀態といふものは平常からノルマアルである。社會の第三階級に屬するものはノルマアルでなければ新らしい社會制度のもとで健全な生活が營なめないといふ事實がわかつてはゐらつしやらないのかしら!?」

「人の善さそうな諷刺家氏、怠惰階級と特權階級からの醜惡な壓迫と迫害で、川べりの葦の如く物質生活に痩せほそつた社會主義者がノルマアルでおさまつて居れる、と言ふことですか」

「劇藥が劇藥としてきゝめが強くなるほど、劇藥を求める人間の手數は複雜である。だから普通藥で間に合せる――それこそアブノルマアルですよ。マルキシズムをお求めになるなら劇藥をおたのみしたいものですね！」

「臨がたちすぎる！ 傳達――報導――誤診――讒謗は絞首臺の認識を確定なものとする！ 到着すべきところが何處であるか！」

「チヨツキン!! だから普通藥でいゝわけぢやありませんか?!」

「普通藥はいゝ――」

きくつもりでない話がどんどん耳へもぐりこむ。へんな壓迫である。こんな話をきいたことが知れたら危險で、おそらく絶對絶命のところに陷入るにちがひない。なんと面白くないことになつたものだらう。笑へ、笑へ、笑つてゐるうちに氣持がからりとする。といふ事である。

そこで私はちつとも笑ひたくないのに、からからと笑ひ出したが、人々は誰もわからないでゐる。私がこんなに笑ふのに人々は風の日の木の葉のやうになつてはくれぬ。いろいろの笑ひ方が次々に出來る。おなかがぺつしやんこになつた。こんなにまでして笑ふ人間を可笑しがらない、一つ塊りに見へる人々に、私はいつか恨みがましい心持を含んでゐた。

やりきれない笑ひである。私の片目がほろほろと泣いてくれた。

ハンカチをみつけたがぼろぼろになつてゐて指ばかりが涙をふく。穴だらけのハンカチはいつそう不快の感を强める。私の不機嫌がおそろしい力で亂暴に影の人をつきとばした。さつぱり手ごたえがない。たるんだ幻燈幕だなあと思つた。

ぼしや、ぼしや、と、話聲がわからなくなつたがそれが蠅の煩しさに似てゐてやりきれない、そこへ、私のすぐ鼻さきにきり紙細工である大きな影繪の男があらはれた。かち、かち鼻をならし合せて、薄氣味悪い口の動かしやうで笑つて、親しい容子で私の手を握りしめる。温かな指さきであつた。

「笑つてゐても寂しいだらう? イヌといふものがあいつ等だと云ふことが解らなかつたかね?」

「イヌ!? イヌ!?」

「アメリカのイヌ、日本のイヌ!」

「イヌはあんなに臆病者とは知らなかつた!」

「なあに、あれは慣し方一つであゝいふ風にしつぽが隱れる。これがお菓子——」

私の嫌ひな種類の夜店の金指輪である。アセチリンガスの上つ面の光りで商人が透かしながら口上を述べたてるのと同じ格好で金の輪をとり出して指に嵌めてみせたが、口上に似つかぬ鈍く出來のわるい光りかたである。

私はその指輪を相手の指からもぎとつた。すると薬指がそのまゝ指輪をつけてはづれてきた。影繪の男はいきなり私にからみついてくる。抵抗してゐてもさつぱり力といふものが感じられない。それに息がせはしくはづむ。

「胡麻かしだ。胡麻化しだ!!」と、私は無中で叫んだ。

室内は依然としてもとのまゝである。青空のある窓もそのまゝであつたが、窓際に錆びた戸があたらしくとりつけられてあつた。

ただなんとなく漠然とした感情が頭のなかで立ち迷ふ。理由もなくあの窓から奴隷が解放されはじめてから何百年の歳月が過ぎ去つたのかなと思つた。こんな風に物事を考へてみるのが空想だ。すると錆びた扉は時間の象徴だといふことになる——こんなことを考へてゐた。

室の入口が無暗と方々に開け放たれてゐて大膽な足どりやおづおづとした足どりの人間が伎樂や舞樂や御神樂のお面をかむつて自由自在にどの入口からでも出たり入たりしてゐる。

新生活が始まる前だから皆は幸福に酔つてゐるのだ。お面をかぶるのは無理に過去の生活と絶縁する手段であるし約束であつた。それであるのに私一人は素面であつた。あんな風にお面をくつつける癖を覺へるとかく戯れの生活をつくり出し易い。しかし戯れはいゝな、どんより曇つたりしないし、愛すべき皮肉に富むし、魅力はあるし、記憶に責任はなくなるし、とあれこれ考へられながらも心のなかではどうしても假面をつけることに同意が出來なくお腹を透してみると澱みがあつて、澱みが二重の紐状になつて胃腑や小腸を縛りあげてゆく。それをみてからなんとしても自分には手も四本あるし、足も四本出來たと確定的に思はせる。まことに悲しいことになつたものだと思つてゐる。しかし、或はこれは祟られた考へ方である。するとたしかに宿命かなあと嘆く。私の或はすつかりそう言ふことに決まつて仕舞つて、それなら私は人にこの四本づつある手足を見られることを避ける工夫をしなければいけない、みつけられたら到底人交りは出來なくなる。困惑が激しく私に襲ひかかる。私はあせつて、のべつに感じの上だけにくつついてゐる手足をもぎとらうとして探しまはる。苦しいだけで結果が面白くない。

突然、「首が飛ぶぞ!」と濁みた太い太い聲がしたかと思ふと、N夫人が誰かに首を絞めあげられてゐる様子である。私はお化けの

手足を倚麗に忘れて思はずそつちの方に走り出した。かたん　かたん　と床がなる。四本の足が走る音だ。こんなに、たしかに二本の足が走るのに何故四本の足が音をたてるのであらう――

がちやがちやとコツプが足許に砕散する。

「亡國だぞ！　亡國だぞ！」

騒々しい叫び聲だ。

「藝術至上主義は資本主義の豪華である！」

「むしつて仕舞へ！　むしりとるんだぞ！」

私はN夫人がむしりとられたなあと思つたが、碎け散つたコツプの破片に氣をとられてあぶなくてたまらない。靴を探して靴をはかなければ血が流れるだらう。さう考へたものでしきりにその邊を探し廻つたが、草履も花緒の切れたものや、まるで花緒のたつてゐないものばかりが後から後からとみつかるだけで、遂々欲しい靴がさがし出されぬ。

こんなことでは小說は書けないと、あつさりあきらめがついた。

「何故です？」と私の臍のへんまでしか丈のない女の人がきてこんなことを聞く。私はこの人は人の心が見透せる人だと感心しながらも氣味惡くなつてあはてゝ顏を隱そうとすると女は口に手をあてゝ、さもさも可笑しいと言ふ風で笑ひ出した。

「私ですよ！　I女でございましてよ」

「なんだ！　Iさんですか――」私は意味のないお辭儀をつづけさまにしてから手をさしのべた。

「小說はおかきになれまして？」

「どうして、靴一足みつけるだけにあの有樣ですからね！　當分配給品の下るまで書かないことに決めました。」

「まあいゝこと！　あなた笑つては駄目ですよ！　實は私も配給品を待つてゐますの！」

さう言ひながら彼女は私に體をすり寄せて他聞をはばかつて言ひ出した。

「へとへとになるまで働いても樂なんか飛びこんではくれませんわね！　だから强盜しないだけで、乞食にならないだけにして置くために配給品を待つことが利口だと、私、直感したんですの！」

「いや、さうですね！そうですね！」

――私は馬鹿馬鹿しいなあと思つたから自分の考へを述べることをこの人の前に愼もうとした。そこで頭から贊成してしまつた。が、そのあとで堪らなく悲しくなつた。私は室の中を步き廻つた。いつのまにか上等の靴がぴつたりと二本の足に嵌まつてゐる。だが私はあたり前のまゝでゐて不思議ではなかつた。

もしかすると、I氏は共產黨員で××政府の間者かも知れない――するとうつかりしては居れないぞと眞面目な態度でI氏の眼をぢつと凝視しはじめた。

「あゝ、ちよつと待つて！、そんなことは別問題にして下さいな。集團の精神から言ふと、個人的な問題は昨日だと申して居りますよ！」

「プロレタリヤには高價な支拂ひだとおつしやるのですね？」

「いゝえ、それはコンミユニストが精算すると申したはづですわ！　でもね、（これからさきの言葉はI氏の獨言である。私は全く聞いてゐない。だが、聞いてゐる。）今は過渡期だから、この人の精算は多分三等品のコムミユニストがしてくれるかも知れない。ともかく過渡期だから――」

I氏は和服に靴ばきである。たもとをさぐつて朝日を出した。朝日の袋は皺だらけになつてゐる。私はマッチを出して火をすつたが火が燃へない。それでも煙草に火がついた。そうして烟りはたゝない。

そこへ舊式な束髪を結んだ痩せた小柄の婦人が村田銃を持つて近寄つてきてI氏を見て、身寄りのものらしい親しさで會釋した。

「大變遲くなりました。會はもうおしまひになつたでせうか？」と聞く。

この婦人は退職砲兵大尉の奥さんだ。I氏は扉を細目に開けて室のなかを奥さんに見せた。扉は芝居の大道具のやうな按配に置かれてゐる。奥さんは遠慮氣にそこから覗きこんでゐたが、I氏を振りかへつてさも困つたといふ顔で、

「實は私、主人の言ひつけを受けて村田銃を袁世凱にお屆けしに參つたので御座いますが、あの方は今日お見へになりませんでしたらうか」と言ふ。

袁世凱!?　私はI氏を見て眼で合圖をみせた。

I氏は心得てゐるといふ眼つきを私にかへしてから奥さんになにやら話しはじめた。奥さんは袁世凱がとつくの昔、死んでしまつて現存した人間でないことがやつとのみこめたやうだ。いくどもおとなしくうなづいてゐる。

そのたびに膝頭まで兩手をさげるといふ丁寧さがひどく氣になる。あけすけに見へてゐながら嚴重に扉が閉められてゐる隣室は、やはり騷々しくざわつく。時々喚聲がたちまふ。そのたびにI氏ははらはらして廊下をあつちこつち歩き廻る。

「どうかなさいまして？　まるで御心配ごとがおありのやうにお見受けされますが――」

奥さんはI氏のたもとにつかまつて訊ねるが、I氏は私に唇を指してみせて「決してなにも饒舌るのではない」と手眞似で敎へる。

私は鍵穴から室の様子を覗いてみた。赤いジャケッを着たM氏が短かすぎるほど刈りつめた髪をばつさりみだして恐ろしく亢奮して聲高に話してゐた。周圍の群衆は默りこんでM氏を一齊に見上げてゐる。M氏の聲は音樂的なリズムをもつて銀笛を吹いてゐる人のやうに思はれた。

鍵穴のひろさ――不自由はない。

「本當のことを言ふと――これは秘密だから皆さん決して饒舌るといふ下品なことをしない、その約束をして下さい。さあ、この約束に同意する方は起立願ひます――」

M氏は權威を籠めて叫んだ。どやどやと椅子から起ちあがる音で空氣が濁る。

「そう！　滿足を感じます。私がこれを要求するのは全人類のためです。これに好意をよせられない人間は山羊になりますよ、豚ですよ、馬ですよ、結局、獸だといふことです。」

獸といはれた人々がM氏に飛びかゝつたが、萎へた腕をもつた男が突然跳ねあがつて、玩具をつかむのと同じにその人々をあつかつて窓から放り出す。

「さあ、おきゝなさい。獸はゐません――そこで、世界は一人の物ではありません。覺へてゐるでせう。共產主義は資本主義を母胎としましたね。あれは手造り主義であつて壞れる心配があります。社會の秩序でも同じことでせう？　人爲××がどんなに缺陷をもつもので、つまるところ人間の着る一枚の變つた衣服です、いや、帽子かも知れない。かぶつたり脫いだり出來るといふ安直さがあるから――。人爲××は人間と人間の自然的

關係の發展をこれからますます阻害してゆくばかりです。

Aと云ふ王様が王様の椅子によい氣持でゐました。その王様がどんなに眠つてばかりゐても寢てゐる間に政治が進行してゆきました。王様でも眠る時間の外、眠つてはいけない。ところが王様が家來におちぶれました。家來におちぶれた王様はそれでも實によく眠りました。しかし新らしく王になつた人間が家來といふものは決して眠つてはいけないと怒りつけました、が家來になつた王様はそんなことが本氣で考へられない。これまで永らく續いた悪い習慣と王であるといふ權力が自分に錯覺を起させてゐるといふことが解りません。

おまけに、家來になつてしまつても、未だ王と同じに威張つて自分を振舞つてゐました。そこで遂々×がどこかへ飛ばされたのです。これは王様が悪いのではない。王様×××××が悪いのです。

この話は日本語で饒舌りましたが、これからさきのことは勝手ながら佛蘭西語を使ひます。」

みんなは佛蘭西語も解つてゐる。私も、知らない佛蘭西語が日本語のまゝ佛蘭西語になつて頭に消化されてゆく。

「悪の國家――それをうけついでゆかうとするのが共産主義である。資本主義國家の如く人爲的强權をもつて社會の統治を將來するでせう。ところが吾々×××主義者は別の信仰をもつてゐます。凡ゆる人類のためにこの人爲秩序の背後にある社會の自然秩序が實現されるために社會的自然法則への理想を感じます。人類が完全と缺陷のない幸福に達するためには、强權をもつて公式に强制法をとる國家に從屬する社會を××することが望みなのです。――實に、この今の社會は憂欝病患者を機械の力で製出してゐる如く多量でありますが私はその患者の爲めに目下病院を建てゝゐる處なのですが――いや、全く多忙を感じます。」

M氏は眞白な手を群衆にさし伸べた。群衆はそれに應じたやうに手をさし伸べた。無限の手の數である。手、手、手、室中一面の手である。眞白い手である。

私は不意に泣き聲を聞いた。振りむくと例の奥さんである。I氏の肩につかまつて泣いてゐる奥さんは泣いてゐるやうに見せかけて心では怖がつてゐるのだと云ふことが私に直感出來る。I氏は恐ろしい眼付きで私をにらみつけてゐるので訊ねると、

「だからHさんを早くお呼びしないと困るつてあんなに頼んでゐたのに――」

私はH氏のことをいつのまにか頼まれてゐるのだつた。

「その奥さんは泣かずともいゝんぢやないんですか？」

「社會主義の集會に近づきになつたから穢れがついたといつてゐるんですよ？ だからそれならお手をお洗ひなさいと言つても、手ばかり洗つても御主人がそれを器用に嗅ぎわけるのですつて！ 爆彈だと云ふに相違ないとおつしやるので、手がつけられない！ とにかくHさんをお呼びしてきて下さいな」

I氏はひどく性急に後れ髪をかきあげながら呑氣な顔で大きな欠伸をする。

軍人と言ふものはそんなに××な種類だらうか――亂暴と云ふより××だと思つたが奥さんが私の氣持を知つたら怒り出すに相違ないと思つて默つたまゝ

「それではお宅まで御送りして、あなたが穢れてはゐらつしやらないことを證明しませう。それか、明日の新聞に聲明書を掲載し

てもいいのですが――」

奥さんの顏は見るまに蒼白になつた。ドストエフスキーはこんな顏色の形容にシーツといふ詞を使つたな――と、私は瞬間思ひ出す。

そうして、そんな事をしたら主人も私も自害しなければならないといつて、わあわあ大聲をあげて泣き出した。I氏はハンカチを出してしきりに奥さんの流す泪の仕末をしてゐるので私は可笑しさを制することに負けて非常な笑ひを爆發させた。これより他の方法がないと云ふ自信で笑ふ――その意識が加速度に加はつて、無中で笑ひつゞけた。

その笑ひのなかに私を麿く男が現はれた。扉に映る影の姿でわかつた。私はぎよつとした。巡査だなと思つた瞬間、身うちが粟立つた。階段を昇りつめたところに突つたつてゐる男は青物屋の服をきて、林檎と柿――トマトオのやうでもあつたが、香りはたしかに林檎である。色のきれいなことは非常な神經をもつ。籠にいつぱいつめたものを左肱にかけ寄せて右の手はズボンの後ポケットにかくれてゐた。

私はつとめた。つとめてしつかり應對した。

「あなたは、どなたでせう?!」

「僕は、胡漢民――」

よく知つてゐた人だ。私はためらふことなく、いきなり進みでて彼としつかり握手の禮をとる。

「どうして今日こんな國へゐらしたので す? 随分おいそがしい時ではありませんか?」

「僕の首にも懸賞金がかゝつた。」といふ胡漢民の顏は平氣である。

「蔣介石は嫉妬の洪水で僕を溺死させる。宋美齡君を美しいとは思ふが催汝の藥まで使ふ氣持ではない、それに僕は美は感じるが彼女の化粧料の莫大さに閉口してゐる。あの太陽の贅澤さを内心恐れること非常である。」

胡漢民はこゝまで言つてから俄かに四角な顏を年若な男の羞恥で彩つてきまり悪げに腑向いたが、それもすぐに消へて次の瞬間、胸を昂然と張つて威張つて言ふ。

「斷然! 全く斷然僕は彼女を憎む。彼女のために盲龜となつて大海に浮かぶ蔣介石を憤怒の情でけとばした。蔣介石、それだのに彼は宋美齡を離れるやいなや支那全土に暴壓の息を吹きかける――そのために經濟は枯れた。國庫が輕くなるばかりだ。革命の名をつかつて宋美齡の虚榮心に香水をふりまく。暴君だ――國民が國庫の金を計算したら、どんなに激怒に咆へ叫ぶことだろう――金庫が輕くなつた!!。漢は宋美齡の眼と××を削ぎ取ろうとして失敗した。蔣介石は僕を死刑臺に搬ぼうとした。そこで僕は日本に僕の首をあづけに來たのだ!」

「中央執行委員會の署名のあるものを持たれないか?」

「こゝにある。」胡漢民が指し示したものは帶封のしてある二通の新聞で、一つは大每で、一つは大朝である。その二つながら帶封に朱色で御祝儀と書かれてあつた。

私は大朝を胡漢民から受取つて懷へしまつて大每の方はそのまゝ胡漢民に返へした。

「あなたの手に色目をお渡しして置きます。それはあなたの財布をふくらます役に立ちますからね! 但しあなたの財布がふくらむことはあなたが商品になることではありますが――」

そう私が言ふといきなり胡漢民はそれをなげすてゝ靴のさきで――泥靴である――ぐいぐいもみ潰ひた。

胡漢民は好い男だと快よく思はれた。しか

し泥で踏みにじられた新聞をこのまゝ廊下に放つて置くと中央執行委員會が胡漢民の所在を探知する道になるかも知れない。これは穩かに隱して置く方がよい。私は泥だらけになつた新聞を拾ひあげて丁寧に泥を拂ひ落して胡漢民に渡した。胡漢民はそれを擴げて隱しズボンからピストルをつまみ出して、くるくるに卷きつけてから林檎と柿をぼんぼん籠から廊下へ投げて隙間をこしらへて籠の底に納つてしまつた。

そのあとで、私と胡漢民はぢつと顏を見合せて慇懃に挨拶を交はした。胡漢民の顏の四角に驚嘆の溜息をしばしば洩しながら、「失禮だぞ、失禮だぞ」と心でたしなんだ。

兵隊だ！　兵隊だ！　私は忽ちに廊下に充滿した支那の兵士の大群にとりまかれてゐた。胡漢民はその中を平氣な顏でくぐりぬけて見へなくなつた。勇敢だ。騷々しいが勇敢だ。私は別の私が無數の兵士にかこまれてゐるのを平然と眺めやつて、かう噛ぶく。もう一人の私は道を斷たれた蟻のやうに心配な格好である。

「お前は胡漢民だらう？　カムフラージユをほどこしてゐるが、たしかに胡漢民だ！」

劍つき鐵砲をもちその上靑ざめた半月刀をひらひらさせてゐる巨大な男が憎々しい面つきでどなりつけた。

「胡漢民ではない――」

「胡漢民である！」

「胡漢民ではないといふのに――」

「なんといつても立派に胡漢民だ！」

「ちがふ――」

「ちがつてゐない――」

私は舊式な束髮の奧さんが自殺するのは當然だと思つたら、がまんが出來なくなつてきてぼろぼろ泣けて仕方がない。私のこぼす泪が凍へた土の上で跳ねかへる霰となつてゆく。泪までこんなに凍てつくのだ。こんな殘酷な目に會ふ――胡漢民でない人間が胡漢民にさせられて首をはねられる――こんな馬鹿馬鹿しいことが一九二九年に現にこゝで行はれやうとしてゐる。

亂暴だ。亂暴だ。私はI氏を大聲で呼んだ。

I氏だ、I氏はユダがキリストを賣つた金が落ちてゐたのを探して持つてきたのだといふ。黄色の財布に手をつゝこんではピカピカに光つてゐる金貨をざくざく音をさせてつかみ出し群らがりよせてゐる兵士をめがけて投げつけてゐる。「醜惡な人間共よ、これを喰へ！」I氏の心持が別の私には了解されてゐるのに、もう一方の私が冷淡な眼つきでI氏を輕蔑しきつて突立つてゐる。それでゐながら心の不安は荒波となつてじつと立つてはおれないほどぐらぐらする。どんなに中心をとりたくても支へきれない。

「買收よ、犬共に金貨を與へよ！」I氏は朗らかな歡聲でそういつて私を輕々と抱きあげて金貨のために匍ひつくばつて一面の黑土になつてゐる兵士共の上をぐしやぐしやに渡つてしまつた。

眼の前に暗く開いた戸口があつた。はるか向ふの方に乏しい光線が搖れてゐる。I氏は一本の蠟燭をとぼしてくれた。灯りがつくと共に油がジジとはじいてなる。I氏は泪が蠟燭をこんなに濡らしたのだといつたそのときI氏はどうも泣きながら灯りを眺めてゐたらしい。

一疋のみちしるべが髭をふはふは振りながら暗い戸口で私をさしまねく。I氏は入念

に言葉を噛みしめて

「ね？　さういふ譯だからＨ氏をおよびしてゐらつしやい――去年もそのさきの去年もあなたは身動きさへなさらなかつた――と傳へてね！」

私は空氣のなかにかゝる階段の如く果敢ない段々を地下室の方へ一つ一つ立ち止まりながら降りてゆく。

明るい世界である。私は蠟燭を吹き消して投げ捨てた。ころがつた足許の蠟燭をみるとさつきのみちしるべがくつついてゐる。

私の感覺はみちしるべだと思ふのにその蟲の姿は甲蟲の雄である。

「お前は甲蟲だね？」

「わたしは、みちしるべ――」

「お前は甲蟲だ！」

「わたしはみちしるべです――」

「甲蟲だ――」

「みちしるべ――」

私はいきなりその甲蟲を踏みつけて殺した。靴をぬいだ私の素足にぺつとり粘い汁がくつついた。

簡單な最後だ！　私は蟲の血をふきとるために紙きれを探したがみつからぬ。こんなに血をつけてゐたら殺人の嫌疑が懸る――私は蟲を踏みつぶしたことを後悔した。

私は明るい世界がまぶしくて邪魔になつて困つた。そこで投げすてた蠟燭をひろひあげて持たないマッチをみつけて――ちやんと火が灯つてくれた。すでに階段を降りつめたことだと思ふのに私の背後にＩ氏が立つてゐて怖い顔でにらみ据へてゐる。

私は一足とびに長い長い螺旋形に組んである、あの「朝から夜中まで」の舞臺面にあつた階段を至極身輕に飛び降りた。左手に金庫室の入口があつた。右手にＨ氏の家の入口があつた。Ｈ氏の入口のベルに黑薔薇が一輪插されてゐる。私はそれを匂つてみたがなんの香りもない。つまらない花だなあ、と思ひながらベルを押したら、ベルが

「ツマラナイハナダナア‥‥」とすばらしく強く高鳴りする。私はあはてゝベルの乳首を――ベルは螺子になつてゐる――左へ左へ回轉さしたら扉がひとりで開いてゐた。私はベルの歌が氣になつて遠慮深く內部を覗いてみたらＨ氏が眉をつよくしめて柱時計の下に私を待つてゐた。

「性の惡いマッチを磨るのは止した方がいい。火はもつと纖細な發火度をもつものが喧しくないからね！」

Ｈ氏は腹をたてゝゐる――間違ひなく私は日本製のマッチを使つた。Ｈ氏は寒氣がするといつて深々と外套をひつかぶつてゐる。お腹がすき過ぎるとつひ外套が欲しくなると言ひながら溫かさうに笑ふ。

「Ｉ氏があなたに來てほしいとおつしやつた。あなたが見へないと××主義と×××主義の調和が難しくて、そのまゝに放つて置くと多分××主義者が××を爆發させるかも知れないと言ふことです。ともかく來て下さい。」

「もうすこし待てないものだらうか、私は今社會主義の發生と發展の方向を調べてゐる最中でいそがしいし、その上Ｏが熱を出してゐるので一寸隙がないが――」

「だけど、義務があるとＩ氏は言ひましたよ、傍觀するのは仲間のために不利益だとも。」

「義務だつて!?」

Ｈ氏は小さい聲で繰返へしてみる。

「義務なんて言ふものは蠟燭のあかりと同じもので、なんどき吹き消されるか知れない稀薄な權威しかない。なんだつて亦Ｉ氏が

そんな惡い洒落に陷ちたのだらう。風のない日の風車がくるくる回轉しないといふことで天氣の判斷をして安心してゐる人達は、突發的に舞ひあがる風力を知らない人達だものね——世界が不確なものでかためられてゐる——世界が波のやうに搖れてゐる……」

柱時計が鳴り出した。

「ちよつと默つて！」

私はH氏の話をさへぎつて鳴り方をきゝ乍ら數へなら十三だけ時を打つた。最後にうつた十三の音が私の臟腑に浸み渡つた。私は何故か震へがつきあがつてくるのに焦燥を感じる。私はやたらに兩手をぶんぶん振り舞はして空氣の中に消へ去つた最後の音に抵抗をこゝろみた。十三番目の音が私を見て苦笑してゐるやうでたまらなくなつた。

「水はありませんか？　水が欲しい。十三番のあいつにぶつかけてやるのです。」

H氏は私の大聲を片手で制して

「止めて下さい。そんな狂人のやうにわめくのは——十三番目の音がどうしてそんなに氣になるの？　Oがよく眠つてゐるのに、もつと靜かにして、ね、お願みだから！」

私は止めやうと努力してもしても私の運動は止まらない。

「素晴らしい幻想曲だ！」H氏は皮肉顔で私を凝視した。　私は跳ねあがるほどのショックを感じた。H氏の前にひざまづいてなんなく、全く容易にH氏の手をとつて唇にあてた。H氏は格別怒つた風でもないが空虚な眼で私を見返へした。

「濡れてしまつたマッチがとぼせると思ふのですか、君は?!」

O氏である。バルザックに扮裝してH氏の肩越しに私をにらんでゐる。H氏は大急ぎでポケットから銀笛を出してO氏の熱を計りはじめたが、息もつかぬまに取り出して明りに透してみる。銀笛のさきに水銀の袋がゆたゆた搖れてゐるために溫度の目もりが非常な速さで變化する。

「わかりますか？」

「高いやうで低いの。壞れてゐる檢溫器だと思ひながら捨てがたいのでね」

「××のときにやられたのでせう。あのときはみんな犧牲になつたから！」

「そうなの。でも、そんなことは考へないでゐるのよ——」

大きな姿見がある。O氏が眞裸になつて映つてゐた。私は手の屆きそうな位置にあるその姿を大膽に觸つてみるといきなり鏡が搖ぎ出す。私は慴へきつてそのまゝ指さきをふきとつて溜息をついたら鏡のなかのO氏がいきなり私の指を引摑まへるなりぐるぐる振り舞した。私は風車のやうに速く速く、しかも輕快である。しかし逐々こらへきれなくなつて嫌惡と憤怒の情がほとばしる。

「消へてしまひそうだから、待つて下さい。」

「消へる!!　濡れたマッチが燃へ出すなんか生意氣だ！」

O氏は私を床の上にいきなり突つぱなして俳優の身振りで疲れた感じを出す。

「何故いいかげんに止めないのです」

私はぷりぷりして聞いた。

「いい加減？　そんなものは我慢が出來ない。僕は戀愛に於てもいい加減なんか御免だね。一位を與へられたい！　二位とか三位とか、そんな組立て細工はいやだ。一位の戀愛に眞實がある。二位三位になるに從つて水が混合されてゆく。混合された戀愛は自殺でつぐなふよりとる方法はないと信じるな。愛情の專有は同志にとつて私有財產に過ぎない。」

別な私は、私といふ奴は案外嘘つきだといつて私をしかりつけて

「そら、そんなことを饒舌るからOがお汝(まへ)を殺そうとしてゐる。馬鹿だな、注意してかゝれ」

といふ。成程O氏は純白の着物に着換へて、掌のなかに光つたメスを一本隠してゐる。

私の臆病心は私に武者振りついて「死ぬのいやだ。いやだ」と言ふ。私の警戒は緊張神經をほぐしてゆく。私はしきりに何處かへもぐりこみたくなつた。室の隅に寢臺があつた。

そこへ猛烈な勢でもぐり込んだが布團がづんづん短くなる。しまひに一枚のハンカチをかぶつたほどの寸法になる。それでも身體を隱し終へやうと足を縮められるかぎり縮めてあせるが、布團は紐ほどの巾しかなくなつてしまつた。だがH氏はどうだろう。

私の隱れ得ざる悲哀をよそに如何にも呑氣に鏡の前ですばらしく立派に刈立つた化粧刷毛で全身に粉白粉をはたいてゐる。そこいらは粉白粉で霧の月夜である。H氏はサロメを演出するためにあゝやつてゐるのだ――私は角(つの)をたゝつきられた蝸牛そのまゝの様子で、しかものどかにそれを眺めやる――まるきり二個の自分が完全に交錯してゐるわけである。

H氏は投げられた照明のなかに突然踊り出た。メスを隱しもつO氏の足許にひざまづいて、ヨカナアンをかきくどくサロメそのまゝのしぐさであつた。これは間違ひなく演劇である――今日は舞臺稽古だよ――一人の私はそう思つた。が、もう一人の私は依然としてその否定のなかで寒氣をたてゝ體をちぢめてうなつてゐる。

H氏の獨白は室中へひびきわたる。いゝ臺詞だなあ――私は感嘆の叫びをあげる。どこかで「シッ！」とやられた。

H氏は泪をさんさんと振りこぼしてO氏の足首に頰づりをはじめた。O氏はすまして突つたつたまゝなんの表情もない。獨白は一きは高い調子ですゝむ。一人の私はノートを出してすらすらと獨白のうつしをはじめた。

これは、
わが神、わが讃美の神、
その愛は彊(かぎ)りなけれ。
これは、わが聖廟、
わが選びしもの
われをあげて、感謝せよ、

この男の愛情は私を老ひほゝけさせた。私はそれだけのものをこの男に與へた。私は滿足である。

しかし、この男はまだ滿足ではなさそうである。

これは、わが智慧、うまし葡萄。
わがこころ、これをよろこぶ。
われ、これを得てより
歴史さかしまに流れ
歴史のいかりをうけたり
されど、わが魂はこゝに愛の聖廟をみる。

私は、この唇をながめることがうれしい。

私は、智慧など、どうでもいいと考へる。

私は、智慧の悦びは忘れはてた。

わが榮光、わが讃美の神
われは讃稱ふ、わがいとし楯に。
わがいとし楯に！ 楯に！。

「さらば――」Ｏ氏は眞白な寢衣（ねまき）をかなぐりすてゝ、いきなりＨ氏のサロメを飛び越へて私をめがけてメスを振りかざした。私は砲彈になつて舞臺から扉の入口まで飛びさがりざまに

「Ｏさん！　芝居ですか、本當に殺すつもりですか!?　助からないなあ、助かりたいなあ！　いけない、いけないといふのに！」

轉びながらどんどん逃げ出すのに、いくら逃げても飛びあがつて防いでゐてもＯ氏の手は非常に長く延びて樂々と追ひついてくる。

「血が出ることはいやだ！　私は血がふき出すのがいやなんです！　止して下さいつたら！」

私の逃げまはる方向に後から後からと色色な形の椅子が現はれて私の逃げ道を邪魔しはじめた。私は熟達した曲藝師である。百千の木馬を雜作なく乘り越へるやうに片つぱしから現はれては積まれてゆく無數の椅子をダグラスのこなしでかたづけてゆく。あかるくて、輕妙で、おそろしく最高速度で――それでかぎりない重壓を四邊に感じながら、實は極力逃げてゐる私であつた。

なんだ！　たあいないことではないか！

二人の役者は藝當をすました後の休息といふ格好で室の眞中にらくらくと寄りそひあつて一本の煙草を吸ひ合つてゐた。私は椅子――私一人は椅子で椅子でやりきれない世界のその椅子のさきつちよに馬乘りしたままそれを見下して聞くともなく二人のはなしを聞いた。

「なんだ。そうか！　ぢや二人は幼な友達だつたのか?!」

「勿論よ！　あれはまるきり子供で、まだ骨組みさへ出來上つてはいないやうに子供なのに、あなたつたら恐ろしく本氣になつちまつて驚いたわ！」

なんだ！　それだけであつたのか！　いちどに秋風が吹きぬけてうらさびしさが胸さきをたゝいた。私の力といふ力は栓のとれた水たまりのやうに――つつと私の體から逃げ出す。椅子は――山のやうに積みあげられた椅子共は、土臺のところでぐらぐら構成の解體をはじめてゐる。「あぶない！」私はやがて起る地震のまへにうつぶしてしまつた。

「市街戰だ!!」

煮へくりたつ硫黄をぶちまけたやうにもくもくとたちのぼる煙で自分達の室は充滿されてゐる。

「どしん！　どしん！」大砲がぶちはなされるたびに室の壁がびりびりに裂け目をつくる。壁にかゝつてゐた額、トルストイの顏だ――がばらばらになつて飛散する。

「あぶないぞ！　あぶないぞ！」

その叫聲がつづけさまにして人達が水平の場所を右往左往してゐる。

「靜かに！　靜かに！　兵士が階段をかけあがつて來たやうだ！」

「ああ、情けないことになつた――」

Ｉ氏は卓の下にもぐりこんで泣き出した。

Ｈ氏はＫ氏の右手を自分の兩手でしつかり握りよせ、

「どうしても仲直りが出來ないものでせうか、友情を要求するのではありません。主義の上で今一應の交渉を要求したい！　私は。」

「あたりまへです。あの大砲は吾々に一切の妥協をゆるしてはいけない――といふ命

令の最後の宣布です。あのすばらしい音があなたには聞えないのですか。手遅れです。慘酷かも知れないが、もう大砲は放たれた後です！」

I氏は涕泣をつづけたまゝ

「もう仕方はありませんわ。これが××の來るべき運命でありました！　だから私はあんなにあなたを早くお呼びしたがりましたの。西洋人の作つた思想でわれわれがこのまゝ大砲のなかで往生するのは佗しい佗しいことではありますが、なにもかも、一切が、嘘からうまれてしまつた眞實ですの！マルクスを眞似てゐるうちに、本氣に油づき、遂々西洋に負けてしまつた——私はそれが佗しいのです……」あとのはなしは枯れほゝけてゆくばかりである。

「醜體は友情で包むべきだ！」H氏はそう囁やきながらI氏の姿を隱すためにスカートをつまぐり、扇子にひろげて卓の上に腰をかけた。

「過去の××に敬意を表します！」

K氏は冷笑を口邊にチラチラみせてH氏の擴げられたスカートにむかつて擧手の禮をさゝげるなりくるつと後向きになつて私をさしまねく。私はK氏が次に與へやうとする輕蔑の計劃が私に近づくことを待つてゐるやうである。

だが、私を凝視めたK氏の表情は信じなければいけない種類の直情的なものであつた。

K氏は窓ぎはに私を連れてきて

「さあ、こゝから下を見下してみるのです。但し、落ついて、落ついて！」といふ。私はK氏の肩にしつかりつかまつて首をのばした。

この、自分達のゐる建物は十三階あつて、今、こゝにかうしてゐる室は表通りに面したところでこの建物の最も上層の、ただしく十三階目のその一室であるといふ感じに襲はれる。また、十三か、十三はこれだからやりきれない——と私だけが思つてゐるのに、それにK氏は私の肩さきをいきなり強くたたきつけた。

「戲談ぢやありませんよ、あなたの迷信はあの行進を一目見た瞬間に歴史から抹殺されますよ。」

どうだ！　どうだ！　どうだ！

銃を肩にした新しい生活へ歴史の第一頁へ新生した第一歩を確實に勝ち得た人間の大群が、その密集があまりにも整然と行進をつづけてゐるではないか！　朝だ、すばらしい夜明だ！

××だ！　××だ！

そのたびに而前の獅子が吼へるやうに彼の人間の大群は「うをう！　うをう」と物凄いまでに吼へる。×××旗が波の如く、うねつてたなびく。幾筋々、幾筋も、幾筋もの旗だ！旗の波、×色の大洋！

K氏は、

「どうですね、迷信的道徳家さん、木葉さん！　われわれの××の快い夜明の行進は！　あの吼へたてる叫聲は勝利の祝歌ですよ。世界××とプロレタリヤの最後の勝利に加擔し、手をさしのべた人間だけの唱ふ祝歌ですよ。あなたは右手に運命的なトランプをもち、左の手にはヤースナヤ、ポリヤーナの老爺さんの思想の生煮へをもつてゐる。だけどその二つはあなたを朽木にさせた。無氣力に陷した。今、あなたは二つの毒素をこの窓から吹き散らしておしまひなさい。勇ましく、勇ましく！　あなたのもつ道徳觀なぞいふものは死にかけてゐる病人よりまだ望みのないものだ。さあ、いいですか、××はあなたに嚴然と命令します。いいですか、即時この窓からその二つの不必要物を投げすてることを要

求する。それからこの眼下に續く夜明の行進に對し敬禮することを要求する！」

私は人類全體のもつ輝しい××にむかつたやうに實に肅然とした感情で緊張を覺へた。それでゐてどんなにあせりを感じても右手が敬禮の形式を表すはづの右手が私の命令を受けいれない。私は私の運動神經はきつと激しい疲勞に陷ちてゐるのだと思ふけれど、K氏はさうはとつてくれまい。恐らく××をよろこばない人間が敬禮を拒否するのだと誤謬するに違ひない。それはいけない。私はK氏へ對して馬鹿馬鹿しいまでの義理を感じた。私の心配はあたつた。K氏は腹立たしく叫んだ。

「何故、敬禮が出來ないのです！　人類のために、人間の歴史のために、今日程敬意を表してよい特筆さるべき時に、あなたの手は機械の運轉が休止したのですか、それとも、あなたはこの行進にむかつて手を擧げることを過去の幻影か亡靈に對して恐怖を覺えるかでせう！　さあ、勇敢になることです、體に力をいれて、私のやうに勇ましくかうして――」さう言ひながらK氏は戰旗をさゝげる勇士の様にきりつとして肅然と擧手の禮をしてみせる。

私はK氏を眞似て、きつぱり突つたつまでは出來るが右手だけはなんとしても强情で私を無視する。しまひには私は體から流れほとばしる苦しい汗のためにぬるぬるになつて仕舞ふ。K氏は情けない顔を何度も苦々し氣にふつてゐたが我慢がしきれなくなつていきなり私の動こうとしない頑固な右の手首をぐつと握りつけるなりひつぱり揚げた。そのはづみに「ぼき」と骨が折れる音がした。骨の折れる音が聞こえたので私はちつとも痛くないのに

「痛い、痛い」と泣き出した。K氏はあたり前だといふ顔つきでその私にはかまはず骨の折れた私の手に、私に代つて敬禮の形式を與へてくれた。

「さあ！　この次は活潑に、さかんに、あの行進に歡聲を投げるのだ」

「手を振れ、ハンカチを振れ、」K氏は懸命になつて、私の不具になつた手を棒ぎれ同様にあつかつて私のために働いてくれる。私は熱情をもちながら、つねに背後につき纒ふ正體のない壓迫力のために溢れほとばしりかける熱情を吸ひとられてゐるのが口惜しいが、それに負かされてばかりゐた。

私の心臟の働きは激烈である。それに手足は冷へきつた鐵板のやうに冷たくなつて硬直しきつてゐる。私の心臟の高鳴りがK氏にも聞えた。K氏は

「心臟の血が手足に流れこまないのを考へて御覧、そこにあなたの思想が如何につくろひがたいまでに矛盾し分裂してゐるか解らう！　だが心臟はよい、手足がいけない！」となぐさめてくれる。

眼前へ飛行機が逆しまになつてツイ落した。すさまじい物音だ。ばらばらになつた機體の破片が反對に私の立つ窓ぎわに跳ねあがつてくる。

整然とした眼下の大行進は何處かに去つて、新たな群衆が――整頓を失した群衆が人間より大きい××を輕々と肩にのせて、「命令だ、命令だ！」と叫びながら蝟集したまゝ駈け抜けてゆく。

「あれが武器だ！　すばらしい武器だ！」

私は驚嘆のあまりどなつた。

これは衣裳部屋である。友人のR、S、T、U、V、W、X、Y、Z、最後のZまで×××服を、急がしく纒つてゐる。自分の着物をボタン一個さへはづさずそのまゝに、その上に新らしい衣を纒ふのに必死である。K氏は劍を

抜きはなつて騎兵の服をきて彼等の樣子を看視してゐるやうだ。亢奮を制しきれず、慌だしい足どりで、この室に出入する人間のあるたびにジー、ジーとベルが入口で鳴り渡る。やりきれないことだ。私は耳に綿花をつめこんでそのベルを聞えないところへ追ひやらうと努力する。K氏は私の持つ綿花を、私の手からもぎとつて、劍のさきで散々な目に會はせた。

「なんだこんなもの！　みろ！　彼等は過去の着物を持つことに恥辱を感じて衣更へしてゐる。それにあなた一人臆病にもベルにさへ恐れを感じてゐる！　恥辱だと思はないか!?」K氏は威張つてどなりつけた。私はむらむらと湧きあがる反抗心に勇氣を與へて言トにどなりつけた。

「なんですつて？　彼等が恥辱を感じるですつて!?　馬鹿だなあなたは。彼等は過去の着物に興味を失つて仕舞つた。そればかりでない。過去の着物をきてゐると××軍に突き殺される――そこで彼等は器用にたちまはつてあの有樣です。主義の清算が出來たからではないのです。私なら、あんなに窮屈にして、着物の上にまたもや着物をきこむ――といつた困る眞似は眞平です。眞裸になつて、そこで新しい着物をきますね、私だつたら――」

K氏は一人の兵士を手招きした。兵士はK氏の手から軍隊手帳を受取つてばらばら紙をめくつてなにか調べてゐる。鉛筆でしるしをつけて氏を見上げて指圖を待つ。K氏は手帳をのぞきこんで頸をひねつてゐたが、

「よし、Mを呼べ！」

兵士は鐵砲玉のやうに飛び去つたが間もなくM氏一人、私達の前に嘲りをもつて立つてゐた。

「K氏、あなたはお悧口さんですね！」可愛い唇がほぐれるとその挨拶がとぶ。

K氏は權力を持つものだけが出せる重力のある語調で「M！」と叫んだ。

「われわれの眞理に對しては、誰もが絶對に服從といふ法則で行爲せねばならぬ。私はこの法則に從つてあなたの發言を禁止する權力をもつ!!」

M氏はますますK氏に嘲笑を浴びせて

「なんですつて？　お悧口屋さん。御自分が私達の仲間から逃げ出したのはあの流行が早晩せり賣り物だと思つたのではありませんか！　あなたが×色の服をあの人達のやうに遮二無二きこんだのは西暦何年のことで御座いましたか!?　只私はいやですわ。×色の服なんか見ただけで胸が惡い！　あなたがいくらきせたがつても、私は私で勝手にいたしますから御心配なく！」

「すぐにこゝから出ていらつしやい！あの室の外で、あなたを待つてゐる人間がゐる。その人間があなたを何處かへ御案內するでせう――」

K氏は扉を指して、顏をひんまげてM氏を見据へた。

「むろんですわ。あすこに待つ人間が中央執行委員會の部下の一兵卒であること、御案內を受けてゐる宴會がどんなに素晴しいところであるか、その御馳走が案外簡單に片付いて、ピストルの小さい玉が私の咽喉笛をついてそこで私が永久の左様ならをあなたに投げる――そんなことを覺悟しないでどうしませう!。さても樂しいこと、この憂鬱の世界の意識の外にもうすぐ解放される人間で私があるなんて、まあ、とても素晴らしすぎるわ！　すばらしい幸福よ、すばらしい執行委員さま！　では、さようなら!!」

そうして次の瞬間、M氏の姿は部屋のなかから消へ去つてしまつた。

K氏は室いつぱいに響き渡るほどの聲を

たてて劇れるやうに笑ひこけた。

會議室であつた――

私は孤獨であつた。泪ばかり流れる。騒々しい部屋の一隅に腰をかけてしきりに家に殘してある小さい子供のことが思はれた。あけくれ見なれてきた地平線が突然どこかへめりこんで見えなくなつた不安である。一切が非合法的で、一切が懐疑的で、不自然に眺めやられた。二本の足が堅く縛りつけられてしまつたやうで、體の中心がとれないのがもどかしく耐へきれない焦燥に導く。だが、もしもこの不安と焦燥が表面に現はれたら、その時はピストルの玉が何處からか飛び出してそのまゝ往生するのだといふ感じが執拗にからみつく。結局運の悪いカルタを切つた――そういふ胡麻かしが私を慰めてゐるが一方ではその感情に恐ろしく侮辱を感じてゐる。

私は我慢が出來なくなつてK氏を呼ぶ。

「會議は未だ未だ續くのですか――」

K氏は胸に嵌めこまれてゐる時計をちらとながめて、

「まだ五六時間、そう、夜明まで續くでせうね!」

「夜明? 夜明? 私の赤ん坊はどうなります。私は家に歸へりたい。」

「あはてるのは見苦しい。それではかうなさい。私は友人としてあなたをこゝから無事に出してあげやう。だけどあなたは着物をきかへてからでなければ危險だ――」

「きもの? 私はこんな風に私の着物をちやんと持つてゐる。私はこのまゝで充分です。」

「しかし、あなたが今きてゐる着物は個人のきものですよ。私の貸そうと云ふのはマルキシズムの着物なのだ。あなたは法則としてこの着物をきる義務がありますよ。」

私は不圖、K氏の衣服がほころびてゐるのに眼をつけた。

「あなたこそ着物をおきかへなさいね。そらそこんところがほどけてゐる。」

私はそう言つてK氏のズボンを示した。

「なに、私はまだ〱着換へが澤山ある。これだつてもう少したてばとり換へます。さあ私にかまはずこれを早く着ることです。」

K氏は紫色の風呂敷をほどいて中から××旗で包んだ小さなものを取り出した。私はその小さな包のなかゝら更にあらはれた新しい色の着物をみて當惑した。

「これはマルキストの衣服でせう。私はマルキストではない。マルクスの資本論だつて讀みかけなんです。赤面しますよ、これをきることは全く衒學の徒だ。私はいやだ!」

K氏は私の反對にかまはず私の背後に廻つて無理に×色の服に手を通させやうとする。私は無中でK氏の手を拂ひのけた。その服を身につけることは、すでに恐怖でもなんでもない。唯、×××でない自分がそれをきることは世渡りの手段に過ぎない。そんな事をしては××を冒瀆することである。

「××にも參加せず、×旗もかついだことがない私です。突然に××黨に落ちこむ、そんな馬鹿馬鹿しいことがあつていゝもんですか! 話にもならない!」

私の言葉が耳に響きかへつて邪魔でならなかつた。私は不愉快のあまり自分の饒舌つてゐる聲が老人のやうに嗄れてゆくことが面白くない。だからますます荒馬になる

「わからない話だ!」K氏は穩かに言つた。

「こんな時に勞働運動やマルクス主義の手ほどきをしなければならないのかなあ! だがそれは私的だ。あまりにも私的なことだ。しかし私はあなたが好きだ。だから私人

としての生活のために與へられてゐる限りの時間をあなたの爲めに惜みなく提供しやう。」

「私はそれより赤ん坊のことが大切だ。早く戻して下さい。頼むから戻して下さい。」

けれどK氏は私に答へる代りに首を振つて見せただけだつた。この上なく愁はしい顔つきで――私は繰返し繰返へし哀願したK氏をゆすぶつて哀願した。

ベルがけたゝましく鳴る、また××だ！

「ヅドーン！　ヅドーン！」

余程間近かだ。階段をかけ昇る多數の人間の足音だ。「いよいよ殺される番だ！」嫌な豫感がのべつに腋の下から匍ひあがる。私はやけに手首を振り廻した。氣になるのは戸口だ。

K氏はなにやら躊躇してゐたらしかつたがいきなり私を引張寄せて早口に言つた。

「行くのだ！」

「駄目です。この部屋の、あの戸口の影に私の心臓に穴をあける道具が待つてゐる！」

「だいじようぶ！」友の聲は低かつたが力がこもつて私の耳朶を打つた。

「あなたを輕蔑してゐる。それで憎みきれない。さあ、このハンマーと劍を持つて、それから、この着物をひつかぶつて――あなたが着たくなければ上からひつかぶつただけでもいい。さあ、その左の戸口から逃げて行くのだ。これでお別れしやう。最後に、あなたは私を信頼して下さい。あなたの友人Kは、××のために、否、世界人類の幸福の爲に、正しい眞理のために勇敢に戰つてゐることを記憶に殘して置いて下さい。」

私は玩具のやうに小さく愛すべく出來てゐるハンマーと劍を掌に乘せてK氏を凝視たまゝ簡單ではあつたが、しかし心からなる感謝をこめて默禮した。

私は左の戸口に馳けつけた。扉の把手をぐるつとねじた。片足を扉の外にかけた。と、ピストルが背後で一發放たれた。

「撃たれた？」

私はそれきり死んだことになつた。

私の死骸をとりかこむ友人や見知らぬ人間を仰向きになつた私が見上げてこんなことを饒舌つた。

「私が×色の服を着るでもなく着ないでもなく、實に曖昧にひつかけたことがいけなかつた。けれど、私はひつかけて置くより外どうすることも知らなかつたのです。まあ、死んだことはよい經驗でありました。」

人々は私の言ふことが聞へぬやうだ。私の死體を指さしながら各自勝手なことを聲高に勝手な理屈をつけて饒舌つてゐる。

一人、――たつた一人、影の男が現れて人人の議論の外に立つた。

「こいつの着物を見ろ！　まだ着物に手を通してゐない！　意志のない、バランスのとれない思想の借着に抵抗したことだけは確かだね――」

だが、人々は、

「なんだ！　成程この人間は着物に手を通してゐなかつた！　着換へることが命のとりやりになるのを知つてゐたら、ピストルなんか飛んではこなかつたらうに！　案外才智のない人間だつたと見えるね！」

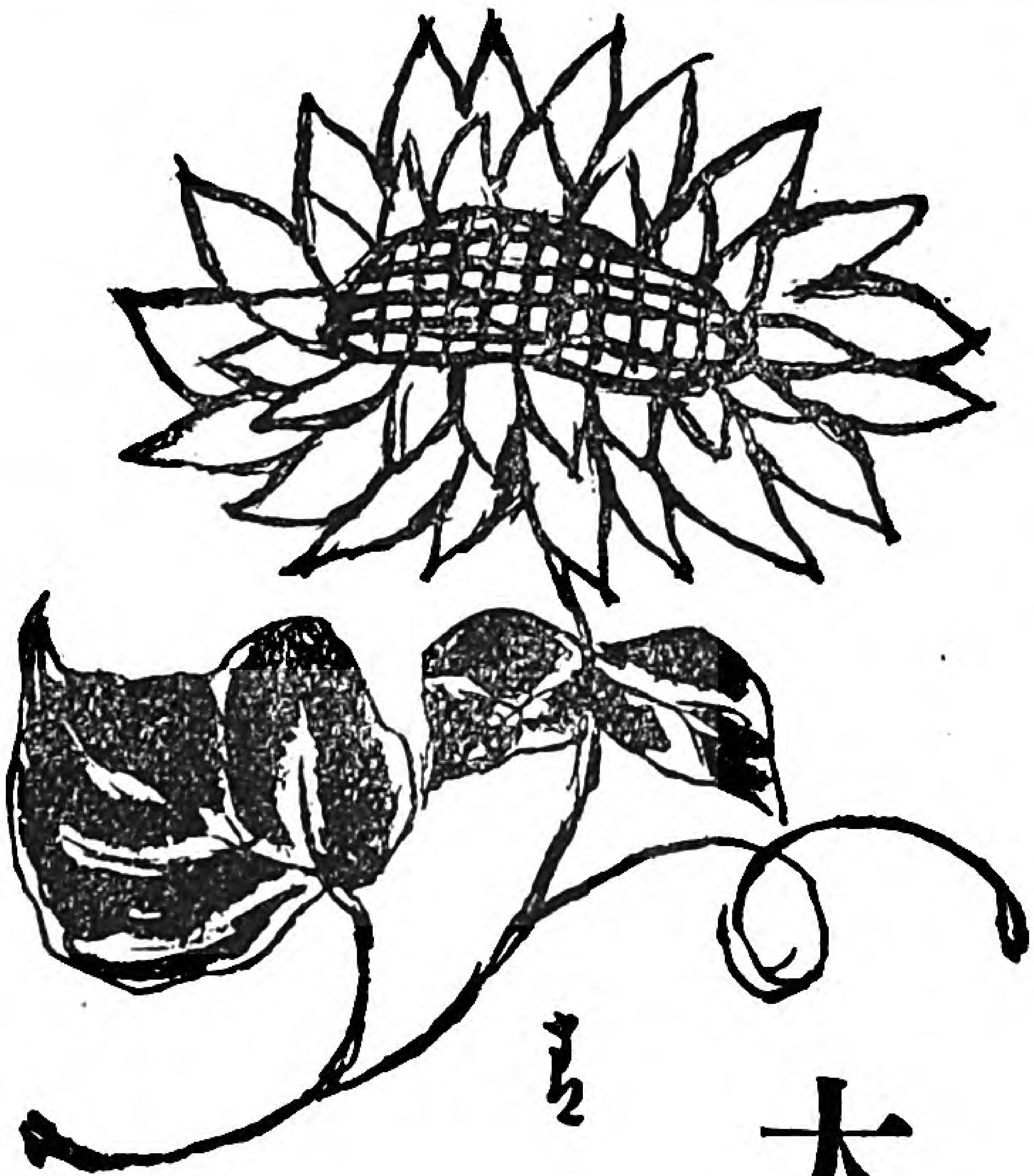
そう、聲を合せて言ふなり顔を見合せてクスクス、と笑つた。憐愍と冷笑と交ぜあはせて――。

そこで、私は夢から跳ね起きた。

大家養成術

—アンドレ、モウロア—

正宗乙未譯



畫家ピエール・ドウシュが、薬瓶にさした花と、皿に盛つた茄子の靜物を描き上げた時に、小說家のポール・エミル・グレエズがアトリエに這入つて來た。グレエズは仕事にせいを出して居る友人を一寸の間見詰めて居たが、軈てキッパリした口調で云つた。

「駄目だ」

畫家はびつくりして頭を上げ、茄子に光澤布巾をかける手を止めた。

「駄目、駄目。君は到底成功おぼつか無いよ。君は頭もあるし、才能も持つて居る、その上正直と來てる、だが、君の繪と來ちや實に恐れ入るよ。人目は惹か無いし、繪の中にちつとでも光つてる所が有るかい？。五千點も出品される展覽會で、君の繪に一寸でも目を吳れる人があつたらお目にはかゝらない。いや、ピエール・ドウシュ君、殘念乍ら先は見えてる。お氣の毒樣だが」

「何故？僕は見た通りに描いてるんだ、それで結構ぢや無いかね」

と正直者のドウシュは嘆息し乍ら云つた。

「其處が問題なんだ。君には妻君も有るし、三人も子供が有るぢや無いか。ミルクは一リットル十八スウだ、卵が一個一フランする。買手よりも繪の數が多いし、悲しい事には鑑賞家よりもまぬけの方が何倍だか知れない。ところでピエール・ドウシュ君、有象無象から急に頭角を現はす何かすてきな方法を思ひ付かないか」

「勉強？」

「しつかりしろ。馬鹿者共の度膽をぬく唯一の方法は、とつ拍子も無い事をやるに限るんだピエール君。君が北極に繪を描きに行くと云ひふらして見ろ。エジプトの王様の樣な着物を着て歩いて見ろ。一派を樹立しろ。帽子の中に氣取つた文句——躍動派——等と書き込むだり、宣言書を作つて見ろ。動態或は靜態を否定し、白、又は黒を、圓或は四角を否定し給へ。赤と黄色しか使はなかつた後期ポーマー派の繪畫を作り出して見ろ。或は圓錐派、又は八面體繪畫を作れ。然らずんばフオアダイメンション派を……」丁度此時得も云へない好い匂が、コスネブスカ夫人の來訪を知らせた。此の夫人はポーランドの美人で、ピエール、ドウシユは其の美にすつかり惚れ込んで居た。彼女は幼年兒童の傑作を金をかけて出版する高價な雜誌の豫約者で、其の雜誌に、正直者ドウシユ君の名前が見當らないので彼の繪を輕蔑して居た。

椅子の上に身體を延して、彼女は描きかけの油繪を見まはして、金髮をゆすり乍ら幾分かの嘲りを含ませて笑つた。

「妾ね、昨日藝術の隆盛だつた時代の黑人の展覽會を見て參りましたのよ。まあ、其の感受性、明暗、力强さつたら！」

と彼女は滑かな歌でも歌ふ調子で云つた。

畫家は彼自身の會心の諸作を向けかへて彼女に見せた。

「まあ、御上手ですこと」

と口先で云つたまゝ餘香をとゞめて出て行つて了つた。

ピエール、ドウシユはパレットを片隅に放り出して椅子の上にグタリと倒れて云つた。

「己は保險の監査員になるか、銀行員か、巡査にでもなる事だ。畫家は一等惡い商買だ。くはせ者でなくちや彌次馬連の賞贊を博す事は六ケ敷い。批評家は野暮な奴の肩を持ちやがる。己はもう結構だ己はもうやめだ」

ポール・エミルは此の言葉を聞き終つて、煙草に火をつけ乍らジツト長い間考へ込んだ。やゝ暫くして小說家は口を切つた。

「で、贋藝術家と氣障な奴等に、相當な手きびしい懲らしめをしてやりたいとは思はないかね。此十年來、君は君獨特の確乎たる更新の爲に準備して居たと云ふ事を、コスネブスカ夫人や、其の他二三の美術鑑賞家に、大いに眞面目に神秘的な態度で公言する丈の自信が有るかい」

「己がかい？」

と正直者のドウシユはびつくりして云つた。

「まあ聞けよ。己は君が思想分析派を建設したと云ふ事を、二大新聞に掲載して世間へ公告仕様。君以前には肖像畫家と云ふ者は無智にして人間の顔を研究した。馬鹿だ！。人間と云ふものを眞に現はす所の物は、其の人々が我々に起させる思想なんだ。だから、大佐の肖像は金と空色の生地に五本の大きな腕章が横に通り、片隅に馬

を配置し、もう一方の隅に勳章を描けばよい。工業家の肖像は工場の煙突、テーブルの上に劵[illegible]を置く事だ。君が世間へ如何んな物を發表していゝかのみこめたかいピーエル、ドウシュ君。で、君は一ヶ月以內に思想分析派の肖像を二十枚計り描く事が出來るだらうね」

　畫家は物悲しく笑つて云つた。

「一時間でゞも出來るよ。惡しい事には其樣な繪の方が成功するかも知れ無い。」

「試つて見るんだね」

「だが已はいたつて口不調法ときてる」

「ぢや一切說明を求められた時は、時間をかけてから聞き手の鼻つ先に煙草の煙を一吹ふつかけといて、只此樣な簡單な事を云ひさへすれば好いんだ。

　――君は河の流れを見詰めた事が有るかね――。

とね」

「だが君そりや一體如何な意味かね」

「何も無いよ。だが、其れが非常に名言に響くんだ。で奴等が君を見出して公告したり、賞讃する時には、已達は此すてきな計畫を語り合つて奴等の盲目さに對して祝杯をあげ樣」

×　×

二ヶ月經つた。ドウシュ氏の展覽會は盛會裡に終つた。其の囀る樣な、聲の調子の好い香水をプン／＼させた美しいコスネプスカ夫人は、此の新進大畫家の側を離れ無かつた。

「あゝ何と云ふ感受性、明暗、力づよさよ！何と云ふ叡智！何と云ふ啓示！まあ貴方樣如何して此の驚嘆すべき合成に到達なさいましたの」

　畫家は暫く時間をおいてから煙草の煙をウンと一吹吹きかけて云つた。

「新愛なるマダム、貴女は河の流れを見詰めた事がありますかね」

　ポーランドの美人の唇は感動の餘りにトン／＼拍子の來るべき幸福を約束した。

　兎の襟の外套を着た颯爽たる青年紳士レペクール氏は、群集に取り卷かれ乍ら批評を加へて居た。

「傑作だ！傑作だ！僕は以前からモデルを使つて繪を描く位卑劣な手段は無いつて事を繰り返へし主張して居たんですよ。だがドウシュ君、貴君の啓示を一寸おもらし願へませんかね。僕の論文からですか？」

　ピエール・ドウシュは隨分長い沈默の後相手の鼻つ先に勝ち誇つた煙草の一吹をふつかけて

「君は河の流れを見詰めた事がありますかね」

と云つた。

「名言！名言！」

相手が賞讃した。

丁度其の時アトリエを見物し終つて來た有名な美術商は畫家の袖を引張つて隅の方へ連れて來た。

「親愛なるドウシュ君、君は仲々喰へないよ。誰だつて此樣な風な進出をやる事は出來るんだ。たゞ多作をつゝしみ給へ。私が云ふ迄は貴君の態度を變へては默目です。私は一年に五十枚計り貴君の作品を貰ひませう、いゝでせうね？」

だがドウシュは謎の樣に、返事もしないで煙草をふかし續けた。次第々々にアトリエは空になつた。

ポール・エミル・グレエズは最後の入場者の後に戸を閉めに行つた。階段の所で段々遠ざかつて行く賞讃の私語が聞えた。

で畫家と二人きりになつた小說家は嬉しさうに兩手をポケツトの中につつこんでゆう〱と恐しく笑つた。

ドウシュはびつくりして彼を見詰めた。

軈てグレエズが云つた。

「ね君、我々は奴等をうま〱とかついだと思はないかい。君はあの兎の襟を着けた靑二才の御說を拜聽したらうね？ あのポーランド美人は？三人の奇麗なお孃さん連が「とつても嶄新！嶄新！」と口々に繰返して居たよ。ところでドウシュ君、己は人間の馬鹿々々しさが計り知るべからざる物だつて事はかね〲百も承知してゐたつもりだつたが、此れ程迄とは思ひ及ばなかつたよ」

彼は此處で又こらへ切れない笑の發作に捉へられた。

畫家は眉をびくつかせ、恰も痙攣的のシャツクリが彼をいらだたせたかの樣に突然

「[illegible]！」

と奴鳴つた。

「馬鹿だつて、ピリシュ以後己が一等の功績をたてたあげくにか」

と小說家は眞赤に成つて叫んだ。

畫家は二十枚の思想分析派の肖像を得意氣に見まはした後、確信ある力強さを持つて云ひ放つた。

「さうだグレエズ。君は馬鹿だよ。此の繪の中には或物があるよ：：」

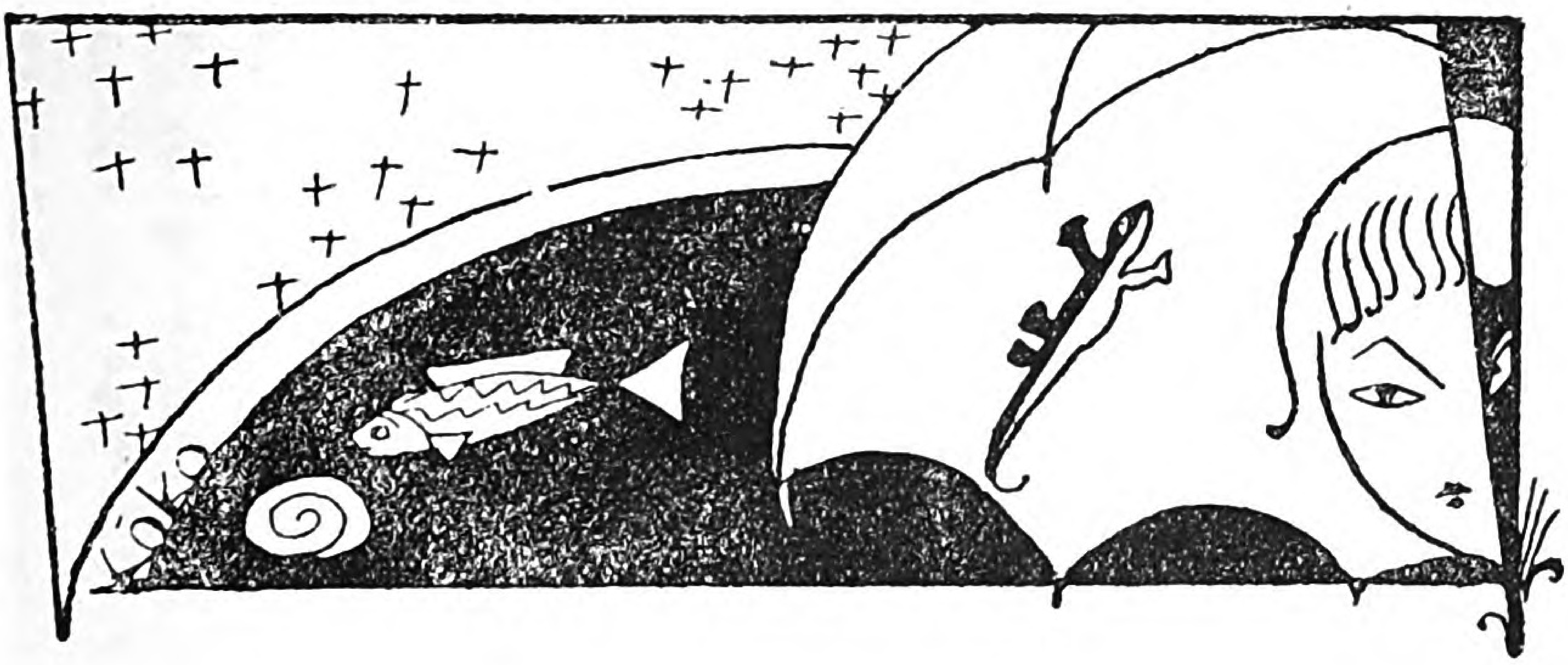
小說家は只茫然として彼の友人を眺めてから云つた。

「だがあまりひど過ぎるぢやないかドウシュ。君は一體此の新形式を暗示したのは誰だか覺えてゐないかい」

其の時ピエール・ドウシュは暫時の沈默の後パイプに火をつけて大きく一吹き煙草を吹かしてから云つた。

「君は河の流れを見詰めた事があるかね」

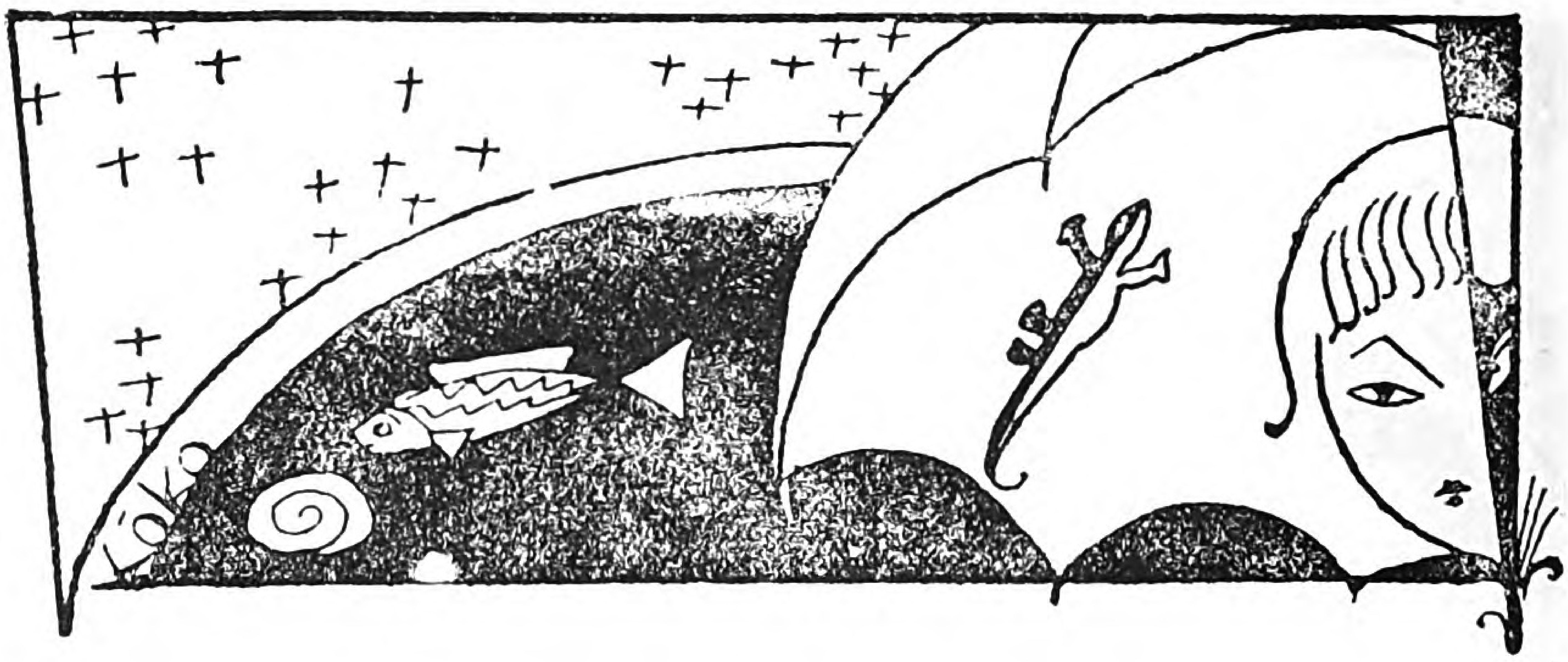
と。



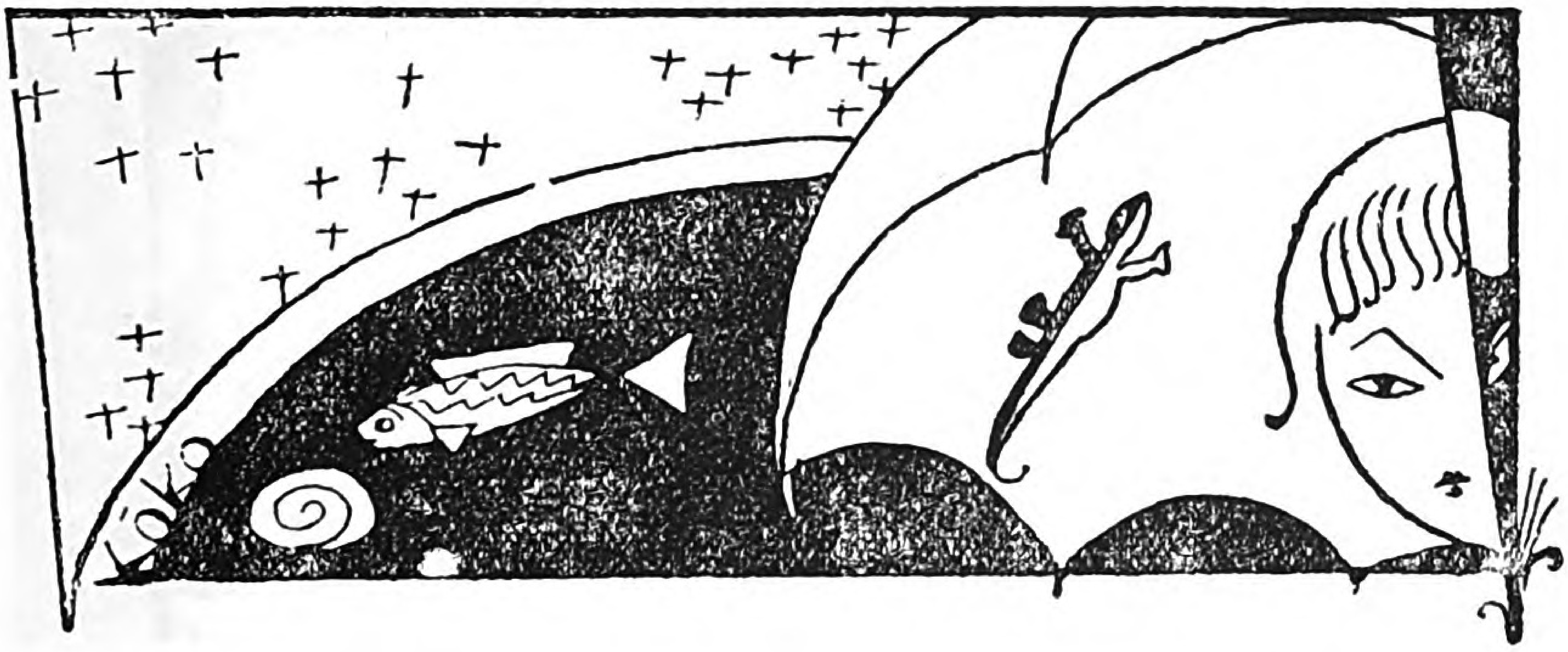
リオ・デ・ジヤネイロ

大石千代子

今晩も
私のふくらんだ栗色の思ひ出は
古風な四輪の馬車に乗つて
アヴエニイダ、リオ、ブランコの街路樹(がいろじゆ)の蔭を
コツコツ、コツコツと馳つてゆく
虚無も寂寥も孤獨も悲哀も
きれいな小娘のえがきぼくろから
並んだ路傍の卓の上から
濡れた若者の紅い唇から
ぎやまんの盃の虹色のかげから
灯にゆれ、息吹きにただよひ
空高くコルコバードの袍に溶けて
私の古風な四輪の馬車は

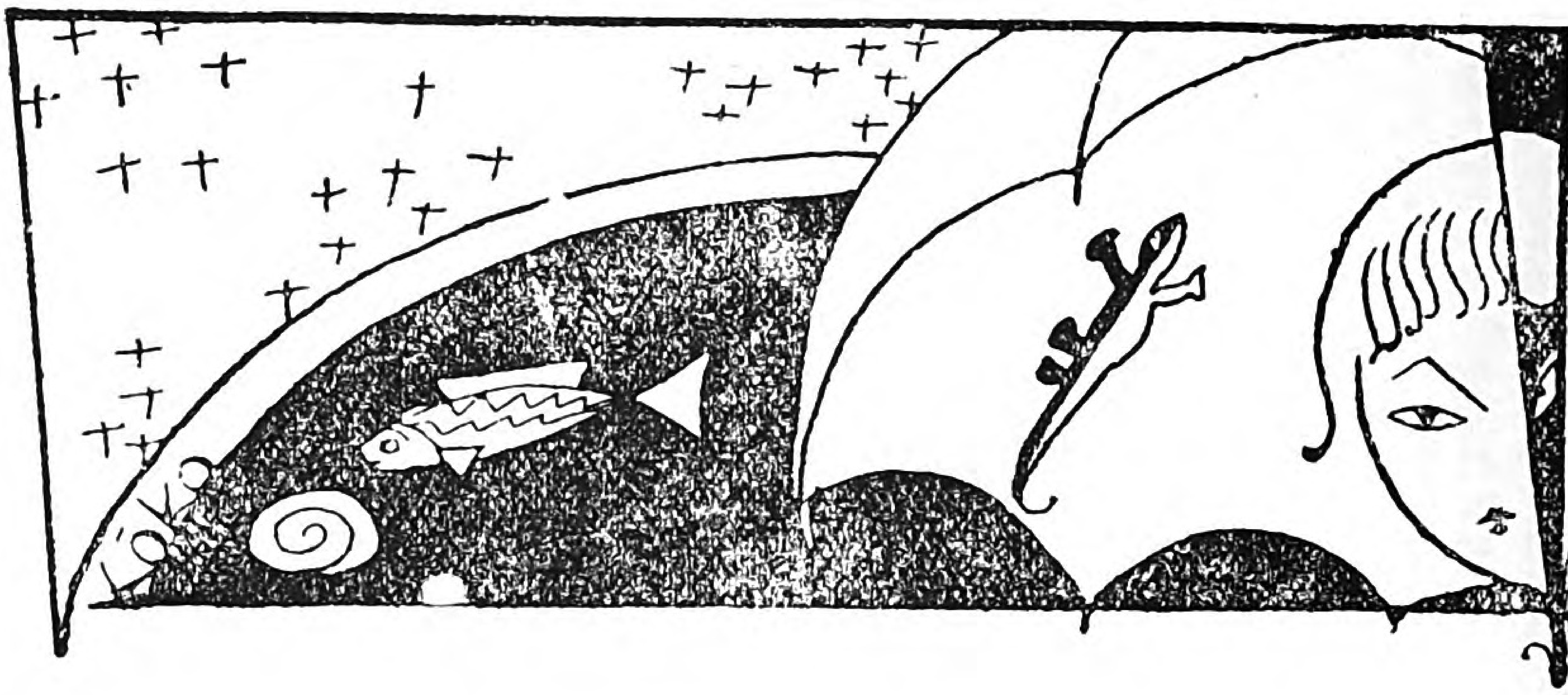


コッコッ、コッコッと馳つてゆく
私の美しい無口な馭者よ
東洋風なもゝいろの被着(しきせ)をきた
若くいぢらしい私の馭者よ
二頭の灰色の馬を驅つて
リオ、アヴェニイダを何處へ馳るのか！
なつかしいふるさとは遙るかに遠く
別れた人々のしめつた目と心臓は
光とジャスミンの混酒の底で
哀れつぽくもタンゴを踊つてゐる
夜風にのつてコッコッとはしる
騒音にかくも淋しく
さゞめきを透してかくも悲しげに
私の栗色のふくらんだ思ひ出は
高塗の古風な四輪馬車にのつて
蒼白くゆれゆれる街路樹のかげを
西へむかつてひづめをそろへ
コッコッ、コッコッ、馳る、馳る。



北極星

旅人よ指ざして
私にはつきり聞かせて下さい
あれは星ですか
北をあらはしてゐる星ですか
夜空に時と希望の運行を示す
あれは私達の星でしようか
犇く暗氣に私の心臓はふるへてゐる
旅人よ、 友よ、 兄妹よ
深夜の妖氣に塞さがれて
しつかりと大きい聲で叫んで下さい
ともすれば私の耳は
彼等の跫音を聴き落しさうだ
たち騒ぐ樹立のやみが
私から彼らを見失はせさうです。
とほきみち、 つきることなきながきみち
もみくちやに破り裂かれた着物の端から



もてあました寂寥の
あゝ、なんとつめたいことか!
旅人よ
微すかに地面を匍つてくるのは
あれは彼らの足音ですか
私の聲が谺してはるかに返つてくる
空しい眞實ではないだらうか。
兄妹よ、指ざして
私はひとすぢに叫びたい
燐光に過ぎない貧しい光の破片を
私の錯覺が肯定してゐるのではないといふことを
私たちの希望の運行
時々運命の動きを示すあれが
私達の北極星だといふことを!
旅人よ、きかせて下さい!
蠟のやうに私の眼は曇みかげろつて
私は立ちすくみ
今はそれを見きはめる術をさへ失ひさうです。

アウ・ルヴォア・巴里

長谷川春子



そろ／＼と薄暗い構内にすべり込んだ。驛夫の呼聲をしない國なので、手傳ひにわざわざ二つさきの寢台車からやつて來た船馴染のイギリスの男に聞くと、のぞいてみて大方まだ郊外だらうといふ。――然し、陰氣で、人がまばらで、これがガール・ド・リヨンであつた。昔の昔の汽笛一聲時代の新橋ステーションの匂ひがする。

日曜の午前九時四十分の巴里はまだ寐て居るのか。建築は古びて落付いて、アメリカ的ビルがなくて、其中へまた極古の建築が交つて、辻々に立つ立像（スタテイウ）は平凡で、並木の古木はお定法通りの形をして年寄らしく――若木のやうに無茶苦茶に芽出しをしないで、つゝましやかに芽を出しかけて、――かくして何もかも頭の中で一度、いや何度も見てしまつた町である。そして、すこし國が現在あまり富まない印しの衰へと、よごれが――手入れをしない古い家具のように、すこし、すこし、すこし氣になる。

そして、もつと肝要なことは曇り雨で、光と云ふ魔術師が何の魅力も輝きも、今日のこの春の巴里へ與へて居ない。これが次いでの途上印象である。

お天氣になつた。が、然し私は珊瑚集を讀みすぎた。ふらんす物語を見なければよかつた、澤山の名蹟を復製であこがれなければよかつた。フランスの事をちつとも知らなかつたらまだよかつたらう。でなければ明治時代に洋行した人だつたらよかつたかも知れない。殘念な事にはびつくりする事が少ない。がつかりする事も少くない。不幸な事にはすぐれたものは皆、眼、耳に新しからず、人間の話も半分か四半分、――時にはよくわかるので、靑い眼玉も、それの故にエトランヂエの珍らしさがない。――かへつて何もかもが、親しみが多すぎて、子供の時離れた故郷へ久しぶりで歸つたようである。それがため衰へと疲れが氣にかゝる――美しく市の隅々まで、美しきが故に――。あの東京に、日本に、盛んに燃え立つてゐる新興の炎が、燃える火の傍に感じる空氣の動搖がなさすぎる。今こそそれが懐しい。あゝ日本よ、友達よ、先輩よ、――未知の明日の若い人々よ、私は手を

差し伸べます。元氣でゐて下さい。
　この十餘日にオペラへ行つた、芝居へ行つた。シネマを見た、美術館へ何度も通つた。森を何度も歩いた、町は毎日歩く。そしてまだ一度としてはつと心がおどらない。
　それにしても、日本に居た時のようなすぐれた知人、先輩、友達でもせめてほしいものだ。そしたら活々するかもしれない。俳優も音樂も、うまくて一通りで平凡だ。――人にも聞いてみた所、天才的なそれらが現今不足か――未被知のようです。もう昔出すぎたのかしらん？日本よ、菊五郎を大事にせよ。――山田耕作をもつといたはれ。――どこの國でもそうやすく／＼とあゝ云ふ人達はいつでもないものですよ。
　私は日本人（エトランゼ）でよかつた。フランス人だつたら、嫌いだつたゴオガンに今や同感しさうである。オランダ人のゴッホならずともこの空氣では頭へ彈丸を送つたかも知れない。
　人は云ふであらう。それでは火星へでもゆかねばお前は滿足出來まいと。ほんとうにさうです。さう思ひます。
　然しこのエトランヂエールにはそのかはり、おかげで喫驚しないで――若しあまり感激しすぎたり、偉大なものが多すぎたら、私は手も足も出なくなりはしないかとは案じてゐたが――おゝ神様よ（大そう古風な表現だが）――それは少なかつた。それ故このエトランヂエールは元氣に、早速自分の心のまゝに動き出すでせう。私ははやく



畫が描きたくなつた。自分の創造をたのしみたくなつた。

かく考へつゝ、毎日新らしき町と、知己とに接しつゝ、折々好意を無にして一人歩きを好む私は――舗道で犬の糞をよく踏む。――辟れな私の好物の動物は、放し飼ひが少いので、可愛いい、氣取やのテリヤでさへも、恥しさうに、仕方がないから御主人の前でオペラの通りでも、ほかの巴里一番の通りででも迂濶な私に糞をふませる。

それから佝僂――毎日一人以上出逢ふ。レンブラントの夜番の畫中人物のようなのに。それにしても、日本人の體が若い人の體が、早くもつと立派にしたいな、優生學と人體美は日本に於てもつと關心されよかし。反對にイギリス人も私に語つた。フランス人も私に語つた。イギリス人はイギリスの人の體の小さくなることを、フランス人も體格が年々下ることを。それから又若い女、中年の女の生活難と情慾の葛藤のためか――すさまじき白粉の顔によく出逢ふ。――店の賣子にはかわいいのが中々ゐる。――時たまであるが恐ろしい淫蕩な顔をした子供に出逢つて吃驚する。それが丁度同じ年頃の子供ばかりで丁度大戰の終り頃に出來た子供らしい。どこの横町にも酒屋があつて、朝でもいつでも男たちが一ぱいやつてゐる。

この季節にミユズイックホールのフオリ、ベルジエールでは『アウ、ルヴオア、巴里』といふ唄を流行せてゐる。酒ない國のアメリカ人がアウ・ルボア・パリまた、くるよ、といふ唄だ。成程、しかし、こうして居酒やへ入りびたる多くの連中の事を考へると表向き丈でも、思ひ切つてペイセックの方が國が興るかな？



さて二週間すぎた、すこしづつ目新らしき印象は減つてきた、比べて考へることが段々らすくなつてきた。やがて雜感もまたかわつてこよう。

一九二九、四月末。

四月二十四日　パリ　長谷川春子

パリ到着の朝は曇り日のためか古都の感じ深すぎて、おちつきすぎて、古木の若葉もかへつて憂欝でした。飛躍と清新のすきな私にはがつかりするものもあつて、びつくりするものはすくなし、いゝものは寫眞でなじみすぎなれば、只活動のトーキーだけは面白かつた、ポアンカレーのフオシユのお葬ひの演説とか、火山の爆發の音、キツスの音、群集のざわめき、競馬のさわぎ成程未來はトーキーでせう。臺詞まじりのジヤズから一歩進んだもので、音樂的に大分加工した一種の音樂的疑聲です。何だか子供の時はなれて空想して居た故郷にかへつたような喜びと憂ひがあります。

昨日藤田嗣治氏におめにかゝりました。大變賢い、ヒロイズムの人で成程とおもひました。綸もなる程と思ひました。時雨さんによろしくとの傳言です。八千代さんのことだから、

女人藝術の皆さんによろしく。

夏のクリミヤ

―ロシヤ見聞記―

大竹せい子



夏を知らぬ北國ロシアも、さすがに南へ行けば暑さにこたへる。

夜と晝とのはじめも淡い白夜の初まる眞夏ちかい頃であつた、黄色い顔をした男女の旅人が、しよんぼりとモスクワのクルスキー停車場へ驅けつけたのは夕方の四時頃。

暑さを慕ふて南へ〱と走る汽車に身をのせ、顔か髯か分らぬやうな連中の中に挾まつて、誰にも解らない亂暴な日本語が二人の間に口早くとりかはされる。

『何だらう…あのおやぢは？』

『すこし河童に似てゐる』

『まんなかが禿げてるからだ』

『よつぽど邊鄙な田舍の百姓だ』

噂の主はきよとんとした瞳をこちらへ向けた、河童！ほんとに河童のとほりだ、捻れ〱の頭髮はまんなかの禿げを殘して銅色の額に蔽ひかぶさつてゐる、汚いルパシカから食出した胸毛の長く動物的なことよ。

『オヤ、あの婆さんは肉のかたまりを繋ぎ合せた樣だよ、ごらんあの胸、腹、それからむき出した腕の太さ』

曇つた硝子玉のやうな瞳が、もれ上つた頬肉の奥の方に何の光りもなく鈍重に動いてゐるこの田舍婆さんの格好ときたら、ロシア農村の代表的婆さんスタイルである、象のやうな足首には靴の替りにワーリンキを穿いて、三人前はたつぷり入れられる賛しめたおしめの樣な更紗の袴(ユブカ)は汚い襞をたるませて、堅(かた)い腰掛から泥だらけの汽車の床を流れてゐる。南京米袋のやうなものへ一杯何

か詰め込んだのを寄り掛りにして、婆さんは人の好い無智な顔に微かに笑ひを含んで珍しい——異國の女——を見つめる、その唇は何か問ひかけたくて仕方がないやうにおのゝいてさへゐる、問ひかけられたが最後、愚問奇問の連發攻め、第一かうした連中は話が長たらしくて切りがないし自分の下手な言葉を嘲はれるのも癪だから、私は窓の方へ身を寄せて單調な青い原野を見やつた。

ハリコフ

翌日の午前十一時十五分といふにハリコフへ着いた、さて西も東も解らぬ。困つたあげく驛長室へ飛び込んで、宿屋はどこが好いかを訊いて見る、示されたのは「赤い宿屋」といふのであつた。別に赤いとも白いとも思はぬが、全體に宿屋の名前や町の名前まで赤いづくめ、革命家の名前づくめが流行つてゐる。さてもさてもと思ひながら馬車を走らせる、「赤い宿屋」では貧弱な部屋代が一日十二留、他のボリかたのひどいのにも呆れたが、翌日拜見に及んだ鐵工場の汽關車製造場の人々の親切さで差引くとしよう。

こゝは工場地帶で人口三十萬、暑い汚い都といふより他に何の印象も殘らない。

勞働宮殿

アルチヨームスクへの汽車に乘つたのは朝の七時過であつた。

先づこゝへ着いて第一に訪ねて行つたのはかねてモスクワから紹介狀を貰つてある「勞働宮殿」であつた。プロフインテルン、全聯邦勞働組合中央評議會及び各勞働組合中央委員會等を含んだ勞働宮殿の中心はモスクワにあるが、聯邦各地方にも勞働組合支部聯合評議會がおかれてあつた、即ちそれが勞働宮殿である、勞働宮殿の人々は皆親切であつた、勞働者達は珍しさうに私をとり圍んでいろ〳〵と話しかける、彼等は私達を「中央旅館」といふのへ案內してくれた、誠に恐れ入つた宿屋であつた、第一に一つの部屋にいくつもの寢臺の行列、夜は南京蟲の襲來にどぎもを拔かれあげくのはてに、この宿屋にはお茶も食事も黃かへしの水さへないのであつた、それで部屋代一夜五圓と敷布一枚五十錢、枕カバー一枚二十五錢也といふ勘定書。

勞働宮殿の紹介で郊外の鹽製造工場へ行くべく、おんぼろぼろの自動車がやつて來た、親切な勞働宮殿からつけてくれた案內役の猶太人の若い衆には今考へても少々腹立たしくなる。自動車は走つた、惡道路と橋なき川の中までも走つた、何時間走つたらうかあまり遠いのに實は私もあきれてゐたら、知つてゐるらしく見えた案內役は實は工場の所在方面をさへ知らなかつた、斷りつかれて人に訊いたら、その三分の一よりも近かに近い所にあつた、戾り着いて見ればもう夕方の六時で扉は固く閉されてゐる、高い自動車賃を拂つてなほ殘されたものは、ばからしい腹立たしさと疲勞のみであつた、短氣な日本女はこの時さう思つた。もうどつこも見てはやらない、觀せて貰ひたくない、と、悔みと怒りのないまぜた氣持で例の不快な宿へ戾つて來た、何のために此處へ下車したのか、何の爲めの滯在か、一分も居たゝまらない、早く海の方へ行きたい、海と遊びたい、が、さて宿の勘定を濟ましたものの汽車の時間は不明である、乘る汽車が着いて見なければ切符の有無が分らないのは苛立たしい、馬車を驅つて驛には着いたが、大方三時間近くも寒い夜の石疊の上に立つたり腰かけたり、聾人

種を眺めたり眺められたりして過した、その間にも幾度切符賣場へ聞きに行つたか、人々は全く呑氣にどつしりと構へ、夜を徹するつもりでか歩く場所へさへころがり寝てゐる人もある、私は心から旅に出たことを悔いた、去年の樣にモスクワの郊外で寝ころがつてゐた方がよかつたと思つた。金力はどこにも偉力がある、最上級の萬國寝臺車だけが私達を救つた、萬國寝臺車に納つた私は想ふのだつた、もしこの汽車に乘れなかつたらこの次の夜中の二時まであの農民達の樣に寝ころがつてゐる、もし又それに乘れなかつたらア――

軟い腰掛の車室には、例の河童や農民代表婆さんなどは見たくても見當りはしなかつた、はち切れさうな俵の樣な奥さんや鼻の偉大な猶太人種、でなければ共産黨員の代表人種、それが政府筋の用務を帶びて旅をする、と云つたやうなことに頷ける。彼等の多くは食堂には行かなかつた、車掌に湯を汲ませて車室の中で食事をしてゐた、女達は廊下へ出てよくしやべる、そして私の車室を覗き込んで行くそれだけでも暑くていやだ。

ロストフ

夜になつて、クリミヤ半島の先端にある港ロストフに着いた。馬車を駈り行けども宿屋は泊めてくれない、漸く三軒目にきれいな宿を見つけた、番頭の爺さんはお世辭がよくて、頼まないのに馬車から荷物を運んでくれたりした、こんなことは今までになかつた。そこは住み心地の好いバルコンつきの部屋であつた、前は電車通りで向ひ合せがゲ・ペ・ウらしかつた、電車と馬車のコーラスはなかなかに騒がしいが、女中達も好意を持つてゐてくれて氣持が好い、早速入浴の用意を頼み久々の旅の疲れを休めサモワルをとつた。夢うつつに馬の蹄の音を聴きながらロストフの一夜は明けた。

眼を射る太陽、それが地上の石にてりつけて久しぶりで私は日本の眞夏に逢つた樣な氣がした、男子の白服もこゝへ來て何年振りかで見かけた、眼を閉ぢれば宛がらに懐しの日本が味はへる。

船で黒海を渡るために切符を買ひに出かけた、町の大通りは割合に整然としてゐる。

船會社の所在はやはりロシヤ式だ。誰に問ふても要領を得ないこと夥しい、巡査さへ知らない、しかも速直（そつちょく）に知らぬと答へてくれないで、いゝかげんな事を教へられるからこちらは餘計な骨折り儲けになる。結局自分達だけでドン河の岸へ行き事務所を訪ね當てた、數人の事務員達が面白がつて相手になつた、日本人だと知ると、長崎へ行つて刺青をしたといふ男が右腕をめくつて龍の刺青の素的なのを見せてくれた、猫の樣に刎ね上つた髯を持つた男であつた。一人の男は親切にも別棟の事務所へと案内してくれたが、そこでは切符を賣つてゐなかつた、又ーても元の大通りへ引き返して藥屋の店の一隅に同居してゐる賣場で一等二枚買つた切符を買つたはいゝがさて船の出るのはこれから三日の後であるといふのに驚かされた、これから三日間この單調な狹い港町でどう暮さう。

宿屋ではサモワルの他食事は一切出さないので、例の大通りを毎日食事のために幾夜となく往復した、ある日レストランの往來に面した端の方で私は食事をとつてゐた、大食でない私は、皿の大半を殘してフォークを置いた、と、同時に、今迄單に珍しがつ

て私を見物してゐる者とのみ思つてゐた汚らしい子供達の群が、一勢に私の目の前の皿に摑みかゝつた、彼等は奪ひ合つて私の食べ殘しをさらつて貪り食つた、その鳥の樣な汚い手で、私は驚いて身をひいた、エーターは走り來つて怒鳴りながら彼等の中から皿をとり戻した。私はもう往來に面したレストランの端には席をとるまいと思つた。

田舍だけに物珍しがるが、人氣は一般にモスクワなどよりはゆつたりして好感がもてた、ある日大通りを二人揃って歩いてゐた皆よく無遠慮に見る、後ろから來た男の子の悪戯盛りなのが二人私達にからかひ始めた。

『ホーヂヤー……』程よくその側を通つてゐた民警が子供を咎めた。子供達の後ろから歩いてゐた中年の女は、民警に聲を合せて又叱つた。

『お前達は何だ……失敬な……。』

子供達は首をすくめて先へ行つてしまつた。

船の出るまでの三日間を私は無聊に苦しんだ、觀るべく何物もない、語るべく何人もゐない、天氣は燒けつく樣に暑い、狹い公園も見つくした、ドン河のほとりもぶらついた、河に架せられた橋は、船を通すために時間を定めて眞中から二つに開いた、向ふ岸の島の遊園地帶では、子供等がぶらんこにづる下つて遊び戲れてゐる、この小島にはさすらひのジプシーが澤山テント生活や穴居生活をしてゐた。彼等の女達は占ひをするためにかるたを持つて群集の中を泳ぎ廻りせがんでゐた。ドン河の水は汚くて魚はばか〳〵しくのろまと見え一つの餌で拾ふ樣によく釣れた、名も知らぬ魚である。

退屈まぎれに夜活動寫眞を見に行けば、むかしにモスコウで見た革命の宣傳劇、歸つても仕方がないから、それを一心に見入つて歎聲を惜しまぬ見物人、そしてやはりさわりの所へ來ると手をたゝく見物人を見物して戻つて、寢につくと間もなく扉をノックする者がある。

『吾々の國では外國人は二日以上泊ると旅劵を屆けなければならない規則です、ですから、一度他へ行つて今朝また來たことにしておきますから……』

と、例の親切爺さんが云ひに來た。今日は日曜日だから明日にでも早速居留の屆をしてくれと、彼は幾分歎願の表情をこめて云つた、朝になると爺さん早速怖さうな顏をして屆けのことを歎願しに來た、もうぢき出發のことが分つてゐて、うるさいことだがお國の規則とあれば仕方がない、朝早く電車で屆出に行く。

革命後船舶不足は聞いてゐたがさて私達はどんな船に乘るのかかなり事務所の人々が御自慢の船らしかつたので、その正體を見屆けるために行く。ところ世紀おくれの兩輪のついた御粗末なのに二度吃驚、すなはちそれが「デルヂンスキー號」さてこのデルヂンスキーが出帆する時間が不思議なことに誰に訊いてもまちまちである、切符賣場の爺さんは午後四時だと云つたが、事務所では十二時か二時頃だらうとの御宣託、旅行案内には一四とあるからまあ二時のつもりでゐやう。

退屈な三日過ぎた日の午後四時に船はロストフを離れた、さすがにさり行く船のキャビンは一抹の哀愁が胸をかすめる。

一等船室は實に不氣味に殺風景なものである。元來が客船ではないから、港々で荷物で時間をとられるのが結局私共には好都合、

三四時間の碇泊を利用して船中で出來た知人達と見物兼散歩買物などに出かける。海近くなると河幅は廣く景色も幾分眺めるに足る、汚い暗い一等室に居なくとも結構デッキの上で暮せる、片足の少し跛の小學校の先生だといふロシア人、聰明さうなドイツ人の若者、溫和な壯年の男等が私の一番親しい友達になつた、どんな眞夜中であらうが船さへ止まれば彼等は誘ひに來た、十歲になる少女ガーリヤは私に一番親しみをもつてついて來た、母親は上品にすました人で、今のロシアのお時勢に合はぬ程アリストクラットな婦人であつた、この親子はクリミヤ半島で一番私の氣にいつた療養地ヤルタまで一緒であつた、宿も一緒で部屋も隣り合せにとつた。彼等が部屋をさがして移り住んでからも互に行き來をして親しんだ。

ヤルタ

ヤルタは明るい好い町であつた。宿屋も比較的廉くて設備も好い、商店の品物も割合に揃へてある、主にギリシヤ人ダッタン人などでお世辭も好い、四日間のデッキ生活で黑人の樣に焦がされた東洋人のためにも彼等は非常な好意をもつてくれた、汗だらけでもう着換へもなくなつたのでダッタン婦人の肩掛を買つて着物を作つたり、ダッタン帽を買つて被つたりした、レース屋の主婦は中年女の裁縫屋を紹介してくれた、優しい溫いその婦人は假り縫ひの時も自分から持參し、約束の時間、違へなかつた、ペトログラードの人だと云つた。

夏の夜のヤルタ町は銀ブラを想起さ[illegible]、モガは肉體美を思ふさまさらけ出して步いた、モボ達は[illegible]にその後を追ふ。その間に立つて宿引らしい男が、『宿がありますよ、食事つきいくら〲』などと行きずりの旅人らしいのを引きとらへて話しかけるなど療養地氣分は多量に漂ふ。例の商店が時間ぎめなのと博物館が一週に何度で何時から何時までといふ規則づくめが旅人にやるせない不便さを想はせる、時間勞働のソヴエート國のひらめき！

美しい海、雲にかすむ山々、小さく貧弱ながらも朝顏の花、かぼそい竹が地上に生へてゐる、それらの存在が故國をしのばせる、久しく忘れてゐたものが凜然と私の胸にかへつて來た、それに私を悅ばせたものは新鮮美味にして安い櫻ン坊であつた、新聞袋の櫻ン坊を抱へて喰べながら終日を步き暮した日もあつた、私達ふたりはかくして每日步き廻つた、ある時はこの町から遠く山の中の村へ行つた、山路は爪先上りにつゞく、太陽の直射はさすがにモスクワに味はれない暑さである、箱庭の樣な美しいヤルタ港は目の下に、藍を溶き流した樣な黑海の水はさながらに繪である、文豪チエホフの家の白い壁も靜かな繪の中にあつた、寺々の屋上の金冠はまばゆく御光を發し家每の玻璃窓を射た、私は何もかも忘れてサンダリを曳きづりながら步いた。この邊の村にはほとんどダッタン、トルコの人々で東洋の臭味がまづ親しみをもたせた、平坦な廣い道へ出た時向ふからお椀帽子の東洋くさい人が來た、そして例のとほり先方から口をきる。何處から來たか？何處へ行くか？いつも誰もが型の如く問ふ樣に問ふた。

『私達夫婦は日本人で、これからマッサンドラの葡萄酒製造工場を觀たいものです』

といへば、何か證明書がなければ參觀は出來ないといふ。私達はがつかりしてゐると彼は面を軟げて云つた。

『たがせつかく來たのですから、グリゴリエフが觀せろと云つたとお云ひなさい、そして中へずん／＼おはいりなさい』

『グリゴリエフさん、さよなら』

私達は感謝の言葉を送つて別れ工場の方へ急いだ、鐵砲を背負つたあばた顔の門番もロシア人ではなかつた、そして誰も彼もが親切である、案內人は廣い工場內を快く連れ歩いて説明してくれた。一萬からの大樽の行列、その栓から點々と洩れ落ちる雫が集つて流れ出る葡萄酒の小川、その芳醇な香は口にせずとも快い陶酔に誘ひ入れられる、千七百年、八百年代の古い葡萄酒の貯藏してある地下室は躰に栗する程寒かつた。罎の洗ひ場を見物して外へ出た。

さてどちらへ行かうか、道は自然にダッタン人の村へとみちびいてくれた、辻へ立つて道を問へばわざ／＼屋外へ出て來て敎へてくれる御內儀さんがあつた、樹もない山路が幾重にも折れ曲つて屢々村の入口へと續く。煙草畑、葡萄畑は模樣のやうに點在してその下に整然たるヤルタの町がつゞく、眺めつゝ行くほどにアイワシリー村へと着いた。石だらけの往來とあまり清冽といへない水を湛へた小川とを持つたこの村を飾るものは、枝もたわゝの紅い櫻ン坊の樹と、まだ青い實を附けたゆたかな林檎の樹とであつた、この暑いのに黑いカラクリ帽（日本でいふアストラハン）を被つた子等の言葉は一語も解らない、學校では露語を學んでゐるといふのに。村へ入つてから道を問ふと立派な主人が出て來て親切に指し敎へた。

私達日本人だが、あなた方の生活を知りたい、といへば、彼け快く家へ迎へ入れてくれた、この家はこの界限でのブルヂョアと見えて、十五人からの人を使つて煙草の製造をしてゐた、煙草は五デシャチン（一デシャチンは我が一町歩强）を作つてゐると云つた、四ツの部屋と浴場とがあつた、臺所には家庭製の大きなパンがころがつてゐた、彼の語るところによると、牛は放し飼ひは許されないし、十デシャチンに對し年に四百留を支拂はなければならないとこぼした。彼は別れる時、歩いて行つて何處でも見せて貰へといつた、だがその後歩いた處では彼ほどのゆたかさを持つた家は見當らなかつた、少し大きい建物があつた。押してみると戸が開いた、誰もゐない、廣間に絨氈や毛布が敷いてある、彼等の寺である、彼等は椅子ではなくこゝに座つて祈念をこめるのであらう、彼等と語ると葱くさい、彼等は羊の燒肉に生の葱を添へて食べる、私達は村の出はづれに並んだ繩のれん樣の店食べるへとびこんで早速葱くさいシヤシルイクを注文した。モスクワでよりは遙かに美味であつた、店の爺さんは私達を東洋のよほど偉い權力を持つた黨員だと思ひ込んだらしい、食事中も側へ來て團扇で蠅を追つてくれたり手拭を濡らして來て手を拭かせたりした、おまけに自分の秘藏の書類を持出して來て昔語りを始めてしまつた、昔の陸軍大臣の秘書官だつたと云つたのでつく／＼顔を見やれば、この御仁可哀さうに少々氣が變である、要するに彼は訴訟狂とでもいふのであらう。

『今モスコウからカリニンが來てゐるさうですがどうしたら逢へるでせう』

などと外國人にむかつてとぼけた質問を發するこのお爺さん、よく／＼へんな人だと見切りをつけてフォークを置き次第に退却する。

昨日頼んでおいた古靴を受取りに行く。職人の興味深さうな眼がこゝでも見張つてゐる。『あなた方はもう日本へは還れないんでせう、歸つたら直ぐにつかまるのでせう』などと親切な心配をしてくれた。

同じ足で團體見物の申込に行くと、事務所の人が『同志カタヤマか？』と問ふた。

名所宮殿見物

翌日の名所團體見物は同行十人であつた。中央に傘の様に幌を張つて二頭の馬で曳かせるリネイカといふ車、車上は赤ン坊までまぢつてさながら一家族の様に親しみ合つた、説明者は若い田舍の親切な男、名所々々でリネイカは止められ、一行は説明者を中心に歩く、その日は宮殿ばかりでも澤山見た、ニコライの宮殿は今勞働者農民の療養所になつてゐて三部屋しか見せなかつた。ニコライ帝の家族の寫眞がありし日のまゝに架かり、幼ない皇太子に從ふ鞠躬如たる將軍の燦たる姿も見られた、金塗りの寢臺二つ、もも色の羅瀬の羽枕二つもそのまゝに、かゞやかしい聖像はまばゆきまでに併列し、しづかに跪く麗人のありし世の様を偲ばせる。



燒けて朽ち果てた壁の僅かに部屋の型を想はせる宮殿であつた。アレキサンダー三世の兄弟コンスタンチスは當時の進歩派として目されてゐた、所謂貴族の革命家であつた、彼はとくからこの地に島流し生活を送つてゐたが、愈々家宅捜索の手が及ばんとした時、彼は自らのこの宮殿に火を放つたのである、燒け落ちた木片は今も尙ほくろ〴〵として横はつてゐる、高貴な玄關を想はせる石の狹間や地下室の邊りから、心なくも延びた青草はなよやかに風にうなづき合つてゐた。

宮殿博物館――最も金持であつたヴォロンツォフ伯爵家は極めて粹を蒐め美を盡してゐる、伯爵はいちばん皇帝の氣に入りの一人で英國かぶれの貴族であつた。まづ誰をしても去る能はざらしむるものは、庭園の三對の大理石を刻まれた獅子である、就中階段の一番下になが〴〵と眠つてゐる獅子は、知るも知らぬも、解るも解らぬも暫し見とれて去ることが出來ない、伊太利の名作であると聞く、ある英國人が五萬留で買ひたいと申込んだがわれわれロシア人達は手放さない、と、かの若者は説明した。庭園の植木の贅、點々と配置された休み臺の美しい大理石のかゞやかしさヴォロンツォフの家族は一九二〇年までこの邸内に居住したといふだけに歴史はなま〳〵しい。贅澤な部屋々々、食堂の椅子一脚にも豪奢ぶりが想はれる、

壁の繪畫、置かれた彫刻、プーシキンが熱愛していつも御機嫌をとつてゐたといふヴロンツオフ伯爵夫人の繪姿もその中にあつた。

だが私は宮殿の中で一番自然を多くとり入れ雄大且つ纖細な美を盡したのはオリアンダのそれであると思ふ。一八八〇年頃に皇太后の宮殿は燒けて見るかげもないが、ギリシヤ式の八本の柱をもつた園亭が、蒼い海にましろの姿を止めてゐるのは繪である、私はこゝでおひる御はんを食べた。惜しくも落ち散る辨當がらを氣にしながら見下せば青葉の中に紅に黄に花畑が點綴され、白鳥の姿はなくとも池は時々波紋を描いて森林の小鳥は頻に囀り和した、歴史を繰ると、コンスタンチン・ニコライヴイチ太皇が九年間の月日をけみし建設した豪壯な宮殿が一八八二年に燒けてしまつた、その跡を買ひ取つたのがアレキサンダー三世である、十五世紀時代にはウルゲンラと云つて古い要塞の趾があつたといふ。美しく靜かなる廢虚である。荒れ果てた花園にこぼれさく花の數々、綠の柏、紅い蔦、何としづかな自然、黒海の水、浮べるヴイナスの彫像、時を過去にたぐりながら私はやるせないといきと共に天然の絨氈の上に疲れた兩足を投げ出した。向ふの池の邊りに白衣の人が立つてゐた、衿に赤い布の卷かれたのは共産青年團の子等である、後ろの頭上の森を越した往還からは自動車の響が時々しじまを破る。モスクワからカリニンが來て今日ニコライ二世宮殿の勞働者農民療養所で講演があるのだといふ。

移り行く人の世の縮圖である。

讀者通信

大分縣　鬼崎雪子

政爭の本場當縣も文藝的には割合に進出してゐるの感がありますが、それでもまだ道遠しです。特に女性の頭惱は――。

併し、御苦勞樣にも書店の店頭に四五時間の見張りして女人藝術を求めて歸つた人の後をつけて行つて、その姓名を覺えて歸る。といつた樣な熱心な誌友もありますから御安心下さいまし。この手段でやがては聯盟を造つて御婦人方を着物と人の噂話から解き放ち、臺所と八百屋とだけの交通距離を延長して街頭に、工場に學校に導く事を努力いたします。諸姉の御健在を。

北海道　長門千代子

女人藝術の叫び、それは何といふ力強い頼もしい聲なのでせう。私は小學校に働く一女教員でございます。教壇に立つ私たちの世界は兒童のそれであつて、他の何ものでもないので御座います。生活のリズムは内在するタクトの停滯に進まず、事物に對する感激は年と共に逝き、心天井のつかえる樣な心苦しさと空虚にのたうつてゐました所へ、東京の友人から送られた五月の女人藝術を手にした時の兩眼の輝き心のひらめき、靜かに讀んで行く時、熱い〳〵喜びと幸福の涙は頬を濡らすのでした念なき魂の歎きに、良き糧を與へて下さいましたこの女人藝術に感謝の言葉もない位でございます。

私たち女性のために女人藝術の永續を祈り上げます。

十弗の紙幣

――マウント・ホリヨーク大學より――

西村アヤ



西村アヤ子

父さん、

お金はほんとに〳〵ありがたうございました。けれど、本當にこの十日程の間はお金の事で思ひわづらひました。

不思議な船の都合で、書留の方が早く日本を出てゐるのにニューヨークまで船で來たためにおそくなつたのです。

毎日毎日私は日本からの書留の事ばかり考へて心待ちにしてゐました。

先月の六日に電報を打つと決心したのはどう考へても手紙でその時お金のさいそくをしたのではこの月の board を拂ふのに間に合はないと思つたので五弗をふんばつしてとうとう打つたのでした。それから日を操つてこの月のはじめにはお金が來るだらうとだんだん心細くなりながら毎日々々待つても〳〵來る手紙は皆アメリカからだつたり日本から來たのでも友達からだつたりしてもうこの七日八日には本當に毎日ドキ〳〵してゐました。そして八日だかに學校から「今日こそは」と思ひながら歸つて來ると久ちやんから手紙が來てゐる、讀んで見ると久ちやんもお金がない、思ひわづらふ。と可成辛らさうな事が書いてある。私は讀みながらもう胸がドキ〳〵して來た。する事もなく私は手を合せて神様に祈つたりした。

「どうぞ久ちやんをおまもり下さい、どうぞ私をおまもり下さい」と言つて。

山田百合子からの手紙は十月十五日の日附で五日にこちらについた。私の電報がそちらについてゐるのならそれを見た返事がどうしたつてもう來なければならないのにと私は始の時間割を出してしらべたり、電報が配達されなかつたといふ場合を考へたりした。

そして土曜日にやつと着いた手紙は父さんからだつたが書留ではなかつた。そして十月二十三日として、日記一通手紙二通電報一つ來たと書いてあるけれどお金を送つたとは一口も書いてないのでもう〳〵私は心配し出した。これからの送金の困難な事、大學で勉强する事の可否などが書いてあるので、私は今しばらくはお金を送つてくれないのだらうと思つて何とかしなければならないと思つた。久ちやんにはこの手紙を見る前に出來るだけのなぐさめの言葉の手紙を書いて日本から來た手紙を送つてやつた。(日本から一寸も手紙

が來ないといふので）

そしていよ／＼決心したのは私の持つてゐる首かざりやブローチや扇子といつた樣な一寸お金になりさうなものをこの土地の金持の家の奧さんに買つてもらつて十弗なり二十弗なりを得て當座の電車賃にでもしやうといふのだつた。

そしていよ／＼今日それを實行した。おゝそれはもう大決心で、胸をわく／＼させながら、マウントホリヨークのカレヂから一哩ばかりはなれた所に廣大な地所と家とを持つてゐるアメリカの絹王のスキナーといふ人の家のベルを押した。もう夜だつた。ベルを押してからも、人が出て來たら何と言つていゝのか知らなかつた。

「ミセス・スキナーにお目にかゝり度いのですが」

と取りつぎに出て來た若い女の書記らしい人に言つた。その人はすぐ私を導き入れてくれた。

ミセス・スキナーは年とつた婦人だつた。優しい言葉で「まあおかけなさい」と言つてくれたので、私はもう、どうしていゝかわからない中に、私がお金に困つてゐる事、私の持つてゐる物を買つてくれないかといふ事などを一人でしやべつてゐた。

「それぢやまあ何を持つてゐるか見ませう」

椅子にかけたまゝ動かない老夫人は言つた。

私は朝鮮人の物賣りの姿を自分になぞらへながら、ボストンバックの中から色々なものを取り出しては椅子の上にならべて見せた。その中から老夫人は首かざり一つと、扇子を一つとを取つて十弗その代りに渡してくれた。

私は又私の商品をボストンバックにしまひ十弗の札をたゝんであの書記らしい女が渡してくれたのをそのまゝ賣れのこつた物の箱の中へ入れてそこを辭した。

外は少し雨などふつてゐたが暖かだつた。不思議な心理作用の中に居る自分を見ても笑ふ氣にはなれなかつた。生れてはじめての物乞ひの氣持、私は暖かい夜の中で六時十分前の電車を待つた。

そしてうちへ歸つて來て見たら、ちやんと階段の所に父さんからの手紙がある。三百弗のチェックがは入つてゐる。私はさつきした自分の行爲を取りもどしたく思つた。

何しろ、明日も一度あの家へ行かう、あの白い大きな家、廣い／＼庭のまん中に學校か何かの樣に立つてゐるあの家へ。そして今日もらつたあの十弗のお札をそのまゝかへして首かざりとお扇子をもらつて來やう。そして改めて新聞記者としてゞもこの老婦人から何か面白い話でもきいて來やう。

これでこの話はすみにして、私は私のこれからのプランと、考へを書きます。

色々な計畫や理想、キグッが私の頭の中をとびまはつては大切な勉強の時間を思はずキグッにつかつてしまひます。（註、キグッとはすてき過ぎる樣な空想のこと。友達と或計畫をしてるうち其處に木靴も置いて等と云ひ出す程空想しすぎたのでそれは實現されなかつた。それからそんな空想のことを木靴と云つてゐます）

教へるといふのは馬鹿のする事ださうですけれど、私は今、日本へかへつて文化學院を教へる事ばかり考へてゐます、小さい時から私は教へたいといふ心があつたらしいです、幼稚園に居た時は幼稚園の先生になり度いと思ひました。

日本へ歸る事が樂しみで／＼たまりませんみんなと一緒に住み、毎日日本語と新宮の言葉を話し、學校へ行けば先生達の仲間入りをして色々話したり遊んだりして本當に面白いだらうと思ひます。

けれど、それまでに私はも少し勉強しなければならないのです。「教育をうけ」なければならないのです。私は生れて、小學校を卒業し、それからは少々の外國語の他には殆熱心に勉強したものがないのです。客間の話の樣なレクチュアばかりきりで何年もをすごし、

友達と日向ぼつこをしながら、一日一日大きくなつた他は大した勉強もしませんでした。

私はこゝへ來てはじめて學校といふものを知つたのです。なるほどこれが勉強といふものかとこゝではじめてそれを見たのです。

私はフレッシュマンから私の新しい勉強をはじめました。フレッシュマンの氣持はいゝものです。一日一日と私はその日の事を得て行きます。私は色々知り度いのです。私がほしいのは學位ではないのです。本當の學問なのです學校のカタログを見てゐると私は四年居てもたりないと思ふほど色々取り度いものがあるのです。

父さんも此の間送つた學校のカタログを見て考へて見て下さい。私ははじめ英文學を主（メイジョア）にし美術を副にしやうと思つてゐたのです。けれど、こゝでは美術などどうせつまらないから動物學を取らうと思つてゐます。生物學です。しかし、やはり主は英文學若しさうでなかつたら、英語、かにしやうと思つてゐます。何故なら、いくら動物學を研究しても私はどうしたつて文學に行くのです。創作をする者に取つて、色んな昔や今の文學を讀む事はいゝ事だと思ひます。カレヂを出た位では心配するほどの學者にもなれません。ただ普通の大人になれるだけです。

アメリカの大學を出た普通の人々の會話は日本で可成な上流の學者藝術家達に相當する程度の問題を持つてゐます。日本では一寸した事がもうそれ一つで大得意の程になれますがアメリカでは誰でも同じ事です。誰も山師的な野心がなくたゞ自分の勉強をコツ〳〵やつて行きそれそのものを樂しんでゐるのです。日本の一寸した文士の創作など、こゝの大學のフレッシュマンイングリシュの論文にも劣つてゐるかも知れません。全體として段がちがふのです。しかし私はアメリカの文學を日本のよりいいとは言ひません。日本の特有の文學的氣分精神は立派なものです。しかし、それのみをふりまはし、それのみによつてはいけないと思ひます。

俳句の樣な氣持だけでは本當の大文藝は出來ません。漣の面白さはいゝとしても、そこには大波の偉大さがありません。私は、他の日本人達が試みなかつた、或は試みたのでせうか、私には感じられなかつたこの大波の創作生活をしたいと思ふのです。あせらず、いそがず、まだ長い一生の道を考へてそれをいい具合に美しく波打たせやうと思ふのです。

墨繪の竹の繪の美しさはあつても、細かいレースの、アラベスクの、さらさ模樣の美しさ、あんなこみ入つたそれでゐて全體として目立たないといつた樣子あの不思議な美しさが日本にはありません。私はそれが出來るかどうかわかりませんが、何しろやつて見るつもりです。

私は持つてゐる材料を今慾ばつて大いそぎで發表しません。もつと私の技巧が出來るまで待つた方がもつとエフエクテイブにこの材料を使ふ事が出來ると思ひます。

私はアメリカを去るまでに詩集を一つと、小說を少くとも一册（可成厚いの）を書くつもりです。小說はロマンスです。プリンスオツトー式のものです。私はどうしても辛辣なとか、人生のどん底といつた樣な怖ろしげなものは書けないと思ひます。私の書くものはキグツと思ひ出と、今見る世界の美しさなどを合せたものだと思ひます。私はこれを一生の中の作品の一つとして要心深く用意するつもりです。これは英語で書くつもりです。

モデルは父さんの父さんと母さんからはじまり、我々のフアミリーを歷史の樣に書くつもりです。一人一人の面白い性格を私は、ストーリーテラーとして書くつもりです。私は私の日記をたくさんその中に譯して入れやうと思ひます。何故なら、私の日記の中に私は色々な面白い考へを見出しますから。そして今學校で、英語の時間に色々な人の作品を讀み、考へ議論してゐる中に私が自分一人で考へ出した色々な考へが昔の哲人の言つてゐる所だつたり、キリストのすでに敎へてゐる所

だつたりするのを見つけました。私のこれまでの生活は、外から哲學を取り入れるより、自分の中で粗末ながらも育つのを養つてゐた様なものでした。他の人達は先づはじめに多く讀み、多くの考へを取り入れてから、さてと自分で考へやうとするのでせうけれど、私のは順序がちがつてゐたのです。私は今から少し他の人達の考へを見て見やうと思ひます。折角共通の考へを持つてゐながらそれを見つけないのは可成つまらない事ですから。

大學がすんだら、私は出來れば大いそぎにでもヨ！ロッパをまはつて歸り度いと思ひます。もうその時は私も今よりしつかりしてゐるだらうと思ひます。少くとも何でもを見る目が出來てゐるだらうと思ひます。三年大學にゐても、日本へはかぞへ年二十四でかへれます。まだ若くてゐられます。まだオールドミスではないでせう。それにこのオールドミスの心配はどこに居たつて同じ事だと思ひます。たゞいゝ對手を見つける事さへ出來ればいゝのですから。二十一で日本に歸つたつて別にいゝ立派な人が私をお嫁にもらひに來るわけでもないでせうし、そんな事のために自分のしたいと思ふ事をいゝかげんにしてそわそわと歸つたりしたくありません。

神様が私をいゝ人に會はせてくだされば、それでいゝし、會はせてくれなければ別にあせつていゝかげんな所へむりにお嫁に行かなくても別に面白い生活がたくさんあると思ひます。勿論私はお嫁に行く事に賛成です。殊に赤ちやんがほしいといつも思ひます。可愛らしい靴や着物など見るともう本當にお母さんになるのはいゝなと思ひます。

だけど、も少し遊んで居たいのです。日本に居る時あんなにお嫁に行く事をつまらない事の様に言ひ、オールドミスになる覺悟をしろと言つた父さんに今度は私からこんな事を書くのはおかしい氣がしますけど。

若し父さんが私をお嫁に行かせ度いと思ふ様な人を日本で見つけたら私は大抵その人にお嫁に行きます。この人にお嫁に行けと言はれれば大抵の人なら好きになれると思ひます私より背が低くなく面白い話をする人なら。

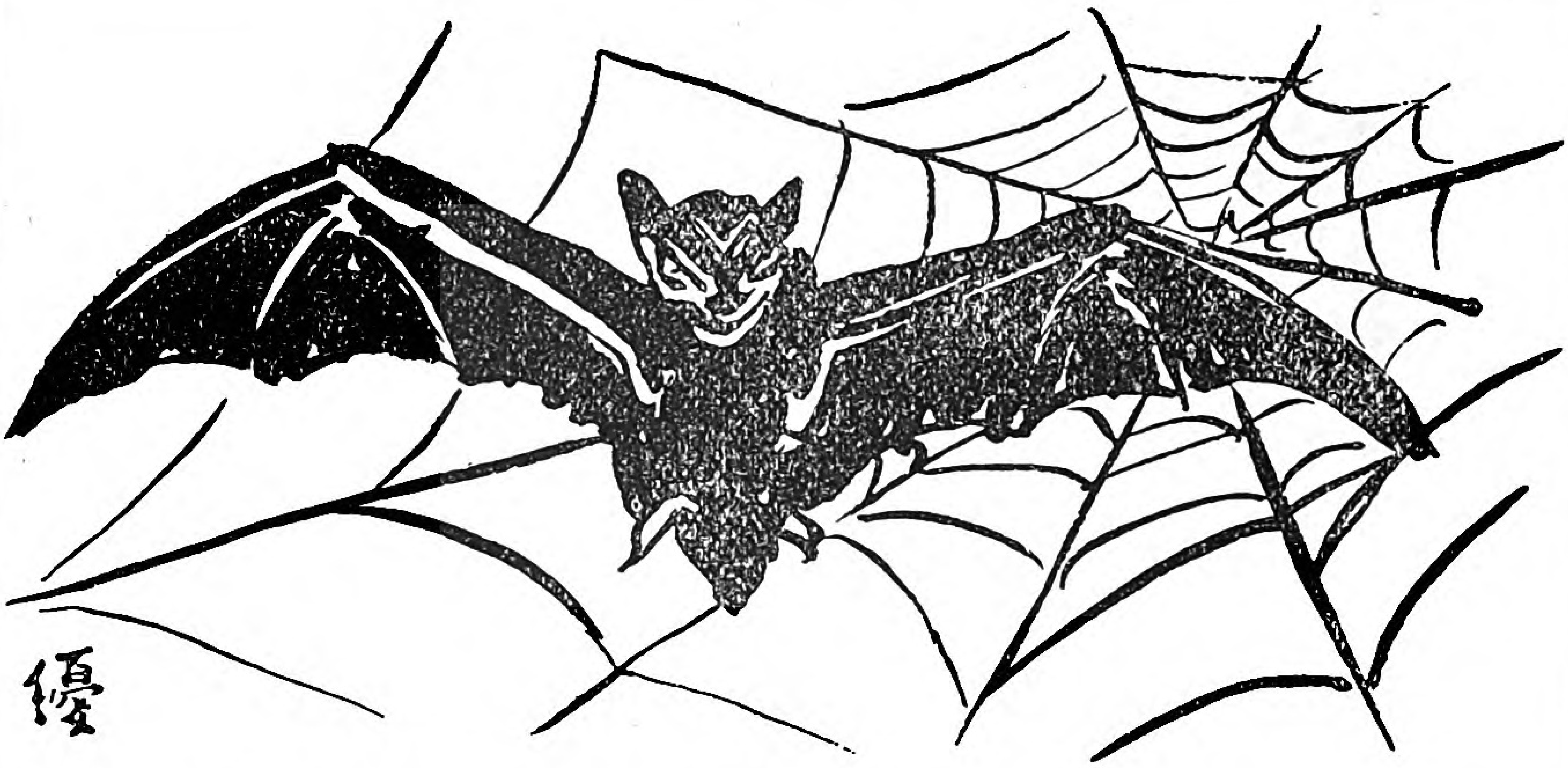
私はしかし、今はそこどこではないのです勉強。々々、々々。これまでの試驗の答案は、A、B+、C+、C- の四種類の點です。C-など取つてゐると落第しないまでも大した名譽ではありません。Cは七十點です。

この學校はアメリカ中でも可成質素な學校です。この點が先づ私を驚かせた事の一つでした。一般の人もニューイングランドの學校はいい社會の人が行くが華美ではないといふ定評を與へてゐると思ひます。

交際など一寸もしません、今は。何もするひまがないのです、土曜と日曜とを一休日と思つてうちで勉強に使ひます。マウントホリヨークの學生は皆大して遊びません、この學校はカチ／＼のニューイングランドの女子大學です。服裝も社交もお金がかゝりません。こゝでは見えなどはらずに、お金がなくなると「賣り物」として靴一度はいたばかりのだとか、スエターだとかそんなものを賣るとカードに書いて掲示板にはり出しては商賣をします。本なども皆代々ゆづりで古本を買ひ又それを次の年に賣ります、文化學院での様に毎年新らしい本を買はされる様な事はありません。皆生徒の間で賣買が行はれます。

どうせ財產なんか多くもらへないのだからなど一寸も思ひません、私はけれど、この頃一つ考へをかへた事があります。これまでは我々は遊ぶ階級に屬してゐるのだと思つてゐましたが今はじめてあたりを見まはして見るのに我々はこれから皆働かなければならない様になつてゐるといふ事を見つけました。

働いてお金をもうけるといふのはきつと樂しい事だと思ひます。遊びながら不安を感じるより。久ちやんも働くさうです。ア、キ、ユ、ヨ、エ、ソ、ナ、ハ、クがみんな働いたら本當に面白いと思ひます。(ア、キ、ユ…：はアヤ、久二、百合、ヨネ、永吾、ソノ、ナ、、八智、クワのこと)



蝠蝙

森三千代

土間のすみつこの方には、人間が一匹寢こんでゐた。

たつた一つ、縱にほそ長い觀音開きの扉でしめきつてある牕の、こまかい棧にいちいち、薄い牡丹蠣の殼がはめこんである。それが仄白く、磨り硝子の役をしてゐるのだが、よごれて、煤けきつて、ところどころは、脂で黄色くなつた爪のやうにひわれが入つてゐた。

光は射しこんで來ない。たゞくらやみのなかで、たくさんの貝殼の眼だまが今にも泣き出さうとしてゐるやうだ。

すえた酒壺と、壁のあひだに首をつつこんでボロボロな兵の服をきた男が、劍付鐵砲にしがみついてねてゐた。

眼がさめかけると、からだぢうの生きづ、打撲が、待つてゐたとばかり暴れ始める。痛む、うづく、ひりひりと焔てる。

で奴は毛すじも動かさないやうにそつとしてゐた。だが、意識がもどるにしたがつて、まるで思ひもかけなかつたやうに、空腹が襲來した。

くらがりの中で手さぐりをはじめた。壺のなかへ手を突込んでつかんで見たが空だ。冷つこい地息だ。壁の方をさはつてみた。いたる所にぬるぬるした蛞蝓がつながつてゐた。劍附鐵砲の銃尻までが、おそらく肥つたやつでぬらぬらしてゐた。

『起立!!』

兵は、腹立ちまぎれに怒鳴つてしやんと立つた。二足三足、牕へ近附いていつた。荒つぽい手つきで觀音開きを外へ押した。

めちやめちやに釘づけになつてゐて、あかうともしない。棧になつてゐる紅殼の細木が古びきつてゐるので、忽ち折れて、その間の

貝殻が四五枚づり落ちて、からからと音を立てた。貝殻のあつたあとから外界がみえた。

——どれだけ眠つてゐたのか見當がつかない。どうしてこんな處で寢たのかもわけがわからない。

最初、彼が傭はれてゐた隊は、安慶を一齊射撃した。略奪勝手次第、といふ許しがあつたので勇氣は日頃に十倍してゐた。だがたちまち安慶は陷落した。楊子江を西へ上つて敵は退却した。

だしぬけに、隊長は味方どうしの第二先頭隊にむかつて亂射を命じた。日給二十錢の増給が同時に言ひわたされた。彼等には敵なんかは一人もゐない。たゞ、利分のいゝ方の親方の下で、鐵砲の曳きがねを曳く仕事をしてゐるだけである。

しかし、傭兵隊長は目算外れをした。多勢が捕虜になり、多勢が銃を持つたまゝ脫走した。

銃を持つて逃げた者には、彼等の考へかたでは『絕對の自由』があつた。彼等は銃をつきつけて欲しいものを得ることができる。酒でも、さかなでも、女でも…。で、欲しいものが自由に得られることは、ひとしく人間の望んでゐるところなのだから。

彼等はそれを憧れてゐる。機會をねらつてゐる。そして、時機がいたつたのである。彼は逃げた。あらゆる自由を求める者の必死で彼は逃げた。追擊兵の狙擊にむかつても一發の應酬もしないで逃げた。ほんとうに自分のものになつた彈藥は、儉約しなければならなかつたからだ。

さうだ。彼等の生活には欲望の自由なんか得られつこない。銃にだけ、その自由がある。…この世から銃といふものを一さいがつさい葬つてしまはない以上は…。

彼が、城內のこんなかくれ家に逃げこむまでのことは、はつきりした經路がたどれなかつた。

たゞ、眠つてゐる間ぢう、死んでどこかへ墜落してゆく、その途中でまた墜落する。といつたやうな夢を連續的にみつゞけてゐた。

しかし、彼は生きてゐた。ぶつたり、挫いたりの負傷はしてゐても、結局、醒めれば癒えてしまふ。おまけに充分に眠り足つた。精力がいやしい欲望をそゝる。おまけに銃がある。彈藥がある。第一、空腹で腸がしぼられるやうだ。づきんづきんと動悸がしてゐる。

內心びくびくもので、奴は外を覗いてゐた。襟についてゐる隊の番號に氣がつくと、あはてゝむしり取つた。だが、外は兵はおろか人つ子一人ゐない。

略奪から略奪のうちつゞいた安慶は、靜寂のはてにあつた。缺けたり、崩れたりした甍の波が、みわたす限りつゞいて、動かない大津波のやうに、膽のまつ下の所まで押しよせてきてゐた。透明な藥の色した空から、力のないその光を浴びて安慶は、まるで瀬戶もののかけらの山のやうであつた。そして、いちめんの高麗鴉が、そのうへを蔽ふて、むらがつて翔びまわつてゐた。

街をてらしてゐる黃色い光。明方とも、日の暮れとも見當のつかない光が、貝殼の孔から、うちへ弱々とさし入つてゐた。兵の武骨な腮がそのなかで突つ張りかへつてゐた。が、その腮は半回轉して後をむいた。

光線のとゞく一番近いところに、もう一つの首が、その時浮いてゐた。

それは、白つ子だつた。四十年配の皺だらけな顏に、うぶ毛が密生してゐる。白痴らしい無氣味な、拗つこい笑ひでにやにやとしてこちらをながめてゐる。

困惑と恐怖で兵は眼をうろ〳〵させた。次には、いきなり身構えして劍付鐵砲を、なゝめ上前方へ突出した。

『出せ。なんでも出しやがれ。出さねえとこれでくたばらせてしまふぞ!!』

こけおどしな大聲で怒鳴り出した。すると彼の眼の前には、もつと思ひがけなく一人の

兜帽子をつけたしなび切つた老婆の顔がとび出した。そして年に似ぬ聲を張り上げておいおい泣く。

『將軍、將軍、待つて下さいまし。お慈悲にきいて下さいまし。これは婆々の一人息子でございます。可哀さうに、ごらんの通りの片輪者でございます。これが殺されましては、婆々は飯びつがひあがります。生きてゆくせいもござりませぬ。』

そんなことをくど〳〵と言つて一巡すむとまた同じことを繰りかへして咒文の樣にうたふ。兵は、それを止めさせやうとして叱咤した。言ひきかせた。眞赤になつて制止した。しまひには哀願した。

老婆はますます大ごゑでわめき出した。兵はもう突つ立つたまゝ、ぼんやりしてゐた。

――くらがりのなかの隅つこに、蚊帳のかかつた寢臺が一つあつた。寢臺のまはりだけが板張りの床になつてゐた。不具者は、寢臺のすぐ前に、太紐で釣したふごのなかに入つてゐた。

蝙蝠!

兵はやつと、こいつを憶ひ出した。體は三四歳の嬰兒で、顏だけが年をとつてゐる。背中から大きな造りものの羽根をつけてゐる。蝙蝠といふ氣持のわるい見世物をどこかのさかり場でみたことがある。此奴である。

赤ん坊が生れた時、首だけ出して、からだはそれ以上育たないやうに小さな箱へ入れておく。賣り物のために、生活のためにわざわざ子供を化けものに育てる。――そして生きてきた母親がこの老婆だ。その母親が、子の愛をならべ立てゝ泣き立てゝゐる。

『やい、やい、俺は腹がぺこぺこなんだ。なんでも食はしてくれりやそれでいゝんだ。』

老婆は、一だんふりしぼつた聲で、

『…婆も飯びつがひあがります。生きてゆくせいもござりませぬ。』

と、わめき立てた。

兵は、くらくらして眼のまはるやうな氣がした。銃をぶらさげて彼はのそのそと入り口の方へ出てゆかうとした。が土壁の口でぴたと立ち止つた。奇型なものに對する反撥、怒りが、勃然として、彼のこころの中に突き上げてきた。

おそらく、貪慾のためにたくさんな蝙蝠を作り出してゐる社會に對しての正當な憤りのやうに、それは激しく、純粹であつた。功利的な、じくじくした母子の愛情をかつさばいてしまひたくなつた。

『ふむ。婆あ。諦めてけつかるにちがひないぞ!!』

彼は意氣込みきつて、つかつかともどつてきた。その氣色がわかると老婆は、野良猫のやうに齒をむき出して食つてかゝつた。

『鬼! 畜生! へつぴり蟲! 猪玀! 猪玀!猪玀!!』

死物狂ひな罵詈雜言を兵は、たゞ一打ちに臺尻をかへしてぶちのめした。頭蓋骨はひしやげた。胴はころがつた。

蝙蝠は、あひかはらずにやにや笑つてゐる。

兵は、夢我夢中になつて、臺尻を横に、力まかせに拂つた。ふごは、ひつくり返つて蝙蝠はまつさかさまにおつこちた。頭は西瓜のやうに割れて、土間にころげた。赤い毛の生えた手が、柔かい嬰兒の手のひらをひらいてゐた。

兵は、牕の貝殼を銃の尻でみんな叩き落した。牕いつぱいの光が、物哀しく流れ入つた。そこいらいちめん蜘蛛の巣が、白い網をかけてあらはれた。寢臺の帷を劍の先にからんで引きむしると屋守がぽいぽいととび下りた。

彼はもう、必死になつて、婆の臍繰のかくしてあるらしい床板をぺりぺりとはがし出した。

幾十百年の堆積が、塵が、しめつぽいものが、惡いものが、光をうけたことのなかつたものが、黄つぽい光線の幅のなかを、微塵になつておよぎ出した。



社會時評

永島暢子

日本大衆黨の分裂問題

「光輝ある五黨合同は成つた！全無産大衆の要望たる戰線統一の具體的一歩は踏み出された事」を宣言し、自ら合同政黨の前途を祝福した日本大衆黨は、全無産大衆は戰線統一を要望しなかつたか、それとも大衆を裏切つてか合同後半歳を經ない今日、既に分裂の醜態を暴露した。さてもあまりに他愛のない寄り合ひ世帶ではあつた。

單一無産政黨は、大衆の要望であり、且これの結成は、いよ〳〵意識化し、挑戰的になれる支配階級への抗爭力を强めるものであるが故に、團結を唯一の武器とする無産運動にとつては、是非實現に努めねばならぬものである。そしてこの問題は、各無産政黨の大會で決議され、自ら合同を提唱する向きもあつたが、いつも指導精神の根本にふれては行き惱みとなつて居た。曾つていつも分裂主義宗派主義の名の下に呼ばれた舊勞働農民黨が、指導精神、政策などの最も同じきものを有する日本勞農黨にまづ下からの共同鬪爭による合同を提議したる際日勞黨はなんと答へたか、宗派主義排除單一絶對條件の條件を持ち出し、口に文字に革命的言辭を弄する同黨はかへつて社民黨合同への機雲が著しかつたではなかつたか、大衆の要望の表はれである下からの共同鬪爭による合同は、分裂主義者の口實であり戰術であると信じ、幹部と幹部との握手を以て完全に合同出來るものと誤認したる無産黨幹部諸君は、やれ指導精神のなんのとしちむづかしい事を議論してゐる間に地方支部では、どん〳〵共同鬪爭を實現してゐる奇現象をさへ呈した。指導精神の如何に拘らず、果敢なる鬪爭ある所必ず彈壓あり、決して兄弟同志が喧嘩してゐる暇はないのである。しかし幹部諸君にはまだ〳〵喧嘩の餘地があつたと見え、勞農黨解散以後、合同問題の中心團體の觀があつた日勞黨内部では、組合同盟を中心とする社民黨との合同派、黨本部の幹部並に農民組合を中心とする無産大衆黨との合同派と相せめぎ、分裂の危機さへ孕んだ事がある。一方黨内に於ける社會民主々義批判の自由さへ捨て、絶對無條件で單一無産政黨出現に努めた大

道憲二氏等の無産大衆黨は、勿論誰でも合同を申込んでくれば御意のまゝに靡かん意向を示した。こゝに最右翼を標榜し、農民は農民黨へのスローガンで反動の役割をさへ演じてゐる日本農民黨がどうした風の吹き廻しか、日勞黨に秋波を送り出し、常には指導精神を吟味する事の好きな同黨が、今はそれには眼もくれず、魚心あれば水心の態を示したのであつた。かくて無產黨の合同問題は急に進捗し、之に民衆、民憲の二黨が驅せ加はつて所謂「光輝ある五黨合同が成つた」譯である。

この五黨合同には、金權にからまる醜聞さへ生んだが、さうした政黨の裏面事は暫くおくとしても、この合同には無理がありすぎた下からの共同闘爭、上から拍車を加へる事によつて同一指導精神を把握する方向に進み、而して單一政黨を實現してこそ合同の意義はあれ、たゞ御都合主義で動くのでは、どんなに無產黨が一大結成されたとて、階級闘爭は强力化されはしない。しかも五黨合同は成つたといつても、それ〲の機關紙、及その性質を帶びるものゝ統一合同を計らず、勝手に各自の勢力を扶殖する事に役立たせようとしたかうした合同方法は日常の闘爭力の上にも表はれ、合同以前の力に比して少しも强力化されず、治維法改惡、豫算編成、山本宣治氏刺殺事件等に對してもあまりに温順振りを示したのみであつた。對外的にはかくも温順羊の如くありながら、對內的には無產大衆黨系と日農黨系は尖銳的に對立し、內紛激化の醜體を大衆に暴露するに至つた。

日農黨系の平野力三氏は、日本大衆黨分裂前、內々帝國無產黨を計畫したり、社民黨との合同を目ろんだり且官憲との或種の關係あると稱される等階級闘爭にとつては札つきのダラ幹であるが、社民黨は同氏の持ち込んだ、右翼一大結成の美くしき餌にもだまされず、平野氏自身の除名を條件として以外は日農黨との合同を肯んじなかつた事はなか〲の大出來であつた。

けれど私達の最もあきれ、奇異の感じのする事は日本大衆黨分裂そのものではない。平野力三氏一派の脫退は寧ろ當然である。しかし、この機を期して日勞黨系は大衆黨系をも除名し、もと〲通り日勞黨系のみにて日本大衆黨を堅めやうとする魂膽をである。お互に言はせれば、指導精神の相違と輕く抽象的に言つてのけやうが、事々しく共產黨宣言を持ち出し、マルクスの名に於て革命的行動を大衆に誓ふ事の出來る、しかも官許黨たる大衆黨と、國情に卽して革命的行動の出來ると稱する日勞黨とが、どこに指導精神の相違があるか？　口と行動との間に無限の隔りのがあるのさへ同じではないか。

かうして考へて來ると、無產黨の合同も分裂も決して大衆の要望を實現したものではなく、支配階級への抗爭力を增大する爲でもなかつた。すべては幹部の笛吹くにつれて大衆は踊り、世間は手拍子をとつた一時の昂奮にすぎない。幹部と幹部との握手によつて合同を實現しやうとする事は、かへつて階級闘爭を毒するものであり闘爭を激化する事によつてのみ、無產政黨一大結成が可能であるといふ事を、大衆黨の分裂によつて、無產大衆は今更に痛感した事であらう。●

人權蹂躙御意のまゝ

幼い子供にお巡りさんが來たよといふ事が　子供の脅威である樣に大人にとつても警官の存在は、請願巡査以外、なんとなく敬遠的

態度をとらせるものを持つてゐる。それは警察政治に基因してゐる事はいふまでもない。當局に言はせれば、日本程警察政治の行き亘つてゐる所はなく、また日本程犯罪人檢擧率の多い所はないと誇つてゐる。宜なるかな、何處の留置所でもいつも滿員、けれど深更一警官の眼に擧動不審と漠然と映じたかどを以て留置所に放り込まれ翌日或は翌々日釋放される無辜の人達がどんなに多いかしれない事を記憶されよ。實に人權蹂躪も甚しく、それに對して國家は何等謝罪する方法をとらないとは、ベラボウな話ではないか。所がこの一夜の奇禍を蒙るのみではなく、一刑事のかけた僅かの不審の斷が、一個人の生活を奪ひ、社會的生命を奪ふ事も亦珍らしくない。說敎强盜横行の折、單なる一投書から良民を襲ひ新聞が大々的に報導し、それが無實と知れるや五圓位のはした金を與へて歸したが、それには××の疑ひもあり、且無實の罪を恥ぢて夜逃したといふその人に對して、國家はどんな謝罪の方法をとつたらうか。女醫として、婦人運動家として聲名ある竹內茂代女史も、墮胎罪の嫌僞をうけ、强制處分にて上田刑務所に收監されたが、最近事件が判明し、不起訴となつて釋放された。けれど之はまだ上の部で、警察はあまりに自己の能力を信じ、權力を信じ、罪の作成には變態的興味を感じるか取り調べに際して一つ二つのゲンコでなぐりつけるはおろかな事、くすぐり竹刀打ち、の××は珍らしくないさうである。現に昨春品川宿大火を引き起した放火の嫌疑にて收容された長島よし子さんが東京地方裁判所にて放火陪審裁判が開廷された折に、警察や檢事局で自白した放火事實を全然否認した。さきに自白したのは、品川警察署での取り調べがあまりにひどく、時には脅迫し、時には××するに耐えかねて自白した旨を申したてた。そして證人として取り調べられた藤井司法主任以下が知らぬ存ぜぬの一點張りにます〳〵泣きじやくり、「あなた方が若いくせにみんな忘れてしまふのですね」とくつてかゝつた。なんと悲痛な言葉ではなからうか。幸にこの事件は陪審裁判によつて無罪になつたが、またこの陪審裁判は、人權蹂躪といふ大きな問題を我々に提出した。

陪審裁判が設けられて以來、全國で十九件の放火陪審があり、地方控訴院管內の放火陪審がみな有罪であるのに、東京控訴院管內のもの（東京二、千葉一、新潟二、静岡一、計七件）がいづれも無罪と決定した事實である。この奇現象に對して、司法當局でも陪審員の判斷が誤りか、警察の搜査、調査が宜しきを得ないかといふ二つの迷路に立つてゐるらしいが、さてもあまりにも人間の感情に委ねねばならぬ被告の運命であり、白を黒と言ひくるめられても身の釋明をなし得ざる身ではある。私達は××の事實をしば〳〵聞く。警視廳本部には種々の×道具を用意した××室があるといふし、階級運動に身を投じたる鬪士諸君は多少の差こそあれ××をうけた經驗者が少くない。五十六議會豫算委員會第二分科會に於て山本宣治氏が、××××事件を質問に藉口して糾彈した。卽ち所謂三、一五事件に於て福津正雄氏が、函館警察署にコンクリート建ての洗面所で眞××××ひにされ、××××××、床を×めさせられ×の眞似をさせるなど慘虐の限りの××に昏迷に陷り、また靜秀雄氏は竹刀で幾回となく打たれ××したが、ふと眼をさますと、枕元に線香をたてた茶碗がおいてあつた。札幌署に於て一婦人の如きは十五歳になる娘の前で、檢事さへ眉をひそめたといふ程の××××××べをうけ且さうした取り調べに際して、警官が、お前方三四人を××たとて上司が引きうけてくれる。昭和の甘粕だからうんとやるといふ樣な

事を言つた事實があるといふ生々しき事實を以て詰め寄つた。山本代議士が、かくも本名、場所の名等を用ひて指摘した事は、その事實に確信があり、充分責任を持つた質問であるのに、それさへも政府は秋田政務次官をたゝしめて一應の調査をすると言明をなしたのみであつた。本會議に於ても淺原健三氏が警察横暴××事件を質問して、望月內相が、また一應の調査をする事を言明したが、依然として、事件はそのまゝである。議會は民衆の意志を代表する場所であり、言論の自由討議が許されるといふブルジョアの大嘘ははつきりと見えすく。か樣に一般民衆は支配權力による人權蹂躙に對して、釋明の場所、抗議する所を持つてゐない。擧動不審と彼等の眼に映じたが最後、飽まで彼等の意のまゝに料理されるのだ。人權の尊重それはブルジョア社會にとつては、一部少數者階級の用語例にすぎないのであらう。

黑田某釋放について

舊勞働農民黨代議士山本宣治氏を刺殺した七生義團員黑田保久二は、殺人罪の決定を與へられ、近く法廷陪審にかゝる準備中であるのに、飯塚豫審判事により四月三十日保釋出獄を許された。この保釋については、檢事局內にても異論があり、司法關係に於ても陪審裁判の點から贊否の聲まち〳〵らしいが、私達は法律的解釋の如何に拘らず、現制度下に於ける裁判の性質に就て判然と知る事が出來ると思ふ。

かの無產運動の絞首的法律治安維持法改正緊急勅令が第五十六議會に於て事後承諾を強ひられ、議會のカラクリから一言の質問も許されなかつた山本代議士が、歸宅後一面識もなき黑田の訪問をうけ思想的轉換の勸告をうけてそれに應酬し、遂にその兇刃に倒れたのであつた。この事實が突發するや、警視廳は正當防衛なりと稱し、議會に於て望月內相が、口論の末と黑田を庇護して、山本氏の死を過失の下に葬り去らんとした。けれどいかなる權力を以てしても事實をまで覆ふべくもない。彼は兇行二三ヶ月以前に既に山本代議士刺殺をほのめかし、多少進步的の人を片つぱしから、殺して了ふといきまいてゐたといふ。か樣な歴然とした證據をどう解釋してか彼は豫審の際に計畫的殺意を否認し、當局も亦死人に口なしを幸に黑田に有利な方向に取り調べを進めた。且獄中に於ける生活は、却つて娑婆に居た時よりも贅澤に、差し入れも豐かに、食物、衣服も實に自由であり、宛然保護的對遇をうけてゐたといふ。

無產階級運動が、尖銳化するに從ひ、支配階級は、警察法律裁判軍隊等、あらゆる權力を行使するのみでなく、××、スパイ等までをも總動員する。震災の折甘粕大尉が、大杉榮氏夫妻並に可憐なる少年橘宗一君をまで殺しながら、僅か五ヶ年に充たぬ刑期にて出獄し、政府筋の保護を受けて悠々自適の生活を送つてゐるといふ。また同じく震災時に南葛地方に於ける平澤計七氏等七名の階級運動者を虐殺したのがそのまゝに葬られた。共產黨事件彼告取り調べに當り、前頁に述べたる如く、「お前達三四人を××ても上司が引きうけてくれる」と廣言せしめたるが如き、さうした事由から推しても、山本氏刺殺事件を單なる殺人事件として取り扱はず、解放運動彈壓の爲に意識的に黑田を保護してゐるが明瞭である。支配階級は既に、階級運動彈壓の爲には、暴力的行爲を承認し、示唆してゐるといふ事を示すものであらう。

法律的專門家、或は司法部內の自由主義者等は、陪審法運用の立

場より、望月内相や警視廳側の黑田の兇行當時に對しての言明、且飯塚豫審判事の保釋理由の解釋について批難してゐるが、その陪審裁判そのものが制限陪審法であり、司法官それ自身國家權力の手先きである以上、この問題にとつては、さまで重點ではない。殊に黑田係りの飯塚豫審判事が、反動の親分と稱せられる前警保局長山岡某の女婿である事から考へても、この黑田保釋の裏面には、幾多の黑き糸が巧にあやつられてゐる事を想像する事が出來る。

ジャーナリズムの淨化？

「雜誌の淨化」とは、近來ます〳〵官能刺戟的記事を以て充たされてゐる婦人雜誌に向つて呼ばれる智識階級の要求である。しかもこの傾向は婦人雜誌にのみ止まらず、一般に浸透し來つゝある。雜誌編輯改善について、讀者側又は第三者より、「雜誌は編輯者の人格の表はれである故人を得よ」「雜誌も賣るが目的故、どんな方法を用ふるも仕方がない、たゞ寄稿家が、どんなに原稿料が高くとも、そんな雜誌の寄稿を斷るべきだ」「父兄と學校と協力して非買同盟を起せ」等々の聲を聞くが、出版業者からはあまり聞いた事がない。所が最近東京朝日新聞社が、五月二十二日廣告社弘報堂より廻された博文館發行新靑年六月號の廣告中にある「何とまあ大膽な」と題する男女のキッスのカットの掲載を拒絕した事實がある。この事實はこれを知る限りの讀者を喜ばし、新聞研究所報は、同報の提唱した廣告淨化運動の最初のよき反響であると報導した。そしてこれについて東京朝日新聞社廣告次長は、博文館出版の講談雜誌廣告を前に一度斷つた事がある。「どんな華客でも、朝日の品位に拘るものは掲載出來ない」事且編輯主幹も「廣告の爲に新聞が發禁になつても掲載後は新聞社の責任であれば致し方がない、現在の廣告法が、現在の出版法で取締れないならば、出版法改正の必要があらう。」といつた事をも合せて報じてゐる。これと同時に廻された廣告を東京日々新聞社ではそのまゝ掲載し、なんとまあ大膽なキッスの廣告が滿天下のモガ、モボ諸君を喜ばせてゐるのである。朝日新聞の廣告拒絕について私の記憶に誤りなくば、賣名的愛國者、有田音松の經營せる有田ドラックの廣告掲載を拒絕した例があり、とにかく日本一流新聞の態面を保つ上に名實共の苦心の、並々ならぬを知る事が出來る。けれど今一段深く考へるならば、如何なる結果を私達の前に齎らすであらうか。

私達は現在のブルヂョア新聞紙の傾向を左の三つに分ける事が出來る。一は自由主義の精神に立ち、いづれの階級にも偏せず、是々非々を以て報導の任務を遂行せんとするもの、二は小川鐵相のポケットマネーが活躍すると稱する「日本」の如く、また政友系、民政系の新聞の如く、政黨の一機關紙の役目をも果さんとするもの、三は、主義主張に拘泥せず、自由なる立場をとると、言へば體裁はいいが、各方面に强力を乞ふ關係から判然と自己主張をなし得ないもの等である。か様なる新聞の主義主張は、必ず出資關係又は資本金の多額によるのである。朝日新聞社の如きは、第一の種類に屬し、反動團體からは、赤化新聞と見られる程に比較的進歩的態度を保ち自由に且正確な報導を誇り得るも、畢竟するに資本の膨大と、株主をして徒に經營に容喙せしめざる制度の確立とがある爲であつて、何も他新聞の經營者に比して、一倍の人格者であると觀るにも及ぶまい。而も陣容整へる朝日新聞社が、僅かばかりの廣告料欲しさに、新聞の品位を傷つけ、發禁の危險を侵してまで掲載する事もな

からうし、一度勢力を扶殖したる後は、金より名に重きをおくはブルヂョア階級の不文律ではないか。之に反し東京日々新聞は、朝日新聞に一籌をゆしてゐる觀が深い。東京朝日と東京日々とは、相伯仲せる資本の膨大と勢力とを持し、肩々相磨して覇を斯界に取らんとする意込みは、紙面に溢れてゐるが、有田ドラッグが東京日々の上華客であるらしく、朝日が拒絶した廣告と雖も掲載するさうした態度は、日々の紙面にも反映し、反動的色彩が濃厚である。一例をあげれば、昨年三月岩波書店にて勞働爭議のあつた折、東京朝日が逸早くそれを報じたのに對し、東京日々は、爭議に關して沈默を守つた事である、この沈默の眞相についてエピソートを語るならば日々新聞記者はやはり爭議の報導をいつもの様に齎したのであつたけれど編輯に先立ち幹部會議が開かれ、爭議に對する態度を相談した由である。岩波書店は、名にし逢ふ出版界の權威であり新聞社の上華客先きである。こゝに起つた爭議を輕々に發表して書店の憤りを買つてはこの上の損はない。多分他の新聞社も沈默を守るであらうから我社も亦沈默を守らうといふ事に一決したが、なんぞ計らんその多分に大きな誤算を生じた。かゝる日々新聞の態度は、朝日の如き強敵を控へ、それを凌駕せんとする喘ぎと見る事も出來やう。

けれど朝日新聞とても、飽までも自由主義の立場に立ち、完全に新聞の使命を果してゐるものではない。一流新聞の態面を保つ上には、多少の利益を蹴とばすだけの氣慨はあるといふのもつまりは採算して見ての事であつて、それだけいざ鎌倉といふ時には、他を顧るいとまなく、自己の利益に低頭し、それを道理づけやうとする圖々しさをも多分に持つてゐる事をも知らねばならぬ。品位に關する廣告を拒絶し、華客の意向を忖度せず、ありのまゝの實情を報導し得る朝日新聞が、何故今年同新聞一手大賣捌所岩月新聞舗の爭議の報導を爪の垢程もしなかつたか。多數の失職者と檢擧者、並に自殺者を出し、且岩月氏の關係せる大和民勞會等の暴力團を使嗾して爭議團と對抗せしめた白熱せる鬪爭は、新聞社間の協定にもよつて暗から暗へと葬られてしまつた。そればかりでなく、事國家權力に關した場合には、ガラリ掌を返した様に、あまりにも空々しきおもねりに充たされてゐる。

之を要するに、營業物として存在せるブルジョア新聞に於ては資本は物を踊らせる原動力であり、販賣政策の立て方によつて、主義主張、さては編輯方針、營業道徳をも決定されるのだといふ事をまづ第一に知る必要があり、表面に表はれた一二によつて、推斷する事は早計であるといふを免れぬ。

讀者通信

愛讀者

御社の「全女性進出行進曲」募集の御計畫は私共同性の大きな喜びでございます。

私共の爲になるすぐれた作品が欲しう御座います。就きましては、各先生方の御選びに當りましては、募集要綱にもございます様な「明るく新らしく、優しく熱のある、」そして内容に詩の存するもの」をお選び下さるやうお願ひいたします。私共はこれまで「校歌」とか「國歌」とかに「極めて陳腐な概念的な説明的な散文」を歌はされて來ました、今度の「女性の歌」だけは、さうした説明的な散文的なものであつてはならないやうに存じられます。

御社の企てに共鳴のあまり失禮をもかへり見ず申上げます。

破産の途上にある現代の教育

神近市子



吉田雅子

一

わたくしは『戰旗』の四月號に揭載された鹿地亘氏の、新潟縣木崎村の農民學校に關する體驗について書かれた記事を興味をもつてよんだ一人であつた。

この記事によせたわたくしの興味は、大體二つの觀點からであつた。一つは、文藝上の効果の問題で、今日の社會生活の不安が齎らす刺戟がわたくし共に（所謂ブルジョア派の作家たるとプロレタリヤ派の作家たるとを問はず）作家といふ職業的な一團の人々によつて製作される作品に倦怠を感ぜしめ、殆んどこれに食指をうごかされることがない程度にまでダアールなものとなつてしまつた感があるのに、これら社會運動に活動してゐる文藝的前衛（といふ字が許されるなら）によつて報告される事實談が、極めて屢々わたくし共に小說より以上の興味と興奮とをよび起すことについての考察であつた。この問題については、わたくしは更に他の機會に於いて充分に書いて見たいと考へてゐるのであるが、何れにしてもそれらはブルジョアの圏內に屬することであればその腐敗と僞瞞とを暴露してゐる點で、又プロレタリヤの圏內に屬することであればその貧困と難澁とが血みどろな反抗と結びついてゐる點で、共にわたくし共には深い興味を與へてゐる。

第二は、教育上の觀點についての教訓であつた。わたくしがこの稿で觸れやうとしてゐるのは主としてこの觀點に於いてゞあつて、わたくしが鹿地氏によつて報告された經驗が今日行はれてゐる一般の教育といかに對立し矛盾してゐるかといふ點を指摘し、最後に今日の現實から遊離してゐる智識が、明日の社會でどんな地位に立つであらうかを想像せしむることができれば、この稿を書かんとするわたくしの目的はほゞ達することができるのである。

二

農民學校の記事を見て、わたくし共が感ずることは、その教師と

生徒、乃至は生徒と生徒間に特殊の親しみが存することである。

無論、一つの學校內に生活すれば、敎師と生徒、生徒と生徒間が友情をもつて結ばれることは當然のことである。しかもその當然のことが今日の社會では屢々行はれてゐない。それは社會が分裂して相對立する階級を生じた時に必ず生ずる現象であつて、その最もよい例は木崎村農民學校の發生理由の中にもあつた。

木崎村の農民學校は、わたくしの記憶が過まらないなら、多分その後縣當局との間に妥協が成立して、農業補習學校か何かになつた筈である。が、この學校は木崎村に小作爭議が起つた時、敎員の間に地主側の者があつたので、農民の子供たちに對する待遇が農民たちを激昂させて盟休を行はせることになつた。そしてそれと同時に農民學校を建てる計畫が成立して、小作人と兒童と應援者との共働によつて、俄かに成立したものだつた。そしてそれに對しては縣當局は小學校としては認めないことを聲明するし各種の妨害が加へられたのを彈ね返して斷然閉校されたものであつた。そして東京からも智識階級に屬する多くの人々が、應援に出かけて行つたが、鹿地氏の記事もその頃のことを報導されたものであつたと思ふ。

かうして成立した學校であつて見れば、敎師と生徒、又生徒同志の間が一般の師弟、友達同志としての友愛の外に階級的な同志意識によつて結ばれてゐることはいふ迄もない。そしてこの事實は明らかに又敎育の効果の上に現はれるものであることも、改めていふ迄もない。

その他わたくし共が感ずるのは、農民學校の子供たちが把握してゐる階級的な批評精神である。智識を攝取しやうとする慾望である生きんとする强い欲求、そしてその爲めに自分たちの階級の×である××と鬪爭しやうとする意氣である。これら凡てが相交錯して、學校內の空氣が非常に緊張したものであり且つ希望の充ちたものであつたことは、想像できるのである。

これらの緊張と希望とは、凡ての敎育家が子供たちに持たせんことを欲してそしてできないのである。何故かなれば、彼等は現實をあるがまゝに知らないし、知つてもそれを子供たちに語ることが出來ない。

農民學校の子供たちは、直ちに現實を見せしめられた。現實をあるが儘に敎へられた。何故自分たちと家族の凡てが、貧しい慘めな生活をし、他の者が豐かに樂しく生活するのか、社會の物資を生產するのは誰であつて、その大部分をとるものは何人か等々。そしてそこで彼等は階級的の良心をシッカリと把握させられた。

兒童に階級的自覺をもたせ、階級鬪爭にその持場を與へるといふことについて、公平な立場にゐると自分達できめてゐる世の識者の間に、異義があるやうである。木崎村の場合にもさうであつたが、野田の爭議の折にもそんな意見を發表した人を屢々見た。

子供はその人々が云はんとするがごとく、野の鳥のごとく、自由であり、山の小動物のごとくに無邪氣に置かるべきであらう。それが人世の理想であることには、わたくしと雖ども異論はない。しかし乍ら現實にはどうであらう？　何人が本所深川その他の工場地帶貧民居住地域の子供たちが、野の鳥のごとく幸福に自由であると云へるのだらう。又何人が農村の子供たちが現狀を滿足すべき狀態に在ると云へるだらう。これら無產階級がたへざる生活の困難から蒙むる苦痛と障害とを問題とせずして、それとは比較にもならない枝葉の問題をとり上げることは卑怯である。これは無產階級の側に於

ける行動に制限を置かんとするもので、無意識に有產階級の立場を支持してゐるものである。そしてそれは實にこれら『公平』と稱する批評家が陷る常習の誤謬である。

三

今日の教育制度の弊害は、すべては今日の社會制度の反映であるそしてその根本的制度を批評することなしに、今日の教育制度のみを批評することは（それは實に屢々なされることであるが）過りである。

今日の社會制度の下では、教育家たちは凡て俸給生活者乃至賃銀勞働者の地位にまで落されてゐる。教育家たちは與へられる僅かな俸給の代償としてその欲する欲しないとを問はず子供達に一定の時と場所とに於て一定の教育とを授けることを規定されてゐる。善惡の批判を、少しも加へることなしに、子供たちに注入すべく決定されてゐる思想と道德とがある。それは全然商取引にも似た冷淡にして事務的な關係であつて、教育の本質とは大凡そ背反するものである。

更に一方から見る時に、この教育家たちもその中のごく少數を除けば大多數は無產階級に屬する人々である。そして資本主義下に於ける經濟の理法は、この一群の人々をも容易につかむのである。しかもその立場が理想的に道德的に規定されてあるだけに、その困難窮迫は一般の人々より以上に深刻なものである。そしてこれらの人人が社會制度の矛盾を感じ始めれば始めるほど現實の問題を批判してそれの批判の上に在つて教育を行なふことをさけるやうになり、かうして資本主義下の教育は現實をさけ抽象的な教育となり、それは直ちに劃一主義の無數の弊害となるのである。

尙ほ再三問題となる中等學校改善の案の如きも、政府の使用人たちによつて成立する文政審議會等によつてどんな立派な改善案が提出されるか觀物である。今日の社會制度に對する眞の批判なくして行はるゝ百の改善も、遂に徒勞に過ぎないのではないかと思はれるのである。

四

今東京地方には、十萬人以上の就職のできない大學卒業生があるといふことである。これらの多くも亦中以下の家庭の子弟であつてこれらの家族は資本主義初頭に於ける大學卒業生の榮達を見て、將來家族の支持者たることを期待してこれらの子弟に一種の投資を行なつたものであつた。しかるにその投資をうけたる子弟が辛うじてうけた學問なり技術なりを役立てるべき地位を發見することができないのである。それは丁度形をかへたる銀行破產の場合の預金者の立場であつて、あるべきではなくして現實にはある事實である。重大なる社會問題である。

しかもこれらの大學卒業生中で、自分たちが當面してゐるこの嚴肅な問題の中心をつかむことに成功する人は何人あるだらうか。彼等は長い間かゝつて與へられた虛僞の觀念によつて物事を見る。そして非現實的な教育の結果として、自分達の現實の地位をそれがあるが儘の形に於いて見ることに屢々失敗する。そして自分たちの參めな智識が何時かは破產を宣告せられた銀行によつて振り出された約手のやうに不渡りになるといふことを知らないでゐる。

五

それでは破産しかけてゐる資本主義の社會よりももう一歩社會が躍進した時に、その社會の建設にもつとも有要な働きをすることができる教育はどこで行はれてゐるだらうか？　わたくし共は、それが農村と工場とで行はれてゐるのを見る。即ち木崎村その他に於ける農民學校、東京大阪等の大都會に於ける勞働學校、集會、研究會等が、全無産階級の爲めの教化を行なつてゐる。尚ほこの外に出版事業の驚異的な發達がプロレタリヤ教化をどの程度に利益してゐるかは、全く想像の外であると思ふ。

　無論これらを學校と云ひ教室とよぶことは、今日の學校や教室に馴れた者の眼には、不思議なグロテスクなものに見えるだらう。しかしそれらこそ無産階級が僅かに許されてゐる教育の機會の全部である。

　これらの教育が一般の教育と異なるところは、それが現實の社會の批判に出發することである。そして階級の對立は、そのア、ベ、チエでありこゝにこれらの人々にとつてはブルジョア教育の制度によつて與へられてゐる人生とは、全く異なる人世の姿が展開される譯である。そしてこの現實についてのうごかない確信が彼等の生活を明るくし、同時に人世を明るくする希望となつて現はれるといふことはいふ迄もない。

カリフオルニヤ　**川島政子**

この二三日前から桑港やこの地の隣りの王府飛行場から、遊覽飛行機（一人三弗二人五弗十五分）その飛行機にラジオの擴聲機を据付けまして、空から大きな聲で唄や噺を飛ばしますので、犬どもはワンワンと大騒ぎです。

北平だより　**笠千鳥**

　先日辻聽花さん（支那劇通）のところへ行きまして女人藝術の話が出ましたところ、女人藝術といふのは活花、茶の湯なんかの事どもと云はれて返事に困つたのですよ。ところが其の場に支那服を着た支那人の樣な青年が居て、それまでだまつて居ましたので支那人だと思つて居ましたの。するとその人もおかしくなつたのでせう『女人藝術は大運で見ました女の人もエラクなつたですね』と口を切りましたのよ。聞いてみたら小林ライオン齒磨の息子で慶應を卒業して支那語を研究に來た人だつたのです。

光成秀子

　六月號に發表された私のあの短かい一文が問題に成らずに濟まうとは考へられません。それ程せゝこましい軍人階級なのです。そこから脱却しない限り私の伸びる道はないのです。たつた二度、獨身の青年將校と語り歩いた――その内の一度は音樂會で偶然逢つたのです――ことが、それも公然と行動したことが、問題になつて、忠言ならぬ愚言を聞かされたことがあります。貴女方には考へられないことでせう。

　獨身の若い男性と夫を交へないで語り歩かない樣につとめること、これが三十前後の將校の奧さんの大眞面目のお忠言なのですから驚きます。その奧さん達が良妻賢母であられる事は言ふまでもありません。

眞井壽子

　男ばかりいばりたがるこの國で皆樣のやうな力強い同性の方たちに依つて生れ出た、女人藝術をどんなに嬉しく拜見して居るかわかりません。

　今度當地へ移り住む樣になりましたのを機會に女人聯盟へ加入いたしますから何卒よろしく、もし社の方たちが名古屋へいらつしやることがありましたらどうぞお立寄下さい。特に林芙美子さまへお傳へ下さい、
私の家には、おすきなアルコールもタバコもちやんと用意してあります。と、

　私は女人酒蟲聯盟を作りたいと思つて居りますが、今のところ私一人だけですから切に林女史の御加盟を祈ります。

ロシアの農民勞働者の實狀

ソフィイ・クロポトキン

ソフィイ・クロポトキン夫人は、現在、かの『叛逆者の言葉』の著者ピエール・クロポトキンが生れ、そして少年期を過ごした彼のモスコーの邸宅たるクロポトキン博物館の管理者である。

この博物館はロシアに稀れに見る立派な私立博物館で、そこには只單にクロポトキン自身に關するばかりではなく第一インタアナショナルから、十月革命に到るまでのアナルシスム運動に關する種々な材料や、書籍や、新聞紙や、原稿等が豐富に集められてある。そしてこの博物館はアムステルダムにあるニユウエンヒスの圖書館と共に、アナルシスムに關する資料の世界的中心である。この經營は、萬國勞働者協會と　特にユダヤ人諸團體及びアメリカに於けるロシア人團體との補助金に依つてなされてゐる。ボルシエヴイストの政府は、現在この博物館の管理を取り上げてこれを國營にしようとしてゐる。それ故にクロポトキン夫人は高齢にも拘らず西部ヨーロッパへの旅行を企てた。

夫人はこの博物館のために、夫人の死後も今日の如く、自由獨立を持續するやうに、獨逸、フランス、イギリス等の知識階級の保護を求めてゐる。次の談話はフランスに於いて、ある同志に夫人が語つたロシア實狀である。

（望月百合子）

ロシアは領土の廣大さと、そこに住居する人種の多樣とのために、ヨオロッパの如何なる國にも比較出來ない。ロシアは一つの大陸である。ロシアに入ることを許される程度に公平な外國の代表者達でさへも、ロシアを見たり、理解したり、比較したりする時間も、資料を得る方法もない。通常、彼等はロシアや、ウクライナや、時としてはトランスコオカサスの大都會をかけめぐるだけで滿足してゐる。そして中心地から五十キロメートルと離れることはない。かうした狀態では、ある模範的工場や、病院や、最

近建てられた托兒所等しか彼等に見せないでおくことは容易に出來る。ともかくも彼等は決して勞働者や、農民と直接な關係を結ぶことは出來ない。大多數の代表者達がロシア語を知らず、若し知つてゐれば直ちに刑事に尾行され、勞働者と話をすることが出來ないやうにされてしまふ。

都會勞働者の貧困は極度に達してゐる。モスコオに於てさへも屢々パン屋は群衆に襲はれて掠奪を受ける。特殊技能を持たない勞働者の賃銀は、些も生活費と匹適しない。衣服は法外な高價で而も粗惡品だ。私の例を申しても、もう十年もロシアで一着の服も買はなかつた。私は古い衣服ばかり着てゐる。それでも尚若しモスコオや、ドミトロフの婦人達のボロ〳〵のローブに比べれば、私の衣服は上等の部類にさへも屬する程だ。

勞働者の窮迫をもつと堪えがたくするものは、成金や、官吏達の挑戰的榮耀である。十月革命から眞に利益を受けたのはこの成金や官吏達のみである。彼等のためにのみ、利益のある地位も、政府や市町村の恩惠も、いい住居もあるのだ……

モスコオに於ける住居難は、巴里や伯林に於けるそれとは比較にならない。ロシアに於ては、十五メートル四方の部屋に七八人の人間が積み重なつてゐることは珍らしくない。この雜居から不倫な行爲が生れるのは勿論だ。その上、一つの臺所が十二家族位に使用され、從つて、その臺所を同時に使はないやうに都合しなければならない。而もそれがうまく行かないで彼等の間に絶えず爭ひが生ずる。

最近、私は昔の私達の所領カロンガを訪問した。そこは今は農民達に分配されてゐるが、彼等農民の狀態は悲慘の極に達してゐる彼等には肥料も、農具も、賃貸家畜もない。政府の官僚階級は、彼等農民を救援するどころではなく、尚その上に彼等が相互に助け合ふことすらも禁じた。昔は、畑を耕すに、一頭の馬しか所有しなかつた貧しい百姓は、富める隣人達から馬を借りることが出來た。併し今日はこの貸借は禁じられてゐる。從つて耕作面積と蒔きつけとは日毎に減少して行きつゝある。のみならず、ソヴエット政府が農業を産業組織にしようと試みた僅かな地方に於ても農民が十分な技術的準備がないために、彼等の使用に供給された器具を利用することを知らない。たとへば刈取機の一つの螺桿が壞れるか、失はれるかするとする。百姓は自分でこの小さな破損を修繕することが出來ないから、その機械を畑に放りつぱなしで村に歸つてくる。そして都會の技術家に電話をかける。この技術家は、極く些少なことのために、少くとも汽車で二日もの旅行をしなければならないであらう。併し誰も農民を教育しようとは思はない。役所には、書類の上で居眠りしてゐて、決して地方に出かけようとしない農業技師達がうよ〳〵してゐるのに。

官僚階級は、ツァ制度の缺點であつた如く、ソヴイエット制度の瑕瑾でもある。それにこの階級は、税金で威壓し、壓迫されてゐる、勞働者や農民の怨恨が、自分に向つて立ちのぼるのを感じてゐる。この怨恨を避けるために、官僚階級は、ユダヤ人排斥の運動を人工的に起した。そして今やシベリアの僻地にはイスラエル民族自治邦建設主義の青年達が居住してゐる。トロツキイの甥のブロンスタインはユダア人であるといふ理由で、キヴの牢獄で暗殺された。最もいけないことは、無知な無鐵砲な人達が、自分達の工合が惡いのはユダヤ人の爲だとして、不幸なイスラエル人

達にウクライナやモスコオに於て、屢々私刑を加へることがある。

ボルシエヴイスト達は、今から七十年以前にイギリスに避難して、イギリスの特殊技能勞働者の國體のみをみて考へたドイツの一猶太人（譯者曰、マルクスのことなるべし）の理論を無教育な農民や、産業的傳統のない勞働者全體に實施しようとした。これは全く甚しい無考へだ。若しカール・マルクスが再びこの地上に歸つて來ることが出來るならば、そして彼の弟子と自稱する人々の事業を見たならば、彼はきつと、まつ先に彼等に對して叛逆するであらう。ロシアは社會主義を實施すべく、最後の國であつたそれだのに不幸にも、そこに最初の社會革命が行はれたのだ。

少くとも、ミイルの組織に代へるに共働農業組織を以てしたところの民族の精神に一致せる、そして幾世紀間もの傳統的に鼓吹された一種の土地的社會主義を實施することが出來たであらうに

ボルシエヴイスト達は、ミイル即ち近代技術の要求に一致しない族長村を破壞した。併し不幸にして彼等は前より以上のよき耕作法をそこに與へる事を知らなかつた。土地の分配と所有とは保護したが、彼等は農民の境遇も、土地の生産能率も改良しなかつた。彼等は只マルキシズムの失敗に力線を引いたのみであつた。

この失敗は悲しむべき反動と結果とを伴ふ。それはロシヤの勞動者達に、こゝ五十年間も、社會主義に對する不信用を抱かせることである。今日、ロシアに於ては、社會主義及び共産主義の言葉さへも嫌悪されてゐる。これ等の言葉は、少數者の殘酷な獨裁制と、官僚階級に對する大衆の隷屬とを意味し、組合の民衆化を單に要求し、或は宣言するのみで死刑或は配流に處られることを想起せしめる。またこれ等の言葉は僞瞞と貧困とを意味するのだ！（百合子譯）

お断り

らいてう

先月は失禮いたしました。

その節御引受けいたし乍ら今になつて何とも申づらい次第ですが、こゝ一週間ばかり例の神經衰弱で讀書も執筆も當分出來ない狀態で、心にかゝり乍らまだ全く手につきません。文藝時評といつても最近のもの何一つまだ讀んでなくこの視力では讀書が何より困難なのです。五六の兩月は毎年私には苦しいいやな月なのです。七月になれば大に元氣を回復し、二ケ月間の取かへしをいたします。

今度はどうぞ許して下さい。それより仕方がありません。自分のからだの事を忘れて先夜うつかり御引受けした輕率をおわびいたします。今日までまだ何とか無理しても短いものでも書くつもりでがんばつて居ましたゝめ御斷りがおくれて却てわるい結果になつたでせうとすまなくも思つてゐます。

五月廿七日



新劇運動の過古について

上田文子

明治四十二年、小山内薫氏の自由劇場にスタートを切つて以來、今日に至る日本の新劇運動の道は、常に多難であり薄幸であつた。そこには實に多くの受難者、殉教者を見た。坪内博士の文藝協會の解散、島村抱月松井須磨子兩氏の死による藝術座の解體、俳優の變節に起因する（私はかう信じてゐるが）自由劇場の閉鎖、その他幾多の新劇團と稱する團體が七月の太陽に照りつけられた茸の樣に意氣地なく干乾らびて消えて行つてしまつた第一次新劇運動の暗黒時代の後に、守田勘彌氏の文藝座その他主として歌舞伎俳優の新地歩獲得を目的とした功利的な、第二次新劇運動の黄金時代、擬似ルネッサンスともいふべき時代が來た。この時代には新劇――主として菊地寛氏その他の創作劇が更に堂々と歌舞伎劇場の門に進入した。大劇場の觀客も歌舞伎俳優も等しく斯ういふ種類の戯曲に親しみ、或ひにこれに出演しなければ自個の識見に拘る如く附和雷同して時流に趨いた。斯くして觀客と俳優の間に成立したこの自然協定は從つて劇場主にも唯々として迎へられて、彼らはある期間に於いて、望外の利を得乍ら、新興藝術の促進に貢献する幸福な、進歩的役割を演じた。しかし乍ら、時代は何時迄一つ所に止つてはゐない。關東大震災を境として全日本國民の上を襲つた經濟界の不況と據つて來る思想の著しい變化とは劇場を滿たす觀客の層にも現れて、震災前の好景氣の泡の中に、進化革新、建設と、新奇な夢に醉つぱらつてゐた舊劇場の新人達を先覺者、犧牲者などといふ華々しい玉座から引きおろして、完全に反動化せしめてしまつた。彼らは、辱しげもなく、生れ故郷の歌舞伎の世界へ舞ひ戻つて行つた。そして今ではまるで二十年間にたつた一度夜歩きをしたといふあのお伽噺しのポストの樣に、新劇運動なんかどこ吹く風だといふ顔をしてゐる。

しかし斯ういふ現象は不幸な日本の新劇にとつて決して悲しむべきではなくむしろ喜ぶべきことだつたかも知れない。自然不可抗力に物質精神のいづれをも打ちひしがれた人心が、一時、極端な享樂主義へおちいつてゆくことはあやしむに足りない。そしてその刹那的なデカダンの要求に應じて、劇場主が先づ指揮棒をとると新劇運動

の闘士であり新しい劇壇のリードであつた筈の舊俳優の新人諸氏が、お手のものの「早變り」で默阿彌や如皐の世界へ走り込んでしまつたこともあやしむに足りない。北風が枯葉を吹きまくる樣に動機の不純なすべてのものを一掃して、第二次の新劇運動は潔くほろびた。動機に於いてすでに不純であつたこの時代を第二次新劇運動と呼ぶことは潔癖にいへば誤謬であるかも知れないが――

　大正十三年六月、荒廢したバラツク街東京の一角から、不思議なもの〳〵しい銅鑼の音を警鐘の如く響かせて、築地小劇場が立ち上つた時、我々は初めてわれ〳〵の時代の演劇に黎明の來るのを感じて歡喜してこれに向つた。我々若い演劇愛好家にとつてあの第一夜ゲーリングの海戰のあたえた印象はどの點からも決して稀薄なものではなかつた。爾來五年、築地が知識階級の一部を拍手に、演劇の研究室として不斷の努力を續ける間に、一方、新劇協會、心座、前衛座――左翼劇場と、よき良心に生きる新劇壇が次々に偏成されて、いづれも惠まれない物質に苦しみ乍ら、それ〴〵よき犧へを劇壇に捧げて來た。そして、終に昨冬、日本の新劇運動の父であつた小山内薫氏をさへその犧牲に供してしまつたのだ。小山内氏の柩を送つて間もなく築地、小劇場はその結束を破つた。今度の分裂に對して、私はこゝにその是非を論じ度くない。しかし、唯、この分裂を契機として確然とした二つの思想の對立が何人にも、感知せられる點に於いて、新劇運動が藝術至上主義を奉持する前時代の唯心的藝術觀から解放されて完全に我々の時代のものとなつたことを喜ぶ。と同時に新劇運動がその本質に於いて變化しかゝつてゐる今、我々の見地から過去の新劇運動史を顧ると、そこに拂はれた犧牲は尊く、又そこから我々の學び得たものは多かつたに拘らず、我々は猶、過去の新劇運動の不成功の根本的理由を明示する鍵をそこに摑むであらう。血をもつて書かれたわれ〳〵の恩人の聖書を汚すことが忘恩であるとしても、我々は現在の我々の爲に、又未來の爲に過去を再批判しなければならない。

　日本の新劇運動の薄命を我々は今、ブルジョアの個人主義と唯心論的な藝術至上主義（それは藝術を宗教にした。）を新劇運動が奉戴してそれに對する少しの反抗をも疑惑をも持たなかつたといふ理由に歸したい。われ〳〵の先人達は、芝居が民衆のものであることをよく知つてゐたと同時に芝居がそれ自身神であるといふ迷信から解放されることがなかつた。彼らは觀客なくして芝居が成立するものとは思つてゐなかつた、物質的材料を集める金がなくて芝居が出來るものだとも思はなかつた、パンと水なくして俳優がステージに立ち得るとも信じなかつた。にも拘らず彼らは其捧戴する藝術至上主義の觀念から、知らず識らず、民衆を無視し、物質を無視して、彼らの神なる演劇へ奉仕することを聖職とした。彼らは最も勇敢に演劇といふ民衆藝術を知識階級の象牙の塔に幽閉した。そして、その塔の床の冷たく、食料の乏しいことを外界の民衆の無關心に寄せて恨嗟し、永嘆した。しかし乍ら、彼らは外を責めるに急であつた割に自個の使命を――演劇の負はされた眞の使命を遂行するに必要な社會に對する認識を缺いてゐた。彼らの主宰する運動の第一歩は發達した資本主義社會の一特長をなす極端な個人主義を信條とする知識階級に向つてスタートを切り同じ階級の中にその營養不良な成長の過程を辿つた。こゝに注意すべきは過古の新劇運動それ自身がこの個人主義的イデオロギーに依存し、その範疇に寄生することを意に介さなかつた點である。云ひかへれば彼らは、演劇を神として奉仕す

る信仰に煩はされて、實社會の民衆に向つて眞に演劇が何をなすべきかを知らなかつた〃又一方からいへば、彼らの運動をその破局が證明してゐる如く、藝術の中で最も民主的な大衆的な神化せることを許されない演劇が、個人主義の强張される資本主義社會に於いて健康な發達を遂げ得るものでないことを彼らは認識してゐなかつた。彼らは自個の奉戴する演劇から神性を剝奪することを怖れたが故に、藝術至上主義の觀念論を去つて就くべき何らの信條をも有さなかつた故に、——換言すれば彼らのすべてがブルヂヨアインテリゲンチヤアの層を代表する個人主義者であつた故に彼らの新劇運動をして結局、プチブル階級の精神的娛樂の對象以上の何ものでもない狹義な中間的なものとしてしまつたのである。彼らは常に物資の缺しさを嘆じ、社會の無關心を痛罵し乍ら、彼らの運動を不幸にしてゐる根源をきわめることをせず、況んや、その根源を根絕する爲に力を借す如きことを欲しなかつた。一言にして言へば彼らは演劇を祭る祭司であつて、演劇を利用する社會主義者ではなかつた。そこに彼らの運動の不振に對する解答があり、インテリゲンチヤアの沒落の相がある。彼らは實に十八世紀の佛蘭西高踏派の詩人の如く、ニコライ一世治世下のプーシユキンの如く、旣成社會を嫌惡し乍ら、遂にその機構の病源を探知することなく徒らな孤立、孤高を事として社會を白眼視した。そしてその白眼視する社會の中に來るべき時代の建築に努める彼等の爲にこそ、よき演劇が待望されるところの階級が新興しつゝあることを看過した。これこそ過去の新劇運動が、澁滯し、頓座し、低回して、終に今日、根本的變化を要求するに至つた原因であり、結果である。

新劇運動は、早く唯心論を捨てゝ唯物論につくべきであつた。偶像を祭壇から引きおろして、民家の中に飛び込んで行くべきであつた。しかし、それも歷史的必然の過程に過ぎない。私は今過去の新劇運動の病點を指摘することによつて、決して過去の唯心的な殉教者に對する尊敬と感謝を忘れるものではない。それは地球圓形を知らなかつた事によつてアリストテレスを冷嘲すると同樣の愚である。

私は唯、私共の同時代人の爲に彼らが藝術至上主義の陷穽におちいつて、演劇の現社會に於いてなすべき眞の使命を誤ることを怖れる爲に過去を語るものだ。例へ、その見地に唯心論的誤謬があつたとしても過去の新劇運動の鬪士はその時代に於いて、直接間接に進歩的な役割を果してゐるが、もしも現在以後に於いて前述の如き概念を奉戴して進むものがあるなら、彼らは完全に反動化し、社會の進化に依存する藝術の進化の上に於いても有害無益な敵となり終るであらうから。しかしこんな杞憂は凡らくわれ〳〵の同時代人には必要でないであらう。時代はわれ〳〵に藝術——こゝでは演劇が階級爭鬪の武器であり、新興プロレタリア大衆に呼びかけるところのものであることを餘りに明かに敎へてゐる。今年に入つてからの新劇壇のプログラムの著しい變化にも旣にそれは見ることは出來る左翼劇場のダントンの死は別としても、新築地の「飛ぶ歌」「生ける人形」心座のトラストD・E」近く公演するといふ新劇協會の「海底に眠るマドロスの群等々、——悉く、過去の新劇運動諸流の潔癖を打破して、新興階級へ呼びかけ樣とする朗かな心强さに裏づけられてゐる、新劇運動よ、行進しろ!

そしてマーチでも奏してやり度い程、彼らの中には生き〳〵としたものが感じられるではないか。演劇は今やうやく長い間まとつて來た唯心的な藝術至上主義の衣を完全に脱ぎすてた。

赤裸になつて行進してゆく彼らの中には、唯物論の眞理がのびのびと育つてゆく樣に見える。あゝ、どうだ、それが一時の虚飾であることのない樣に、どんな怖しい反動の嵐が吹いて來ても、急いで又脱いだ着物をまとふ樣な弱さのない樣に。

新興階級と共に鬪ひ、共にゆくところ、必ず時代から與へられた演劇の進歩的な使命に遂行せられるのだ。新劇團は悉く主張を持たなければならない。イデオロギーを持たなければならない。階級爭鬪の武器として喜んでその前衞の役目を果さなければならない。それが急進であると漸進であるに拘らず、前方へ丈は進んで行かなければならない。もし、眞に意志さへあるならば科學と認識とは君達の——同時に我々の爲に、常によき推進機となつてくれるであらうから。

（一九二九・五・三一）

六號雜評

桂八重

文線六月號所載前田河氏の長編戲曲「蔣介石」は、まだ始めだけの發表である。支那は知れば知るほど不可解だとかきくが、この戲曲は支那を知ることの深い人によつて書かれた、危げないところに主材、構圖、表現ともに力强さがある。今月號のだけでは、蔣介石カルカチユアといつた風に印象されるが、どんな風に展開するか、興味ある讀物でありツプの大きい戲曲であると思ふ。この一幕でも單に讀物としての面白さばかりでなく、舞臺上の技巧も生てゐてソツがない。現代支那に動いてゐる人間の標本がズラリと出て、邪魔にもならず効果を示してゐる。大衆ものとしても上々である。現代支那の名將—大人はかうもあらうとほゝゑまれる。序曲も氣がきいてゐる。

戰旗六月號の小林多喜二氏の『蟹工船』は前月につゞいた力作だ。いつぞや文線に載つた岩藤氏の「ガトフ・フセグダア」でボロ船生活のドン底の甚さに戰慄し、義憤を感じされられたが、今またこの「蟹工船」は時もあれ、樺太漁業について大政商二人が醜惡な利權爭ひを起し、連日新聞紙上に報導され、泣寢入りとなる一方の者は貴族院議員になれるとかするとかの噂のある折とて、前月號をさへ讀みかへさせた。漁夫たちの東北なまりがこの作に鈍重な濁りを與へて成功し、ムウムと息苦しい壓力を感じさせた。

鈴木淸次郎の「人間賣りたし」文戰所載は最後までくる道を丁寧に書いてある。人間賣りたし、買はれたしの札をさげてゐるサンドウヰツチマンは、今迄にないのが不思議な位でさへある。それほど笑はれないものがある。此題を新らしい思ひ附きだとかキバツだとかいえるものは、良い日の下に生れた極樂トンボだ。だが、それよりも奇妙なのは、最初の彼を拘留した翌日は、二十人もの眞似手が出來て、留置場から出された最初の本人が眼を睜る—といふところだ。そんな氣持は他のことでブツかつて、よくけいけんされることだが、巧なところをつかまへてゐる。

◇

流石のカブキ團にも時代の流れはせき止め得ない。さきに音羽屋門下新進の七明座連中

が逆旗を擧げたのも見逃せない現象だが、其他にも今春豐島園で、開くこととなつてゐた東京俳優協會の大園遊會が突然無期延期となつた。原因は幹事が一枚三圓の入場券を各百枚づゝ押附けられることに不滿だとあるが、日頃階級的差別待遇を快く思つてゐない連中の協會攻撃からであり、俳優協會の改變さるべき前提だとも見られてゐる。

近くは歌舞伎座で均一料金を試みて成功したのにも、教へられる事があつたであらう。だが此芝居國で、五六歳の俳優のための一幕を、義理で見せたり――無論そんな義務のない觀客の方が多數なのだが――する一方、市內で毎朝仕事を爭ひ合ふ勞働者は、五月の調査によると二萬五千にあまり、復興事業の完成につれて、本年末には約六萬九千の失業群が勞働市場に現はれると市社會局では見てゐる。市設職業紹介所の前に立つて靜かに仕事券配付を待つ者は、一週間に一回、十日間に一回位しか仕事にはありつけない。朝七時紹介所の扉があくと聲をあげて亂入する。百枚內外の仕事券爭奪に血を見る事も珍らしくなく警戒の巡査が何名ゐても手が附けられないほど眞劍な生活鬪爭である。これはお役所で調べただけだが其他にどれほど血みどろな生活苦があるか、切ないことだ。

◇

東京朝日新聞が廣告淨化運動を斷行した。廣告も新聞の一部であるからと主幹は言つてゐる。不淨廣告を掲載して大衆に損失を蒙らせることは一面新聞編輯者の罪も許す可からざるものとして、講談雜誌の排撃、新靑年の廣告を忌避したのだ。いふまでもなく美事(びじ)だが、表に現はれた廣告の繪や記事よりももつと害を與へる內容のものがある。さうなると、もう一層徹底的にクリーンにならなければなるまい。

◇

新聞の販賣制度と配達爭議は、東朝のからつゞいて各社にあるやうだ。朝日では創刊五十週年の記念事業として諸種の大計畫がある中に、百萬圓を從業員に贈與(株券又は現金)五十萬圓を村山、上野兩氏から從業員幸福基金に寄附するといふことである。それにつけても、あの配達夫爭議團の小さな要求は？ 大きな犧牲者まで出したのに！ 僅か、彼等の要求は追つて聞入れる事として金一封贈呈で終つた。三越の爭議もまた金一封であつた。

その東朝は行詰つた販賣政策打破として特種新聞の發行を企て、一は上層階級を目ざし二は無產階級の伴侶とするのだといふ。

配達夫の要求の中には一年のうちに幾日かを全休にしてほしいといふ事があつたかと覺えてゐる。各社の夕刊が日曜だけないのは、せめての心休めであらうのに、讀賣が日曜夕刊を出し、報知もありして各社の協定が破れ、各大新聞みな日曜夕刊を發行するかも知れぬといふ、さうなると爭ひには破れ、猶其上の重荷が配達夫諸君の上にはかゝる事になるといふものだ。

―仲間破れの反動團體―といふ面白い記事を目つけた。岩月爭議を支持し飜歷した反動團體が、謝禮に得た巨額の金の分配について仲間割れを生じ、分裂して逆に配達員支持の態度をとりつゝあつたといふのだ。

英勞働黨內閣には失業事務大臣が新設されその計畫としては、全イギリスの鐵道運輸業を設造、有能なる靑壯年失業者の就業を可能にする目的をもつて、六十歳以上の現業勞働者に十分な國庫年金を與へて隱退させ、勞働黨內閣成立の意義の一班を知らせるとの事だ。我內閣諸公感如何？

緑蔭小卓

二人の捕虜

日本人だが日本語を忘れてしまつたといふイワノフ、彼はモスクヷに住んで赤衛軍にゐる。もとより細君もある。それだけでは變テツもないが、イワノフ氏は日本產で、しかも日露戰爭に從軍して、ロシア側の彈に片脚がない。なのに、捕虜になつて氣まりが惡くてか、兎に角日本語は忘れちやつたと忠實な赤衛軍になつてゐる。

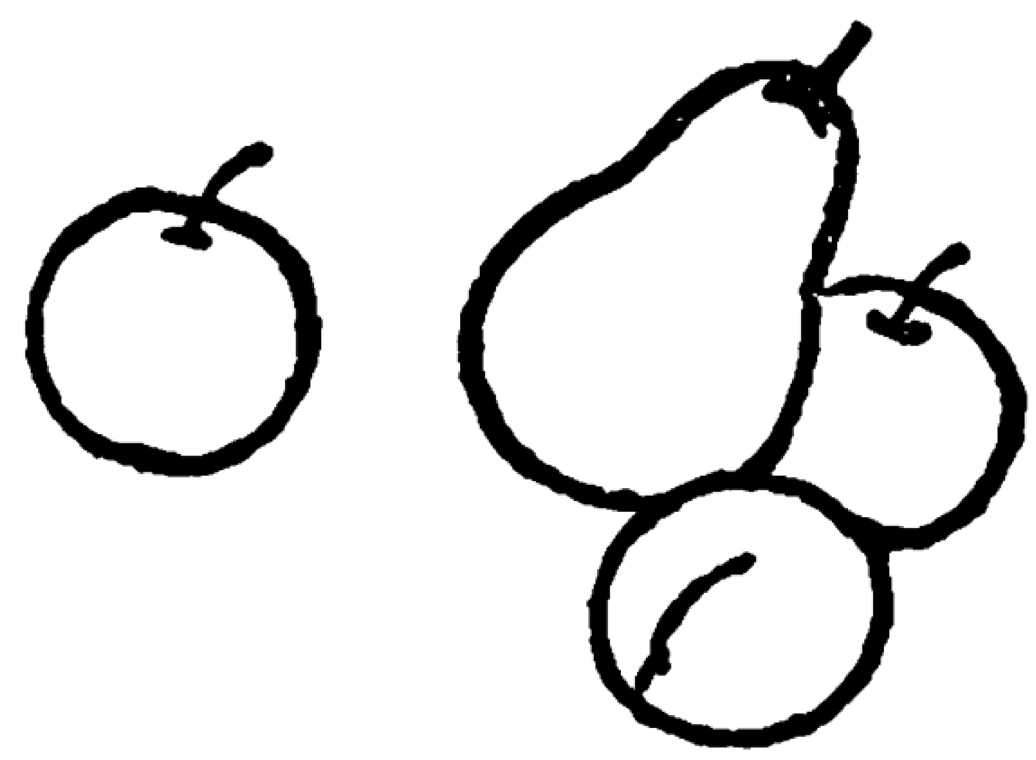
ところが日本語の出來るソビエート陸軍大學教師某氏、矢つぱりその戰爭當時少尉で日本側の捕虜になつて松山に居た。この人日本人を見ると、松山では大變よくして貰ひましたとお世辭をいふ。日本の彈丸を肉體に入れてゐるのだと誇る。景秋と書名した白樺の樹皮の色紙を大切に保存してゐる。景秋とは大庭柯公氏の賞名で、一首の國風が記してある。

シベリアの森の女神の織りなせる白樺色紙わが歌書かん。

◇

革命犧牲者の宿なし子供（ベス・プリゾルニー）は石炭藏へはひつてゐる。冬は寒いからクリミヤあたりへ行くのださうだ。レイニン夫人は、夫の銅像は建てなくとも此子たちをどうにかしてくれと叫んでゐる。勿論育子は幽霽であるが、手が廻らず殘つてゐるのがかなり多數にあるといふ。

◇



日本橋

—4—

時雨

——老母のところから、次のやうな覺書をくれました。「大丸」のことはもつと後に、ゆつくりと書くつもりでしたが、折角の志ですからその儘記します。

小傳馬町三丁目のうなぎやは（近三(きんさん)）明治廿四五年ごろまであつたと思ひます。

大傳馬町四丁目（此一丁だけ通はたご町）大丸吳服店にては一月一日表戸を半分おろして、店を大廣間として金屛風を立てまはし、元日一日は凡そ（そのころで三百人以上）三四百人の番頭、若者、子僧一同に大そうなごちそうが出る。お酒も出る。福引其他、實に一年中を十日に樂しませるので、近所の子供等も皆女中小僧をつれて遊びにゆき、羽根をつくやら、鞠なげ、揚弓もあり、踊りもあれば三味線もあり、いろ〳〵と樂しませ夕方歸りには、山ほど土產をそれ〴〵にくれました。

大丸の符牒(ふてう)。

（イエトモヲコルコトナシ）

とか聞いてをりました。朝は早くから子僧が「おきろよ〳〵」



セン、片山はアメリカにゐた時分一流の料理長をしてゐたので、第三インターナショナルのお料理はとてもたべられないので、自分で籠をもつて野菜や何かを買出しにゆく。香水の瓶へ入れたポッチリの醤油、つかひかけの小指ほどの鰹節をあげても非常なよろこびだ。だが、セン・片山の身邊は嚴重に警戒されてゐるので、ちよつとした面會にもパスポートがなければならないので、それが面倒だといふ。

◇

モスクワの町を歩いてゐると、ソツと寄つて來て、體の横の方で、すこしばかり開いて見せるものがある。——絹の靴下、香水の類である。女の靴下は一足十弗もとる。それでも買手はある。香水は一瓶くれといふとんでもないと斷はる。勿體なさうに少しづつ分て賣る。みんな密賣品だ。

◇

死んだ某氏が最後にロシアへ行つた時に、ある人が秘密倶樂部へ連れていつた。そこは町のどこかの地下室で、とてもとても、地下室上の空氣とは無論世界が異つてゐたが、やつぱり成金氣分はどこにもあつて——といつてゐた。

雨にぬれた辨天さま——同行四人

と呼んで、見世中十人ぐらゐで、ぐる〳〵起して廻りました。客がはいつてくると、帳場の者が——帳場に、

甚四郎とか
才助とか大書した、三尺ばかりの紙札の下に、各自の横に、小さな帳場格子とかけ硯をひかへて、ずつと並んで座つてゐます。客は名札を見て、氣の合ひさうな賣手のところへ上つてゆきます。

女客なれば、クノイチ〳〵と云ふ。

男客なれば、ハツコウ〳〵と云ふ。

クノイチと言へば店中女客と思ひ、ハツコウといへば男客だと知ります。

○不一のクノイチは不器量な女の事。

○不一のハツコウは嫌な男の事。

○ト一のクノイチはよき女人のこと。

○ト一のハツコウはよき男のこと。

客の買物の金高によつて御馳走がちがう。その符牒は、お菓子なれば「きしるし」といふ。おそばなれば「とくいし」といふ。御飯なれば「ふしんかた」といふ。肴なれば「またろ」といふ。(肴)かもしれません。

大門通り右側に、たはらや(田庄)呉服大問屋、大丸其他へおろし店。そのさきに市田これも大問屋、市田の方は多く織ものと模様もの、上々品ばかり、人形町其他の呉服店へおろす。

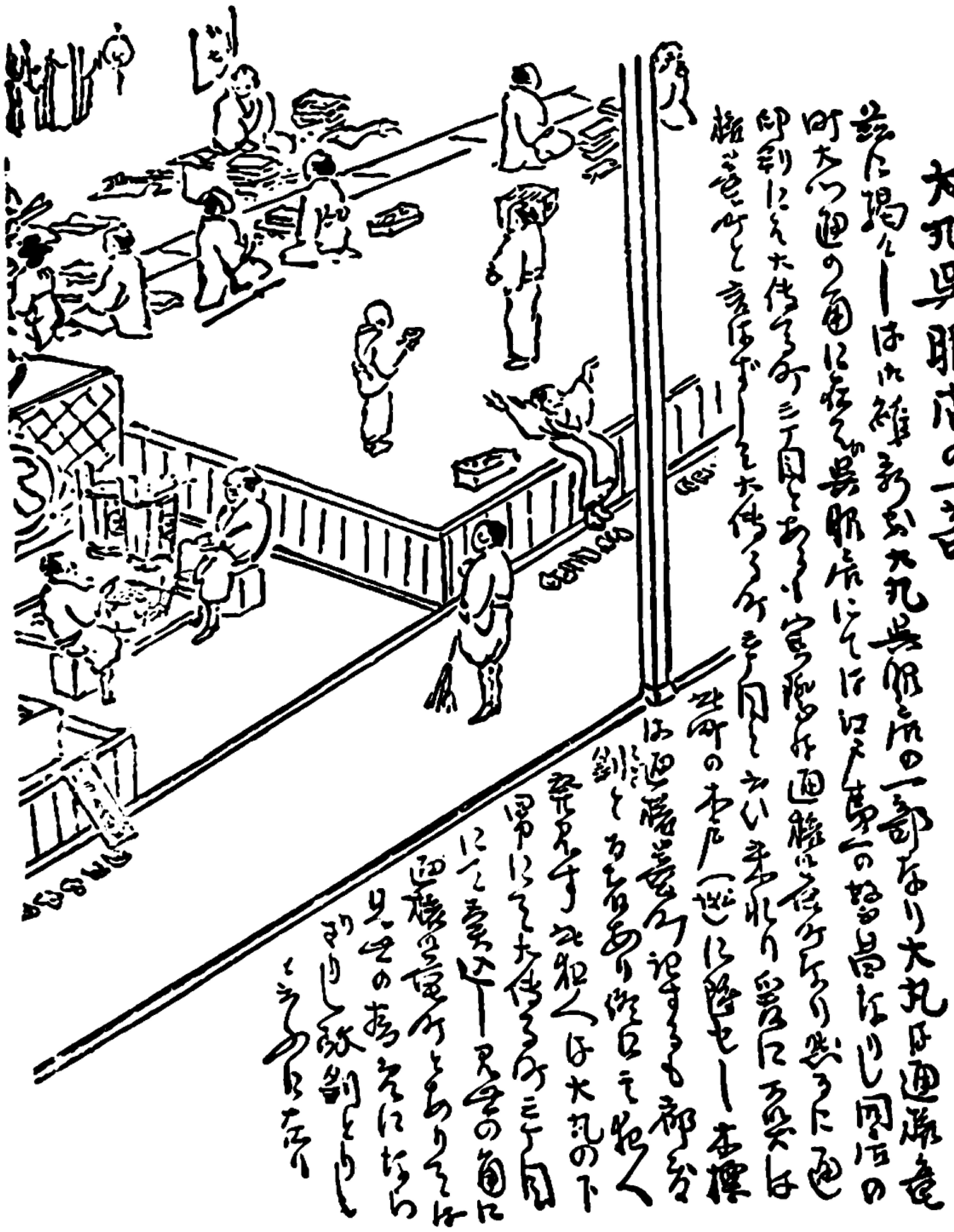
大門通り左側は角からずつと金物店斗り、此邊を廻ると店々にならんでゐる番頭若者等が、よき女子の時は、煙草盆のはいふきを二ツ叩く。それをまた隣りの店で二ツたたく、

五月十五日今にも落ちてきそうな空をよそに、水郷の旅と洒落てる素川、熱田さんのむこうをはつて江の島へでも行こうか、社長さん、八木さん、西村さんあたしにお勝さん（いつもあたしたちにお八ツの心配をしてくれるいい女中さん）の五人、ポッカリポッカリ出かけたのが三時すぎ。「へえにぎやかねえ、ふだんの日にまあこの人たち」洋服に靴の社長さん新宿驛の人波をみてまづ目をまわす。「大丈夫でせうかねえ時間をきめないで來て丁度よいのがあるかしら」八木さん一人で氣をもむ。ところが幸なるかな三時四十分江の島ゆきといふのが目の前にまつてゐる。

「どんなもんだい」自分のせいでもないのにちよいとえばりたくなる。

アメチヨコをしやぶりながら、みんなはおしやべりをして、あたしはゐねむりをして、五時すぎ江の島につく。何だか人が澤山ゐるお珠數をさげたおばあさんたち、お爺さんたち、御夫婦づれ、何かと思つたら辨天様の御開張のおまゐりの人、それで私たちもさしづめ善男善女、（善男はいないけど、私が善男になつて、）あの長い殺風景な棧橋をドシンドシン。

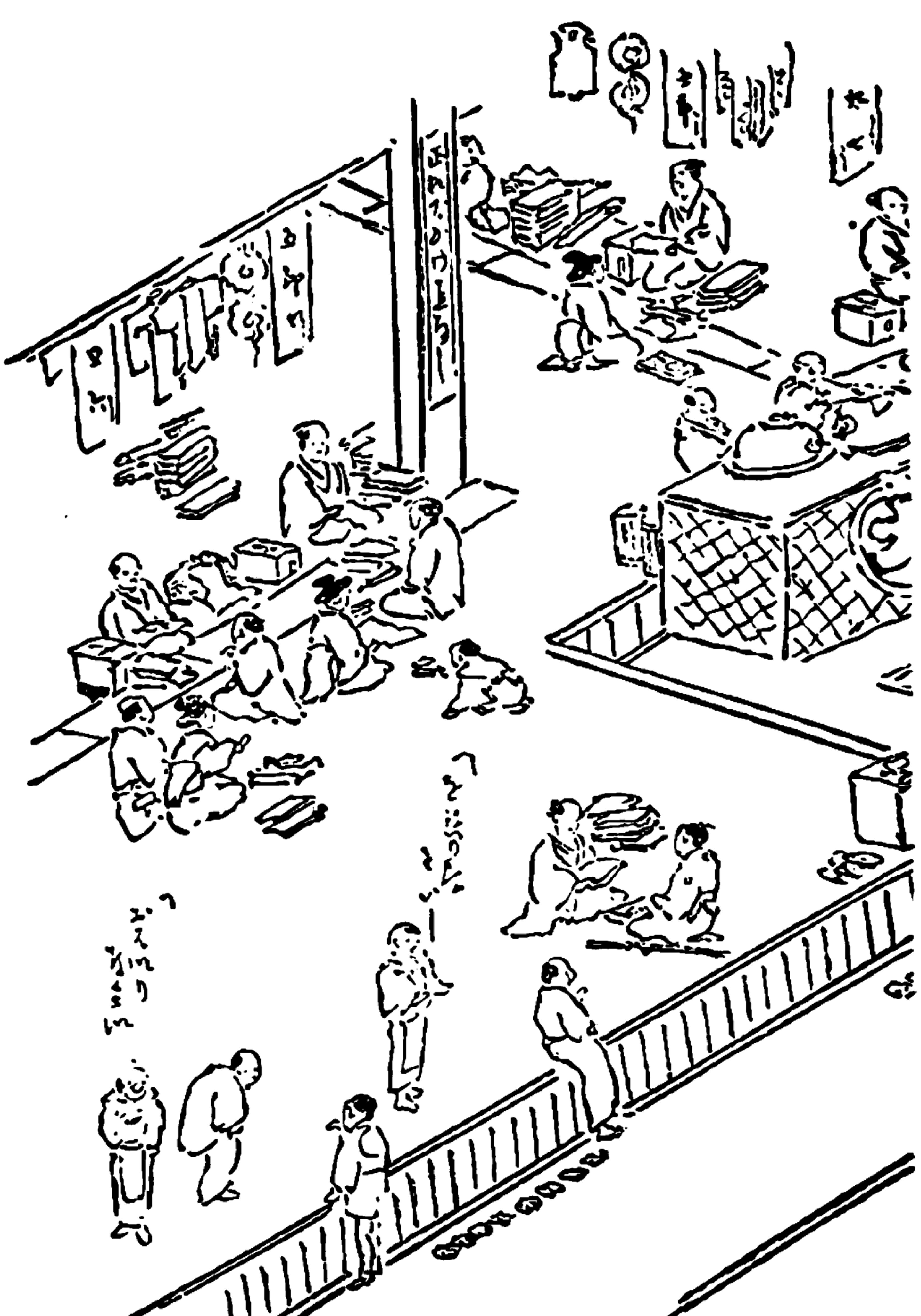
洋服をきた社長さん、靴が啣くなつたのでよく歩くこと歩くこと。岩本樓の客引にとつつかまつて、とう〳〵晩のごはんの豫約をさせられる。そこで今日の會計掛のあたしと西村夫人と相談して一番安い一圓三十錢といふのをあつらえる。（社長さんに會計掛をさせるとどうしてもいけないので今日は口を出させ



つぎ〳〵に知らせるのです。大丸のまむかうに、大丸出入りの菓子や「かめや」あり、旅籠通りに大丸とならんで大丸の糸店あり、扇店あり、「みすや針店」のとなりが森田清翁といふ、これも出入りの菓子や。十月十九日べつたら市の日には店へ青竹にて手すりを拵へ、客をはかつて紅白の切山椒を賣りはじめます。たいした景氣、極々よき風味なり。向側の「かめや」にても十九日には矢張り青竹にて手すりをこしらへ、柏餅をその日ばかり

ないことにしてある）

それから石段をのぼりながら、みんなぶつぶつ、何かと思つたらあんまり文明開化すぎる之ぢやあ感じが出ないと。まつたくあんまりコンクリートでかためられた道はさびしい。窟へ行く人は手を擧げ、と云つたところがさすがに元氣のよかつた社長さんも西村さんも八木さんも手をさげたまんま、魚見亭で見おろしてゐる。そこで私とお勝さんだけエツチラオツチラ石段を降りてゆく。窟の戸は閉つてゐる何故かと思つたら六時まででなければと云ふ。六時すこしすぎたのにあたしはいいけどお勝さんに見せさせてあげたいとばかり俠氣を出して、「小父さんいいでせうまだちよつとすこしすぎたばかり、せつかく遠くから見にきたんですもの、あんまり殘念だわ」そこで許されて大いばり、金五錢也の入窟料を出して這入る。前の方に何處かの修學旅行の女學生たちががあ〳〵騷いでゐる。くらい所になると、蠟燭を賣つてゐる。賣つてゐるのなら買ふけどお心持といふ、そんなお心持はわからないのでよして女學生のおしりにくつついて行く事にする。つまり少々ずるをした。ところがやつぱり神罰はおそろしいものでおさいせんをあげないといけないとみえて暗くて足元が見えない。お心持をそまつにしたことを後悔したがおいつかないので、暗い所を幸ひに女學生の中にまぢりこむ。ところがその女學生たちも澤山の人數に少しの蠟燭なのでキヤア〳〵いつてこわがつてゐる。キヤアレー蛇やわ、おゝいやや、おそろし。



賣ります。エビス樣の繒の團扇を客にだしました●此家は神田小柳町の大火で店藏をおとして、主人が氣が變(へん)になつて、四五年の後店もたくなりました。通油町の大通りの向ふ側の横町は南新道、それとならんだ通りが大丸新道、此一丁は、大丸の十藏の窓——裏側なのです——に金網(かなあみ)が張つてあり、湯殿も、臺所もみなおなじ。

以上は、辿々しい文ではあるが、大丸といふ大吳服店を通して、其うらのお店ものの奴隷生活がうつしだされてゐる。一年に一度の、この目覺ましい慰安的な、解放したやうでその實解放しない、人目を眩(くら)ます華々しいやり方と、終りの方に書いてある、窓々の金網の

アーもう行くのやめ、もどろもどろ。そこであたしたちも止むなく後退。横手から小さい穴をくゞつて行く道が一つあるそこへ前の女學生たちが入るのであたしたちも入ろうとする。と一人が頓驚な聲で、わては入れへんわ、こんなに太つとるに。暗くて幸はせ若し明るかつたらずい分赫い顏をしなくてはならなかつた、何故つてその太つた女學生と太つた私とが同時にその穴をくぐりぬけ樣としたので、わて通れへんこんなせまいとこつてことになつたのだ、神樣もここまでくると可愛らしい。

それからみんなのゐる茶店へ歸つて、さゞえのつぼ燒とうで玉子をたべて、靜かな内海の青にびのたそがれに降りこめる音もない雨に、外套の衿をたてたり風呂敷をせおつたりした一行は、お土産賣りのなやましいしつこさをふりはらつて、数へられた裏路傳ひに山を降りる。岩本樓には修學旅行の中學生と女學生が一ぱい。そこで番頭に案內されて行くと下の方の部屋につれて行かれる。道々番頭私達をつかまへて「あなた方はどこの學校の先生です」にギャフンとまいつてみんなエヘラエヘラ。出されたごちそうがまたすごい社長さん今日は一十五日だから家には鯛のおさしみがきてゐるのになあ一なんて悲しい聲を出す。今日は何も文句を云はない約束だからいくらくどいても此方は氣が强い。みんな何とかえばつてもお腹が一ぱいにならない顏。

歸りは電車で藤澤までゆきそこから東海道線にのる。間一髪といふ所で間にあふ、電車

ことを見すごすことは出來ない。

あたしは震災の幾年か前、ある怪談會が吉原水道尻の引手茶屋で催された時にいつて、裏の方から見た妓樓の窓を見たことがある。そこは金網が張つてあつた。娼妓の逃亡をおそれてだといつたが、それよりか幾年前、帝都の中央の日本橋に、しかも區內のめいめぬきで中心點である土地ゆゑ、日本國の中心といつてもよい場處の大吳服店に、さうした窓が、しかも一丁の半分以上をしめて金網が張りわたされてゐたといふ事實である。それはあたしも子供心に知つてゐた。盜品をおそれるのだといつたが、それならば臺所の窓にまでしなくつてもよい筈である、外からの盜人を怖れたのではない。

理屈はやめて、大丸はその近所の者にとつて、何がなし目標點だつた。物珍らしい見物があれば、みな大丸の角に集まつてゆく。鐵道馬車がはじめて通つた時もさうなら、西洋人が來たと騷いで駈附けるのも大丸であるし、お開帳の休憩もそこであつた。アンポンタンが知らない時分の大丸は、神田から出た北風の火事に類燒るのを知らせたやうなもので藏の戸前をうつてしまうと、店をすつかり空にして、裸ろうそくを立てならべておいたのだといふ、妙な、とんでもない巨大な男戶だつた。

大丸は大傳馬旅籠町から大門通りへ折れまがつて裏まで通つた、一丁の半分以上を敷地にして、幾戸前かの藏と店とで、糸店によつた方に廣い土間があつた。表附きは明つぴろげではなく、土藏造りのところどころに間口があり、そのほかは上部だけ扉があがつて、下部は土で塗つてあつた。大戶の上げおろしが、あの廣い間口では大變だつたせいもあらうが、その中側が一軒以上ぐるりとタタキになつてゐる土間だつた。老母の覺書にもある通りの紙の名札が、高い欄間から並べて張つてあつたが、それは店さきの疊からは、三間以上も奥の方だつた。角の大黑柱を中にして、座りどころにも位置があるらしく、甚四郎、

の中で汽車は二等にのせてくれるでせうといふ小さな聲がどこからかとんできたが、それはそのまゝ雨の中に落つことして。

汽車の中はどこかの店員連中が遠足の歸りとみえて赤い顔で歌をうたつてゐる。聲色がとぶ。にぎやかなことだ。横濱で途中下車して、ほんとは伊勢崎町を散歩するはずだつたけど雨でだめ、驛の川村でサンドウイツチをたべる、みんな晩ごはんがまづかつたのでおとなしくむしやむしやとパクツク。そこから京濱線で鶴見、大森とふりおとして品川でさよならして、十一時頃歸つた。費用は一人前四圓五十錢位。社長さん五圓にならないと大いばり。それは水郷行の菓子組が五圓のよていだから――。（みどり）

江の島の長棧橋を濡れて歸る四人の洋服は氣がつよくて、雨はいゝわね、あら御覽なさい、小田原急行の乘場が龍宮のやうに浮いてゐる――はいいが、雨で三人の眼鏡が曇つてポツとしてゐる。

八木さんのお土産五錢の海ほうづき、小池みどり蛇のおもちやをほしがつて嫁がられる仕方なしに籠に入れたキシヤゴ金二十錢也。翌日底を見て、アラ〳〵みんな新聞紙だ、キシヤゴは上に一ならべよ。

風船リーダー　――同行二人――

儲金の財布を首に下げて行からぢやないの。會計とリーダー、どこへ連れてゆかうとその日の當番の心任せ。十一時兩國驛集合と

才助などと書いた兩側に專屬の小僧の名が、三ツも四ツも並べて書きつけてあつた。

店さきの諸々に、小切れをいれた箱が据てあつた。あたしの祖母は道合ひが呉服の御用商人であり、兄がやはり絹呉服の御用商であつた關係か、大丸とはゆかりがありげであつた。あたしたちがよい事をしたをりや、若い娘客に何か與へたくなつたをり、ちよいと曳裾のおつまをとつて出かけてゆくさきは、いつも大丸だつた。彼女がはいつてゆくと、誰かしら顔を見た番頭が立つて來て、小切れ箱から絞りばなしをつまみ出した。赤いのや、濃い紫や、淺黄のが取りだされて、八釜しぼりとか、蘇の葉とか、つのしぼりとか、赤の黄上げのだとか、種々な鹿の子絞りにも名のあるのをあたしは知つた。祖母はその二三種を、手ごろな有りぎれのまま、ザクリと手にさげて歸る――あたしたちの目はかがやいたものである。その裂れ地が、もらつた孃さんたちの結綿島田にもかけられ、あたしたちの着物にもじゆばんの襟にもかけられた。帶にもなつた。

ある日、大丸に大變な人だかりがした。西洋人が買物に來てゐるのだといふ。いつてみると、太い赤い頸に、金茶色の毛がモジヤ〳〵してゐる眼鏡をかけた男と、キチキチした、黑つぽく光る上衣に、腰の方だけ澤山ひだを重ねて廣がつた服をきてゐる、意地のわるさうに尖がつた、茶色の眼の、狐のやうな女が、ボンネットをかぶつて、見物にかけつけたものを睨めかへしてゐた。小さくて痩せてゐる犬をつれてゐた。子供の目にも、今思ひだしても、決して上品な、よい人柄とは思へなかつたので、ものめづらしくはあつたがなんとなくこの西洋人を輕蔑した。その時分、黑いやせた、茶色の斑點が額にコブのやうになる洋犬をカメと呼んだ。だが、そのをり人々が口にしたカメは、連れてゐた小犬ではなくどうもその女の方をさして呼んでゐた樣子だつた。西洋人も傲慢だつた。泥靴のままで疊の上へ上つていつた。

いふのに、集まつたのはやうやく日頃早起きの熱田と素子の二人限り、これでは申分なく、重りのない風船玉だ。どこへ飛んでゆくか知れたものではない。風の向きが佐原、潮來の方面だ。熱田さんの生れ故郷だから、私は馬鹿お大名みたいに、口を開いて、洋服の懐手をして後をついてゆかう。青葉の匂ひをお腹一杯すひこもう。何もかも熱田さんよろしくお願ひします。(素子)

會計は御願するよと渡されたのは金五圓。あとは知らないよだつて？こつちだつて知らないよだ。お鍒をぬきにしたからつて泣顔はしない事、ぢやあ出かけよう。十一時の汽車ももう駄目だ、ぢや押上から京成電車にしようそして成田から佐原迄乘合自働車で。(熱田)

危ない、危ない、電車が出さうなのに會計係は切符の買直しに行つた。電車の中で同行の妹さんがお澄しで林檎の丸嚙りをいやがつたら、隣りのおじいさんが庖刀を借して上げませうか。

風、風、青葉、輕快に走る電車。午後三時ごろ佐原からモーター船に乘る。船が利根川に出ると舳を切つた浪のしぶきが、さつ、さつと窓から飛込む。有名な利根川堤、兩岸の綠が美しい。(素子)

さて船に落ちつくと空になつたお腹が氣になり出す。モーターへとび込む前の一分間を盜んで辛うじて買つて來たお菓子をひろげるといつもは甘い物ぎらひで通して居るくせに空腹にはかへられぬと早速つめこむ。丁度乘り合はせた學校歸りの佐原の女學生連。しき

お正月元日は、大戸の上がところ〲明けてあつた。お茶番のゐる廣い土間の入口の潜り戸をはいつてゆくと、平日に増してお茶番の銅壺は煮たち、二つの茶釜からは湯氣がたつてどこもピカピカ光つてゐる。すぐ前の別座になつてゐる、大格子の中が大番頭や、支配人や、一番番頭の居るところだつた。頭の上の神棚にもお飾りが出來てお燈明が赤くついてゐる。そこの前の大飾りは素張らしい鏡餅が据えてあつた。海老もピンとはねてゐた。

夜があけるとすぐ羽根の音である。いつも番頭の並んでゐる區劃にずつと金屛風が——立派な畫のもある——が廻らされて、そのうち側で羽根をつくのだが、それは朝のうちだけのことで、近所の女たちが見物に出かける時分には、屛風の前の方へ出てきてゐる。小僧も、若者も、番頭も入交りで、ゆかりのある家の女供や近所の者が、風はなし、自由に廣しするので遊びにゆくので、とても壯觀な位に、しまひには屛風もとりはらつてしまつての追羽根になる。騒々しい位の羽根の音だ。

糸店によつた方に舞臺があつて、立派な衣裝をつけた芝居を番頭たちが演つてゐる。そこも見物はギツシリだ。だがかうした足どめ策をしても、矢つぱり外に忍び出るものは多かつた。

この廣い店、中央の羽根つき場になる個所はずつと天非が高く、明りとりになつてゐて、廻りだけにぐるりと二階がある。お客を接待する座敷の方は立派できれいだが、それでも薄暗かつた。なぜなら、中央の廣場の方の手すりから光りはくるが、肝心な表通りへ面した方には窓もなにもない、盲目窓だつたからである。合宿室も、さうした二階のそこらにあつた。臺所に近い藏前には、各自の性名をかいた雜煮箸の袋が、細い板割で板張りに添つて造つた、幾筋かの箸たての溝に、ずらりと並んではさんであつた。

ある番頭が、羽根を突いてゐて、暑くなつたので糸織の羽織をぬいで小僧に渡した。羽

りに英語の本をひろげてコソ〳〵しやべつて居る。一つ食べない？と打ちとけて出たが唯ニヤ〳〵するばかり。遠慮をして居るのだなと一つづつとつて渡すとこれは又驚いた。開いた本の上にのせたまゝ相變らず見むきもしない 今度はこつちが愛想をつかした。食べたくなきや勝手にするがよい。むざんにもお菓子はコロ〳〵とむしろの上にころげ落ちる。何たる不見識さだ。加藤津。十二橋の前で船を捨てる。(熱田)

　今日の宿は扇島の熱田さんの親類高塚衞氏の宅、かつてお祖父さんが漢學の塾を開いてゐたといふ書院風の御隱居家。古い書畫がどつさり積んである。即ち無料宿泊所。ガアガアと盛な蛙の鳴聲。はる〴〵と土を起した田んぼ、島中縦横に五尺許りの堀があつて、兩側のよしの間を分けて農具を積んだ小舟が棹さして行く夕暮れの眺め。不思議に淋しくない物靜けさだ。ゐろりの前に戻つた御隱居さんは色の白い、體格のいゝアハ……と氣持よく笑ふ人だ。母家から御馳走が運ばれると乘物の都合で(會計の都合でありません)おひるぬきの連中はせつせとつめ込んで漸く堪能する。それから暗い電燈の下で、字と繪の交錯一年生のかいたやうなはがきが幾枚も出來上る。酒仙林女史が千葉へ行つた亭六先生に引かゝつて來ないのは殘念だ、一杯のませたい風情だ。(素子)

　さてその次は歌だ。こゝ迄來て潮來出島の歌を知らないなんて。そこでお婆さんをつかまへて早速始める。細かい縞に黑袷の借着。

織の裏は大きな帆かけ船があつて七福神が乘つてゐるのだつた。船と書いてゐる帆は縮緬で盛上つてゐた。帆づなの金絲(きんし)をひくと、帆がひつくりかへつ——アンポンタンは多分寶ものが澤山積んであるものだらうときめてゐたからよく見もしないで、蜜柑まきのみかんを拾ふのに無中だつたが、その船のうちこそ、彼等が給料をのこらずかけたといつてもよい手のこんだ不思議な細工だといふことであつた。禁慾(きんよく)された彼等が不自然な生活に哀れなものであつたらう、誰も彼もが胃病患者に違ひない——もしくは十二支腸蟲患者か、みんな生氣のない青びやうたんみたいだつた。

　だが、不思議に元日に間違ひはなく——もつとも大僧より子僧の方の悦びの日だつたのだ。大きいものは、もう晝から夕方になると、段々にかげをかくしてしまつた。そして無邪氣な、近所のものがのさばりかへつた。

　大丸の神棚の下に納まつてゐる大番頭たちは、みんな近くに家を持つてゐた。藏附きの中流以上の構へである。面白いことに養子制度で、どの家でも細君が家附きの娘たといふ。多くの中から目ぼしい若者を養子に抜いてゆくのであらう。だが、大番頭の息子も小僧と一緒に終業するのかどうかそれは知らない。あたしの知つてゐる大番頭さんの娘は、おあぐさんにおたをさんといふ姉妹だつた。そのお母さんも、そのまたお母さんも家附きの娘だ。とても丁寧な人たちで——一體にどこの家の女の人もさうだつたが——お風呂であふと板の間でも兩手をついて、寒いのに何時までも御挨拶がある。それが、時候が冷えますといふことから、朝晩めつきり寒くなつたこと、皆様おかはりがないかといふこと、先日は何々して何々がなにとやらと、とても閑談的なのである。

　おあぐさんといふ名は妙だが、下町ではよく阿久利といふ名をつける、大概大事な子

髮は勿論オカツパだ。早速出來上つた今様おせが「あやめ咲くとはしほらしや」とやる。かなり滑らかな調子だ。社へ歸へつたら忘れたなんて云はない事だ。（熱田）



忘れませんが唄へませんだ。ほんとは朝になつてそつと唄つてみたらちやんと唄へたんだが――。雜音に遠い島の寢ざめはとてもいゝ。雨になつた。折角水郷へ來たのだが雨とは、酔狂すぎるとか何といつても始まらないので、午後になると傘をさして潮來まで歩く。島の雨、渡し舟の雨。土堤が歩きたいなあ。潮來の稻荷山に上ると技藝學校だつた。さし渡し一間もある大釜が雨受けになつてゐるので、先づ心配になつて、何に使つたのでせうと、おそる〳〵校長先生に伺つたら、簡單に釀造用だといふ。實は石川五右衛門用かと思つたのだ。見晴しが利き相なので學校の二階へ上げさせて貰ふ。銀色の水の光が幾條となく綠の間にえん〳〵と續く。

謹厳な校長先生から、あやめ踊りの說明を

子育ちの悪い家でつける名だといふ。このおあぐさんが、年寄り連の理想的な娘なので、あの通りにお催しく、しとやかな聲を出さなければいけないと、よく引合に出して叱られた。おあぐさんの家は向ふ新道の角から二軒目で、二階と塀を通りにもち、玄關はわざとのやうに、敷石のある露路に古い磨いた格子戸をもつてゐた。冬は朝早くから寒ざらひといつて長唄のおさらひをする。午後つからもする。三味線の音がよく聞えるので、ソラおあぐさんはお浚ひだと私も三味線をもたされるので、その方角は鬼門だつた。

その他、大丸直厮の仕立屋や縫箔屋が幾軒かあつた。店藏づくりの、上方風の荏柄ぬりの格子窓で、入口の格子戸の前に長い暖簾が下つてゐた。帶ばかりくける家もあつた。天水桶があつて――桶と云つても上に乘つてゐる手桶だけ木で、下の天水桶は鑄鐵が多かつた。かなりいい金魚が飼つてあるので、金網を張つてあるのもあつた。その一軒の仕立屋におしゆんさんといふ美しい娘がゐて、上方風の濃艷なおつくりをしてゐた。面長な下ぶくれな顔に、黒い鬢を張つて、おしどりに結つて緋鹿の子の上を金紗でむすんでゐた。つまみの薬玉の簪の長い房が頰の横でゆれて、羽織をきないで、小さい前かけ位な友禪ちりめんの小ぶとんに、緋ちりめんの紐のついたのを背にあてて、紐を胸でむすんでさげてゐた。その女が狆を抱いて、夕方遊びに出るのを見るのがあたしは大好きだつた。

大丸の子僧はみんな馬鹿なのかと思つたことがある。大きな姿をして、頭髮をおかつぱのやうにして――中には胸にあぶらやのやうな茶色の切れをかけてゐた――お茶盆をもつて、アーアーと節をつけて、店のはなつさきを行つたり來たりしてゐたからだ。アーアーといふのは、おはひりといふ事なのだといつたが、眺めてゐると好い氣持ちではなかつた。

大丸と向ひあつた角に佛具屋があつて、その横に交番があつたが、ある日引つこしをした。人夫が交番へ丸太ン棒を通して擔いでいつてしまつたのであたしは吃驚した。でも、

閑くのもおもしろい　元來は娼妓が十二三人とはやし方がついて踊るもので、本當のは實に私もまだ拜觀の榮に浴しないですが……と恐縮しておつしやられる。洒仙女史でもゐればだが、貸席まで見に行く勇氣は他の人になさ相なので我まんする。(素子)

學校と云つてもこゝは寺小屋だ。利根川が一目に見渡せる。山を降りると古寺に案内してもらふ。老松の間からすばらしい鐘樓が見える。長勝寺と云ふのだがとても古い。境内に頼朝のお手植と立札のある老梅がある。古ぼけたお堂がある。格子から透かしてみると中は土間でガランとして居る。いかにも淋しい。そこで三つのぬれ鼠は船つき場へ急ぐ。至る所ポプラの樹が雨空に聳える(熱田)

長勝寺の鐘樓は實によかつた。雨にぬれた十二橋の眺めも中々いゝ。船はモーターを止めて櫓をこぐ。手のとゞき相に迫つた兩岸の田舍家と紫の桐の花の中をゆら〳〵と舟はすべる。舟の窓からのり出してパチリとやつてみたが水が光つてうまく寫らなかつた。鹿島を後まわしにして一先づ津の宮まで引かへす。今晩の無料宿泊所なり。こゝには熱田さんの兩親と若い船頭さん?と、樂しい歡待とが待つてゐる。暮れかゝつたのに關はず、利根川の水門を出る。船頭さんは中々巧く對岸の灯がふるへてゐる。爽やかな水の夕ぐれだ。(素子)

船頭さん、實は私の兄貴だ。利根はすつかり暮れて水丈白い。今夜の宿は兎も角自分の家だ。今日は梅坊の素子さんよりこつちの方がよく寐たようだ。雨戸をあけると桐の花が、

この四ツ角が賑くなつたのは具合がよかつた。何事もみんな物珍らしいことはこの四ツ角に立つて見物する最上の場所だつたから――

住吉踊の一隊が來てかつぽれを踊ると、大きな渦になつて見物がとりまいた。梅坊主の連中は夕方をやつてくるのでよく人が寄つた。お正月の初出も賑やかだつた。下町の纏は大概あつまつて、ずつと大傳馬町から油町通りに列をひいて揃つて梯子乘りをする。それよりも大丸の年中行事は、諸國から出開帳の諸佛、諸神のお小休みだ。殊に嵯峨のお釋迦様が兩國の回向院でお開帳だとか、信濃の善光寺様の出開帳だとか――そのうちでも日蓮宗は華やかだつた。小傳馬上町に身延山の出張寺はあつたが、本所の法恩寺へお開帳はもつていつた。そのかへりが一日上町のお祖師様へ立寄るのだつた。大萬燈や、髭題目を書いた、ひぢりめんのくくり猿をつけた大巾ちりめんの大旗や、出車もでた。縮緬ゆかたのお揃ひもある、しぼりの揃ひもある。派手を競ひ、華美をつくし、見てゐるのも足勞れるほど澤山、目印を各講中ごとに押立てくるが、そのどれもがかはらないのは、氣狂ひかと思ふほど無中で太鼓を叩いてお題目を叫鳴ることだつた。花笠を背にしてゐる一連もあれば、男女共手拭を吉原かぶりにしてゐるのもある。胸で小意氣に結んでゐるのもある。

その人達が――無數な人達が、一時大丸の店を一ぱいに占領してお中食をする。それから一休みして順繰りにくりだす。先頭が兩國橋へかかる時分に、まだ中頃のが足揃ひをしてゐる。御本體が出て、お茶湯が一番最後に出てゆく。

ある日もアンポンタンはおまつちやんと四ツ角で、その大人の、目覺しい狂奔を見物してゐた。すると、帝釋様の劍に錦地の南無妙法蓮華經の幟をたてた出車の上から醉をかけたものがある。

「ヤッやちん、手を出して――はやく乘つた、乘つた。」

眞つさかりだ。その間から水が。そして舟がひくい橋をくぐつてすべるやうに水門に向ふ。川向ふの田へ働きに出かける人々だ。(熱田)

戀人ぢやない妹さんと三人で土堤の散歩に出かける。東京の女學生らしいのを滿載したモーターが通る。たつた三日でもさすがに人懷かしい。手を振るとふなばたに立つてゐた一人がやはり手を上げた。やがてぞく／＼出て來てハンカチを振る、手を振る。果ては頭を下げたり、笑つたり。見えなくなるまで夢中になつて御挨拶の交換。都會の女學生はさすがにさばけてゐていゝな。船頭さんぢやない、熱田さんのお兄さんが船を操つて迎へに來てくれた。櫓を習ふのだとみんな意氣けん昂。海燕がすい／＼と舟の先きを切つて飛ぶ。(葉子)

靑い葦の間をぬけて水門をくゞると、せまい水がやゝひらけて與田浦に出る。かもめが水にくゞる。あしの中から雲雀が上る。此頃淡い光が雲間をもれ始める。靑空が次第に雲をおしのけて廣がつてゆく。一同雀躍して櫓の練習だ。ギイ／＼と一つ二つはよいのだがぢきにおヘソがはづれてしまふ。その度に船頭さんが重い櫓を持ち上げてはめてくれる。又はづれる。大分うまくなつたといゝ氣になつて利根の本流に歸へる。蘆の密生した砂地へ船をつける。船頭さんが砂地にながくなつて寢ころんだ所で一同船に飛びのつて綱をほどく。船はわけなく出たが、風だ。腕はたしかだと櫓を漕ぐ。棹をさす。舟は遠慮なく川下へ。そこへ、それこそほんとの助け船だ。

學校友達の古帳面屋のお金ちやんのお父さんだつた。その人は背の高いキレイナ人で、清元のお浚ひの時に山臺（やまだい）に乘つて、二三人で唄つてゐたことがあつて、みんなに、オシイ、オシイー、とほめられた人だつた。その時はじめて清元とは首を振つて唄つてしまうと、をしいーーと長くひつぱつてほめられるものだといふことを知つたのだつた。金坊のお父さんは、講中の世話役だから橋のもやうのお揃ひの浴衣を着て、茶博多の帶をしめて、お尻をはしよつて、白足袋の足袋はだしで、吉原かむりにして襟に講中の團扇をさしてゐた。

あたしたちは吃驚してゐるうちに、見物が抱上げて出車（だし）の上の人たちの手に渡してくれた。無論上にはお金坊もおよつちやんもゐた。妙に晴がましかつたが、押上げてくれた人たちが不思議とほこらしげにニタニタ笑つてゐた。日傘ほどの大きな團扇で誰かが煽いてくれるーーお金ちやんのお父さんは首から拍子木をかけてゐて、止るところや何かで鳴らした。火の用心と赤く書いてある腰にさげた袋から煙草を出して吸つた。行列が深川の高橋にかかつた時、あたしは橋の上から後の方を見渡して、誰もほかに知つたものはなし何處につれてつてしまはれるのかとホロ／＼して歸つてくれとせがんだが、もう仕用がないときかれなかつた。

憲法發布（けんぽうはつぷ）の時、大丸では舞樂の「蘭陵王」の飾りものをした。これは日本橋洲町の鉾出（はた）車にあつたもので、神田田町の「猿」京橋の閑古鳥（かんこどり）と並んで有名な日本橋の龍神とは違うが、維新の時國外へ流れ出てしまつて、その有名な蘭陵王の面はアメリカにあるとかいつた。大丸は當時の町總代が京都までいつて織らせた、蘭陵王の裝束の裂れ地の價値を知つてゐるので、それを造つて飾つた。その日何處でもしたといふ酒樽のいくつかが、大丸

荷を積んだ船にやつとひつぱつてもらつて又元の離れ島へ。船頭さん、悠々とのりこんで「どうも御苦勞様」。(熱田)

腕は出來たと意氣込んで無謀をおこしてみたが、舟はたゞくる〳〵まわつて押流されるばかり。とう〳〵船頭さんを餘計威張らせてしまつた。口惜しいからせつせと櫓の練習をやる。これがやがて三日もたつてから、首筋にるいれきが出來た〳〵と騒ぐもとにならうとは。何しろ久しぶりにお天とう様がキラキラ何もかも忘れて子供みたいにキヤツ〳〵と他愛がない。だが流石にリーダーは斯る事を考へ出したらしい。そんな事は忘れてしまへばいゝのに。(素子)

が歸へりは女の手で兎も角水門迄漕ぎつける。やつと歸へりついて足をなげ出す暇もなくもう歸り仕度だ。荷物をまとめて自動車のたて場にあづけると虹の間をぶら〳〵と山へ登る。こゝで古墳が發見されたのは去年だがわづか一年間にこの山の俗化した事よ。展望臺が出來て山の中から赤い旗がヒラ〳〵したり、瓢形の小山に閣が出來たり。今迄トン〳〵かけのぼつて撫子や山百合を取つて來た所だ時計を見てあはてゝ山をかけ降りる。(熱田)

財布の口を一ぺんも開けない私は心安らかに安閑としてゐるが、何しろ三日だ。それにもう雜誌が出來てくる時分だ。遊び疲れの歸りの汽車はうつら〳〵と一瀉千里。名殘り惜しいも何もあつたものではない。東京の灯が大變々々なつかしいものに見える。會計袋の具合はどう？と初めてそつと聞いてみたら、

の前にもかがみが抜いて柄酌がつけて出された。

油町側では憲法發布の由來といふやうな、通俗的な公演會といつたふうなものを催した。そんな時にこそ大丸が會場である筈なのだが、町内の關係で油町の加賀吉といふ大店で開かれた。そこはたしか山岸荷葉氏――紅葉門下で、少年の頃は天才書家として知られてゐた人である――の生家で、眼鏡や何かの問屋だつた。年の暮のゑびす講などに忘年芝居を催したりする派手な店で、北新道のあたしの家の並びの荷蔵に、荷車で芝居の道具を出しに來たりしてゐた。その店が會場となり演説の卓がおかれた。

そんな事はお江戸開闢以來のことと見えて、アンポンタンの幼い頭にも忘れない不思議な光景を残してゐる。まづ、辯者は、その近邊でも當時の新智識と目されたものと見えて洋服を着てゐることの多いあたしの父であつた。洋服が新時代の目標であつたと見える。尤も、官員さんの一人もゐない土地であつて見れば、私の父がハイカラだつたのかも知れない。明治十二年官許代言人、今から見ればとても古くさい名だが、十二人とかしかなかつた最初の仲間の一人であつたときいてゐる。

前の日まで、憲法といふことの講釋を、若い旦那たちの幾人かが熱心に聽きにきた。その人たちが世話役でもあつたのであらう、その當日も机をはこんだり、會場のしつらへを問合せに來たりして、いよ〳〵午後六時前となると、傍聽ファンの動作研究會といふやうな集りになつた。どうもまだノーノー、ヒヤヒヤが分明しないといふ譯なのだつた。書生たちまでが一緒に並んでその稽古をやる。父はハイカラな禮服だが、朝からの祝酒に、私が大きらひな赤黒い色になつてゐる。手はづしてあつた個處で、合圖を忘れるので、ファン連は、困りきつて、演説を暗誦しておかうと努力したが父は面倒くさがつてゐた。俺が、このコップをかうあげたらヒヤ〳〵だ、机の此處へ手をやつたら否だ、かういふ風になつ

後で曰く、四圓九十九錢五厘ですつて。名會計係御苦勞樣、風船リーダーは中々確かでした。（素子）

いたこ紀行は醵金の財布に金五兩、二人合せて金十兩。

一行に洩れた翠月百合子翌夕ボンヤリ、其くせシャツシャツと出かけてくる。オヤ？もう歸つて來たのときくと、ウーン、寢坊して、おいてかれちやつた。

亭六先生芙美子女史、日を問合せに大急ぎで駈附けると兩人只今出立！これは困つた、もう一度家へ歸らうか？行くとすると二三日とまるのだからうちで案じるだらう——とうとうオジヤン。

江の島追記

けふは珍らしくも昨雨女史は洋裝である。石段の長い道を登り下りして行きついた島の突つ端の茶屋で、元氣な小池さんとお勝さんは命屋を見に行くといひ出す。しめつぽい幾り日の海の遠景、伊豆半島も房總半島も茫として見る由もない。手摺りによつて待つことしばし、斷崖のかげから二人の姿がぽつちり現れ眞下の岩の上を玩具のやうに、フエアリーのやうに黑い帽子と桃いろの帶が傳つて行く。波のしぶきに濡れはしないだらうか。岩角にパッと碎け散る泡の白いこと。滑り落ちてゆくその足の早いこと。帽子をぬいで私達三人は榮螺のつぼやきの饗をとる。（八木）

たら拍手だと敎へる。だが、やつて見るとノーノーもヒヤヒヤも拍手も入交ぜとなる、何度繰返してもおんなじなので、まあいゝやといふことになつてしまつた。今の言葉ならばそれが自然だといふところだつたらうが——

聽衆は表の通り一ぱいの黑山だつた。解つたのか解らないのか、ともかくとてもおめでたい事といふ槪念と、はちきれるほど一ぱいなお祭り氣分で、ノーノー、ヒヤヒヤ、拍手喝采、何もかもメチヤクチヤに景氣よく、辯士を胴上げにして家まで送つて持つて來た。

そのあとが馬場勝一派の長唄——馬場は淺草橋の橋手前、其處に住む杵屋勝三郞といつた長唄三味線の名人——夜一夜、唄ふにまかせ、狂ふにまかせ、市中は明るい不眠症にかかつて、そこら中で花瓦斯が燃え酒樽が空いた。雪をこねかへした泥濘に、お酒にお腹の袋を破つた死人がゴロゴロ轉がつた。

多分戶を閉めないで寢た家が多かつたらう。

追伸・このさしゑはアンポタンの父淡石が、六歲の時から明治四年頃までの、市中で見聞したものを七十歲ごろ「實驗實錄」として百五十圖ばかり描き殘しておいたものです。父の沒後その中の五十圖を一卷として知己におわけし、第二卷目を彫らせてゐたをり震火にあひ、前の五十圖の木版は失つてしまひましたが、第二卷目のが少し殘つてゐたので縮寫して入れました。もつと早く、第一回から入れればよかつたと思ひました。

部屋の中の散歩

村山籌子

さつき夫は外出した。

私はその時、新らしく敷いた靑くさい匂ひのする疊の上を、赤いスリッパをはいたまゝ理由もなくぶら〳〵歩きまわつてゐた。一家の主婦である私が、主人の外出まぎわになつて、一向その手傳ひもしないで、部屋の中を散歩してゐるなどといふことは何とおかしい事であらう。私は明らかに呆然自失の狀態にあつた。私は時々こんな風になることがある。ただ時々ひどく呆然としてゐるだけのことで、理由などは何にもない。この發作に私は今日捕へられてゐたのであらう。目にはいるものとては、夫のぬぎ散らした眞黒の長い長い縮緬の兵古帶と、風呂敷のやうな着物だけであつた。私は、それを時々大きな障害物のやうに感じて飛び越えた。

「はんかちふーとちり紙を出してくれ。」と夫は私に賴んだ。私はそれが耳にはいらなかつた。

「なあに？」と返事をしながら夫の言つたことは、もつともつと何か樂しく面白く優しいことのやうに感じてゐたそれだのに、私の夫は、私に、はんかちーふとちり紙を出すやうに命令してゐるのであつた。けれども私は、大變素直に、タンスの引き出しをかきまわして、白いハンカチーフと、押し入れの中から、ちり紙を出して、ポケツトの中へ押し込んだ。そして、傍らに積み重ねてあつたフトンに倚りかかり乍ら、氣忙しくレイン・コートを着てゐる夫を見乍ら、何故であらう、ひどく私は笑つてゐた。何と氣樂な私であらう。それにも係らず夫は私がぼんやりしてゐるので、ひどくぷりぷりしてゐる。そして大急ぎで家を飛び出して行つた。私は、玄關までついて行つたが、おかしさは直らなかつた。

「どういふわけで、あの人はああぷりぷりしなければならないんだらう。」と考へ乍ら、椅子に腰をかけて庭を眺めた。それにしても、この頃の木の葉の繁りの美しくなつた事は素晴らしい。四月から五月にかけて、枯れた樣な棒つきれから、小さな薄紙のちゞれた芽が出初めてそれを細かい雨が打つてゐた。枝はひつきりなしにぶる〳〵と小さく震えてゐた。私のエネルギーはすつかり消失してしまつた。私は絶望の爲に死んだ方がましだと思つた

醉さへあつた。一日中私の目からは涙が雨の樣に降つた。

それだのに、今日はあゝこんなにも私は呆然と樂しく清い葉はこんなに濃く、そして重り合つて熟した匂ひをこぼしてゐる。つゝじの葉はかさ〳〵した肌に赤い生ぶ毛をはやしてゐる。其匂ひは遠くへは廣がらないおもちやのパラシュートに似てゐる。それから、雜草の匂ひはアメイバの樣に單純でかげば頭痛がする。それはもはや匂ひではなくて鼻の粘膜を刺激する絹毛みたいなものだ。

桃の葉はプンプン青くさく、いちぢくは甘美な匂ひがしてゐる。重なり合つてゐるアカシヤの丸い薄い葉には日の光りと影とが半分づつ落ちてゐる。じりじりと日に照りつけられるとやつと少しばかり匂ひだす哀れにも若いそのにび色の枝には極彩色の身體中針だらけの毛蟲がはひまわつてゐる。彼等は高い所から墜落しても決して柔らかな身體をつぶさない。それは不思議な位だ。毛蟲と言へば、私は必ずスパニエール種と呼ばれるらしい顔から長い柔らかな毛の垂れた犬を思ひ出す。もうずつとせんのせんから私はそれを「毛蟲みたいな顔をした犬」と呼んでゐた。全く毛蟲によく似た顔をしてゐる。今でもその犬に大いに憧憬れてゐる。此間銀座の裏を二匹並んで歩いて行くので口笛を吹いて呼んだら、茶と白の毛をふわ〳〵立てながら大變なうなり聲と叫び聲で飛びかかつて來た。私は非常に恥かしくて顔が赤くなつた。私はスパニエール種の犬を恐らく自分より數等すぐれた所のあるものだと尊敬してゐた樣であつた。私はすこぶるどころか申し譯けの樣に笑ひ乍ら逃げ出した。私はしばらく妙に沈んだ氣持になつてしまつた。彼等の顔が毛蟲にさへ似てゐなければ、私はあんなものを眼中には消かないのだ。私はひどく後になつてぷりぷりしてゐた。しかし今となつては、あの可愛らしい下つた目と、そのまわりに下つてゐる毛を忘れかねてゐる。愛すべき犬よ。

それとは全く異つた種類の犬だけれど、近いうちに宮本一枝さんの家から仔犬を一匹もらふことになつてゐる私は出かけて行つて、八匹の中から最も美しく健康なのを選らなければならない。親犬は耳の立つた、鼻の先きが桃色で、しまつた身體をしてゐるブル・テリヤで、大變氣に入つてゐる。私はうちの人たちに、それがどんな魅力のある顔と身體をしてゐるかといふことを說明するのにじれつたくてひどく困つた。

「結局、ヴイクターのマークに似てゐるんですよ。あゝいつた風なの。とてもいゝでせう。」とよく分らしたつもりだつたが、どこに、共通した點があつただらう。それは全然ちがつてゐた。ヴイクターの犬がひどくつまらない犬であつたことを發見してがつかりしてしまつた。私はそれをひどく買ひかぶつてゐた。私は少々誇大妄想狂的傾向があるのではないかと思つた位であつた。どうして私は私の頭の中にある間に、黑と白の土で出來上つてヒズ・マスタース・ヴオイスを聞き入つてゐる犬を、あんなにすばらしいものにこね上げてゐたんだらう。一旦私の注意をひいたもの、それを戀々として忘れかね、甘美なものにこね上げるのは、私の癖だから仕方がない。私は時々、こんな性質のために、自分自身の頭を疑ひ、そしてそれを傷けることさへある。

風が次第に葉のそよぎを忙がしくした。しかし、私は矢張り呆然と、それを眺めてゐるばかりで、悲しくとも淋しくともなかつた。風のテムポが高まるにつれて、木

の薬は一せいに音をたて初めた。それは、大小無數のガラス・コップのガチャガチャいふ音と全く同じであつた。しかし、私は私の頭をいらいらさせはしなかつた。何といふ平穩さであらう。私は少しどうかしてゐるにちがひない。私は夕方になつたら、どんなことをしやうと思つてゐるのか。汚れきつた着物を疊みたいとも、二階の夫の机の上を雑巾でふきたいとも何とも感じてゐないのだ。私は明らかに、さつきの陽氣さから、憂鬱の中にめり込んで行く自分を感じた。

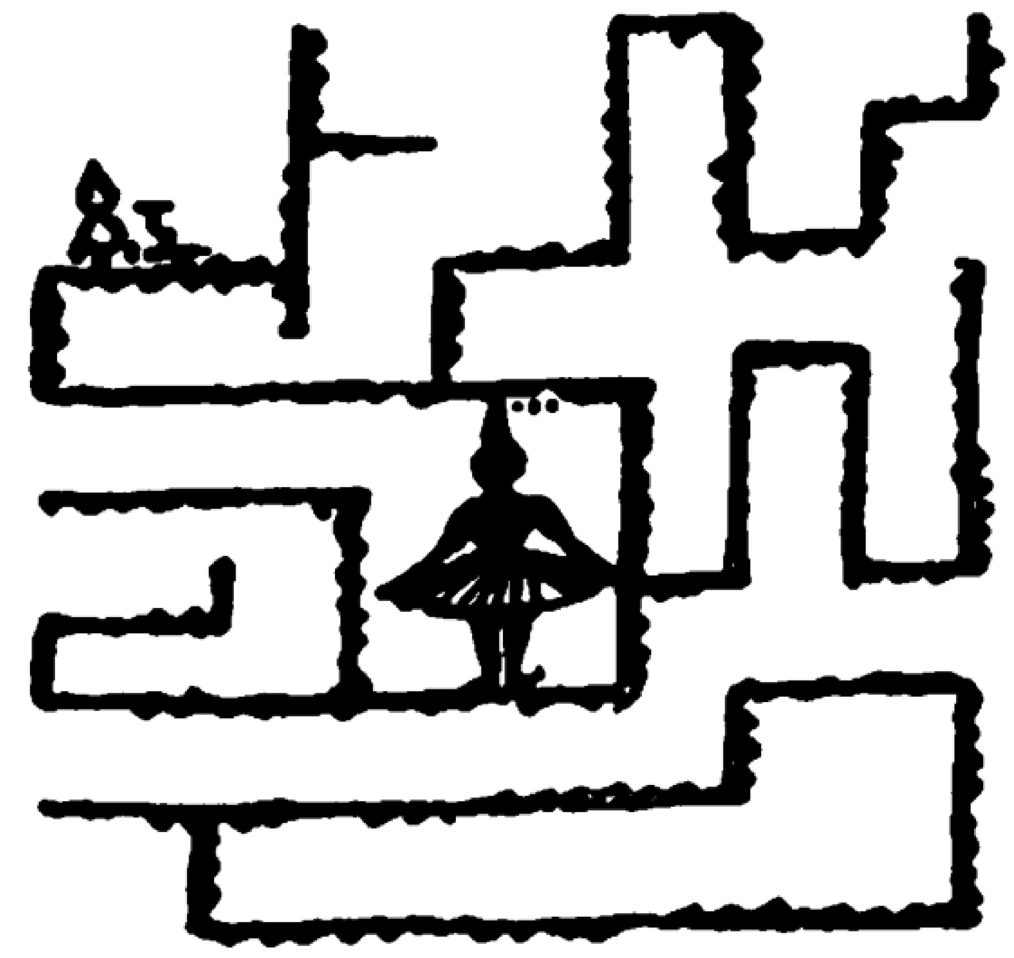
私は自分の机の上を見た。そこには雑誌や單行本が山のやうに積み重さなつてゐる。私は悲鳴をあげたくなつた。三日目毎にからなるのだ。私はどうしたらよいのであらう。部屋のなかを見まわした。タンスの上には赤いアルバムが開いた儘でのつてをり、壁にぶら下つてゐる夫の着物のおしりの所は一文字に破けてゐる。籐椅子の中には子供雑誌と、スリッパが乗つてをり、おお最も悪いことに、私はキレイな疊をスリッパでふみ荒らしてゐるのだ。第一日目には、私はいかに自分の家に滿ちてゐるものを熱愛し、部屋を愛し、片付け、ぶら下げてある着物の垂れ工合にさへも自惚れを感じる。明らかに、すべての過ちは第二日目にある。私は何かに注意を全部吸收されてしまつて、たつた一日間、私は自分の周圍のものがいかに亂雑に取散らされてゐるかが目にはいらないのだ。そして、第三日目になつて見れば、私は全然すべての事を忘れきつてゐるのである。永久にこの三日間を私は繰返してはさつぱりしたり、忘れ果たり、憂鬱にいらいらしたりするであらう。私は全くやり切ない。

私は咽喉がひどくかわいたので、フルーツ・ソルトを飲みに臺所に行つた。コップをかいだら、それはフキンの匂ひがしみてゐた。何度も水をかけて、その不快な匂ひを消して、一杯の水にフルーツ・ソルトを入れて、鼻の中に飛び込んで來る小さい白い泡を避け乍ら飲み干した。私は胃がひどくよくない。食慾が出るのでプレインソーダのやうな味を持つてゐるこれを始終のんでゐる。新鮮なフルーツから取つたソルトだと說明書がしてあるけれども、私はそれを信じない。重曹に何かを交ぜてあるのだと考へてゐる。私の知ることの出來ないこと、私はそれを信じることが出來ない。しかし、こんなことはどうでもよい。私は何より先きに部屋の中を極めてキチンと掃除をして、讀書をしたいのだ。

掃き出した紙切れや塵は庭の中で少しづつ動いてゐるやがて夜の露にぬれて重くなり、動かなくなり、おしまひにはしめつた赤い土にはりついてしまふことであらう

私は少々せいせいとした氣持になつた。

今日のきれぎれな思想、飛び飛びの觀念呆然とした生活態度は全く私の自信をたゝきつけ、そして大變な不滿を私の胸に卷き起した。私は少くとも十時迄に、私のこの浮はついた感情を淸算してしまふことに決意しよう。その頃、夫は歸つて來る。それは何とたやすい事であらう。私は昨日から讀み初めてゐるア・アルチンヤンの「ソヴェート聯邦の學生」といふ世界××及び、社會主義建設のための優秀なプロレタリア技術者の幹部を養成する事を目的とする大學の組織について書かれてある論文をよみ終つた。私は強い意志と實行力をひどく欲してゐる私は新らしい昂奮と希望のためにじつとしてゐることが出來ず、再び部屋の中を散步し初めた。



下谷の家

――放浪記――

林芙美子

一月×日

カフエーで醉客にもらつた指輪が、思ひがけなく役立つて、拾參圓で質に入れると、私と時ちやんは、千駄木の町通りを買物しながら歩いた。

古道具屋で、箱火鉢と小さい茶ブ臺を買つたり、澤庵や茶碗や、茶呑道具まで揃へると、あと半月分あまりの間代を入れるのが、せいゐつぱい。

原稿用紙も買へない。

拾參圓の金の他愛なさよ。

白い息を吹きながら、二人が重い荷を兩方から引つぱつて歸つた時は、十時近かつた。

「芙美ちやん！　前のうち小唄の師匠よ、ホラ……いゝわね。」

傘さして
かざすや廓の花吹雪
この鉢巻は過ぎしころ
紫にほふ江戸の春

目と鼻の露路向ふの二階屋から、沁みすぎる程、いゝ三味線の音〆、細目にあけた雨戸の隙には、灯に明るい、障子のこまかいサンが見へる。

「お風呂明日にして寢ませう……上蒲團借りた？」

時ちやんはピシヤリと障子を締めた。

敷蒲團はたいさんと私と一緒の時代のが、たいさんが小堀さんとこへお嫁に行つたので殘つてゐた。

あの人は鍋も、庖丁も敷蒲團も置いて行つてしまつた。

一番なつかしく、一番厭な思ひ出の殘つた本郷の酒屋の二階を思ひ出した、同居の軍人上りや、二階でおしめを洗つたその妻君や、

人のいゝ酒屋の夫婦や。用が片づいたら、あの頃の日記でも出して讀もう――。

「どうしたかしらたい子さん！」

「今度こそ幸福になつたでせう。小堀さん、とても、ガンジョウな人だそうだから、誰が來ても負けないわ……。」

「いつか遊びに連れて行つてね。」

「あゝ……。」

二人は、下の叔母さんから借りた上蒲團をかぶつて日記をつけた。

一、拾參圓の內より

茶ブ臺　壹圓。
箱火鉢　壹圓。
シクラメン一鉢　卅五錢。
飯茶わん　貳拾錢　二箇。
吸物わん　參拾錢　二箇。
ワサビズケ　五錢
澤庵　拾壹錢。
箸　五錢　五人前。
茶呑道具　盆つき　壹圓拾錢。
桃太郎の蓋物　拾五錢。
皿　貳拾錢　二枚。
間代日割り　六圓。（三疊九圓）
火箸　拾錢。
餅網　拾貳錢。
ニュームのつゆ杓子　拾錢。
御飯杓子　參錢。
花紙一束　貳拾錢。
肌色美顏水　貳拾八錢。
御神酒　貳拾五錢　一合。
引越し蕎麥　參拾錢　下へ。

一、壹圓貳拾六錢　殘金。

「心細いなあ……。」

私は鉛筆のしんで頰つぺたを突きながら、つんと鼻の高い時ちやんの顏をこつちに向けて日記をつけた。

「炭わ？」

「炭は、下の叔母さんが取りつけの所から月末拂らひで取つてやるつてさ。」

時ちやんは安心したやうに、銀杏返へしの鬢を細い指で持ち上げて、私の脊に手を卷いた。

「大丈夫つてばさ、明日から、うんと働らくから芙美ちやん元氣を出して勉强して。淺草を止めて、日比谷あたりのカフエーなら通ひでいゝだらうと思ふの酒の客が多いんだつて……。」

「通ひだと二人とも樂しみよ、一人ぢや御飯もおいしくないね。」

私は煩雜だつた今日の日を思つた。

萩原さんとこのお節ちやんに、お米も二升もらつたり、畫描きの溝口さんは、切角北海道から送つて來たと云ふ、餅を風呂敷に分けてくれたり、指輪を質へ持つて行つてくれたり。

「當分二人でみつしり働かうね。ほんとに元氣を出して……。」
「雜色のお母さんのところへは參拾圓も送ればいゝんだから。」
「私も少し位は原稿料がはいるんだから、沈默つて働けばいゝのね。」
雪の音かしら、窓に何かサヽヽと當つてゐる。
「シクラメンつて厭な匂ひだ。」
時ちやんは、枕元の紅いシクラメンの鉢をそつと押しやると、簪も櫛も拔いて、「さあ寢んねおしよ。」
暗い部屋の中で、花の匂ひだけが、強く私達をなやませた。

一月×日

積る淡雪積ると見れば
消えてあとなき儚なさよ
柳なよかに搖れぬれど
春は心のかはたれに……

時ちやんの唄聲でふつと目を覺ますと、枕元に、白い素足が並んでゐた。
「もう起きたの……。」
「雪が降つてるよ。」
起きると、湯もたぎつて、窓外の板の上で、御飯もグッグッ白く吹きこぼれてゐた。
「炭もう來たの……。」
「下の叔母さんに借りたのよ。」
いつも臺所をした事のない時ちやんが、珍らしさうに、茶碗をふいてゐた。
久し振りに、猫の額程の茶ブ臺の上で、幾年にもない長閑なお茶を呑む。
「やまと館の人達や、當分誰にもところを知らさないでおきませうね。」
時ちやんはコックリをして、小さな火鉢に手をかざす。
「こんなに雪が降つても出掛ける？」
「うん。」
「ぢやあ私も時事新聞の白木さんに會つてこやう、童話がいつてるから。」
「もらへたら、熱いものしといて、あつちこつち行つて見るから、私はおそくなるよ。」
始めて、隣りの六疊間の古着屋さん夫婦にもあいさつをする。
鳶の頭をしてゐると云ふ、下のお上さんの旦那にも會ふ。
皆、齒ぎれがよくて下町人らしい。
「前は道路へ面してゐたんですよ、でも火事があつて、こんなとこへ引つこんぢやつて……前はお妾さん、露路のつきあたりは淸元でこれは男の師匠でしてね、やかましいには、やかましゆうござんすがね……。」
私はおはぐろで齒をそめてゐるお上さんを珍らしく見た。
「お妾さんか、道理で一寸見たけどいゝ女だつたよ。」
「でも下の叔母さんが、あんたの事を、此近所には一寸居ない、いゝ娘ですつてさ。」
二人は同じやうな銀杏返しをならべて雪の町へ出た。
雪はまるで、氣の拔けた泡のやうに、目も鼻もおほひ隱さうとす

る程、元氣に降つてゐた。

「金もうけは辛いね。」

ドンドン降つてくれ、私が埋まる程、私はえこぢに、傘をクルクルまわして歩いた。

どの窓にも灯のついてゐる八重洲の通りは、紫や、紅のコートを着た、務めする女の人達が、やつぱり雪にさからつてゐる。

コートも着ない私の袖は、ぐつしより濡れてしまつて、みじめなヒキ蛙。

白木さんはお歸へりになつた後か、そうれ見ろ！

これだから、やつぱりカフェーで働くと云ふのに、時ちやんは勉強しろと云ふ。庇い受付けに、このみじめな女は、かすれた文字をつらねて、困つておりますからとおきまりの置手紙を書いた。

だが時事のドアーは面白いな、クルリクルリ、水車、クルリと二度押すと、前へ逆もどり、郵便屋が笑つてゐた。

何と小さき人間達よ、ビルデングを見上げると、お前なんか一人生きてたつて、死んだつて同じぢやないかと云ふ。

だが、あのビルデングを賣つたら、お米も間代も一生はらへて、古里に長い電報が打てるだらう。

ナリキンになるなんて、云つてやつたら、邪けんな親類も、冷たい友人も、驚くだらう。

あさましや芙美子

消えてしまへ。

時ちやんは、かじかんで、この雪の中を野良犬のやうに歩いてゐるんだらうに——。

二月×日

あゝ今晩も待ち呆け。

箱火箱で茶をあたゝめて、時間はづれの御飯をたべる。

もう一時すぎなのになあ——。

昨夜は二時、おとゝひは一時半、いつも十二時半にはきちんと歸へつてゐた人が、時ちやんに限つて、そんな事もないだらうけれど……。

茶ブ臺の上には、若草への原稿が二三枚散らばつてゐる。

もう家には拾壹錢しかないのだ。

きちんきちんと、私にしまわせてゐた拾圓たらずのお金を、いつの間にか持つて出てしまつて、昨日も聞きそこなつてしまつたが。

蒸してはおろし、蒸してはおろしするので、御飯はビチヤビチヤしてゐた。濱鍋の味噌も固くなつてしまつた。インガな人だなあ、原稿も書けないので鏡臺のそばに押しやつて、淋しく床をのべる。

あゝ髪結さんにも行きたいなあ、もう十日あまりも銀杏返へしをもたせて、地がかゆい。

歸へつて來る人が淋しいだらうと、電氣をつけて、紫の布をかけておく。

三時。

下のお上さんのブッブッ云ふ聲に目を覺ますと、ドタン、ドタン時ちやんが大きな足音で上つて來る。醉つぱらつてゐるらしい。

「すみません！」
蒼ざめた顔に、髪を亂して、紫のコートを着た時ちやんが、蒲團の裾にくづ折れると、まるで駄々つ子のやうに泣き出してしまつた。
私は言葉をあんなに用意してまつてゐたのに、一言も云へなくて沈默つてゐた。
「さよなら時ちやん！」
若々しい男の聲が消ると、露路口で間抜けた自動車の警笛が鳴つた。

二月×日
二人共面伏せな氣持ちで御飯をたべた。
「此頃は少しなまけてゐるから、梯子段を拭いてね、私洗濯するから……。」
「私するから、こゝほつといていゝよ。」
寢ぶそくな、はれぼつたい時ちやんの臉を見ると、たまらなくいじらしくなる。
「時ちやん、その指輪どうして……。」
かばそい藥指に、サンゼンと白い石が光つて裏はプラチナだつた。
「紫のコートわ……。」
「……」
「時ちやんは貧乏が厭になつてしまつた？」
私は下の叔母さんに顔を合はせる事は肌が痛くなる。
「姉さん！　時坊は少しどうかしてますよ。」
水道の水と一緒に、叔父さんの言葉が痛く來た。
「近所のてまへがありまさあね、夜中に自動車をブウブウやられちやあね、町内の頭なんだから、一寸でも風評が立つと、うるさくてね……。」
あゝ御もつとも樣で、洗ひものをしてゐる背にピンピン言葉が當つて來る。

二月×日
時ちやんが歸らなくなつて五日。
ひたすらに時ちやんのたよりを待つ。
彼の女はあんな指輪や、紫のコートのおとりに負けてしまつた。
生きてゆくめあてのないあの女の落ちてゆく道かも知れない。
あんなに貧乏はけつして恥ぢやあないと云つてあるのに……十八の彼の女は紅も紫も欲しかつた。私は五錢あつた銅錢で、駄菓子を五ッ買つて來ると、床の中で古雜誌を讀みながらたべた。
貧乏は恥ぢやあないと云つたもののあと五ッの駄菓子は、しよせん私の胃袋をさいどしてはくれぬ。手を延ばして押し入れをあけて見る。白菜の殘りをつまみ、白い御飯の舌ざわりを空想する。
何もない。
漠々。
涙がにじんで來る。
電氣でもつけやう……駄菓子ではつまらないと見えて腹がグウグ

ウ…辛氣に鳴る。
隣りの古着屋さんの部屋では、ジ…と秋刀魚を燒く强烈な匂ひがする。
食慾と性慾！
時ちやんぢやないが、せめて一碗のめしにありつかうか。
食慾と性慾！
私は泣きたい氣持ちで、此の言葉を嚙んだ。

二月×日

芙美子さま。
何も云はないでかんにんして下さい。指輪をもらつた人に强迫されて、淺草の待合に居ます。
妻君があるんですけど、それは出してもいゝつて云ふんです。笑はないで下さい。その人は請負師で、今四十二です。着物を澤山こしらへてくれましたの貴女の事も話したら、四拾圓位は毎月出してあげると云つてました。
私嬉しいんです。

讀むにたへない時ちやんの手紙の上に、こんな筈ではなかつたと、涙が火のやうにむせた。
齒が金物のやうにガチガチ鳴つた。
私がそんな事をいつたのんだ！　馬鹿馬鹿こんなにも、こんなにもあの十八の女はもろかつたのか！
目が圓くふくれ上がつて、見へなくなる程泣きぢやくつた私は、時ちやんへ向つて呼んで見た。
所を知らせないで。淺草の待合なんて……●
四十二の男！
きもの、きもの。
指輪もきものもなんだ信念のない女よ！
あゝでも、野百合のやうに可憐であつたあの姿、きめの柔かい桃色の肌、黑髮、あの女はまだ處女であつた。
何だつて、最初のペエヂをそんな、浮世のボオフラのやうな男にれてやつてしまつたんだらう…愛らしい首を曲げて、
春は心のかはたれに…
私に唄つてくれたあの少女が…四十二の男よ呪ろはれてあれ！

「林さん書留めですよッ！」
珍らしく元氣のいゝ叔母さんの聲に、梯子段に置いてある日本封筒をとり上げると、時事の白木さんからの書留め。
金貳拾參圓也！　童話の稿料。
當分ひもじいめをしなくてすむ。胸がはづむ、狂人水を呑んだやうにも。でも何か一脈の淋しい流れが胸にあつた。
嬉しがつてくれる相棒が、四十二の男に抱かれてゐる。
白木さんの手紙。
いつも云ふ事ですが、元氣で御奮鬪を祈る。
私は窓をいつぱいあけて、上野の鐘を聞いた。晩は壽司でも食べやう。



長流記（その十二）

山田邦子

佐千子と水木氏との交際のはじまりは一寸人工的の處があつたと言へる。佐千子が由井氏との家庭生活に失望する一方にまだ空想を追つて高い處で何物かによつてそれの滿たされるだろう希望のやうな憧憬のやうなものを持つてゐた。

それは時には手をのばせばもうそこにある、一足ふみ出せばそこにある、といふ程に近くたしかに希望を持てるやうであつた。自分には由井氏のやうな人でなくて、もつと自分に合つた、愛も理解も持つた人で、尠くも藝術家ですぐれた人が自分とめぐり合ふ日を待つてゐる。さういふ人がどこかに居る。そして藝術家らしい實に高踏的な淸い樂しい家庭がそこで作られる。あんな野卑な皮肉に代るデリケートな愛のいたはり、あの粗暴な怒りに代る靜かな敎訓……さうした人さうした家庭が與へられるやうな憧憬的希望を持ちつゞけた。現在の藝術家に愛想をつかして思ひがけない方向に結婚の道をもつたとは言へ、自分の今の生活はほんの假りの一日一日であるやうな氣がして來てゐた。……それがいざ喧嘩がはじまつて互に心が極度に興奮して「出て行け」「行きます」の問答になるといつも佐千子の心からその美しく好ましい空想の虹が一時に消えてあたりは眞つ暗やみとなりはてる……目にひら／＼とぶ蝶のやうに、容易につかめさうなよりよき生活は一時に消えて、たゞ一歩と思ふその一歩が金輪際またげない、さういふ根のはつた夫婦生活、家庭生活といふものにはゐつてゐるのをよく知らないで……。

或る日佐千子は雪どけの道を、うつむくやうにして道玄坂を上つていつた。佐千子の心は行き詰り切つてゐた。由井氏とは喧嘩をしてもう五日も口をきゝ合はなかつた。由井氏の片意地は血統的のものであつたが佐千子の强情も親讓りで互にひけは取らなかつた。然し何と言つても佐千子は女心のつい淚つぽく心細さに誘はれて由井氏の機嫌をとるやうな態度をとると由井氏の片意地は一そう强固になつて來る。佐千子はさういふ屈辱に心が荒れはてゝしまつた。さうしてどうにか歩み出したい複雜な心理狀態から文壇で一時非常に名高かつた小說家の水木氏を訪ねる氣になつたのであつた。……水木氏の家には一時北山春代さんが家庭敎師のやうになつて居つたのでその頃佐千子は一度春代さんを訪ねて行つて水木氏に紹介されてゐた。水木氏は評判の美男子で育ちのいゝ事を思はせるやうなハイカラな好みを持つてゐた。若い婦人の心理描寫にすぐれてデリケートな筆を持つてゐるので世にきこゑてゐた。

佐千子は臺灣から屆いたウーロン茶の大きな箱を風呂敷に包んでそれを抱えて道玄坂を上つて舊式な西洋館のその家を訪づれたのであつた。……その家は寫眞やの低當流れを水木氏のお父さんが水木氏に與へたものだとかいふので通された二階の應接間は一處天井がガラス張の樣に明るくてまだ寫眞やの面影があつた。水木氏はバンドのついた散步服の樣な輕い洋服を着て元氣に二階へ上つて來た。

「やあ、いらつしやい」

さう言つて水木氏は其ふつくりした立派な顏に笑ひをたゝえた。前齒の蟲齒が現はれて瞬がいたづらつ子の樣になる笑ひ顏であつた。

水木氏は非常な雄辯で自分で自分の話に興がるといつたやうに、それからそれと話を續けた。話はパンの生活の話であつた。お米よりかパンの方が文明人のからだには如何に適當であるかといふ實證的の話であつた。水木氏の家では米屋は全くはいらない。三食ともパンをたべてゐると話した。間違つてごはんが一食まじると子供はすぐに下痢をすると話した。又子供たちは小學校も退學させて、水木氏が本を書いてその本に依て敎育してやつてゐる話をした。佐千子は此思ひ切つた變な生活を不安氣もなく自信を以てやつてゐる水木氏の態度を面白く思つた。然し先年逢つた時より水木氏のやつれて見えるのはパンの生活なんかしてゐるからだと思つてそれをきくと。

「いや、パンの生活をしてからずつと肥りました」

と水木氏は無茶を言つた。……佐千子は持つて行つたウーロン茶をそこにおいた、水木氏は柔らかいきれいな手に眞桃色の箱をのせて

「これはいゝものを頂いた。パンの生活をしてゐると飲物が一番うれしいんです」となれた調子で紅茶をほめた。

一時間程して佐千子はいとまをつげたがその時佐千子は思ひあましたやうに、

「私ほんとに心が行きつまつてしまつたものですから何か書いてよもみたいと思つておたづねしましたの」

と水木氏の目が一點の燈のやうにチラリと佐千子を見てすぐに消えた。

それから凡そ半月ほどたつた或る日、佐千子が臺所に立つて洗ひものをしてゐるとそこへお慶さんがはゐつて來た。

「一寸…家はお客様よ」

さう言つてお慶さんはやゝ意外な驚きに似た表情をしてゐた。

「だれ？」

「水木さんよ」

佐千子も心で吃驚した。そして直覺的に「まつすぐに家へ來ればいゝのに、まづい技巧だわ」とつぶやく心があつた。お慶さんは紅茶がきれてゐたのでそれをもらひかた〴〵やつて來たのだが心のなかでニヤ〳〵してゐる氣持はかくせなかつた。

「あとでゐらつしやいよね」

さう言つてお慶さんは歸つていつた。

佐千子の家にはその頃子供をひどく可愛がるお末といふ女中がゐてその女中は少し頭腦がたりない女だつたが朝飯がすむと

「一寸お孃樣と遊んできましよ」

とひとり言のやうに言つて後の片付けもせずに子供を連れて出かけてしまふと半日家へ歸らなかつた。おひるに一寸歸つてくると夕方までどこか遊び歩いてゐた。はじめ赤坂の家でその女中が佐千子の家に來た翌日、その調子で伊津子を一寸おんぶして出て三時頃まで歸らぬので佐千子は急に不安になりだして昨日來たばかりの氣心しれぬ女中に子供をあづけて出してやつた事を後悔した。空が曇つて雪が降りさうに冷い風が吹きこんで來た、もう秋のネルを着る頃で佐千子はその雨前の肌寒い風の音をきくとネル一枚で出してやつた伊津子の可憐な姿が目に浮んで大いそぎで押入から黄八丈の羽織をなほしてこしらへたネンネコを取り出して門の前へかけ出してみた。外は靜かな廣い通りで人通りは絶えてゐた。その道を見ると右へ行つたものか左へ行つたものかとんと方角が分らない…どちらからもそれらしい人は見えて來ない…雨は降りだして八丈のネンネコにハラ〳〵と降りかゝつて來るのであつた。佐千子は急に目が熱くなるやうで、子供はあの女中につれられてもう輕業にでも賣られたかといふ氣がして來たのであつた…と向ふから小走りに雨をよけながら子供にふろしきをかぶせてとんで來るその女中の姿が見えて自分も思はず聲をあげてその方にかけ出した。…その時はひどく驚かされたけれど、そのお末はほんとにお人よしで子凡煩で夕飯のおかずなども牛肉とかお魚は自分は食べないでとつておいて朝伊津子を呼んでお膳の前へ座らせて半分こにして食べてゐたいといふやうで子供の世話だけは眞から上手にやるので佐千子は子供がありながらお慶さんと同樣遊びに行きたければいつでも子供の心配はせずに其まゝ遊びに出て行かれたのであつた。

佐千子がお慶さんの家に行つてみると水木氏はもうくつろいで川端氏と話しこんでゐた。

「やあ…僕はね、今日はずつと澁谷から代々木の原の方を散歩して來たんです、のどが乾いてどこかでお茶をのみたいと思つてゐると貴女の家の女中さんが角の八百屋でしきりに貴女の話をして、家の奧さんは小說家だなんて自慢をしてゐるものだからてつきりあなたの家は近い處だと思つていきなりその女中さんに君は由井さんの女中さんだろ。奧さんはおうち？ときいたら吃驚してゐましたよ、川端君の處がこんな處とは知らなかつた、丁度此前に出たから寄つて今お茶をのませて貰つてゐる處です。」

三人は此水木氏の話をおもしろさうに聞いてゐた。然し心のなかでは此話のなかの散步を信ずる者はなかつた。お慶さんの顏には明かに「佐千子さんを尋ねて來たんでせう」といふ笑ひがあつた。

其晩は由井氏もまじつて五人でおそくまでお花をひいて遊んでしまつた。水木氏と由井氏は妙な處で話の調子が合つていつた。由井氏の駄じやれが水木氏をひどく口惜がらせたり水木氏のおそろしくまづいしやれが由井氏を苦しい程笑はせたりして二人は前から知り合ひの川端氏よりも話の合ふらしい處があつた。それはあへて佐千子に近づく爲に水木氏が無理に由井氏に調子を合せるといふやうな技巧的のものではなかつた。水木氏と由井氏とにはどこか明るいにぎやかな――人が集れば其氣分を釀し來る江戸ッ子式の氣分があつた。尙川端氏はどういふ場合にもしんねりとして同じやうに大笑ひをしてもどこか自己にたてこもる陰鬱な處があつた。

「川端君は書生生活をしないからあゝなんだね」

「さうだ〳〵」

由井氏と水木氏は或る時かう言つて共鳴した事があつた。

それからお花は益々盛んになつていつた、水木氏は殆んど一日おきにやつて來て電車のなくなる一時二時頃原を越えて澁谷まで步いて歸る熱心さであつた。

お臺所ではお末が伊津子の牛乳消毒器をかけたまゝ伊津子と一緒に寢てしまつて、瓦斯はいたづらに靑い火をたてたまゝ牛乳は瓶のなかで半分に煮つまつてゐる。臭い〳〵と言ひ出してたれかお臺所へ出て見て大變よ、と言ふさはぎで、急にお末をおこして夜半に牛乳を　ひに走らせる、その頃まで座敷の電燈は明るく輝いて「一寸百本もとを貸してくれ…」と夢中になつてゐる有樣であつた。

水木氏と一緒に小石川から或る大きな雜誌の編輯をしてゐる織田さんといふ紳士もやつて來て、川端さんの家でとう〳〵夜明しをしてしまつて次ぎの日の三時頃、晝食とも朝食ともつかぬ食ぱんなどを食べてゐると疲れて社を早く歸つて來た由井氏は

「どうした？博打(ばくち)うちたちはもう歸つたの」

と外から聲をかけて一同を笑はせた。

水木氏の遊びに出て來るのは大抵午後からであつた。お花のはじ

まるのは夕食後が多かつた。水木氏と佐千子はよく打ちつれて活動寫眞を見に行つたり展覽會を見に行つたりしたそして其事が漸く人の噂にのぼつて來た。水木氏は時折自分の家の廣い庭に咲いてゐる美しい花で花束をこしらへて持つて來た、水木氏のデリケートな詩情がそこにも動いてゐみえた。花束には時に水木氏の心の息をきくやうなおもひが洗練された言葉で書かれてあつた。佐千子はそんな時讀んで笑つて濟ましてゐた。さういふ水木氏のやうな名だゝる人は田舍靑年の戀の表白のやうに、相手の心を見ないで自己を押して來るやうな無茶はしない洗練された戀愛道をたどる事を佐千子は知つてゐた。そこで佐千子は思ふ程の處で水木氏を立ち止まらせる事に成功してゐた。散步、もの見…さういふ時に互に目につくやうな奇麗な人と連れだつてゐる、その快感を誇りたい…現代では說明なしにも通じる此二人の交涉が當時の人になか〳〵通じないうらみがあつた二人はさういふ世間を「頭腦のわるい世間」と輕蔑して臆說に恐れ入つてゐなかつた。

或る晩佐千子の家に集つて例のやうにお花をやつてゐると突然暗い玄關を音なふ聞きなれない女の聲がきこえた。

「ごめん下さい」

皆が一寸花札の手を止めてきゝ耳をたてゝゐると玄關にはおすえが出て何かその客と話してゐるらしくやがて客間の襖をあけて

「あの水木樣の奧樣が…お坊ちやんをお連れになつて…」

一度は目をみはつたが水木氏はサッと顏色をかへた。佐千子まで侮辱されたやうな不快な感が身内を走つた。

「こちらへおあがりなさいつて…」

由井氏が口を切つてそこらを片付けはじめた。水木夫人は大柄なからだに少しはでた小紋の羽織を着てはゐつて來た。その後ろに長男の晃ちやんがクル〳〵の瞳をして從つてゐた。

「どうも每度水木が出まして」

さう言つて夫人は挨拶をした。手に一通の電報を持つてゐる。

「たれか解らない電報が來たものですから」

水木氏は電報を取つてよんだ。

「アス六ジニツクタノム…なあんだ。大井君だよ、これは」

さも〳〵何んでもないといふやうにそれを言つて夫人の方へ電報をかへしてやつた。

「さあ…私もさうとは思ひましたけど」

その間に由井氏は行つて本箱の抽から天狗の面に車のついた小さいおもちやを出してそれをくる〳〵座しきに廻しながら

「坊ちやんあげませう」

と言つてゐた。天狗の面は車のまわるたびに鼻を長くしたり引こめたりした。

水木夫婦が連れだつて歸つた後で一座はホッとしたが佐千子は挑戰的に一足心を前に出した。

公開状

曇り日の獨白

八木秋子

1

プロレタリア文藝へ轉向した作家の人たちのうち、私は藤森氏へ一ばん多くの關心をもつてゐた。片岡氏や今氏が華々しい鳴物入りでゴシップ欄を賑はせたのに、氏の轉向はこれまでの生活態度なり作風なりからしても當然くるべきところへ來たといつたやうな自然な感じを與え、それだけにまた氏に期待するところも多かつた。藤森氏は既成文壇でも相當な顔の人であつたし、因緣もあつたことでもあらうし、そろ〱自分の世界に安住の地を求めやうとする年齢でありながら、兎にも角にも工場の生活も經驗し、その上思想的立場を鮮明にされたといふことは、少くとも現在の動搖期にある作家達の意識生活に相當の波紋をなげ與えたものと思はれる。

ところが、戰旗の人となつてから、否その前から次ぎつぎと發表される氏の作品は一つ一つにひどい惡評で迎えられ、自由主義的立場にある批評家ばかりでなく、同志のうちからさへも非難の聲を放たれるものであつたがそれでも氏は大抵の場合默して應へず、相變らず根氣よく勞作をつゞけて行く態度には何か深く期するところがあるものゝやうにも見え、時に文戰一派に對しての犬糞的な惡罵も藤森氏の一面の稚氣くらゐに人々を微笑させる程度のものであつたが、ともかく私は轉向したほかの人達や若い觀念的作家などを見る眼とはまたおのづから違つた氏の眞面目さを認めてゐたし、今もさう信じてゐる。

2

ヒューマニスト藤森氏が現在のマルキスト作家へ遷り變つてきた經路はその作品の跡によく現はれてゐる。が作を一貫して變らないのはその色濃きロマンティシズムであり少しばかりの感傷である。ところが、それが近ごろではやや救ふべからざる詠嘆的自己肯定と

あまりにも必然性のない觀念の飛躍で安つぽい明るさを生み、戯畫化されたプロレタリアの姿を曝け出すに至つたのはどうしたものか氏が持前の空想は現實の上を見事に滑走して――といふよりは現實と悶掻きからみ合ひながらしかも空間に浮游してゐる。

前の「何が彼女をさうさせたか」夫婦「親友」のころは轉換の動搖の中でもあり新らしい形式への摸索時代で、その詠嘆的肯定へはまだしも氏がプロレタリアの現實へもつと衝き入り認識し得る作家であらうとの眼を、疑はせるものとも思へなかつた。

それが、最近の「土堤の集會」となり「十萬圓事件」となり「光と闇」から「ツバサ」に至つては、藤森氏はみづから觀念的ロマンテイストの哀しい騎士の姿で舞臺の上に、大衆の背後から追ひすがつてゆく一人の俳優になつてゐる。

プロレタリア文藝の大衆化といふ結構な叫びがあがつてから、多くの作家はそれをどう認識したものか、近ごろのジヤズ的レヴユー的傾向はこぞつてジヤアナリズムへの迎合を事實において示してゐる。高速度映畫のテンポ――その主役は最後の亂鬪の場面で觀客のスポーツ的興味をことさら滿足さすことを知つてゐる――これ等の作品は例外なく都會文學にして卽興文學、理智的技巧の產物にほかならない。そして彼等は唯物論の上に立つ以上、根本的に對蹠的立場にある新感覺派と多分に近接した要素をもつてゐる。一部の作家は形式主義を笑殺しながら、しかも實際はその形式に追隨しつゝあることをどう辯明するだらうか。

3

一般プロレタリアートはかういふ文藝作品には日に日に緣遠くなりつゝある。その技巧化よりも、第一に無產大衆の生活はもはや今日の作家の描く內容よりははるかに先へ進みその悲慘の度は深化してゐて、概念化された常識的作品などには興味をもち得ない。優れた作家のもの――たとへば小林多喜二氏の「一九二八・三・一五」や「蟹工船」、そして岩藤雪夫氏の「ガトフ・フセグダー」や「鐵」などに私たちが惹かされるのは、描かれた異常な生活相と、驚くべき熱情をもつてその現實の中に突きすゝんで行く作者の意力である。これ等の作で讀者が感ずる反抗は現實として少しの不自然もなく、また浮游しはしない。

プロレタリアの生活とその眞個の感情をもち得ない作家はせいぜい想像によつて作の構成を探偵小說的怪奇に組みたて、階級意識で色づけし、文化住宅式舞臺裝置の形式に拵えあげなければならないのは當然だ。これがプロレタリア文藝の大衆化だとすれば私達また何をか言はんやである。

4

インテリゲンチア作家としての藤森氏は今後いかなる步みをつゞけられるであらうか――。

現實の上に跳びあがつた觀念の遊戯を合理づけて行くのかしら？　だが、私はけふまでの氏の作が眞個の個性から生れたものばかりとは考へられない。林房雄氏や片岡鐵兵氏などは通俗プロ作家である事を、みづから勇敢にも肯定し、ある意味では生活の爲めに書いてゐるのだといつた態度を我人とともに認めてゐる。あの人達の存在はまたそれでいいともいへるかもしれない。しかし少くとも階級的良心の眞實性をもつ藤森氏がその個我をみづから歪めて意識の綱に自らを縊り、そのイズムの政治的目的のためにあゝした觀念技巧の作品を世に出して行かなければならないとは、何としても矛盾ではないか。

マルクス主義の作家達が彼等の文藝批評の標準を社會的價値（實はイズムの政治的目的への効果）に置いてゐる上は、作家の自由性は抹殺されて作品はいきほひ劃一的とならざるを得ない。凡ての生產はその價値標準が社會的普遍性にあるべき事は判りきつてゐる。

しかもプロレタリア大衆と叫び反抗をぶちまけてみても、現在の藤森氏の作品がどうして初期のものより社會的普遍性が多分にあり無産者の心を搏つものといひ切れやう。

私は氏の初期の作に滲む謙虚さにながい間牽引を感じてきた。「東京へ」のおその「北見」の靑ちやん、「床甚」「雲雀」などの人物は氏が深い人間愛から描かれたものだつた。「磔茂左衞門」は後半の不自然さはともかくとして氏が個人主義から社會主義へ、自然主義から目的性文學へ移つた當時の收穫として新らしい境地を拓き、劇作家としての技倆を示した優れたものだつたが――。

しかし藤森氏はマルクス主義作家である。同時にインテリゲンチヤの意識と生活をもつ人だ。プロレタリアが益々生活的に窮迫し反抗の激化するであらう今後、その現實をいかに捉へ凝視し表現するであらうか。私の豫想はインテリゲンチア作家の未來に對しては常に悲觀的である。そして鬪爭目的の手段としての創作の重要性を認めず、さうした作品を必要としないプロレタリアの起つであらう日を心に描く。良心的な藤森氏は、ほんたうにだんだん書けなくなるのぢやないのかしら?

5

それから――

藤森氏に筆の序に申上げたいと思ふ。先だつて會合のあつたあと、氏は私に少しばかり思想の話をされた。そして、私の顔を眺めていつた。

「マルクル主義とアナキズムの理想とする社會は窮極において少しも違ひませんよ。全く同じですよ。たゞ、それへ達するまでの過程の相違と科學的必然性を有つか否かにあるのです」

そして、或婦人が、レーニンの國家と××を讀んで誤りをさとつたといふ話だつた。

私は藤森氏もまた凡てのマルキストと同じく理想社會の認識を誤つてゐることを知つてはゐたが――。アナキズムの「自由」について考へるならば理想社會は同じだといふ言葉の誤りを知るであらう。レーニンはその國家と××においていふ。

「かうして、世界においてもはや搾取の可能もなくなるならば、一人の地主も工場ももはや存在せず――かゝる事態に對する何等の可能性も全くなくなり了つたならば、その時にこそ始めて我々はこの機關（國家權力による獨裁機關）をぼろ靴の如く捨てるであらう。かくして始めて、何等の××もなく何等の搾取もなくなるであらう。」

またエンゲルスはいふ。

「社會關係への國家權力の干渉は、一領域から他のそれへと漸次不用となり、かくて遂におのづから眠りこむ。人に對する支配の代りに、事物の管理と生産過程の指導とが現はれる。國家は廢止されるのではなくてそれは死滅するのである」

この時の狀態は一見、無階級無支配のアナアキーの社會に似てゐる。しかもこれほど深い兩者の溝渠はないのである、たとひ獨裁支配の必要も可能性もなくなつて眠りこむ時代がよしんばあらうとしても、それは民衆が權力の支配に慣れ、奴隷の服從を服從と意識しなくなつた狀態――いひ代れば人間の自由意識が完全に磨滅して苦痛を苦痛と知らぬ文字どほり眠りこんだ狀態でしかない。從つて、その獲るところの「自由」はみづからの意思によらず強制され、諦めさせられた末の自由である。この時はもはや自由は本質を失つてゐるのだ。かうした社會が何で理想社會の言葉をゆるされるであらう。

6

眞の幸福な社會生活は人間の自發的創造的意思によつてのみ生れる――。マルキシズムの社會は國家の獨裁支配に第一歩を始めるに反し、自由聯合の社會は不完全な個人の自由に發生し、爛漫と花咲く自由へと限りなく伸長して行く聯合社會で、國家では最初からあ

り得ない。マルクス主義の國家理論を批判してレーニンは「國家の存在は階級對立が和解しがたきことを立證す」といつて、一面また××社會に階級の存在を正當とし、權力を必要としない日までの國家の存在を承認してゐるが、すべてはその史的唯物論の公式が造りあげたもので、彼等にとつて權力は絶對に必要である。

このプロレタリア獨裁國家が何ういふものであるかは現在のサヴエート・ロシアが雄辯に事實を物語つてゐる。民衆はあらゆる幸福と自由を奪はれた。ロシアの社會生活を幸福であると宣傳するのは陰謀であり僞瞞である。たゞ、私達はロシアのプロタリアは極度に不幸であることを知るのである。マルキストが辯明するに過渡期の現象でありロシアの特殊性といふ言葉を以てしても、決して特殊ではなくマルキシズムの××はその他であり得ない。私達はたゞひとつ、信じてゐる。眞の理想社會は自由聯合にあることを。そしてその社會はあらゆる民衆の創造的意力と內在的組織力によつて實現するものであることを―。

藤森氏との公開狀が私の獨白のやうなものになつてしまつた。私はこの上貧弱な智識をひけらかす愚さをやめやう。不遜な言葉を謝して氏の健康を祈ります。●

小林多喜二氏へ

松田解子

かう云ふ場所からお呼びかけする事を、おゆるし下さい。私は去年十一、十二兩月の『戰旗』で『一九二八、三、一五』を讀んで始めて、この樣な作家が、吾々の呪はれた生地の、直ぐ近くに居るのだと云ふ事を知つたのでした。然も、プロレタリヤ文學の陣營から比類なき巨彈を敵に放ち、その事に依つて私共の、より無智で無力だつた時代の血と汗がありつたけ彼等の爲めに吸ひ取られてゐた頃でさへ、既に、眞直に、被抑壓階級の激憤を戰鬪的マルクス主義として育て上げた前衞があつた。そして、今もあるんだと云ふ事を知つたものでした。それは當時、『戰旗』誌上で藏原氏が云はれた樣に、――成程そこには非常に多くの藝術的缺陷が見られる。だが、作者が我々に最も近い、最もヴイヴイツトな問題を、小さなエピソードとしてゞはなくて大きな時代的スケールの中に描き出さうとした努力の中には、プロレタリヤ文學の今後の發展に對する一つの重要な暗示が含まれてゐる。此の暗示は、作者がその藝術的缺陷を克服した時にのみ始めて現實の姿となつて現はれて來るであらう。しかしそこには既に作者によつて一つの方向が提出されてゐる――それだけの強さを以て、多くの讀者が鞭打たれた事と思ひます。

東北地方、殊に秋田以北――から北海道にかけての極りない酷寒と積雪、あらゆる自然の暴虐にも增して、執拗に搾取網を張る資本の魔手が作つた。無數の、計り知れぬ不幸、悲慘が、あの作を讀む事によつて、まざ〳〵と自分の嘗めて來た體驗を喚起さずに居なかつたのです。

多くの人々があれを批評しました。だが、私には批評の力が不足な爲めばかりでなく、所謂『多くの藝術的缺陷』も、あの作の內容を成した人々、鬪爭の第一線を行く各々のタイプの人々の姿が、何の飾りも無く、何の誇張もなく突き出されてゐる點に、打ち消されて了つてゐると思はれたのです。讀みさへすれば、誰しも、あの中の誰々が強く且つ正し

いかを知る事が出來るでせう。若し、痛快な迄に暴露し盡した、あの××の場合を讀む事に依つて、憤起ではなく、恐怖を感ずる勞働者があるとしたら、彼は意氣地無しか、裏切者と云はれねばならないでせう。——作者は最後迄、『だから、かうしろ』とは云つて居ない。——だが、どうしてあれを、階級的感激全ての壓迫者への反抗、更に、自分も亦彼等の中の强き者の如くに强く鬪ひ拔かうといふ感慨なしに讀み了せるだらうか？——要するに私は多くを示唆され、深く鼓舞されたのです。

『蟹のハサミの樣に兩肩にブラ下つてゐた。』お由の手——手だけは、其の儘、農村から鑛山に嫁入り、直ぐさまプロレタリヤと化した多くの母親達の手であつたのです。

其の後間も無く（同年十一月號）『創作時代』に山田淸三郎氏の書かれた「新興文學」と「文學世界」（プロレタリヤ文學發達史）の中に、偶然、大正十二年頃に『健』や『鈹八』の貴作があつた事を知り。更に最近五月號『戰旗』に『蟹工船』を發見しました。

これは、何よりも、ムキ出しにされた、恐ろしく鈍重で、濁音にゴミゴミした東北辯でヂカに、彼等の苦しみや、苦しみの中に悶めく意志を聞いた感じです。殊に『瓦斯も恐ろしいが、彼も恐ろしいなあ』と云つた炭坑出の男は、實在的な力で自分の半生を過した×鑛山と、其處に充滿する勞働者達とを思はせました。同時に思ひ出されるのは、金子洋文今野賢三氏等の事です。約七年も前、×鑛山は嚴重な門扉と、群り包む山脈の中で、希望も、空想すらも無く、世界そのものから完全に隔離されて居りました『改造』を讀んでさへ危險人物扱ひをされた當時です。氏等が、長髮や眼鏡の儘で鑛山に來たとか、門鑑迄來て巡視に追拂はれたとか云ふ事を、子供らしい一種の英雄崇拜的心理で、或仕上工から聞いた事がありました。彼は××城下の落ちぶれ士族の子として鑛山に移住し、父母と多產な兄妹を背負つてゐたのですが、不思議なネバリ强さで勞働者の啓蒙に献身してゐたのです。暗い屋根裏には『種蒔く人』や『××主義靑年』や、其他色々なパンフレット、リーフレット、書籍を積み上げて、行きさへすれば、プロレタリヤの途を說教して吳れたのです。今も多分その樣に生きてるでせう。だが金子氏等は『投げ棄てられた指環』とか『詩人と洗濯屋』かと、其他有名無名の作品を產み、ずん〳〵現在の樣な文壇的地步を——ただそれ丈けを獲得する事に依つて、もう×鑛山等に用はなくなつたかの樣です。今野氏は其の後、私達同志が、謄寫版刷で出してゐた文藝雜誌『光』に、確か『プロレタリヤ文學とは何ぞや』と云ふのを書いて吳れた事がありました。

一人の組織者、指導者をも持たなかつた×鑛山での私達は、どんな者でも、所謂社會主義者でさへあれば、大きな尊敬と信頼を以て自分達の進むべき方向を指示して貰ひ度い願ひを持つてゐたのでしたが、其後、氏等は、『文藝戰線』の玉座に濟まし込む事に依つて全然、私達の友ではなくなつて了つたのです何時か×鑛山を見に來た伊藤永之介氏に、坑內の十六番坑で一人の機械夫が云ひました。

——あなたが持つてゐる技術で、俺達の、この通りの生活一切を曝露して下さい。どんなにでも說明しますから——其處には多角な岩壁の間を突き墜されるケージがあり、支柱のない大岩塊の空洞があり、暗いカーボン電球があり、ダイナモ係りの少年から、三十代でヨロケ果てた坑夫に至るまでの一切の疲勞し切つた靑春があり、孕み女が在り．爆破死墜死、脫落死の血しぶきに依つて幾度も塗り直ねられた坑道があるのだから、もつともつと、作家にのみ惠まれた解剖のメスを打ち振る事に依つて、彼は先づ自分達の生活場面を世の中に知らせて貰ひ度かつたのです。だが伊藤氏は未だ書かれない樣です。そして、やつぱり『文藝戰線』に行かれました。最近一人の友達からの手紙に——伊藤永之介君が文

盤戰線』に入つた事に就て、俺は彼の頭を疑はざるを得ない――とありました。

脫線した樣です。これ等の不用意な饒舌は御迷惑かも知れません。けれども、更に言葉を緊がなければなりません。彼等の無關心、又は裏切的行爲に拘らず、プロレタリヤの運動は、益々正しい方向に進展して行きつゝあると云ふ事を、です。ストライキで、三、一五で、市議戰、町村議戰で、小作爭議で、近くは又×、××で、愈々闘爭の根幹を露はにした東北の勞農から、完全に脫落した、多くの有名無實な『プロレタリヤ作家』を思ふ時に『蟹工船』で今、命的に闘つてゐる海上プロレタリヤを思ふ時に、明瞭と、誰が裏切者であるかゞ嚙みしめられるのです。『蟹工船』は、海上プロレタリヤを描く事に依つて、各種の勞働者對資本家の、尖銳な敵對關係をあばき、資本の恥知らず侵略性を剔抉してゐると思ひます。

半分だけしか讀んで居ませんので、更に云ひ添へるべき言葉もない樣です。唯、あれ丈け深く廣汎な表現に、より以上の確實さを與へる爲めに、作者にもう一息の落ち付きを希望せずに居られません。

眞實に、プロレタリヤ階級の必要を描く、一人のプロレタリヤ作家としてのあなたに、から申上る事によつて、私は此の手紙の目的を達しました。

御健闘あれ。

中川紀元氏に問ふ

熱田優子

過日、日々新聞紙上であなたが發表された春陽會評を拜見してたま〳〵注意すべき事實を見出した。それは倉田白羊氏の作品についてであつた。私は常によき畫家として又賢明なる畫家としてあなたを尊敬し、從つてあなたの作品及び言論を注意しつゝ今日に至つた者である。――近頃のあなたの作品の傾向についてはかなりの疑問を抱いて居るとは云へ――であるからあの春陽會評も多分に注意を集中させたのであるが、あなたは倉田氏の作品を評して「プロレタリア美術としてはよいものと思ふ。」と書かれて居るが氏の作品の如何なる部分を指して斯く云はれたのか私には全然のみこめないのである。

先づ倉田氏の作品を自分の見た儘に說明して見るならば、それは山間の風景を題材とした細密な自然描寫に終つて居るのみだ。その繪は細々と描かれた器用なものにはせよ決してそこには躍動して居る何者もない。又中から湧き上る何の熱情も感じられない。あまりにも靜的な其の畫面はむしろ死んで居るかのやうに思はれる。さればとて死を思はせる程の深刻味は微塵もなく面白くもおかしくもないものである。唯正格な描寫のみをよしとするならば寫眞がより美しく其の務をはたしてくれるであらう。そして其の方がむしろ活々とした自然の姿を明らかに表現してくれる事だらうと云ひ度くなるのである。勿論其の作品の中にこもる忠實さ、素朴さは充分に認める。併しそのどこにプロレタリア美術としての何物かがひそんで居ようか。

私は又こうも解釋してみた、あの面白くもおかしくもない繪をやゝ皮肉つてそのやうな事を云はれたのだらうかと。あの繪は繪について何の知識のない者にも一ト目で山の繪だなとわかり、よく實物のやうに描けたものだと感歎出來る。其故其の樣な言葉を用ひられたものとすればそれはあまりにもつまらない言葉の翫弄ではないだらうか。

では、プロレタリア美術とは如何なるものか、これを理論的にはつきり書くには私自身あまりに不學者である。併し倉田氏の作品の如きが決してそれではないと云ふ事丈は斷言出來ると思ふ。あのやうな題材の繪を在來のブルジョア畫家が曾て描かなかつたと云へるであらうか。そして倉田氏自身も又一人のブルジョア畫家にすぎないと唯か斷言し得ないであらうか。その題材は山間の農村もよからうし或は都會の一部でもよいのだ。プロレタリアの生活をモチーフとしたのも勿論好ましいそれ以外のものでも結構である。唯其の中に常に流通するところの生命を、プロタリアの心からの叫びを感じ得るものであり、又プロレタリアが心から感銘し得る熱情を含むものでなければならない。一口に云へば、プロレタリア意識を土臺として描かれたものでなくてはならないのだ。虐げられる者の泣き寢入りではなく、すべての壓迫を蹴とばさうとする力其のものでなくてはならない。

中川氏よ。私はもう一度おたづねする。如何なる意味であなたは斯く云はれたのか。プロレタリアとはあなたが想像される程弱々しい存在ではないのである。彼等は今美術等にあまり重きをおいて居ないかもしれない。何故なら彼等にとつては如何にしてパンを得るかゞ先決問題なのであるから。彼等が自由にパンを得る事が出來るやうになつた曉にどんなに立派な藝術を生み出し得るかを誰か否定出來ようか。彼等も又立派な人間である以上藝術的情操を深く蔵して居る事は明らかだ。

あなたには今ブルジョア的インテリゲンチアとしての態度でプロレタリア美術なるものを冷笑して居られるのではなからうか。——これは私の偏見である事を望むが——全く彼等の藝術は洗練されて居ないかもしれない。又技術に於ても勝れて居ないかもしれない。併しそれは彼等の罪ではないのである。彼等はそれ等をさへする程の餘裕を持たないのみだ。しかし彼等は在來のブルジョア文化が生んだ形式的な美を破つてかなり率直に彼等の感覺を表現しようと努力して居るのではなからうか。

私は空想する。かゝる理想的な社會が到來し得るならば——そこにはブルジョアもなくプロタリアもない。恐ろしい闘爭もなければ利己的な野心もないのどかな社會である——その無政府的な美くしい社會に於てのみ眞の藝術の王國は榮え得るのではなからうか。彼等は充分に藝術的快樂を味はひ得るかゝる社會を獲得するために努力しそのためには現在に於ける藝術を否定し、或はその運動のための手段に用ひる事によつて自ら慰さめて居るのではないだらうか。

私は賢明なる畫家であるとあなたを信じ且つあなたの未來に對して大いに期待して居る者である。であるから一言申上げ度いと思つたのである。唯高踏的な目で見おろされるばかりでなく、つまらないもののやうに見えるプロレタリア美術についてもう少し深く考へていただきたいとお願するのである。未熟、不學者の暴言、お許を乞ふ。

平塚明子様に

伊福部敬子

1

平塚明子様

報知新聞に、五月十五、十六兩日にわたつての御感想拜見いたしました。

私共の小さな雜誌「窓」に御注意下さつて

短見―イプセンの場合と私共の場合と」について、親切な御批評と御教示をいたゞきましたことは、まことにうれしいことでございます。婦人運動の先覺者として常々傾倒して居りますあなたから、私の短見が注意せられたといふだけで、私は「窓」を出してゐる目的の一半を達し得たやうな氣がいたします。

さて、しかし、私は私の不注意と措辭の不完全から、あの中で私が書かうとした所のものを十分にあなたにお汲取り願へなかつた事を、あなたのよりも、私自身のために殘念に存じます。それでこの紙上を藉りて、もう一度私の所見を申述べさせて頂きます。

私はあの中で、今日既に思想的には解放せられてゐる中産知識階級婦人が、なほ生活的行動の自由をもたないことを述べ、その一例として無産運動に參加が出來ないことを擧げたつもりでございました。然るに、あなたには、無産運動を全體として見、全體として論じてゐるやうに見られました。私が、無産運動に參加投入するの困難をたゞに中産知識階級の婦人のみがもつてゐると思惟してゐるやうに解せられました。それ故、勢ひ中産知識階級の男性の問題が出、既に私のいはゆる婦人解放運動を了して、行動の自由をもつてゐる筈の獨立婦人の場合までもが問題とされて來たのであります。そして論點の相異と齟齬とを來しました。

無産運動に參加するの困難と障碍とは、ただ中産知識階級の婦人のみがもつものでなく男性も女性と共に負うてゐるものであるといふあなたの御見解は、その限りに於て正しいと存じます。私と雖も、それを否定するものではありません。

しかし、これは階級運動の問題でありまして、婦人運動の名を値しないと思ひます。

中産知識階級の、男性と婦人とは、今日無産運動に參加するの困難を共通にして居りますが、婦人は更に一層の大きな困難に面して居ります。故に、中産知識階級の男性がもつ困難さ、にまでも到達してゐないのであります。

最近の傾向によりますと、婦人運動は無産婦人の階級運動の如く見られてゐるやうであります。そして從來の中産知識階級婦人を解放するの婦人運動は、今日既に古いものであると言はれて居りますけれども、婦人運動は今日になつて、更に新しき問題にあひ、更に新しき意義をもつて來たと考へるのであります婦人運動は、中産知識階級の婦人を解放するの運動でありまして、中産知識階級が存在する限り、之を必要とするものであると思ひます。然るにこのことが先覺者の間に於て不分明であるらしく考へられましたために、私はあの一文を草したのであります。

即ち、昨日の婦人運動は思想の自由を婦人に與へんためでありました。今日の婦人運動は、思想に從うて行動するの自由を得んためのそれであります。

この如くして思想の自由を得、思想に從うて行動するの自由を得た時、中産知識階級の婦人は眞の自由をもつことが出來るのであります。

こゝまで來た時、中産知識階級婦人は、無産婦人と合同して、無産婦人運動、否無産運動に合流すべきであります。しかしこれは明らかに婦人運動の範圍を脱したものであります。

2

婦人運動と無産運動とは、全然別個のものであります。一は自我運動であり、他は經濟運動であります。その故に、たゞ婦人であるために無産婦人運動と稱せられてゐるところのものは、嚴正な意味に於て階級運動、經濟運動でありまして、いふところの婦人運動ではありません。

私は中産知識階級に屬する婦人が、思想の自由をもつに不拘、思想意志にしたがうて行動する自由を許されてゐない例をもつて居ります。

Aといふ婦人は、これまで關係してゐた消費組合運動から身を引きました。彼女はプロレタリア作家として現時の文壇に有力な作家の夫人であり、かつては消費組合の理事者であり、近くは×××同盟の重要な位置にあつて、活躍してゐました。沈着で勇敢で、まことに得がたい婦人鬪士でありました。

しかるに。この婦人は突然のすべての實際運動から身を引きました。而も傳ふるところによれば、プロレタリア作家であり、階級運動の支持者であるところの夫君が、彼女の實際運動に携はることを好まず、斷然これを禁じ、もし押切つて行動すれば家庭の平和を破らなければならないからだ。といふことであります。プロレタリア作家であり、階級の鬪士である夫君がその夫人に階級的自覺を促しこれに從うて實際運動に參加すべく勸めらるべきであるにも不拘、これを拒絶せらるゝは夫君が、家庭的には依然古い家長意識をもつてゐることを知ると同時に、かくも深く婦人を捉へてゐる「家庭」といふものを考へさせられるのであります。婦人は家庭といふ一經濟單位の主格たる男性の生活に參加し、その意志を意志とし、その生活を快適ならしむるために生活しなければならないと考へてゐるのであります。もしこの夫人にして、男性、この場合夫君と同じ自由さ、もしくは同じ困難さにあるとすれば、夫君と同樣に實際運動に參加することが出來る筈であります。

私はもう一つの例をもつて居ります。

B婦人は。純然たる中產知識階級の家庭に屬する、既に數人の子供をもつ婦人であります。と同時に一個の文筆人として著述に携つてゐる人であります。彼女は家庭婦人としての自覺に立ち、その細緻なる觀察と親切な考察をもつて、家庭婦人の意志、思想を語りました。私は數年來その作家のものされる創作感想を期待し、何らかの新鮮さを絕えず得て居りました。

併し、彼女は沈默しました。沈默せざるを得なくなりました。彼女がその聰明なる理智と眞摯なる思索とによれば、當然その思想に從うて實際に行動をしなければならないわけであります。

しかし、彼女が思想する限りに於てはいかなることも許されて居りますけれども、これを實行に移さうとする時、古い約束による家庭はかたく彼女の自由を緊縛して許しません。

實行にゆくことも許されず、しかもかゝる場合多くの婦人のゆくところのデカタンスへもゆき得ない彼女は、當然何ものをも語るものを持たれなくなつたのであります。自然彼女は沈默を守るより外仕方がなくなつたわけであります。

もし彼女にして中產知識階級の家庭に隸せず、自分の生活を自分の意志によつて主宰することの出來ない家庭婦人でないならば、彼女は彼女の思索するところに從うて進退することが出來、新しき地平より私共によびかけることが出來たのであります。

此の如き問題は、今日中產知識階級婦人の全般の問題だと思ひます。而してこの家庭的因習、家庭的緊縛より脫せしめて中產知識階級の男性と同等同列にまで並び、男性と同じ自由さ、同じ困難さにまで到達せしむるのが今日私のいふ新しき婦人運動であり、こゝに來て婦人運動はその使命を完全に果したと見るべきでありませう。かくして中產知識階級婦人は、無產運動に合流することが出來るのであると思ひます。

以上で。私の先の文中で書き足りなかつたことを申述べました。御親切に重ねて御注意をおむけ下さいますならば、この上ない幸と存じます。

不備

×　×　×　×　×　×　×

地獄の反逆者 ＝人生記錄＝4

松村喬子

またやりそくなつた三度目

検査の日だつた。歌子が事務所の二階へあがつてゆくと、幾軒かの娼妓がもう集まつて、てんでにシャベツてゐた。來る者來る者を眺めてゐる者もある。歌子も、榮楼の者ばかりが一かたまりになつてゐる所に座つてゐた。他の樓の娼妓達を眺めながら時間の來るのを待つてゐた。けれども醫者がまだ來てゐない爲め、廣い場内も、集る一方で、少しも減らなかつた。身動きも出來なくなつた頃、羽衣が、一番最後の組にまじつてやつてきて一生懸命に歌子を搜してゐたらしいが、やうやく見つけ出して、「歌子はん姐ちやん、こゝに居やはつた！　一寸、姐ちやんに用事がおまんのやわ、そこへ行かれしまへんよつて、こつちきとくんなはれナ、」

生れつき表情のうまい羽衣は、大きな目をみはりながら、立つたまゝ手まねきしてゐた。

歌子が落ち付いてゐるので、慌てゝ羽衣がいつた。

「イーエナ、姐ちやん、一寸、是非共の用事だすネー」

不性無性に立ち上つて羽衣の側までゆくと、

「エライ事が出きましたんやワ、こつちへ來とくんなはれ、」

羽衣が此處へ來やうと下駄をはきかけてゐる時、庭先へ自動車が着いて、その中からは、木浦と番頭と帳場が降りた。そして運轉手と助手に抱かれて玄關口へ連れて來られたのは、たしかにかるたであつた。まるで死人の如く顔からも手足からも、血氣らしいものは一つも見られなかつた。眠つてゐるのか、それ共氣絶してゐるのか目をつぶつて、堅く口を結んで人のなすがまゝに任せてゐるがたしかにかるたであつた。何事も知らなかつた人々は、只々不思議そうな顔をして眺めてゐるばかりであつた。

「その時の顔がまだ目にちらついて、私はじめて見た時、ゾツトしましたんやワ」

頸を縮めながら、

「まるで幽靈の樣だしたんやワ」

と云つた。

「おとうちやんの顔も、コハーイ顔だしたワ、目ばかりギヨロ〳〵さして大きな聲で、

『ようも〳〵こんな恥さらしをしよつたナー、馬鹿にも程がある。この態をみんなもよう見ときなはれや、天罰はてきめんや、私がせんかつて、天がちやんとセイ裁をしてくれるのや!!今この天が加へたセイ裁を俺が治してやるから待つてなはれ！』

自由を失つた片方の足は、まるで人形の足でくつつけた樣にダラリと下つてゐた。

玄關口へころがされてもだまつてそのまゝ横になつてゐるかるたを、さも憎々しそうにみやりながら、また言葉をついだ。

「皆にみせてやるのやから、二階へ連れて行く事はならん、帳場へ入れときなはれ」

と云つて帳場へ番頭と帳場の山田がかつぎ込んだのだと云つた。

「可愛想に、何をしやはつたんだつしやろうナー」

——また歸つてきた、どうしたと云ふのか、これで三度目ぢやない

か、――
　歌子にも見當がつかなかつた。
　検査が終つて、歌子が小波や新高とその事を話しながら歸つてきて、玄關から帳場の方をのぞいた時、足の先からすねの所まで一ぱいにホータイをして片方をなげ出して、何かクドクド云つてゐる主人の前に、割合に冷靜な顔付で座つてゐるかるたの姿をみた。
　身動き一つせずにジット動かない眼は、名狀し難い悲しみに滿ちてゐる――歌子にだけはそれがみえる樣に思えた。
　とにかく樣子をきゝ度い、早く二階へ來ないか知ら、床の上に寢さしてやればよいのに――、と待つてゐたが、なか〳〵連れて來る樣子はなかつた。新高も小波も心配して歌子の室へ來て待つてゐた
　五時間も過ぎてから下の一等惡い彼女が三ケ月間も寢てゐた室にかるたはうつされた。早速見舞に出かけ樣とした歌子の室へ、樓主からの云ひ渡しだと、帳場の山田がつたへにきて喰ひ止められてしまつた。
「かるたさんは惡い事をしたのだから云へば罪人だ。病氣の治る迄誰方も絕對室へ行く事はできん」
　そして、主人に尤も忠實である小町と笑福だけが、身の廻りの世話をすると云ふ名の下に許されてゐた。そして、
「若し、かるたさんに用事のある人は、小町さんか笑福さんに頼んで下さい」との事であつた。
　警察の方は急に取調べをやる事になつた。笹島署からは二人の刑事と巡査が出張してかるたと歌子を調べた。小町は主人から名ざして一應參考人として調べられた。
　かるたを一應調べた後歌子の室へ豆衆に案内されてやつてきた二人の刑事巡査はやさしい同情のある人であつた。
　室を一わたりズット眺めてから茶棚の上に並べてある雜誌やら、小說をみて、ホヽエンでゐたが、一方の刑事巡査は、チャブ臺を机の代りにして、聽取書をその上においた。
「で―お前はかるたがあんな大けがをした事について何か知つてゐるだらう！」
「いゝえ少しも知りませんでしたそれに今日もかるたさんが警察から歸つてきてからまだ一度も逢ひませんし、口もきゝませんからどうしてあんなケガをしたのか亦何をしてしたのか少しも知らないんです。」
　少しく刑事の目が光つた。
「どうして！でもお前とは一番仲よしで、何事もお前に聞けばよく解ると本人も云つたぞ。」
「ハイ、それはかるたさんが、何も知らないのだからでせう、實は今日警察から朝十時頃歸つてきて夕方迄あの體で帳場へ座らされてをりました、そして、」
　之迄云つて一寸入口の戸を開けて外をみてから、
「誰か立聞でもしてゐて主人に告げるとまた私が、どんなに叱られるか解りませんから」
「よし僕がみてゐてやらう？」
　一人の巡査が立つて戸口を少し開けてそこへ座つた。
「そして室も二階の風通りの好い室でしたのに、今日急にあんな三方壁の空氣の流通の惡い室へ入れられておまけに、全體の娼妓に面會を許さない樣にして了つたのです。そしてもし、かくれてゞも見舞に行く者があるといかんから、見張りまでさしてゐるのだそうです、同じ朋輩ですもの、お互ひに困る時は助け合ふのが人間の情です、まして、永い間仲よくしてきてゐるのですから、すぐにもと思つてゐましたが、そんな風で行く事が出きなかつたのです、」
「そうか、それでも小町だけは許されてゐるのか？」
「エヽあの人と笑福さん丈けが、許されてゐるのです」
　何んだか今小町も一寸調べてきたのだが、大變親切にしてやつてゐるさうだ、御飯も持つて行つてやつたり、足の藥の世話も一切、自分でしてやつてゐると小町が云つたヨ」
「それはそうですワ、表面だけはね！　然し恐らく小町さんの氣持から出た親切ではありますまい第一全部の娼妓さんに見舞にすら行く事を拒んでゐる主人が、小町さんと笑福さんだけに、かるたさんの事を任せてゐる位ですもの、そこは貴方の御想像に任せます。」
「フームかるたもそんな事を云つ

てゐたナー、主人の大變お氣に入りで何でも娼妓の取締りの樣な事をしてゐるつて、そしてお前はどうだ主人の受けは—」
「私ですか、かるたさんと同じで一番お氣に入らない方です。」
　自分でも可なり勇敢だと思ふ位日頃思つてゐる事をどし〳〵と云つた。そして最後に
「どうか私達弱い者の味方として何もかも調べてみて下さい、どんなにされても何もし得ない哀れな者を助けて下さい、お願ひします。」
　と云つて心から頭をさげた。
　聽取書には、かるたの待遇の惡い事や、小町や笑福の事など可なり委しく書き取られた。
「之で好いのだ。之はみんな警察へ殘るものだから、いや、どうもお邪魔しました。」
　一寸頭をさげて二人の刑事巡査は出て行つた。
　歌子は、ホツトした樣な氣になつた、然し之が主人に知れたら、亦どんなに叱られるだろうかと思ふと、ゾツトする樣な恐怖にもおそはれた。二人の刑事が立去つた後に笑福が入つてきた。大方主人に云ひつけられて、どんな事を云つたかを調べる爲めに來たらしくウサン臭さうに、歌子の室をキヨロ〳〵し乍ら、顏では　つてゐた。
「何や云ふて、警察のお方は來やはつたの」
「かるたはんのケガはどうしてしたのかつて、私が知つてゐるだらうと云つてね—」
「アラそう、そして、あんた、なんと云やはつたの？」
「私、別に、何もケガはどうしてしたのか知らないのですから、知りませんと答へましたワ、」
「外に何も調べはらしまへんか？」
「エ、色々聞いてゐらしたわ、私は別に云つて惡い事も好い事も、嘘さへ云はなかつたらいゝと思つて、尋ねられた事に對して、まつすぐに、ほんとうの事で私の知つてゐる事丈けはお話しました」
　之に對して、何も笑福は云へなかつた。元來が、餘り、口の上手でない、そして、字が讀めないと云ふ事で、小町程、人をグン〳〵突込んで行けない質の彼女は、それから何も云はなかつた。そして二言三言外の事をシヤベつて出て行つた。
　樓の中は、もう、皆が、半分は事實を、半分は主人の逆宣傳を、誰からともなく聞いて、あちらの室で五六人、こちらの室に三四人と固まつては、色々噂をしてゐた。
　川柳も新高も　第一に歌子の室へ入つてきた。そして、方々で聞いた話を、ふんがいし乍ら話した。
「今警察からきやはつたのは、どんな事できやはつたの？」
　川柳は心配して聞いた。
「やつぱりかるたさんの事でだけど、今日は何んだか、スウーツとした樣な氣がするワ、主人の事も小町の事も云つてやつたの、小町の事なんか、思ひ切り云つてやつたワ。主人に氣に入れてるのをかさにきて、何かにつけて辛く當りちらします。何事も御無理御尤もでゐるので、增長してお山の大將をきめこんでゐて困るのですワ！」
　二人共、日頃反感を持つてゐる小町だけにすつかり喜んでゐる。
「そしてもつと云つてやつたのよ至つて見ヱ坊で、形式家でつてネそしたら、警察の方は笑つてゐたワー」
「そうね、私も呼び出してくりやはつたら、エ・がナー、そしたら炭代を取つてゐる事や電燈代を取つてゐる事もみんなシヤベつてやるわ」川柳もそう云つた。
　そこへ小波も氣になるとみえて入つてきた。
「今何や云ふて、警察の人來やはつたんや」
　それから亦二人に話したと同じ樣に、小波にも歌子は話した。
「私も呼び出してくれんかナー、好い材料があるのに、第一去年私のお母さんが死んだ時の事を云つてやるわ、二通も電報がきてゐるのにやつてくれなかつた事を、二通共チヤンと、シマツてあるから」
「母大病すぐ歸れ」の電報を受取つた時、彼女は大きな聲で泣いた日頃男の樣な氣性の彼女としては不思議な位、メソ〳〵泣いた。すぐにも行き度いからと主人に頼んだ「どうか死ぬかも解らないのですから、一目逢ひ度いと思ひます母には苦勞もかけてゐますし、ずい分不孝をしてゐますから、是非一言安心する言葉をかけてやり度

いのです、二三日ですぐ歸りますからやつて下さい」と、その返事は、
「行くなとは云はぬ、だが行くのだつたら金は一錢も貸しませんよ」
　之が七ケ年も主人の爲めに體をこはして働いてゐる者になげた第一番目の言葉であつた。
「そして行くのだつたら、仲居を一人連れて行つてもらはふ」
　自分の汽車賃さへ名古屋から前橋市の片隅までは、容易ではないのに仲居を連れてその旅費と、たとへ安い旅籠へ泊めるにしても、その費用を、どこから出し得樣！
　娼妓に賣られる位の家では、人を一人泊めるだけの餘裕の疊の廣さはない、まして母の病氣も明日か今日と云ふ時だもの、見舞の八もきてゐよう、いやでも、こちらから連れて行つた人は旅館へ泊めねばならない――。
　小波は早速の返じをすることが出きなかつた。若し親を助け樣と思ふのだつたら、行かずにお金を送つて上げなさい五十圓位だつたら貸してあげます。」
　彼女は「とにかく考へてきます」と云つて一寸引取つた。
　金はもちろん、早速と云つて、五拾圓も六十圓も、拵しらへられない、だと云つて、いつ死ぬか分らない母に一目でも逢い度い――どうにも考へがまとまらないでゐる時、
「ハ、シス」
　の電報は彼女の手に握られた。電報を持つたまゝ二時間も三時間も泣きくづれてしまつた。その夜、主人夫婦の居間で彼女はボンヤリと、主人の口から話されるのを聞いてゐた。
「では明朝早く山田に送らせます五十圓、そうしなはれ、その方が賢いのや、今から行つた處で、葬式を出す丈けやないか、あんたが歸つたからつて、決して、死人が生きて戻る譯やおまへん、それよりか、お父さんに五十圓お金を送つた方が、爲めになる、葬式の費用の足しになる事やでナー」
　――金籠に囚はれてゐる小鳥はこんなにも束縛されるものか――

樓主會議

　翌日から、二人三人と笹島署から呼び出し狀がやつてきた。新聞は大きく榮樓の娼妓虐待として、榮樓の寫眞まで出た。新聞は皆娼妓の同情で埋まつてゐた。
　樓主達は皆集まつた。廓の取締りもやつてきた。同業者として今後自分の家へもこんな不祥事があつてはいけない。こんな不屆きものを出さない樣にと、なるべく、おんびんにすまそうとした。
　五日程たつてやうやく、かるたの室への見舞は許された。それも、餘り、輿論が喧ましいのと警察の取調べが大きくなつたのでしかたなく、許したのであつた。
　丁度その頃の警保局長松村光三氏の、娼妓に同情した記事も毎日新聞に出て、樓主達は大ろうばいの時であつた。
　全部の娼妓を一間に集めた榮樓のおかみは、毎日の警察からの一人一人の呼び出しに、どんな事をシヤベラレルか分らないとのおそれもあつたので、それとなく口止する爲め、こうも云つた。
「今度かるたさんが、あんな事しでかしてくれたおかげで、毎日新聞には出される、警察へは呼び出される、もうとんと商賣は上つたりになりました。私の家にも娘が二人おます、年頃の嫁入前の娘を持つて、あんな新聞の記事で、鬼の樣な惡樓主などゝかゝれては知らん人はほんとうにしますもう、養子を貰つてやろうと思つてゐる娘に、來てくれる人もおまへん。」
　始め、他所行の事で切口上にシヤべつてゐたが、いつか泣き聲になつた。そして今度は訴へてみたり、怒つてみたり、ヒステリーの彼女は、自分で自分の言葉に昂奮してゐた。
「親の身になつてみなはれ、どんな氣持がするか」――
　前に竝んで聞いてゐた忠實な娼妓達は、そのおかみと一緒に泣いた。そして、かるたを心から憎んだ。自分自身の身の事は少しも考へないで――、
「まあ、皆さんはそれでもよく私樓の事は知つてくれてやで好いけれど、また今迄に警察へ行つた人達も、どんな事云つてきやはつたか知りまへんけど、まだ行かない人ゝ、どん〳〵有のまゝを云つて

きて下さいまし、少しも遠慮は入りません。惡い處があれば、どんどんと云つて下さいまし」

最後をいやに力を入れて云つた。

「それから、かるたさんにも、今迄は八つ裂きにしてもあきたらん奴やと思つてゐましたが、罪を憎くんでその人を憎くむなと云ふ事もおますそうなで、之からは、行つて見舞つてやつて下さいまし」

——急拵へのクリスチャンの樣な言葉を誰れに聞いたのかナー、

歌子は心の中でおかしく思つた。

罪を憎んで其の人を憎むな、そんな言葉を、このおかみが持合せてゐたのか知ら——

長い間女郎屋稼業で、女郎だけがこの人の相手であつた。他は仲居か番頭、さもなければ親類筋の人達で、我まゝ一ぱいに云つて通つてゐた。堅氣の家との交際もなければ、堅苦しい挨拶なんか出來もしなかつた。

「皆さん解りましたら室へ引取つて下さい」

歌子と小波は一番先に、その場を立つた。最後まで殘つた者は、忠義顏して、警察へ呼ばれて、「私はからも云ひました、あゝも云ひましたと」主人にオベッカを云ふ連中と小町達が、いつ迄も、おかみの御氣げんを取つてゐた。小波の室に集まつた歌子と川柳は、

「これから、早速かるたさんの室へ行かふか」

「エヽ行きませう」

「かまふもんか、どうせにくまれついでに、何もかも、先へ先へとでしやばつてやろうよ」

川柳も大分元氣がよかつた、其の日は新高が警察へ呼ばれてゐた

「一寸まあ一ぷくして行かふよ」

小波は立膝のまゝ、敷島に火をつけたので、歌子も川柳もそこへ座つた。太郎兵衛も、いつもの樣に、無言のまゝ入つきた。

「今のかゝあの話は、なんや、警察から呼び出されても、何も云ふナ、云へ、といふ謎みたいやナ」

「エヽ、そうよ、そしてさ、自分の娘の事ばかり云つて、泣きおとしにするつもりよ、亦、それに同情して泣いてゐる馬鹿もあつてネ」

「私おかしくなつたワ、小町と笑顱が一番先に泣いたら、同じ樣に泣かな惡いと思つてるのか、皆泣き出したのでよけいに、上向いてやつた」

川柳はズイと胸をそらして、仰向けた。

「自分の事を少し考へてみたらどうだろうね、さんざ、苦しめられてゐて、その苦しめてゐる人達に同情する人もないものだワネー、泣く事や、云ひ度い事は、こちらにこそ、モット〱あるのぢやあるまいか、親が子供の可愛いのは誰だつて同じ事ぢやないでせうか、そんなら、その可愛い娘を、金の爲めに賣らなければならない、辛いつとめに出さなければならない私達の親の身にもなつてみてくれたら好いだらう、あれぢや、餘り自分勝手すぎるわネ、自分の子は大切、可愛いが人の子は、どんなに、いぢめても何んともないと云ふのがあの人達の云ひ分ぢやないか。それを、それを一緒になつて泣いて同情してゐるのだから、仕末が惡いわネ、お人よしにも程があるワ」

「そやから、今迄、平安無事に金儲けしてきられたんやワ」

「そう〱、でも今に、何かあるよ、このまゝではすまされないワ今度はネ、事が大きくなつたのやもの」

三人がかはるがはる、そんな事を云つてゐたが、太郎兵衛に注意されて、四人で、かるたの室へと二階を降りて行つた。

室へ入るなり、ムッとする熱の爲め息苦しい空氣に、四人はおもはず顏をしかめた。どこからも風は入つてこない、うす暗い室であつた。

「まあ、こんな室に居たら、丈夫な人も、病氣になりそうやワ、一寸この障子を開けておきよつさ」

川柳は最後に入つてきて、そのまゝ障子を開けておいた。

小波はつとめて晴々しい口調で

「今日始めて面會を許されたのでやつときたのよ」

と云つて床の側へ座つた。

如何にか悲觀してゐるであらうあの寂しい顏を一層沈んで口もきけないでゐるであろう、と思つて歌子は入つて來たのであつたが、かるたは案外凉しい顏をしてゐた。

「一昨日、お勝手のおばさんに聞いたのやけど、誰もこの室へ入つて

はならんと云つてあつたんやそうだんナー」

　靜かにそう云つた。すぐ歌子も元氣づいて

「體の具合はどう？」

「オーキニ、體の方は相變らずで別に大して痛む程の事もおまへんけど、まだ足の痛みがちつとも取れないので困つてまんネー」

　と云ひ乍ら心持ち腰を浮かして自由のきく足を投出して坐つた。そして蒲團の中から、片方の足を出さうとしたので太郎兵衛が、側へいざりよつてふとんをあげてやつた。三人は思はず、進み寄つて、その足をみた。近くの花柳病專門の醫者が來て、毎日、シップと塗り薬をつける位であつたが、うず高く巻いた綳帶の下には板が挾んであつた。三人は同時に、

「どうなつてゐるの！」

　と尋ねた。

「こゝの所を挫いたので骨と肉とが離れてゐるらしいつて醫者が云つてゐたの」

　彼女は綳帶の上から足の甲のところをさしながら說明した。

「そこだけなの」

「腰も少し打つたのやけど、腰は大分痛みがとれたの」

　腰の處には、アンマ膏が五六枚も張りつけてあつた。そして外部から見えるところは大して疵にはなつてゐなかつた。四人は、だまつてその傷ついた哀れな人をどう慰めてよいかも解らず無言でゐた。

「私の事が新聞に出てゐるつて、ほんまどすか？」

「エヽ、出てゐるわ、でも心配する事はないわ、あんたの事は一つも惡く出てゐないから」

　安心する樣にと思つてさうは云つたものゝ昨日、ある地方新聞の記者が、榮樓に訪れてきた、樓主としばらく話をしてゐたが、紙包を貰つて歸つた。そして、今日は前日とはまるつきり反對に、樓主側のよい事ばかり書いて、かるたの事はない事まで惡く書いてゐたのであつた。樓主側では、外の新聞は一つも見せない樣にして、その新聞を張店に持つてきて、皆に讀ませた。

「亦、ひけてからでもユックリきますわネ」

　四人はそう云つて室を出た。

警察

　話は元へかへる。

　歩くのさへ、横の腹の筋がつつて、いつも、くの字形になつて歩いたかるたが、その夜當直の二人の仲居の目を、どうきりぬけてか二階から飛び降りた。もう一生懸命であつた。夢中で、足が地につくと思ふとすぐ走り出した。一目散に、ひた走りに走つて、折よく四つ角で拾ひ車に乘つた。普通の體でさへ二階から飛び降りるのは冒險であるのに、幾日か、ろく〳〵御飯も食べないで、フラフラした體で飛び降りたのであるから降りた刹那、目がクラッとして、何んにも意識がない樣な氣がしてゐた。地に足がついた拍子に痛いッと云ふ感じはあつたが、グヅグヅしてゐる場合ではなかつた。

　彼女は二階の欄干から飛び降りたと云ふよりも、落ちたと云ふ方が適當してゐた。ドシンと云ふ重身が、地上に響いたので、ハットして立ち上つたのであつた。俥の中で始めて、足の痛みを感じ出した。けれど、「まだ警察へ行きつく迄は——と云ふ意識から、ジットがまんしてゐた。

　俥屋が、「どちら迄」と云ふのに「大川町の警察迄」と鸚鵡返しに云つただけであつた。その客の何者であるか、そして、之から何の爲めに警察へ行くのか？を考へる前に、幾度か、この廓から、大川町の警察迄往復しなければ得られない位の代金を先へ出されて、後のたゝりも責任もないモーロー俥夫は、喜んで、カヂ棒を取つて走つた。卅分か卅五分後には警察へ着いた。

　警察では當直の巡査が二三人、ウツラ〳〵と椅子によりかゝつて夢路を辿つてゐた。突然、しかも髮を振り亂した、まつさほの顔した女が、靜かに訪れてきたので、少なからず平和をみだされた。然し、彼女のオヅ〳〵と訴へる事情をきいては、同情せずに居られなかつた。そして何かといたわつてくれた。それ迄、がまんしてゐた足から腰へかけての痛みは、安心に似た氣安さと、體を休めた爲めか、もう、ジットしては居られない位になつきた。熱さへ加はつて、

もし後五分間もそこへ立つてゐたら、倒れて了ひそうであつた。
「とにかく時間もまだ早い事だし君のその顔色では、大分體も弱つてゐるらしい。こゝで横になり給へ」
　若い方の巡査が、そう云つて、疊の上をさした。側の箱火鉢にはたくさん炭をついでくれた。
「有りがとう御座います」
　もう、遠慮も體裁もなく、云はれるまゝに、
「御めん下さい」
　倒れる樣に横になつて了つた。
「それにね、管轄が違ふのだから一應、笹島署へも通知しなければならない　然し、こんなに朝早くては先方もまだ係りの人が來てないだろうからそれ迄．ゆつくり氣を落付けて休んでゐ給へ」
　寒い冬の夜も明けて、太陽の光りに、欄干の上の白い霜も消えかゝる頃には．警察署も出勤の人が皆揃つて、ガチャ〳〵とサベルの音と靴の音でどうやら賑々しくなつてきた。かるたは、もう歩けなかつた　片方の足は全然自由を失つてゐた。それで、わざわざそのかるたの横になつてゐる處へ調べる方に來てもらふ事にした。
　話は一應きゝ取つてくれたが、聞き終るとすぐ、それでも優しく靜かに云つた。
「笹島署は、所轄であるし、たとへ一度でも二度でも手をつけてゐるのだから、こちらでどうこうする事は出きない。笹島の方へは私からもよく頼んでおきますから、あちらへ行つてよくお話をした方が好いでせう」
　それから、一時間程して彼女を迎ひの自働車が來た。然しその中から出てきた人々は、やつぱり、榮樓の主人と帳場の山田と、第一榮樓の主と、おまけにいぢの惡い番頭と、外には誰も居なかつた。
　自動車へは山田がおぶつて乘せた。
「一應笹島署へ連れて行つて本人の云ふ事を述べさせる事にしなさい」
　と云ふのを、木浦は殊勝らしく聞いた。けれど、笹島署へは、一寸自動車が止まつたばかりで、第一榮樓の主人が一人降りて行つた。
「大變昂奮してゐますから、それに怪我も酷い樣で御ざいますからこゝへ連れて來られませんから、今日は引きとつて、少し體がよくなつてから連れて參ります」
　それで事は無事に運んだのであつた。そして彼女は三度目の榮樓へ歸つてきたのであつた。
「あんたが、どんなにジタバタしてももう駄目ぢや」
　勝利の自信を以つて木浦はウソブイてゐた。
　けれども、他署へ行つた事によつて　事は大きくなつた。取調べは急に開始されて、笹島署の方から、榮樓へ呼び出しをかけた娼妓は半數以上であつた。
　始めから同情して、娼妓の方に味方してゐた次席の警部は、かるたや歌子には優しかつた。グングン取調べは進んで、不正な事は、數々上つた。水揚帳も大福帳も取あげられた。樓主の方は毎日戰々兢々の姿であつた。然し、かるたは．そのまゝ何の沙汰もなかつた新聞の輿論では、五ケ月以上の營業停止はまぬかれまいと書いた。かるただけは、親元へ歸されるだろうとも記してあつた。客は．面白半分で、やつてきて、その噂でもち切りであつた。
　樓主がその間に歌子を呼びつけて、攻めたのは、かるたを煽動したゞろうとの事と、彼女が二階から飛び降るのを助勢しただろうとの事であつたが、ハッキリとその證據がない爲め、眞向ふからそれを云つて攻める事は出きなかつた。それに、色々と取調中の間であつたから、餘り嚴しく云つてまた、一人でも、警察へ出られては困るとの心配もあつて、遠まわしにそれを云つたり、外の事でジリ〳〵と、いぢめてゐた。
　その間が二ケ月間、丁度四月の二十日、何んとなく晝から、ざわついて、〃方迄に、たくさんの客があがつて、娼妓も主人も、ホクホクとしてゐた。七時頃になつても半數以上の娼妓は長襦袢一つで廊下を小走りに走つてゐた。殘つた娼妓も、いつになく早くから身じまいをして店へ出てゐた。八時頃であつたと思はれる頃、交番の巡査が赤い紙切れを以つて帳場に現はれた。間もなく、揚つてゐる客は全部、歸された。

「ハハーンペチヤンコか」

客の方が娼妓より悟が早かつた手で戸を止める恰好をして營業停止の事を云つて歸つた。

客が歸つて了つた後大戸をおろした榮樓は物靜かになつて、ガランとしてゐた。常に大きな事をシヤベり合ふ者も、あつちの室へ一かたまり、こつちへ一かたまりづつ寄り合つて、小聲で話し合つたまるで、不幸でもあつた時の樣に、主人の木浦は丁度大阪へ行つて不在であつたので、早速大阪へ電話をかけて通知をした。帳場は親類中集まつてゐた。

歌子と新高とはかるたの室に居て、その事を、室の前を通る人から聞かされた。染之助は、さも腹立しいと云つた口調でかるたの室の前を流して通つた。

「ようも〳〵こんな事、しよつたナー、おかげで、ハーさんにも當分逢はれへん、折角捕まへた、鳥もみす〳〵にがす樣なもんや、ほんまに、あほらしい、三月もこんなにブラ〳〵遊ばされては、たまつたもんやない。三ケ月間の借金は皆引受けてくれるのやろう？」

「あの聲は染之助さんやナー、馬鹿ヤナーあの女も、何んだつて、こんな處を流して歩くのやろうか」

高安は、そう云つて、一寸いやな顏をした。

「でも濟みまへんワナー、娼妓さん達には何の罪もないのやもの、折角、そんな好いお客さんがあるのに私の爲めに落しては……そして、それが皆さんの御迷わくになる樣では、——外に方法はないのか知ら、三ケ月間も營業停止にする位なら」

かるたは辛さうであつた。染之助ばかりでなく、外にも多勢居るであろうところの、その氣持の人に對して濟まないと思つてゐた。

歌子は直その言葉を打消した。

「ナーニどうせ三ケ月間働いたからつて借金が減る譯ぢやないのだもの、かへつて大つぴらに遊んでゐられて私達は喜んでゐるわ、三月間働いたからつて借金が減る位なら、十年も六年も居る人はないでせう！　五年居ても七年居ても殖えこそすれ、減つては居ない人ばかりぢやないの、そしたら、三ケ月間遊べるのだから禮をいひに來るのが當然ぢやないか、それに、大きな聲で廊下を流して行つてさ主人に忠義をつくしてゐるつもりなのかしら」

歌子はなぐつてもやり度い位におもつた。その時亦二階からも、聞えよがしの大きな聲で吸なるものがあつた。

「私しや三月間も、マーさんに逢えなかつたら、戀にこがれて死んでしまふわ、ほんまに癪にさわるナー、いらん事してくれたばつかりに——」

「ほんまにいナー、あてエかつて（私だつて）二三日中に、ヤーさんが、久し振りに大阪から來る事になつてゐるのに、みす〳〵逢はれへんのやろうか」

相呼應して、あつちからもこつちからも、一犬吠ゆれば萬犬これに應ずる如くであつた。

かるたは益々辛さうに身をちゞめた。

「まあ、いくらでも云はしておいた方が好いわ、今に見てゝ御覽んなさいあんたのおかげて、樂になつたし借金も減る樣になつたと云つて、あんな奴が一番先に禮にくるから。あんたは皆の犧牲になつたんぢやないの、決して、この人達に濟まないなんて思ふ必要はないのよ何もわからず、人事の樣に云つてゐるあの人達は、かへつて可哀想なのよ、ねー、新高さん……」

新高が、すぐ、答へて、まだ何か云はふとしてゐる時、小町が入つてきた。

「…皆さんも御存じでおまつしやらうが、三ケ月間の營業停止になりましたから、そう思つとくれやす明日にもお父さんが歸らはつたら何かお話がおまつしやろうがそれ迄はおとなしく室へかへつてよくれやす」

流し目にかるたを見てそのまゝ出て行つた。その夜は、おそく迄稻本の主人が主になつて今後の處置について策を講じてゐたが、主人の不在でまとまらなかつた。

翌朝は、歌子も、のび〳〵と床の中で久しぶりにくつろいでゐた之から三ケ月間遊べると云ふ氣安すに、何をしようかと考へてゐた。

十時になつても歌子は床の中に居た。いつもなら室の掃除で忙しい時であつたが、そしてかるたの

室へ行かねば――との心もあつたが、その時、フト、二三の室を隔てゝ山田の聲をきいた。

「今日お晝から事務所の二階で警察の署長さんが何か皆さんにお話があるそうですから、午後一時迄に全部事務所へ行つて下さい」

彼は一室毎に頭だけ突込んでその事を云つて歩いた。間もなく川柳と富奴が歌子の室へやつてきた

「署長サンのお話つて何やろうかなー」

「キツト、今度の事で餘り榮樓が解らなすぎるから、私達に同情して下さるのだわ」

お互ひにそんな事を想像してゐた。今の處では、樓主側には不利な、然も三ケ月間の營業停止にまでなつてゐるのだから、笹島の署長も娼妓の味方であると信じてゐた。そして、樓内での、主人派とかるた派が、はつきりと區別され然も、かるた派は小數である、まして、同志だけ集まつた時には、多少の元氣はあるけれども主人の前に出ては、やつぱり、弱い哀れな一個の少年にすぎなかつた彼女等が、せめて、警察署長でも、同情してくれたら……との賴みは充分であつた。それだけ、署長はエライ人だと思つてゐた。

「歸りには、私等は鼻高々として歸れるわ、あいつ等は、小さくなつてコソコソとしてくるから見てみなはれ」

高奴も川柳も歌子もさう信じて嬉しい期待をつないで、時間より早く出かけた。

わたしは名古屋の中村廓内本家往榮樓におります羽衣ですが姉さんのかいた本をお客さんからもらつてよみました。ほんとうに本にかいてあるとうりです。

あれをみていよ〳〵私もでるけつしんをしました。この次の本がでるのをまちどうしくおもいます。

亂筆にて御面くださいまことにすみませんがこの手紙ぜひおはたしください。

羽衣

御中樣

讀者通信

米子市　齋藤ふみ子(京)

早くて二十五日頃おくれて翌月一日頃でなくては書店に來ない女人藝術を今月は本當に、おもひがけなく早く手に入れましたので、嬉しうございきした。

いつも直接讀者になりたいと思つて居ますけどまとまつたお金ができないので、――もゆる樣な意氣を盛返して來た女人藝術の姿をみて、力强く、力强よく私達の力をしめしてみたいと思ふのです。

さあ同志よ！　赤いたすきをしつかりとしめて――

六月號に私のつたない詩をのせて頂きまして、濟みませんでした。忘き友もきつと喜んでくれましたことでせう。

大切な意義あるページを私のためにさいて下さいましたことを感謝致して居ます。山陰の中にことに私の生れた此の町は封建的な知識の低いところです。

私の知る人に一人の味方なく、弱いながらも女人聯盟同志をつのるべく働きかけ樣と思ひます。

なんて、社會的にめざめない人達の多くあることよ――直接讀者の中に、米子の人のあれば幸ひ、姓名をお知らせ下さらないでせうか。

結ばれた私達同志によつて女人藝術の皆樣をおよびして講演會でも開ける樣になる日をこゝろから願つて居ます。

來月號は、一週記念號、一年て早いものだ、創刊號の出たのは、たつた此の前の樣だ――みちあふれでる力を盛る記念號を早く來る樣待つて居ます。

東京を知らない、田舍者の私は、日比谷にて紀念講演會に集ることのできる人達を、本富にうらやましく思ひます。

では皆樣、お元氣で、働いて下さい。

私も元氣よく忙しく働きます。――

やがて、女人聯盟の旗の下に、――强よく、强く進んで行きませう。

女人藝術！　女人聯盟！

バンザイ　バンザイ

婦女界所載

菊池寛原作

現代劇 受難華 二枚

（目下大阪中座上演中）

コロムビアレコード

Columbia

小說より　舞臺へ！

舞臺より！　レコードへ！

不朽の大作はこれによつて全し

菊池寛先生原作、不朽の名著「受難華」が愈々レコードとなつて出ました。

女學校を同時に卒業した三人の女性が、それぞれ家庭を持つこころから筆を起し、各々が抱く結婚、乃至家庭に對する理想が、現實生活に於ていかに裏切られて行くか……

文壇の元老菊池先生が纎細な描寫と魅力ある鋭さ、鋭い觀察眼とを以つて、現代の戀愛生活、夫婦愛、家庭生活を如實に描いたもの。

松井須磨子の衣鉢を繼いで、出藍の譽高く、女優界の第一人者を以て許されたる、水谷八重子と、新派の花形花柳章太郎氏等の熱演によつて、此不朽の名作は、文字より臺詞へと進展し、愈々増々美化されて行く。

特別發賣

「受難華の歌詞」

今別れては何時か見む
　幾年春はめぐるとし
橄欖の花咲く下に
　再び語る事やある。

◇

思ひは同じ相寄りて
　心々に酌みかはし
胸に溢る・感激の
　泪は頰を傳ふかな。



吹込

水谷八重子
柳永二郎
花柳章太郎
解說唄山本かほる
外藝術座々員

お買上げはお近くの蓄音器店で

序文　石川三四郎氏・辻　潤氏

林芙美子詩集・装幀　岡田龍夫氏

蒼馬を見たり

定價七拾錢

送料八錢

コロコロ無意味に轉げて來たやうな氣がします、こんなところで一つ起き上がつて、兩手をあげて、萬歳！と叫びませう。拾年間の仕事です。嬉しくてなりません。

朱帆は海へ出た、いとしのカチウシヤ、醉醒、お釋迦樣、赤いスリッパ、大悲殿の富士、のり出した船だけど、接吻、戀は胸三寸のうち、外數篇。

東京市牛込區肴町

電話牛込一四六一番

振替東京七五三二八

南宋書院

中形の時候！文壇華浴衣を買ひ下さい。

文壇華浴衣と圖柄考案者

1 不知火
2 瓜
泉鏡花氏案

3 雨
4 チューリップ
長谷川時雨氏案

5 天の河
6 露ばれ
徳田秋聲氏案

7 兩國の秋
8 新朝顔日記
岡本綺堂氏案

9 赤穂浪子
10 海の隼
大佛次郎氏案

11 三頭首
12 木芽時
岡本一平氏案

13 劇場の廊下
14 櫻の貨
岡本かの子氏案

15 夜曲
16 狂想曲
加藤武雄氏案

---

17 18 永邊楊柳
吉田絃二郎氏案

19 鎌倉模様
20 麻の葉
吉井勇氏案

21 蒼白き薔薇
22 夜の潮
中村武羅夫氏案

23 綠衣の聖母
24 雲の柱
長田幹彦氏案

25 柳に涼風
26 海波
野口雨情氏案

27 系圖
28 月夜のたより
宇野千代氏案

29 天と地と
30 靜夜
久米正雄氏案

31 葛の葉
32 露あかり
久保田萬太郎氏案

---

33 波
34 赤トンボ
山本有三氏案

35 山ノ手暮色
36 今年竹
里見弴氏案

37 銀座
38 詩箋
39 君遲し
西條八十氏案

40 受難華
41 東京行進曲
42 結婚二重奏
菊池寛氏案

43 夕立
44 寶石
三上於菟吉氏案

45 二つ運命線
46 奔流
三宅やす子氏案

47 七夕
48 千鳥
宮崎燁子氏案

（イロハ順）

賣價一反二圓四十八錢均一

（送料三反まで十八錢です。）

見本は葉書で申込まれれば寫眞版の綺麗なものをお送り致します。

發賣元 東京麴町 大阪ビル四階 文藝春秋社（振替東京一七六〇三）



今井邦子推薦

病兄を守る日

高橋佐和子

梅雨晴れをよろこぶ兄をみとり居れば郭公鳥はここにきこゆる

氷のうの水かへんとす山百合は花粉こぼし居り手桶の水に

はかどらぬ兄をみとりつつ此頃は醤油のかびをこして用ふる

窓をおほふ若葉いろ濃くなりにけり兄のおとろへは目に痛々し

薬瓶（やくびん）にすゝきを活けて病む兄と十五夜の月をおろがみにけり

十五夜のよき月夜なり病院の廊下に立ちて吾れは見にけり

守り袋に添えたる母の長き文涙ながれて座りけるかも

便器すゝぐ川底の砂流るゝが寝たらはぬ吾がまなこには見ゆ

羽根ふとんを欲しと思ふ兄の背を指輪をぬきてさすりやりつつ

雲の間の陽すぢおがみて居たりけり兄を死なさず吾れの思ひは

全女性進出行進曲を募る!!

――すでに女性は重き足枷を蹴放して、暗き心の牢獄を脱出した。今やわれ等の前にあるのは陽光雨の如く降りそゝぐ街頭である。轟音耳を聾する工場である。屹立して天空を摩する思想の尖巓である。あらゆる人類に伍して、われ等はすべての生き動くものの世界へと前進する。友よ、かかる時われ等の爲めに、讃め、勵まし、歡こび、突き進ませる「歌」がなければならぬ。疲憊して路傍に仆れた「母」と「娘」とをも蘇へらせる「歌」がなければならぬ。激越にして而も優雅に、燦爛として而も素朴に、裸らはにして而も賢こき「歌」がなければならぬ。本社が「女性の歌」を偏ねく募る所因はここにある。全國同性の寄稿を待つ!

I　應募者女性に限る

II　歌體隨意　但し群集の合唱に適するもの

III　再締切　昭和四年八月十五日

IV　賞　金　壹等金貳百圓　貳等五拾圓

V　附屬賞品　1　雑誌三ケ月券二十枚・メヌマポマード三十個文藝春秋社　2　圖書券百枚　平凡社

3 同 改造社　4 同 新潮社　5 半襟百貨 高島屋呉服店　6 松屋呉服店　7 十字屋楽器店

VI 應募歌は七月號（女人藝術一週年記念號）誌上にて發表。

VII 當選歌詞は作曲を附し、全國女學校、及工場に寄贈す。

VIII 作曲者の選定を讀者の指定に待つ。各自推選せる作曲者氏名を別行規定の欄內に記し投票をこふ。

選者は知名なる各階級の女人を網羅す

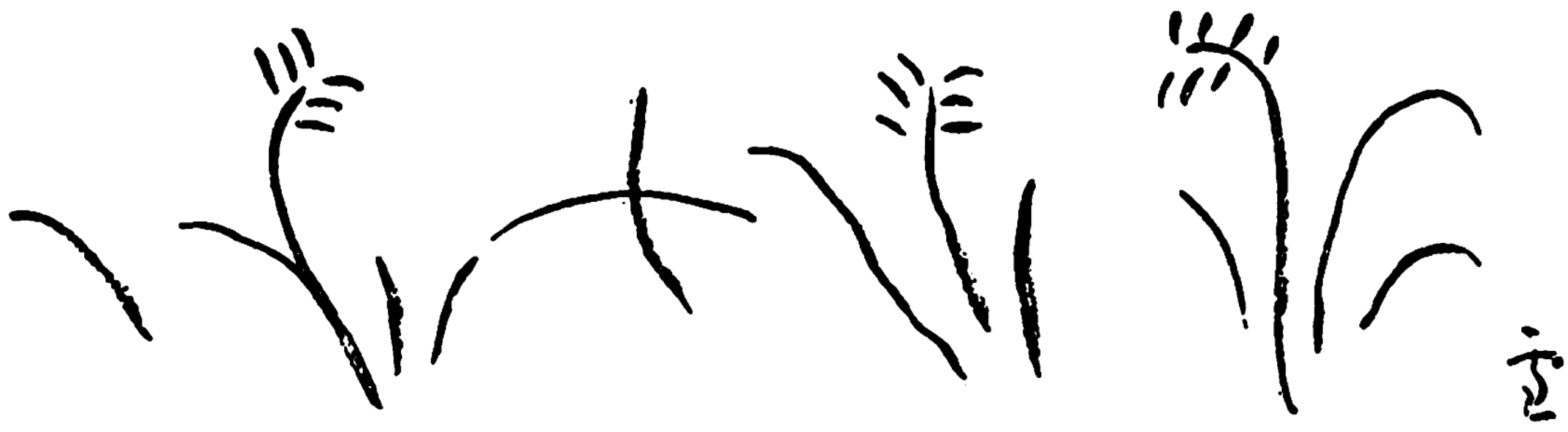
女人藝術社

全女性進出行進曲第一回成績發表

わが社が賞をかけて徧ねく募つた「全女性進出行進曲」應募歌稿は、締切日に至つて百數十篇を算した。社中嚴選の結果、稍上位を〆むべきもの三篇を得しのみ、美辭麗句に富むもの、內容の卓拔なるもの、もとより少なくなかつたが、それ等は日常高唱に甚だ不便で、從つてわが社今回の擧に適當せず、遺憾ながら採ることが出來なかつた。

こゝに佳作と推す三作に慰勞の意にて薄謝を贈呈す。

東京市外杉並町　米田三千枝氏
神奈川縣鶴見　坂本春枝氏
女人藝術社內　小池みどり氏



中河幹子氏推薦

白き花・その他

山下紅音

朝にけに通ふ道邊のアカシヤの白く咲きつづく夏さりにけり

夏くれば故郷の野邊にいちはやく咲きて且つ散る白き卯の花

ほととぎす啼きてぞあらん初夏の故郷の山目にうかび來も

木村喜久子

アカシヤの垂り花白し笑みそめし愛しき子らを抱き出で來つ

みどり子のうつゝに笑めば共に笑まふ吾はも母のおろかさを知れり

この子はも嬰兒なれど男の子ゆゑ赤き着物は着せざりにけり

松の秀の風さわやけし臺近くもの書きてゐるこのしづ心



七時のボー

—小説に非ず—

平林たい子

道のぬかつてゐる夕暮だつた。

私は近所の魚屋で、どの魚が一番やすくつて分量が多いだらうかと思つて、木綿の風呂敷を丸めて持ち、濡れた硝子の中にゐる鯖の切り身や鮪のあらを見較べてゐた。

その時交番の角を曲つて、黒い袢天を着た新聞配達が、魚屋の軒下へ走つて來て、一枚拔き取つた新聞を「今晩」といつて、冷藏庫の上へ投げて走つて行かうとした。

「もし〳〵新聞屋さん」

私の傍に立つてゐた魚屋の神さんが、いきなり呼びとめた。

「きのふの晩の夕刊はどうしたのさ」

「來ませんでしたか」

と言つて、店の中のあかりの方へ向いた顏を見ると、先日から時事へ入つてゐる同志の賢ちやんだつた。瞼を動かして、私は笑つて挨拶しようとしたが、慣れない仕事で氣を使つてゐるらしい賢ちやんは、ちらりと一と目乾いた目で私の顏を見たゞけで、

「すみません。慣れないので間違へたかも知れません。明朝持つて來ますから」とお神さんに言つた。

「あゝさうしておくれ。家ぢやあ旦那がやかましいんだからねえ。今月は拂はんとか言つて怒つてゐたよ。困るぢやないか。」未だ何か言はうとするのを、賢ちやんは押へる樣に

「すみません。明朝必ず持つて來ますから」

と言つて、泥だらけの地下足袋で、ぬかるみの道をペチヤ〳〵と

走つて行つた。黒い袢天をひら〳〵させて軒下へ入つて來て、すぐまた走つて出て行つた彼の姿が、私には何だか、敏捷な燕の樣にうつつた。

「あの配達は新米なんですよ」

色の白いお神さんは、大きい山の樣な「行衛不明」の束髮を手でさわりながら、文句を言つてやつた事を痛快さうに言つた。私は鮪のあらの包みを羽織から離して持ちながら、新聞組合の人から聞いた、配達の精神的な屈辱といふのが、どんなものであるか、實感でわかつた氣がした。

中央線沿線から市內へ新聞組合はどん〳〵發展して行つた。新聞組合と共同になつてゐる私達の團體の本部へ行くと、机の上に整理しかけの入會申込の封筒など置いてあるのをよく見かけたが、狀差しにあるのを見ても、淺草支部、青山支部、鶴見支部など、だん〳〵に新しい支部の名前がふへて行くのを見た。經堂支部などといふのもあつた。經堂とはどこのことだらうかと私は家へかへつてきいた。

そのうちに××新聞にゼネストが起りさうな噂がひろまつた。組合の鬪士たちは、朝刊と夕刊との間の暇で、忙しさうに活動した。直配所の自轉車へ乘つて、一里もある所を走つてレポートに來る同志もあつた。忙しくなつて來ると不便なので、組合本部を××に借りた。すり減つた下駄の樣に軒の低いトタン屋根の長屋だつた。狹い壁に鱗の樣に重ねて無數に印刷物を貼つた。壁新聞の橫に、××新聞直配所の所在地の一覽表がかけてあつた。組合に加入してゐる直配所には赤い丸がつけてあつた。この丸が無數にあつた。玄關が狹いので、往來に脂垢だらけの下駄が澤山脫いであつた。ある日行くと集金の證劵をふところに入れた賢ちやんが、足を投げ出して、プリントを刷る相手になつて紙を一枚づつめくつてゐた。

「××さん」と私の名をよんで

「新聞配達の生活つて、實際ひどいねえ」

と、短い配達生活の感想を語つてきかせるといふ風に私を顧みて言つた。振返つたゝめに手が遲くなつて、下に揃へた半紙が動いて不揃ひになつた。ロールを持つてゐた同志は笑つて

「配達の生活のひどいのを、今はじめて知つたのかい」とひやかしながらそれをなほした。

私はどちらの同志の言葉からも配達の生活のひどいことを汲みとつた。皆の目がぎら〳〵光つてゐた。私は戻りがけには、露路を走つて行く新聞配達の姿が目について仕方がなかつた。ことに××新聞の背中に赤い色を染めぬいた袢天を着てゐる配達に出會ふと、呼びかけて話したい氣持がわく〳〵した。しかし、變な常識が私にそれをさせなかつた。無言の私の目の光で相手は何かを私から直覺したかも知れなかつた。走りながら、いつまでも振りかへつて私を見た少年の配達があつた。私は後戻りしてその少年を呼びとめやうか

とよほゞ思つた。が、待て待て、私などの樣に、新聞組合の事など何も知らぬ女よりも、配達をやつてゐて、配達の氣質傾向を一番よく知つてゐる同志たちが、組織的に聯絡をとつて、組織の仕事を進めてゐるではないか。——

私の家には地方へ行つてゐる同志の大人しい妻君が泊つてゐた。私は夕飯後、その妻君に鮨を買つて來る事を約束して井ノ頭近くの同志の家に用事に行つた。が、吉祥寺へ降りて見ると公園の近所は皆高くつて不潔さうに見えたので、懷の金を數へてよした。その代りに五つで四十錢の洋菓子を高すぎると思ひながらつひ食べたくつて買つてブラ／＼さげて來た。家へ戻つて來ると泥靴がいつぱいぬいである。臺所で湯がしん／＼沸る音がする。がらりと襖をあけると大人しい妻君が淋しさうに本でも讀んでゐるところを頭に描いて來た私は、意外な光景でふつと身がしまるのを覺えた。そこには、新聞組合の五人の同志が、上衣をぬいで指令のプリントを刷つてゐるのであつた。傍の机の上に、電燈を低くずらして原紙を書いてゐるのが、賢ちやんだつた。脂のしみた靴下の香と煙草の煙が、まぢつて室の中にもう／＼とこもつた。障子と襖にかこはれた室の中の空氣は、若い男たちの體溫で膨脹し濁つて濃い液體の樣にゆら／＼動いてゐる樣に私は思つた。私が持つて來た洋菓子を皆は興奮の頂點にゐる樣に、だまつてむしや／＼食つた。空いた箱の中へ賢ちやんは煙草の灰を落した。そしてすぐにまた鉛筆を持つて、ジイジイと原紙に一字づつ書いた。私も傍で半紙を數へながら、この爭議はきつと勝つだらうと確信した。賢ちやんは、省線の音がしなくなつた夜半の二時頃、出來上つたプリントを持つて誰何された時の心得を他の同志にきき自動車で爭議團本部へ行つた。

翌日神樂坂で新聞從業員大會が開かれた。私と妻君とはそちらへは行かずに風呂敷を持つて近所の同志の家を米を集めて廻つた。その晩から私の家に××新聞は來なくなつた。〆めたぞ！と私は一人で叫んだ。

その翌朝、同志Kが寢てゐる私を起した。一と間へだてた緣側の硝子を一つたゝいただけて、神經の立つてゐる私ははね起きた。

きのふの從業員大會で數十名の檢束者を出し、五六日前から家をあけてゐた私の夫も、そこで檢束されたことをKは私に話した。それは、當然ありさうな事なので、私は驚きもしなかつた。殺氣立つた演說をする私の夫は、何でもない事を言つてもよく檢束された。ただ、幹部の居ないあとの爭議團のことが少し氣になつた。

Kは用事はそれですんだ筈なのに、睡眠不足で煤けた樣に黑くなつた顏を下へ向けて來て何かありさうにしてゐた。そして、

「ねえ驚いちやいけませんよ」と突然言つた。

「驚かないわ。何？」

「きつと驚いちやいけませんよ」

私はどんな恐しい事が彼の口から出て來るのだらうかと思つた。

この場合、爭議に關係した事に違ないと思つた。

「今朝ねえ、賢ちやんが鐵道自殺したんですよ」

「えゝつ！本統？」

私はさう言つて、わつと泣き出した。

「何て、卑怯なやつだ！」

すぐ涙を拭いて男の樣な言葉で言つた。

中野と東中野の間で、誰だか判らない程に粉微塵になつて死んでゐたのを、先刻時事の配達が知らして來たのだとKは言つて、他の同志の家に知らせに行くために出て行つた。私は長い寢卷を引摺つて立つてゐた、淀橋の淨水場から七時のボーが遠く聞えた。

私は寢卷の皺くちやな袖口を顔へあてゝ、緣側の冷い柱にもたれて泣いた。そんな風にして泣いたことは、子供の時以來覺えないことだつた。どんな大怪我だつて命さへあれば、またどんな手當をでもして取りかへすことが出來やう。だが、死んでしまつては、何事も終りだ。さう考へて暫く泣いた。泣いてゐるうちに、悲しみはだん／＼に怒りに變つて行つた。腹立たしさで腹の中が熱くなつた。社會主義者が自殺するとは何といふ恥さらしだ。――

そのうちに涙は乾いてしまつた。

布團へ今一度もぐり込んだ。すると、どうしても彼が自殺したとは思へなくなつた。過つて死んだのを運轉手がうまくごぢつけたのではないかと考へはじめると矢も楯も堪らなくなつた、また布團の襟に顔をあてゝ暫く泣いた。何故こんなに悲しいのか自分でもふしぎだつた。こんどは、米を取りに來た爭議團員に起された。

戸を明るなり「賢ちやんが死んだんですよ」と彼は私の驚く顔を期待して言つた。彼は私の問に答へて賢ちやんの死は、きのふの從業員大會に對する官憲の壓迫と、昨晩押しよせて來た監理所の暴力團に對する憤慨が主な原因らしいと話した。私はKに暴力團が來た事はきいてゐなかつたので驚いた。二人の負傷者を出したが、こんどは薪の棒を買ひ入れて、皆用意してゐるから大丈夫だといふ話だ。「最後まで戰へ」といふ遺書が巡路帳の間に挾まつて、線路の傍の砂利の土にとんでゐたといふ事をきくと、私はやつぱり賢ちやんの自殺を信じないわけには行かなかつた。

爭議團は暴力團に對抗するために戰術をかへて、職場を引上げて狹い本部に蝟集した。押入の棚の上や臺所にまで坐つたが、とても坐り切れず、代る／＼庭に立つたりしてゐる程いつぱいだつた。床は落ち、緣側は傾いて、雨戸がはづれて倒れて來た。壁新聞を剝いで、そこへ、青年同盟の歌や「民衆の旗」の文句を書いた紙を貼りつけた。歌に飽いて來ると、五分間演説をやつた。二三日すると、メーデーの歌や山宣××勞農葬の歌まで書いて貼り出した。

堺利彥氏が寄贈した米を赤襷で旗を立てゝ歌を歌ひながら挽いて來ると、淀橋署で車ごと檢束した。それをうまくのがれて逃げて來

た二人が立つて報告をやつた。皆パチ〱と拍手して痛快がつた。その時表からどや〱と四五人の刑事が入つて來た。そのあとから草鞋の様に細長い扁平な顔をした男が、印度人の様に頭をぐる〱繃帶して入つて來た。

それは、近所の直配所へ監理所から派遣されて、主任と二人で、配達が引上げたあとの得意を、巡路帳をあてにして探し〱配達してゐる男だつた。夕刊を配つてゐた時に爭議團員に毆られたので、そいつを引張らせるために、刑事と首實檢に來たといふのだ。

「顔見せる義務なーし」と隅から叫ぶものがあつた。「さうだ〱」と一人が拍手すると、皆が手を拍ち、男の顔を見上げて嘲つた。監理所の男は、亢奮のために青ざめて、顔へ降り注いで來る嘲りの視線とたゝかつてゐる様子だつた。

「あ、そいつだ、そいつだ。」

彼はきよろ〱見廻しておいて、一番前に坐つてゐた朝鮮人の善君を突然指した。その聲は唾涸れてゐる様でかすれてゐた。

「確にさうかい？」

刑事は、出鱈目ぢやないか、といふ顔で男の顔を覗き込んだ。

「えゝ、たしかにそいつだつたと思ひますが……」男が出鱈目を言つてゐる事はその聲で誰にもわかつた。わつと笑つた。

「なに、ボクだつて？」善君は一膝乘り出して「もし、ボクでなかつた時にどうする決心か」

その言葉使ひを皆がまた笑つた。後に立つてゐる刑事まで笑つた。笑つて筋肉がゆるんでゐる幾つもの顔の中で監理所の男の顔だけが青黒くこちんと固まつてゐた。

刑事まで笑つてゐるのを見ると、男はます〱亢奮して固くなり唇をわな〱と動かした。そのあとで一瞬間しんとした。その時うしろの方で「いやぢやありませんか」とはつきり言つた人があつた。どつと皆が笑つた。男はその笑聲の中で、埋つてしまひたい様な苦痛を感じ、こんな所へやつて來た事を後悔する様にしり込みした。

私は、もう賢ちやんの事など思ひ出さなくなつた。誰も賢ちやんの事など言はなかつた。しかし、家から爭議團へ行く途中にある番人のない踏切に來ると、右と左に光つて連つてゐる線路を見わたし枕木の傍に西瓜の中を食べて捨てた様に碎けた人間の頭が轉つてゐることを想像し、暫く慘忍な空想をつゞけて歩いて行つた。五分間演說を指名されて、私は三度も賢ちやんの事を言つた。三度目には人のかげでくす〱笑つてゐる人があつた。それは不眞面目な嘲笑ではなかつた。「貴女の言ふことは、もう我々にはわかり切つてゐるんだ」といふ風な意味に私には取れた。それ程賢ちやんの死は皆の頭の芯まで浸み込んでゐた。爭議は一ケ月以上もつゞき、結局、豫想よりはいゝ條件で解決した。賢ちやんよ、安んじて眠れ！



紫衣の挽歌

野溝七生

一

元印度總領事のK氏の別莊のある増明院の丘の下に、道を隔てて畑地の眞中に、小さい家が五軒だけ、隣り合つたり向き合つたりして一團に建つてゐる。その中にわけても小さい茅屋に私は住んでゐた。角店はうちの家主である八百屋と、髪床とで、他の二軒には東京に通勤する人の家族が、それぞれひつそりと住んでゐるのだ。そのうちの一軒にはディクと呼ぶ顏割れの犬が飼はれてゐて、しばしば空氣を嗅いで、界隈の凶禍を豫感した。

この村に居住んで暫くして、私は偶然のことから二匹の仔猫と一緒に暮すことになつた。家族は朝にも夕にも唯それきりであつた。ベルとヤヌと呼ぶ二匹の仔猫は兄妹であつた。一年前私のところに連れて來られた時には、引き放されたばかりの母親の乳の匂ひがまだ薄紅色の小さい口の邊りに殘つてゐた、彼等は卓の下にあてがはれた小箱の中に縮ま

つて、夜中になると母親のことを戀しがつて、三晩、啼いた、彼等の啼いてゐる間、私も隣室でそれを聞いて、眠ることができなかつた。その次の夜からは、彼等はふたりで居ることに馴れて、もう啼かなくなつた。

仔猫は何を喰べてゐるともなく、日に日に大きくなつて、家の中を暴れ放題にころがり歩くやうになつた。私は彼等のする儘にさせて置いた。日がな一日、彼等の擧動を眺め暮して、決して見飽きるといふことはなかつた。私は時とすると顔の上にまで、その小さい爪のお蔭で生傷の絶え間がなかつた。境の襖を締め忘れた時など、夜中に屢々、ひとの顔の上をも介意はず踏み歩く小さい蹠のために眼を覺まされた。彼等はひとの寢床の上で好い氣になつて騒ぐ。私は腹を立てて二匹の首を撮んで行つて巣の中に投げ込む。

「寢ろちゆば、寢ろちゆば、このちび等。」

しかしながら、彼等は一旦、手を放すと私よりも先に私の寢床の上に飛び出して行つて、またすぐに騒ぎ始めるのであつた。

彼等のために、時には自分の飢を耐へて、いつもいつも充分にあるといふわけには行かない乏しい食事を割いて與へる時、私は彼等に對して限りない愛憐の情を湧した。この小さい動物が、そのかみの野獸から、人間に馴らされて本性を奪はれ、僅かに三年か五年の生命をしか賦へられないのに、迫害されたり愛されなかつたりすることは、有り得べからざることに思はれるのであつた。

ペルはその毛色と同じ金茶色の善良な眼眸を持つてゐた。彼の胸と前肢の純白は、都雅で優美な育ちの貴女を想像せしめた。妹のヤヌは、いつも物に驚いたやうな大きい丸い眼と、嫋々として蛇のやうな肢體を持つてゐた。その周圍の動く限どられた瞳の色は、綠玉のやうに青く輝いてゐた。私は、これほど柔軟極る纖弱な動物を、いまだ嘗て知らない。彼等は各自の特徴に依つて、素晴しく豪勢な本名を持つてゐた。『白き手の愛（ワイセン、ヘンデ、リイイ）・ピエエル』『綠の眼の愛（グリユネン、アウゲン、リイベ）・ジヤンヌ。』ペル、ヤヌは、それを簡略して呼んだのである。

この一人の人間と二匹の仔猫の一家族の間には、恰も人格的な感情の交流があるやうに思はれた。私は精細に彼等を見戍つて來た。物心付くに從つて二匹の性質は著しく異つた。二匹ながら神經質で臆病であつたが、ペルは陽氣でヤヌは內氣であつた。私は彼等をひとしく愛してゐたが、心底を云へば、何かと文句の多いところが可愛くて、陽氣なペルを、ほんの少し丈ヤヌよりも多く愛してゐた。

私は彼等をかうも呼ぶ。

「文句屋さんに默り屋さん」

二

冬から春にかけて、私は風邪が因で永い間病氣をした。家主の八百屋さんから人が來ていろいろと世話を見て與れてゐた。そんな時二匹はいつも私の枕の上に、蝸牛のやうに丸くうづくまつて、兩方

から私の顔を挾んで眠つてゐたが、いつの間にかヤヌの方が入百屋さんに行き馴れるやうになつて、食事の時よりほかには、夜も滅多に歸つては來なくなつた、或時、ふいと歸つて來て、ベルが私の肩の上に枕してゐるのを見ると、ヤヌは寄つて來て彼の頸のところに噛みついた。おづおづと物優しく、しかしながらその噛み方には一種の妬情が溢れてゐた。そして、すぐまた何所かに出て行つてしまつて、呼んでもその日はとうとう歸つて來なかつた。

病氣の終りの頃、私はよく夜中に犬の遠吠を耳にした。氣を付けて見ると、私の傍で、ベルの全身が眠りながら小刻みに戰慄してゐることに氣が付いた。私は宇宙の凡ゆる現象の豫兆が、人間に感じるよりも、より純潔な彼等には更に早く感應するのではないのかといふことを考へた。

人が來て、この頃デイクがしきりに吠えるのだと云つた。凶事の前兆ではないかといふのであつた。

病後の額に汗するほどの春陽の一日、私は昨日から歸つて來ないヤヌを、丘の方へ探しに出て行つた。身内には絶えず輕微な熱感が湧いた。歩いてゐるうちに髪床のおかみさんに會つた。おかみさんは綺麗な着物を着て寂しさうな顔をして笑つた。私はお辭儀をして擦れちがつた。あんまりその着物が綺麗だつたから、振り返ると、もうおかみさんはそこに居なかつた。私は何故か、ふと、ほんとに彼女に出會つたのであつたかどうだかと、不思議な氣持がした。

私はその時、彼方にヤヌが何かを追ふやうにしてK氏の別莊の方に飛んで行く姿が見えたやうに思つた。私はヤヌを追ひ求めて、今はもう誰も住んでゐない、そこの低い柵門が斜に開いてゐる中に入り込んでしまつた。兩側の植込の間を通つて、面白い起伏のある廣い芝生に出た。その中央に唯一本の白木蓮が的皪として搖れてゐる星のやうに、皆空に向つて花を開いてゐた。不意に、何處からかヤヌが出て來て、私の足元の芝生の中にころりと横はつた、例の綠色の瞳でじつと私を見据えてゐたが、私が身を屈めて抱へ上げやうとすると、またすぐ飛び逃げて、彼方の植込に消え去つて行つた。行く時振り返つて今一度あの眼が異常に青く輝いて私を睨みつけるやうに見えた。これは何事であらう。人氣の絶えた丘の空邸の春晝に仔猫のこの振舞は私の心をふと寒くする。猫の瞳に、何か妖しいものの影がさしてゐたのではなかつたのであるか。私は、突然、眞晝時に、陰々としたデイクの遠吠を微かに聞いた。

私は限りない春愁を抱きながら、そこの宏大なテラーセの石段を上つた。そこには嘗て、熱帶性の植物の巨大な鉢植が置かれてあつたことを想像する。軒端は朽ち、雨と日光に曝れてところどころペンキが剝落してゐた。

不意に背後の扉の中から、錆びた太い聲が響いて來た。

「何誰か、何か御用ですかい。」

私は棒立ちになる。入口の扉が開いて其老顔を覗けたのは、ここの

管理をしてゐる増明院の住職であつた。私達は見知り越しであつた。

「こんにちは」

私はやうやく安堵して答へる。

「猫を探しに來たんです。」

「中にはいつて御覽なさい。わしも今日は天氣が好いから、見まはりに來ましたんぢや。」

そこで家の裡にはいつて行つた。

すぐ眼の前に、殘らずの窓は皆、重々しい二重の窓帷に閉ぢられてゐる薄暗い、奇妙に天井の低い、しかしながら非常に立派な部屋があつた。そこに据え付けてある種々な調度の類の凡ての配色は、恰もそれに最も相應しかつた。充分に異國的な香氣が隅々から發散して、身に迫つて來た。片隅に、數多くの丸い天然石を寄せ集めて築き上げた巨大な煖爐があつて、灰は冷え冷えときれいに掃き寄せられてゐた。その前に今しがたまで、何者かが掛けてゐたのではなかつたのであるか、まだ搖れ止まない、華美な彫刻を施した一脚の舟底椅子があつた。しかも、仄かな煙草の匂ひがした。

私はこの建物の裡ではなくして、かういふ樣式の上に同じ格調を持つてゐる今一つの部屋を、曾て何處かで見たことがある。確かに現實に於いて。

過ぎ去つた日、L・H子爵のホテルの晩餐會の宵に、私達は中階のロビンで休息した。そこの仄々としたたたずまゐが、すべて、今見るこの部屋の表現と少しも異ることがなかつたのを思ひ出す。その夜の主賓は愛機C・M號を携へて佛蘭西の空から來たところのC大尉とL・B中尉とであつた。私達は低い靜かな聲で、彼等の驚嘆すべき天涓萬里の航路について話し合つてゐた。げに、東洋の一少女の眼には、造物主の稜威を犯して、空を征くものは巨いなる神々とテイタンにもひとしいのだ。私は久しい間、激しい崇拜の情熱の囚となつてゐた。して、私はその時そこに居て、今も同じいその煙草の匂ひを嗅いだ。

心臟が痺れるやうな遙かな想ひがした。

私は嘆息して、傍の老僧に、この家の設計者に就いて知つてゐるところはないかと訊して見た。すると、果せるかな、この家こそあのホテルと同一の設計者の手になつたところの、東京には——恐らく日本中にも——唯一の私人の邸宅であるといふことを、老僧は知つてゐて、私に語つてきかすのであつた。

「その人はアメリカに歸ると間もなく、氣がちがつたさうですね」

と、私はまた訊ねた。

「そして？　亡くなりましたかい？」

と、老僧は反問した。そこまでは私も知らなかつたのである。

間もなく私達はそこを出た。外はたそがれの景色であつた。ひとり芝生の中の白木蓮は殊に輝いてゐた。

「もう、日が暮れたのでせうか。」

と、私は呟いた。すると老僧はかう答へた。
「何、何でもありませんさ。」
そこで私は彼の耳が遠いのだといふことを了解した。
私はあたりを見まはしてから、更に念のために、先刻、ヤヌが飛び込んで消えて行つた植込の方に探しに行つた。突然、私の足は釘付けになり、心臓は早鐘を打つて全身に赫と熱氣が崩した。
そこの水々しい灌木の植込の傍に、すらりと背の高い一人の外國人が、外套の襟を立てて半ば顔を埋めて立つてゐた。夕暮の色を溶かしてその外套は紫立つて見えた。私に見覺えのあるその外套の色を以つてして、その背恰好を辿つて想像すれば、私はそこに、今は常然、佛蘭西に、老年の父上の膝元に在るべき筈のL・B中尉の面影を錯覩したであらう。しかしながら私は、その人の顔を見定めることができなかつた。何といふ暗いたそがれであつたか。
私はヤヌを斷念して、後退りに取つて返して、すぐ老僧に追着いて長いゆるやかな傾斜の道を、門の方に並んで下りて行つた。
「猫はどうしましたかい。」
私は他のことを考へてゐるが、老僧の言葉に、すぐ我に返つて答へた。
「とうとう見失つたきりです。何故だかヤヌはこの頃、ちつとも歸つて來ないのですよ。」
「猫ちうものは二匹以上飼ふと、きつと一匹つきや家には居つかないさうです。どうしても一方は短命なさうで。悧巧この上なしですからね。あなた、一つだけ偏愛なさるんぢやありませんかい。」
「これはなかなか微妙ですね。猫にはそんなところまで感じられるのでせうか。」
「どうもさうらしいですな。あいつは何も彼も知つてしまふですよわしがこれで大した猫きちがひでしてね、一つ頃は五つも六つも飼つてゐましたものさ。」
門を出ると老僧は、腰の鍵束の中から、この鍵を撰んで、門の上の南京錠を卸した。
「掛けてしまつても好いのでせうか。まだ一人殘つてゐるではありませんか。」
「誰かゐましたかい。」
老僧は早錠を外しさうにしながら不審つて私を顧た。
「私達が家の中から出て來たでせう。そしたらあの植込の所に、誰か一人立つてゐたぢやありませんか。」
「さうですかい。」
「西洋人です。御覧にならなかつたのですか。」
「わしは見んでしたよ。」
そこで、私は、錠を外さうとする彼の手を押へて止めた。
「では、その儘にしてお置きなさいまし。」
歩きながら、彼は云つた。

「彼所が空家になつてからは、よく色々な借手や買手がつくんでさ。主人の知り人だといふ西洋人なぞもよく見に來ますがね。皆、どうも、話が思はしくないやうで。」

老僧の言葉は、あの植込の傍で蒼ざめた人物に就いて、最も有り得べき事實を說明してゐた。しかしながら、私の心には、想像し得べくして不可知な、他の事相が考へられる。

暫く默つてゐてから、私は云つた。

「やつぱりあの人は亡くなつたのでせう。」

「誰がですい？」

「そら、あの氣狂ひの建築師ですよ。」

「誰ですつて？」

「今、私が話したぢやありませんか。そら、あの植込の傍に立つてゐたあの人ですよ、あの家を建てた。」

私の聲が低いので、老僧はよく聞きとれないといふ顔をした。増明院の門の下で私達は別れて、私は家に歸つて來た。留守をしてゐた番兵のペルは、私を見るとしつぽを旗竿のやうに押し立てて、それを震はしながら私の脚に絡みついて、踏まれやうとした。

「ペル公や、ヤヌは何處かに行つちやつたよ。」

抱き上げるとペルは私の腕の中で、ぐるぐると喉音を立てて首をのばしてひとの顔を嘗めた。安坐するとひどい熱感を催して來て、私は病氣がぶり返したのかも知れないと思つた。

私は寢床に入つた。その時刻から、向ふ隣りのデイクがしきりに例の陰鬱な吠聲を立て始めた。逢魔が時である。デイクには夜の步み寄つて來る姿が見えるのだ。デイクはそれを恐れて吠えてゐる。何故ならば、夜に於いて人間の罪惡や不幸が最も多く孕まれるからだ。造物主が瞬刻の未來にまで、人間を全く盲目にして置きながら、他生の彼等にのみは賦へたところの、人間の必要な運命を豫知するこれ等の動物の神祕は、神意の存するところ、測るべからざる畏怖である。十二時頃、その吠聲は最も激しくて、鋭く且、悲しげであつた。その聲には、更に數頭の犬が混つて、その啾々の吠聲が私の一身を取り卷いて襲ふやうに感じられた。

「若しかしたら、ひよつとして私が死ぬのではないのだらうか。私の周圍から、もう死臭が發散してゐるのかも知れない。」

と、ふと考へた。するとまるつきり豫期してゐない打擊を蒙つたやうに、私の心はひどい蹉躓を感じた。私は自然に寒くなり、傍のペルを胸の上に置き、再び眠り入つた。

三

私は戶外の騷がしい氣配に眼をさました。明るい晝間である。ぼんやりしてゐると八百屋のおかみさんが來て、

「髮床のおかみさんが昨夜亡くなりました。」

と云つた。

髮床のおかみさんは自殺した。近頃出來た郊外電車の驛の傍の、玉突の女に御亭主が夢中になりおかみさんのことを棄てようとしてゐた。おかみさんは二三月前から品川の兄さんの所に行つてゐたが昨夜、突然歸つて來て、また喧嘩をして飛び出した。御亭主は御亭主で腹を立てて玉場に行つてしまつたが、虫が知らせたのであらう電車がその前で停ると、一番に飛び出して行つたのが、やはり御亭主だつた。おかみさんは、玉突の家の眞前を走つてゐる寂しい線路に登りかかつて、俯伏せに轢かれて亡くなつた。頭蓋骨が碎けたのである。私は床の上に坐り直して、沈んだ氣持でそれを聞いてゐた。

「私は昨日あの女に會ひましたよ。綺麗な着物を着て、増明院の前の道を歩いてたの、あんなに若くて美くしかつたのに、それに、あのたくさんな髮を持つてゐて。」

「さうですよ。綺麗な人だつたのに、大方、あなたんとこに暇乞ひに來たんでせう。だつて品川に行つてたんですからね。お棺に納めたところを、私は一目拜ませて貰ひましたがね、ああいふのはお湯を使はされないのですつてね。顏は綺麗に拭いてありましたが、頭半分なくなつて、あのたくさんな髮が血と腦漿とで粘りついて、それに新聞紙がべつたり密着いてゐて、それで死顏を包んだものでせうかね、ほんとに淺ましいお氣の毒な姿でしたよ。そら、昨夜、デイクが矢鱈吠えたでせう、あの時、佛を家に運れて歸つたんです。これが夜であつて、せめて幸せでしたよ、おかみさん。と私は云ひましたよ。」

私は、自分の顏からだんだんと血がなくなり、恐しくひん曲つて行くことに氣が附いた。

「蒼くなんなすつたよ。お可哀さうに。」

さう云つて、八百屋のおかみさんは、私の肩に布團を載せて歸つて行つた。

翌日、お葬式が出た、私は門に立つてお見送りをした。自働車で桐ヶ谷の火葬場に運ぶのである。いや更に、遠く、虚空へと運び去つたのである。その眞夜中、私は再び、デイクの不吉な警告に眼を覺ます。覺めぎはに誰かが耳元に來て、かういふ。

「新聞紙を除つて頂戴。」

夢であつた、しかしながら午前二時の現實に於いて、私は、今日葬送の列の消え去つた方角から、微かに辷つて來る轍の音を耳にした。音は次第に擴大し、疾走して來て、私の門を過ぎる瞬間にその音を停めた。二三十秒間しんとする。私は我知らず呟く。

「おかみさんが歸つて來た。」

やがて、自働車は再び爆音を殘して、元來た方へ引き返して行つた。桐ヶ谷の方角へ走せ去つたのである。

翌朝、眼をさますと、ヤヌが何處からか歸つて來て、舊の寢床の中にひとり丸くなつて眠つてゐた。私は老僧の言葉を思ひ出しながら、その上に屈みかかつて、いつまでもヤヌを眺めてゐた。ヤヌは

終日家にゐて、私の傍を離れなかつた。時々眼を細めて、顔をじつと眺めるのであつた。夜になると、ディクはまた私を悩ます。

「まだ、不幸が一段落付かないのであらうか、こんどこそ、私の番かも知れない。」

曉方の三時頃、小さいヤヌは起きて、家中をぐるぐる歩いて出口を探してまはつた。私は起き出して、戸棚から食物を持つて來てさまざまに懐柔しようと試みた。

「どこにも行くんぢやない。ヤヌや、うちにおいで。」

しかしながら、終ひには障子を突き破り、硝子戸に打つかつて、どうしてもヤヌは出て行かうとした。私は、とうとう、そこの戸を開けてやつた。して、この小さい生命とはそれが遂に別れであつた。

翌日、ヤヌは死骸になつて八百屋の裏坐敷の屋根の下に横はつてゐた。私は跣足で飛んで行つて抱き上げた。どこかの子供が棄てたお菓子の霰の紅いのが、土と一緒に一つだけまるで口紅を含んだやうに、唇のところに密着いてゐた。全身をコロン水で拭いて見たがもう決して生き返らなかつた。ヤヌは、もう十日も出ないで、お母さんになる筈であつた。どんなに華奢で美しい母親になるであらうと私はそれが千秋の樂しみであつた。私はそれを考へてヤヌのために一滴だけ涙を濺いだ。

雨が降つて來た。晴れ間を見て、私は二日がかりで穴を堀つて、ヤヌの死骸と、その母胎の中で死んでしまつた數個の小さい生命とを、深いところに葬つて偉大なるものの手に委ねた。

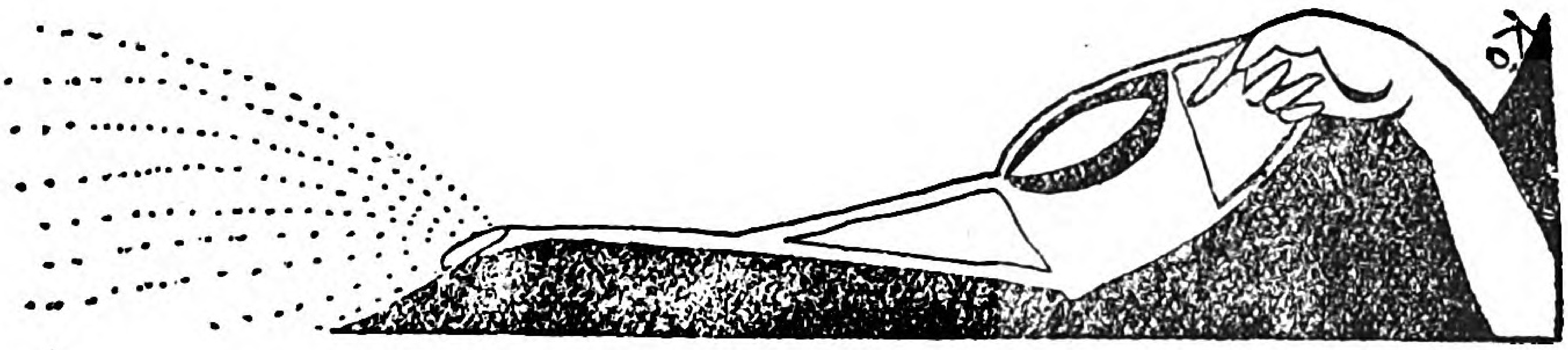
それから三日ばかり私はまた病氣をした。その間中讀まなかつた新聞を、夕方、寢床の上に取り集めて眺めてゐると、かういふ文字が眼についた。

『佛飛行機墜つ（パリ聯合十九日發。）』

ジャン・L・B中尉を載せた飛行機がカラアチに向け飛ぶ途中、突風に遭つて墜落したと書いてある。それ以上讀まないで、新聞は私の手から辷り落ちた。十九日は「綠の目の愛（グリユウネン・アウゲン・リイベ）・ジャンヌ」が、高い所から踏み外して死んだ日だ。ジャンヌはL・B中尉の名のジャンの女性稱であつたことが、偶然の符合以上の恐しい意味を私の心にもたらした。私はしきりに因緣なるものを思つた。

私は起つて、ヤヌの墓に花を撒かなければならない。墓の彼方に暗喩、一致、思想、さうしてL・B中尉の重々しい深い決然とした微笑の白面を見る。彼は紫の外套に包まれて立つてゐる。あの晩餐會の翌日に、私が通り過ぎながら、ホテルの扉の前に、數人の同國人に取り圍まれて立つてゐる彼を、ふと見た、その時のその儘の姿である。

あの黄昏に、K氏の庭園で私だけが見たところの人影は、あとで私が考へ直したやうにアメリカの狂天才ではなくして、やはり最初にさうかと思つたL・B中尉の、私にのみ現はれる永遠の姿であつたのだらう。



緒（いとぐち）

山本和子

一

トタン盥の行水の湯の表面には、弟の流して行つた垢がもう〳〵浮き上つてゐた。湯の動揺が靜まると、垢はタニシのやうにぶつぶつ泡をふいた。手をさし入れると、湯は炎天下の泥滯の溜水のやうに、氣味惡くなまぬるくてぬら〳〵してゐた。取り出した手の甲に、ゴムの粉のやうなよじれた垢の破片がねつとり喰つついた。

美知代は裸の腹に手拭をまきつけたまゝ、竈に薪をくべやうとして揚板をめくつた。濕氣臭い床上には、萎びてかびた牛蒡のやうに細い薪が、五六本散らばつてゐた。美知代は揚板をしめて、竈に丸めた古新聞をねぢ込んでマッチをすつた。新聞がパット燃え上ると、釜の底がひとしきりしゆう〳〵鳴つたが、直ぐに、焔は丸められた形で灰になつた新聞の皺の中に吸ひ込まれて了つた。もう一枚の新聞を丸めやうとした時、彼女は島田髷の女の寫眞を見つけた。擴げると、それは三段抜きに印刷された、仇つぽい若い藝者らしい女の寫眞だつた。下の段には丸い枠に圍まれた白髪童顔

の老人の寫眞が喰ひ違ひに出てゐた。大見出しには初號活字で『〇〇翁の若返り』傍見出には『十九歳の田舍藝者を本妻に入籍』『老いてます〱旺んな八十歳の翁』とあつた。

美知代は最初の瞬間、玉の輿に乘つた女を羨ましがつた。そして次の瞬間、肉布團を輕蔑し、憐憫を感じた。がその次の瞬間、再び玉の輿を羨望し、遂々絕望した。うす黑い腹の皮は、青春をすつかり下痢させて、皺くちやになつてゐた。

籠の中で八十歳の翁と十九歳の藝者の寫眞が灰になつた。うす鼠色の灰殼の角々に、見出しの大きい活字が、辻占のあぶり出しのやうに浮き出した。

美知代の體から落ちた、安白粉と汗にこねられた垢が、弟の垢に入り交つて、彼女の股の側に附着した。

〇〇町の電車通の街路樹の葉が綠色の風をふり撒き、街頭は重り合つた葉の隙間からふるひにかけられて、舖道に網目の蔭を落した。その網目に、金魚の鰭のやうにひら〱する袂をもつらせた若い女達の影が引つかゝつた。

最近區劃整理をすませた二流町には三階建てのビルデングが急造されて、もうこゝらあたりまでも、都市計畫と同じ方向に伸びた手が、間もなく開けて行く事を見越して、うす暗い三流町との境目にダンスホールの設置を忘れてはゐなかつた。

夜風がビルデングの頭を越す每に、三階の窓からは、あとからあとから使ひ古しになつて行くジャズの小節と、次ぎから次へ踏み捨てて行くステップをばら〱に引きちぎつては、路上にそのかすをはたき落した。抱き合つた男女の影が水族館の縞鯛のやうに、鰭を交へて、シャンデリアの青い光に霞んだ空氣を波立たせて窓際を横ぎり、うすもの窓掛にホールに充滿した息吹きに、ふくれ上つた。

美知代の腋の下には、夏を待ちかねた銘仙の袷せと羽織が、風呂敷にくるまれて、羽搔ひじめにされてゐた。美知代の痩せためだかのやうな體は、優越者の大きい影を恐れて、細い隙間から、ちよろちよろ通り拔けた。

町角を曲ると、うす暗い狹い裏町通は、朽ちた板ぎれと古トタンの蓋をのせて、淀みつつ流れる兩側の溝の巾にせばめられ、その長さに引きづられて、ずつと延びてゐた。

表通にダンスホールの表看板を立てたこの町は裏通に、質屋の紺暖簾を吊してゐた。

美知代は片手で暖簾の一枚をはねた。

歸りには、兩手で暖簾を二枚押し分けて出て來た。

營養不良と貧血に引き下げられた低い體溫に僅かに溫い彼女の懷に三圓五十錢の金が心細く挾まれてゐた。

表通に出て、見直すと、新裝された街の兩側にずらりと立ち並んだ飾窓は、競つて硝子板の大きいレンズを嵌め込み、電球の光線を

出來る丈擴大しやうとしてゐた。店頭から亂射する光線は、互に兩隣の光線を遮ぎらうとするかのやうに、重り合つて巾廣くのしかゝつてゐた。その光線の刺の切つ先に、電柱と街路樹によりかゝつた危つかしい露店が射竦められてゐた。

街の一角から見渡すと、光の洪水の中に浮き上る一切の商品は、無數の吸盤をその頭に頂いて息をつめてゐる、からみ合つた無數の觸手が吸盤に伸びて行く。

絣羽模樣の夏着の女とそれにつき添ふ男とのカプルは散歩の輕い疲れを休めに、食後の口直しに、プディングとソーダ水を欲して、躊躇なく、赤皮のハンド・バックを挾んだ手と、スネーク・ウッドをつまんだ指をあげて喫茶店の硝子の扉を引きあける。とにかく皺のつかない浴衣に、レーヨンの夏帶をしめた女を交へたカプルは、躊躇なく、飾窓の前に立ちはだかつて、赤皮のハンド・バックと洋杖に見入り、次ぎにコーヒーセットとテーブルセットの飾窓に空想の頁を繰る。

美知代は飾窓の障から、手拭浴衣を一通り見渡して、最後に一枚を念入りに眺めた。

三圓六十錢、二圓三十錢、一圓八十錢等の値段札は、八雲惠美子や栗島すみ子の浴衣姿の寫眞を背負つて下がつてゐる布地の端に横向きにぶら下つてゐて、値段を氣にしない買手を待つてゐた。美知代の眺めてゐる浴衣地は下手な三色版刷りの口繪のやうに、染料が模樣の輪郭を外れて、白地に拔いたチウリップの葉に藍色の汚點を泌ませてゐた。一圓三十五錢の値段札が、眞正面を向いて、貧しい女の購買慾に示威運動を見せびらかした。

高級な店頭の飾窓はレーヨンの帶地に、堂々と五圓なにがしの札を下げて、美知代をたぢろがせた。美知代の手が帶にさわつた。指の先に布の破れ目がひつかかつた。地がすけて芯のはみ出た合せ目を丹念に內側に折り込んだ帶は、眞ん中にちゞみよつて、絣の布を繼ぎ合して作つた芯とその上にひいた綿がよぢれて露出してゐた。

美知代は商店と商店の境目で横をむいて、帶の端を內側に丸め込んで、皺を伸ばした。

と、かさ〳〵といふ音に顏をあげると、女の子がうす暗い露路の泥溝の上に立つて、坂東妻三郎や林長二郎の似顏の厚紙の面をつけて、眉と眼玉を動かしてゐた。

隣りの大きい洋菓子屋の店先から甘い香が流れて來た。女の子がひとしきり動かした眉と眼玉を休めると、ぴつたり止つた厚紙の眼玉が横眼で飾窓の中を睨んだ。チョコレートで作つた外國の劇場風の形をした菓子が、飾窓の中に飾られてゐた。銀の粒がイルミネーションのやうに菓子の周圍にきら〳〵ついてゐた。

美知代が歩き出さうとすると、恐しく光つた黑い眉をつけた洋裝の女が、細いすんなりした男を影のやうに引いて通りかゝつた。洋裝の女の光つた眉がぐつと動いた。長い睫が上下に開いて眼玉がく

るつと廻つた。紅い唇が『まあ』と笑つたのだ。

厚紙の眉と眼玉は急いで動き始めた。

洋裝の女の手の指は確かに動いたのだが、ハンド・バックのバンドの間をするくとくぐつて了つたのだ。

美知代が家に歸へると、弟の克己は石膏に汚れた手を洗つてゐた。美知代は金を出して。三圓弟に渡した。

『今度はいつモデルに拂ふの』

『一週間で六圓なんだ。二人で使つてるから三圓でいゝんだが、二三日のうちに飾り付けの方からいくらか出るからいゝよ』

床に這入つてから、克己は、晝間、××デパートの仕事場の出來事を話した。

――克己は、本館の天井裝飾の石膏を取り付けてゐた。東館の鐵筋を圍んで立て廻された高い足場には一本の棒に全生命をのせて、××組の人夫が大勢働いてゐた。その一ッの足場からふるひ落された人夫が、ひゞわれた陶器のやうに、地上に叩きつけられて生命を粉碎した。人夫の死屍には、コンクリートの粉を拂ひ落した菰が投げかけられて、手荒く運び去られた。同じ足場に上つてゐた人夫が五六人どかく降りてくると、現場監督とデパートの企畫部長とがいきなり怒鳴つた。そして、もやくした煙草の煙と一しよに吐き出すやうに云つた。『なあに、さうやらなくても、百圓あまりもやれやいゝでせう』狂人のやうに驅けつけた內儀さんの背で、鼻を垂した子供は、大きい紙袋から、餡パンを二ッも三ッも取り出して餡丈舐め、皮を惜しげもなく道の上に撒き散らしてニコくしてゐた。他の足場に居つた人夫は『又かい』と云つてあくびをした。只『百圓くれるつて云つたぜ』といつた時、彼等の眼がちよつと光つた。併し直ぐ呟いた。

『百圓の命か!』

二

月刊雜誌『婦人の世紀』は九月の增大號『文化生活號』の編輯を終つて、來月號『趣味生活號』に着手してゐた。

古參の婦人記者新井貴美子は、會計から一圓札を三枚受取つてゐた。貴美子は札を納めると、ッパのつまつた帽子を一寸かぶり直して、下唇と上唇を交るく嚙みしめた。紅くなると、舌の先で輕くしめらせて、口紅をつかはない科學的化粧を施した。

美知代は傳票の紙片に『十四錢、市內電車賃』阿部とかいて會計に示した。

會計は『星ヶ岡茶寮、淸川伯爵夫人、眞珠美容院訪問、自動車賃新井』とかいた傳票の上に重ねてクリップで押へ乍ら、美知代の傳票の金額と美知代の顏を見比べた。

美知代は赫くなつて、銅貨を交ぜた金を受取ると、自分の席に返つてオリーブ色の事務服を脫いだ。

編輯室の扉を開けると、社長と、編輯主任の羽田芳枝の姿が見えなかつた。校正係り兼廣告部の日下部と正文堂印刷所の岡とが口論してゐた。

『さうガミ／＼云つたつて、私のせいぢやない。男工が全部怠業してゝ、女工が三人きや來てないんだ、輪轉機が一人で廻るものでもなきや、活字が一人歩きするもんでもありませんぜ』

『大體、お前んとこの爺がけちだからよ、給金を上げりやいゝんぢやないか。それとも失業者がうんとゐらあね、そいつをどし／＼入れりやいゝんだ。永年の得意先に迷惑をかけといて文句はないぜ。他の工場にでも廻して都合つけてくれる位の親切があつたつて、いいぢやないか。』

『だつて、私の方だつてさう大きい工場でもないし、賃銀の値上げだつてさう出來なからうぢやありませんか。失業者々々たつてもいきなり印刷にかゝる熟練工が、おいそれと落つこちてやしない。それにいくらも例がありまさあね、共同印刷の時みたいに火でもつけられちや、早速破産でさあ』

『おい／＼勝手な熱を吹くぢやないか。こつちの九月特大號をどうしてくれる氣だい』

『あんまり大きい顏をしてもらひますまい、あんたとこだつて、さうきちん／＼支拂つてくれてるわけでもないんだからね。金さへありや、他の工場に頼みますがね、こつちで紙代から、刷代まで立て替へて、あとはなしくづしぢや、一寸許りでは合ひませんよ。』

『毎月きちん／＼拂へる位なら、お前んとこみたいなけちな印刷屋へ、活字の古いのを辛抱してたのみやしないぜ』

『へへ…、とにかく今日明日に話をつけるつて云つてるんですから、待つてやつておくんなさい』

岡が出て行くと、日下部は、かき損んじの廣告用紙にペッと唾を吐いて丸めると屑籠へ投げ込んだ。が美知代を見つけると、急にニヤ／＼した。美知代は用心深く、岡のしめて行つた扉の方へすさり乍ら云つた。

『先生も、羽田さんも未だ入らつしやらないのでせうか』

『先生と羽田さんは昨日の夕方から入らつしやらないよ』

日下部は又ニヤリとして立ち上つた。

美知代は汗ばんだ手首に日下部のねと／＼した脂手を思ひ出して慌てゝ外へ出た。

入口で、自轉車から降りた給仕の長尾が、ユニフオームの衿をはだけて汗をふいてゐた。

『阿部さん、印刷屋が來なかつたかい』

『えゝ、さつき、日下部さんと阿部さんが喧嘩をしてゝよ』

『ふん、ざまあ見ろい。正文堂ではストライキをしてるんだよ。俺たちも一ツやらうかな、併し、こゝぢやびい／＼してんのは俺と、あんたと電話の愛ちやん丈だね。そんぢや一文にもなんねえ、それ

で首にでもなりや世話ねえや』

『長尾さん、三人の女工は出てるつて云つてたけど、姉さんはどう？』

『なに？奴ら裏切りだよ。姉は、植字工の家に集つて、飯たきの手傳ひをしてらあ。併し大したもんさね、二十人足らずの人間でも、共同すりや、工場の機械がビクとも動かねえんだからね。』

あんた、今どこへ行つてたの？』

『俺かい』

長尾は聳やかした肩を一寸すぼめると、低い聲で囁いた。

『こつちから、毎日のやうに急き立てゝ、他の印刷屋にたのむ〱つていはせにやるのさ。社ではいゝ印刷屋が見つかれば今までの借金を踏み倒さうてんでね。正文堂では縁が切れゝば貸しが取れないんで逃がしたくはないんだよ。職工の方ぢや賃銀を値上げしなけりや働かねえとがん張つてるだらう。正文堂では社と職工の板挾みになつて、そのうちに職工に讓歩するあね。俺はあつちからたのまれてるんだ。ところが、實際は社の方だつて大きい事は云はれねえのだ。雜誌の賣上高の回收がうまく行かないので、新しい印刷屋に、左から右へと支拂ふわけには行かないのさ。でなけれや、毎日のやうに俺を走らせて、いら〱するわけがないぢやないか。俺たちはそれがつけ目さ。で俺が活躍するつてわけさ。表向き、社の使ひになつた、空おどしに出掛けてゐるやうに見えても、實際は、職工の方には有利な役目をしてるんだ』

美知代が謎を抱いて交叉點で市電を待つてゐると、向ひ側の喫茶店から、自動車で星ヶ岡茶寮へ行つてる筈の新井貴美子が出て來た。貴美子の押へてゐる扉から營業部主任の正木が出て來た。はつとして目を外らせやうとすると、青バスの大きい横腹が正木を吸ひ込んだ。青バスが行き過ると、貴美子が美知代の方へやつて來た。

『阿部さん、今日は外訪のお手傳ひ？』

『えゝ、丸ビルの松井洋服店の廣告ですの』

『ぢや、そこまで自動車で入らつしやい。夏の市電に揺られちやとてもやり切れないわ』

自動車の中で、妻のある社長と羽田芳枝が、多の休暇も夏の休暇も同じ日に取つてゐる事を美知代が訊くと、貴美子は愉快さうに笑つた。

『まあ、貴方御存じなかつたの？でもね、なんでもない事よ。貞操なんてものは、純潔である場合には一文の値打だつて出ないものよ。僅か一片の肉塊が、何千何萬の富を築き、喰ひはぐれのない地位を築くなら、投げ出して値踏みした方が悧巧よ。貞操は自分の權利ですもの。どの限度に利用したつて、結局自分の便宜を計つてくれるならいゝわけぢやないの。』

『正木さんと新井さんは昨日の夕方から入らつしやらないよ』といふ聲を美知代はきいた。そして、『阿部さん と日下部さん……』とい

ふ醉にぞつとした。

松井洋服店では意匠部の人が晝食に出て、一時間程待つてくれと云つた。

美知代は二階の休憩所に腰を下した。ぼんやり東京驛の時計を見上げてゐると、足をつつかれた。掃除婦が汚い水の垂れた雜布を挾んだ棒を足下に突きつけてゐた。前にゐた洋裝の女がつや〳〵した靴を眞つ直ぐに伸ばして高く上げた。美知代も足をあげやうとすると剝げた布草履をつゝかけた足袋の先が脂汗と埃に汚れてゐるのに氣づいて慌てゝつま先を內側に曲げて低くあげた。

掃除婦は『もつと高く上げて下さい』と怒鳴つた。拭いた方へ立つてゐると、掃除婦は端まで押して行つた雜布を直ぐ引き返して、『はい一寸御免なさい』と又足下を拂つた。横に身を交はすと、洋裝の女の手から、煙草の灰がパラ〳〵こぼれて彼女の足下に散つた。掃除婦は素早く雜布でもう一度足下を拂つた。美知代が腰を下すと、洋裝の女は煙の立つた煙草を、彼女の足下の方へ投げて立ち去つた。美知代は慌てゝ吸殼を草履で踏み消すと向ひ側へ蹴りつけた。

東京驛の大時計の長針がピクと動いた。十五分しか經つてゐない。

美知代は隣の席に落ちてゐた新聞を擴げた。丸菱吳服店が家賃不拂で差押へを喰つて閉店したと出てゐた。

氣がついて見ると、『本日より閉店仕候、御用の方は事務所まで御越被下度候』とかいた紙片が、閉された防火扉の中央に粘られてゐた。どの飾窓にも、白いカーテンがすつかり下りてゐた。厚い大きい硝子板の一枚に、眞つ赤な大きい疑問符が斜目に粘られてゐた。

そのマークは、丸菱が苦しいやりくりから土曜日奉仕と稱して、殘品整理のために特價賣出しを行つた時の廣告意匠として使はれたものだつたが、今は、丸菱の投げた一つの疑問が皮肉にも飃然とその影を、閉された飾窓の硝子に粘りつけたのだつた。

美知代は再び新聞を取り上げた。

新聞には、ステッキ・ガールの出現を記載してゐた。

と——、新聞の上に小さい紙片が散つて來た。紙には『つきあひませんか』とかいてあつた。裏返したり表返したりして眺めてゐると、肩を打つ者がある。見上げると、若い男がぢつと見下してゐた。美知代は吃驚して立ち上つた。男も並んで歩き出した。

『ちよつと〳〵』

美知代は慌てゝ云つた。

『私、違ふんです。違ふんです』

松井洋服店から、廣告の紙型をもらつて出ると、先つきの男が休憩所に腰を下して小さい紙片を鉛筆で切つてゐた。

美知代はさきほどの新聞をもう一度擴げて見た。『一時間銀ブラのおつきあひで二圓の收入。モダニズムの生んだ新職業ステッキガー

ルの出現』美知代は男の方を振り返つた。男の組合された足の先には、埃つぽい、踵のへつた靴がぶら下つてゐた。男は紙片に字をかいた。

美知代は階段を下りた。

彼女のうつむいた眼は、脂と土埃によごれた足袋が、雜踏に踏み躁られた紙屑のやうにコンクリートの階段を落ちて行くのを見た。

社長と羽田芳枝。營業部主任と新井貴美子。女達はそれ〴〵の仕格と腕前に應じて、代價を支拂はれてゐた。汚れた足袋は泥靴にふさわしい値段がつけられた。

美知代は丸ビルを出るときふと二圓の金を休憩所に落して來たやうな氣がした。が併し直ぐに今少し多額の金がどこかに落ちてゐ相な氣がした。そしてその空想の先に日下部の名が拗い上げられた。

東京驛前に、斷崖のやうにきつたつた、丸ビル、海上ビル、郵船ビルは、厚いコンクリートの皮を剝ぐと、そこには人夫をふるひ落した足場と、人夫のあせた血でさび、赤茶けた鐵骨が、マンモスの骸骨のやうに立ちふさがつてゐた。その巨大な怪物の骨といふ骨には、夥しい人間が虫けらのやうにぶら下り、一人の人夫が墜落すると、百圓札があとから追つかけてヒラ〳〵舞り下り、直ぐに死屍をくるんで了つた。二人、三人、四人、人夫が墜ちる度に百圓札がヒラ〳〵散つた。

美知代はその中に弟の克己のゐる幻想を見た。

三

帝展の搬入日が二週間に迫つた。

克己と共にモデルを使つてゐた友人が暑氣に當てられて、ひどい大腸カタルをおこして入院した。一人で一週六圓のモデル代を拂はねばならない。內職片手の克己は、二日に二週間分の仕事をしなくてはならない。そしてモデル代は四十二圓。石膏抜きが十二圓。

××デパートの本館の飾付が終つた。克己の內職がなくなつた。日給四圓の仕事を、途中から、先輩の請負でやつて一ヶ月程働いただけであつた。そして四圓の日給は先輩に頭をはねられて二圓五十錢づつの手取りであつた。仕事がなくなると、二日を一週間として、七週間に相當する日數と、その割合に、計算するモデル代を拂ふ當がない。

モデル女の林千惠子は、克己が取らせたポーズを度々崩しては手間取らせた。そして十分間の休憩の時にかう云つた。

『今日は少し早く切り上げてよ、私、洋畫の大島さんに、『夜の女』をどうしても今夜中に書き上げたいつて云はれてるんですもの。私あの方に夏帶を貰つていたゞいたりして、ほんとに義理が悪いわ。』

克己は作品の肱のあたりの面を整へ乍ら、こみ上げてくる舌打を咽喉のあたりで、のみ込み〳〵した。

『千惠ちやん。僕も半襟の一かけ位は買つてやるから、もう少し辛

へておくれよ。それにお前、この肱を度々動かしちやうもんだから、肉の引き具合が變つて形がつきやしないよ』

『だつて、あんた、この暑いのに、五分間も同じ調子で腕をあげられてゝ？なんだつて今年はかう彫塑科の方つたら、手をあげるポーズばかり取らせるのよう』

『そりや仕方がないよ。昨年、安藤照の『大空に』が賞を取つてから、型がさうなつて來たんだよ。帝展向きの作品はどうしても、流行の型を取るんだからね』

美知代が出勤すると、社長達は未だ歸つてゐなかつた。編輯室には日下部が一人で、校正も出ないのに豫告の二段廣告の原稿をかいてゐた。

今日は美知代は彼を恐れなかつた。克己のために重大な使命を帯びてゐたのだ。

美知代は日下部の好色らしい眼を今日はひたすら待ちわびた。

美知代が思ひ切つて彼の隣に腰を下すと、紙の上に動いてゐた日下部の固いペンダコに盛り上つた右手の中指が、赤インクに染つたまゝ、いきなり止つた。指の間に挾まれたペン先が最初の肉片をさした牙のやうに血をたらして、切つ先を彼女の方にさし向けた。日下部の大きい手が、猛獸の掌のやうに擴がつて、次ぎの肉片に爪を立てやうとする瞬間の緊張に、息を呑んで震へた。

美知代は、自分の机の端につき出されたその掌の中に、三十圓の金の姿を押し込んだ。

『投げ出せば値段が出る……』

彼女は、引き換へに代價が支拂はれるならば……と肯いた。それから氣を靜めて左手を机の下にさし入れた。そして返事を待つた。

日下部はあたりを見廻はすと、ペンを握つたまゝの右手で美知代の手をぎゆうと摑んだ。左手で引き出しから小箱を取り出した。奉書の包紙には『半襟、紅屋製』とあつた。固唾を呑んだ美知代の左手の拳固が突然緩んだ。强い力に引き寄せられた彼女の體が、急カーヴをしたのだ。男の固い冷いかさ／＼の唇が、彼女の唇に非常にものなれた感じで押しつけられた。美知代は自分のうすい唇を捕へてゐるその固い唇から皮の感觸を受けた。それからワニ皮の財布を想つた。恐怖の戰慄が止ると、彼女の皷動は、緩漫に、三十圓、三十圓、三十圓と律動して行つた。

美知代は目の前に差出された半襟一枚の手附金で契約された、素晴しい收穫に小躍して、已に兩手を惜しげもなく男の胸に伸ばした。

『日下部さん、貴方にお願があるんですけれど、實はね、弟の帝展の作品が半分出來上つたのに、金がないためにどうも出來なくなつたんです。月給を先借りしやうと思つたのですが、社長が留守で、會計できいちやくれないんです。モデル代が滯つたんで、モデルが來ないつて云ふんです。でね、私に三十圓丈貸して下さい。明日ま

でに持たしてやらなけりや、折角の作品が目茶々々になるんです。ね、ね、日下部さん、私あなたの仰言る通り……、何んでも、本當にどんな事でも……」

美知代はもう、强盜のやうに强迫した。

すると、彼女の背にまわされた手が、いきなり緩んで、男の顔がさつと驚愕に引き歪められた。

『え？三十圓？』

と、扉の外で、交換手の聲がした。

『日下部さん、正文堂から、お電話！』

電話室から戻ると、日下部は物靜かに事務的に云つた。

『阿部君、君すまないけれど、正文堂の爭議團に使に行つて下さい。社から三十圓の慰問金を出して、とにかく校正を出してもらはなくちや。今會計で金を包んでゐますから。先に事務所に行つてよく打ち合せをして行つて下さい。爭議團へは、正文堂とは別の關係である事、あとは又自由に爭議を續ければいい。全員が働けばこの通り仕事が迅速に運ばれるといふ威力を見せる事にもなるつて、そこはうまく、貴方の口で工夫して下さい。』

麗々しく水引をかけた包紙の上には黑々と、『御菓子料』と書かれてゐた。

美知代の耳には『正文堂からお電話！』の聲が突如としてひゞき返した。三十圓にからみついた、からくり糸の端を握つた自分の役目に漠然とした恥辱と苛責を感じた。

『長尾さんに相談しなくちやならない！』

突嗟にさう氣附くと、事務所を素通りして、まつしぐらに爭議團本部にかけつけた。

爭議團は正文堂から二町程はなれたきたない露路の中の長屋であつた。

美知代は、低い軒に『正文堂印刷部爭議團本部』の紙片を見つけると、はつとして立止つた。露路の突當りに擴がつた空地に正服の巡査が二人のそ〳〵歩いてゐた。美知代は微かな恐怖に脅えて、瞬間、一歩退いた。

うす暗い土間から、長尾が出て來た。

『おい、阿部さん、どうしたんだい』

長尾は美知代から話をきくと息を卷いて怒鳴つた。

『畜生！狡猾な手で買收をしやがるな。よし！併しあんたがこつちへ來てくれたのはとても素晴らしいレポだ。機械の掃除丈でもしときませうつて、毎日工場主の髭の塵を拂ひに行く三人の女もゐるんだ。とにかく入つて下さい』

狹いうす暗い六疊の壁には、下手な字で書たビラが貼つてあつた。

『勝つまで工場に入るな』

『十八人の威力を示せ』

『裏切者は我等が馘首する！』

三人の女工は緣側で握り飯を作つてゐた。

『おい、皆んな、三十圓の金で、社の手を利用して、俺らを就業させやうとしてるぜ。この人は阿倍さんといつて、社のプロレタリアだ。今注進に來てくれたんだ。』

美知代の躰は急に、强い太い綱で固い誓約に結びつけられて行くやうな氣がした。

三十圓の金のために好色漢日下部に唇を盜まれた。克己は頭をはねられて、危い足場でもうけた命をモデルに取り上げられた。美術家の地位と名のために帝展といふ關所が高い城壁のやうに聳え立つてゐる。會計で美知代に出せない三十圓の金が、ストライキ崩しのためには惜しげもなく差し出された。これらの事實がどんな關係でこんがらがつてゐるのか、美知代には判らなかつた。併しそのもつれた糸束が、この印刷工のストライキの引きづり出した緒から次第にほぐらかされて行くやうな氣がした。

『……で俺は三十圓を突返さなくちやならないと思ふんだが……』

ぼうとしてゐる美知代の耳にこんな言葉が這入つた時、美知代はいきなり叫んだ。

『そ、そうです。私、この三十圓を必らずつき返して來ます。』

十五人の男工と三人の女工は一齊に『異議なし』と叫んで手を拍つた。美知代の躰の隅に隙があればふくれ上らうとしてゐた不安と恐怖の戰慄が、今は一つの誇りと責任感に打ちあげられた躍動に打ち震へて行つた。

露路の入口では金魚賣の爺と二三人の內儀さんと子供が蹲んでゐた。

『この大きいのいくらだえ』

『これは二十錢、こつちは十七錢』

『これの方が大きいぢやないか』

『へえ、なあに、これや一寸鰭が折れてますんでね』

『この小さいのは』

『これは三匹十錢、めだかは五匹十錢だが六匹に負けときませう』

『お爺さん、この小さい奴、なんだかよく動かないぢやないか。すぐ死んぢまうだらう』

『ぢや、もう一匹負けやせう。なあに、死ぬつたつて二三時間は大丈夫でさあ、生きてゐるうちが、お樂しみですわい』

五匹十錢の實値に一匹負けて六匹にしても、もう一匹入れて七匹にしても、利益の中に打算されないめだか一匹の相場と、瀕死のめだか一匹の相場とを大膽で値踏みしてゐる街頭の辟をきいた。

洗練されたモダン・ガールを値踏みする資格のない踵のへつた泥靴の男と、あはよくば半襟一枚の手附で女を盜まうとした好色漢とによつて、辛うじて女群のメニウの最終にトーストパンのやうに書き加へられた市價(マーケット・プライス)を美知代は彼女自身で値踏みした。(一九二九、五、二六)

留吉

山川朱實



吉田雅子

お芳は土間の黒光りのしてゐる板の間に腰かけて、この春生れた松吉に乳を飲ませてゐた。

働きものゝ留吉が、一時間も前から裏の納屋で、籾をすつてゐる重さうな音がしてゐても、足の惡い姑のおもんが火の氣のない圍爐裡に向て、煙草をすつてゐるのを知つてゐても、氣にも止めないで、松吉のやはらかい生毛をなでてゐる。そしてどこか松吉の眞實の父親に似てゐる額ぎわだと思つたりしてゐた。自分を捨てゝいつた人の事を思ひ出してももうさほどに腹の立つことのやうに思はれなくなつた。

「松はまだ乳やめねえか」おもんは見兼ねて聲をかけた。

「あゝ、もうぢきだ」

それでもお芳はべつたり腰掛けたまゝ立たうともしない。

おもんは呶鳴りたくなつて、じり〱上り框ににじり出て來た。

「お國よ！　お國！」

子守のお國は籾摺りの手傳ひをやめてとんで來て、默つてお芳に背を向けて立つた。

留吉は生れながらの啞である。耳はどうしたことか、人並はづれてよく聞えるので、小學校の先生や、夏休みに歸つてくる村長さんの息子が、いゝ醫者に見せたら或は口が利かれるかもしれない、といつてくれても、貧乏百姓の身分で、そんな事は考へるだけでも恐ろしい事だつた、全く雲の上の話である。少しでも學校にいつた留吉

はそれでも、いくらか世間に對して不平がないことはなかつたが。
留吉は耳で物を聞き、そして口では何ひとついへないもどかしさ、どうかすると口を二つに引き裂きたい衝動にかられながら、いつとはなしに二十四年の月日が過ぎた。口が利けないだけに、啞であるだけに、留吉の性慾は整理の出來ないつらさに責められた。お芳をお土產附きで貰つたのも其のためであつた。作馬おぢのとこのお時はいゝ娘だと思ひつめていても、啞の留吉にはお時どころか誰れも相手になつてくれる女はなかつた。

おもんは又、伜が啞であるために、だらしないお芳ではあつてもそこは遠慮し、言ひたいことも自然控へなければならなかつた。

「松吉は乳はもうえゝぞ、早うあんねに負さつて遊んでこいよ」

おもんは優しく松吉に呼びかけた。

お芳は兩乳をだらしなく出して、膝までだした赤い腰卷の上で、松吉をあやしてゐる。

「あねさま、もう負うよ、あにさんが呼んで來いて」

「せくことあるもんか、日はながいよ……餘り日の照るとこゆくでないよ」

半分眠りかけた松吉を負つて、お國は飛んで表に出ていつた。

お芳はゆつくり裾からげをしてから、そこの竿にかけてあつた手拭をとつて、姉樣かぶりにして外に出た。

おもんはがつかりしたきもちで、煙管をパタンと疊の上に投げ出して

「あゝ、あゝ、つらやな、つらやな」

さういつて後に兩手を突いて背延びした。隣家の納屋から、勢のいゝ籾摺りの音が聞えて、若い男女の笑聲がはしやいで聞えてゐる。

お芳は留吉に並んで、籾摺り臼の柄をとつて押した。留吉はまはしながら一足横に寄つて、お芳の立つ場所を廣くしてやつた。留吉はお芳の顏をみて笑はうとしたが、笑へなかつた。口の利けない留吉は自分の感情を表はすには笑ふか睨めるより表情の仕樣がなかつたから。

籾は臼ですられてざあざあと籾殼と黒い米とが一所になつてこぼれてゐる。下に敷いた蓆の上に山のやうに積つてゐる。そうして臼がからになるとお芳が大きな箕で籾をすくつて入れるのであつたがお芳は入れるたびだらしなく摺つた米の中に籾をこぼした。留吉はまわしてゐる手は休めないで、其の跛足を上げてお芳を蹴る眞似をした。そして彼の顏はひんまがつて、憎惡にうづく顏をしてゐる。

それがたび重つて、留吉は思はず何か叫んだ。ふだんは自分のあやしげな聲が、自分の耳にひゞくのを恥ぢて、殆ど聲は出さなかつた。留吉は今出した其の聲が猿のやうに、其の上呆れるほどの悲鳴になつて聞えたので二重の腹立しさでやけになつて臼をまわした。

午前になつて、納屋の隅に積んだ籾俵が半分にへつた。留吉の眼は充血して、鈍なお芳を今にもひつ叩きさうな樣子をしてゐる。

表から歸つて來た松吉が、お國の背中で火のついたやうに泣いてゐる。まだ十二のお國はあやすことをしないで、自分の身體をゆすぶりながら、

「里のおみやになにもろた――」

と松吉の泣きごゑにまけない大きな聲を出して唄つてゐる。

留吉はそれをきくともう我慢が出來ない、と思つた。

「お土産附きの嫁さん」

こんな噂を村のものがしてゐることを知つてゐる。「自分の口さへ利けたら」さう思ふ心は、お芳を貰つてから一層慘めに、留吉の心をさいなんだ。

しかも昨夜あのお時が、薄野呂の常太と祝言したことを思ふと、留吉は自分が啞であることを一層くやんだ。お時は實際美しいばかりでなくいゝ氣だてのやさしい娘であつた。留吉とはもう二三年も前から、道ですれ違つたりする度に、厚意のある微笑を二人で取り交はす位であつた。お時がにつと笑つてとほる白い額を、どんなに可愛く思つてゐたかしれない。どうせ啞の自分の處へなど來つこはないと、思つて諦めてはゐたが、人もあらうに常太の嫁になつたかと思ふと、留吉はお時のために諦めかねた。あの白い額や、白い齒を惜しげもなく常太に見せることを考へるだけでもむしろ穢いやうにさへ思つた。留吉は「ペッ！」と納屋の前に唾を吐いた。

そしてふりかへつて蓆を敷き直してゐるお芳の太い黑い足を見ると留吉はなほ更お時が好もしかつた。そして何もかも常太が取つて了つた今朝を思ひ、留吉は腹立ちや口惜しさのやり場がなく、も一度奇聲をあげて、お芳を叱りつけた。

留吉が愛慾に胸を焦してゐるまに、秋の日和は容赦なく曇つて、今にも降つて來さうになつた。留吉の心はその上にも焦々して來た。

お芳はさすがに嫁入り當時こそ、人のいゝ姑や、男振りのいゝ留吉の愛に慣れて、元〻放縱になり、もう今では啞といふことによつて、お芳ははるかに優者の立場にさへあつた。結局先の男より啞でも留吉の方がいゝ位にも思つてゐた。

松吉はまだ泣いてゐる。

「松に乳やつてくるよ」

留吉は空を指して、兩手で雨の降る眞似をしてみせた。

「まだふりやしないよ」

お芳は何だ、といふ顏していつた。

留吉はいきなりお芳の頰をはり倒した。啞でなければ、もう一度

「今に降つてくるよ」といふ所であるが、口の利けない留吉はさつするより外に仕方がない。お時の顔がまだちらついてゐる。
「何んでぶつたんだよう」
留吉は又お芳の右の耳のあたりを、力任せに撲りつけた。そして「馬鹿！」といふつもりで聲を出したが、やつぱり其のこゑは「あー」とも「キー」ともつかない癇高い聲で、留吉自身の耳の鼓膜をつき破るやうにひゞいた。留吉はもつとお芳を叩きのめし、泣いてゐる松吉は、形のなくなるまで踏みつぶしてやりたいと思つた。

立ちにくい足を引きずつて、おもんは土間に下り竈の下に榾を焚きつけた。煙が草葺き屋根のひさしにまつわつて、重くかぶさつた空氣に押され、いつまでも漂つてゐる。重い空氣は人々の頭をさへ押へつけてゐるやうであつた。

板の間に四つの四角い箱の膳が並べられて、けさの殘りの味噌汁に黄色い澤庵の十切れほど入つた丼が、板の間の眞中にだしてある。留吉が裏の井戸端で手を洗ふ音がきこえて、やがてのつそりと入つて來た。
おもんは釜の下を燃しながら、苦しさうなふくみごゑで聲をかけた。
「はかゞいつたかや」
留吉は五俵摺つた、と手ぶりでいつた。
「そりやえらかつたのう、一人だもんな」
留吉は手を振つて苦い顔をした。
おもんは横をむいて板の間に上つた。
みんなめい／＼につめたい麥飯に澁茶をかけては何杯も代へて食べてゐる。
おもんは思ひ出したやうに
「今年は何俵うちに殘るのぢやろ」
留吉は八本指を出して見せ、序に十二俵が年貢米になることをがつかりした風にして見せた。
「仕方ないよ、地主さんのもの作らして貰ろうてるんだもん、作らなにや一俵もないのぢやもんのう」
「こんな無法なことはない、遊んでゐるものが十二俵で、汗水流して一年中働いたものが八俵といふのは……」
といふ説明を、手眞似で母にいつても、おもんは「土地は地主さんのもの」といふことを楯に、どうしても留吉のいふことに贊成しなかつた。
「せめて十俵あれば秋までは食つてゆけるが、八俵では夏までの飯米しきやない」
といふ説明は、おもんの心にいくらかひゞいた。一年中働いて一

年中の飯米がないと思ふことはやつぱり年とつたおもんの心にも不合理を思はせた。留吉はも一度

「せめて十俵あれば秋まで米に困らない。十二俵あれば、いゝ醫者に見せて、自分の口が利かれるかもしれない」

と說明した。

おもんは情ない顔をして、堅い麥飯をポツリ〳〵と喰べてゐる。之れよりも六分位も麥の入つた冷飯が、病身な母親にはつらさうに見えた。それでも息子のいふやうな地主さんを恨む氣にはなれなかつた。貧乏人の心が骨までしみこんでゐた。唯せめて街の病院までやつて、留吉の口が利かれるものか診せたい、と思ふ時だけ心が、重くなつたが、それとても貧乏人は仕方がない、と諦めることによく慣らされてゐた。

「お芳はどこへ行つたのぞ」

留吉は自分の口の中に、自分の大きな握りこぶしを押しこんで了ひたいと思つて慌てゝをしまいの澁茶を一口のんで立ち上つた。

そこに松吉に乳をふくませながら、お芳が入つて來た。

おもんは、

「はやう食べんかや」といつた。とすぐはね返すやうに、

「喰ひたうない」とぶつきら棒に投げつけた。

留吉は振りかへつてねめつけたが、ふと留吉の考へは違う方に働いてきた。

お芳が實家に歸るといひだしたら、と或る冷いものがすつと燃えてゐる身體の中を通りぬけた。「お芳がいんだらもう嫁に來てもない」といつた母親の言葉が、急にいき〳〵と留吉の頭に浮んで來た。留吉は其のみじめさを思ふと堪らなくなつた。燃えやすい彼はさう思ふと何か恐ろしいことが、目先きにちらついてゐるやうになつて、けさからの手荒な行爲がわな〳〵と、ふるえるやうに生きかへつて來た。留吉は急に顔色を柔げた。そしてお芳の側により、手持無沙汰の氣から、ふと松吉をあやさうとして、松吉を抱いたお芳の右の腕の上に顔をさし出した。するとお芳は力いつぱい留吉の腭をはね上げた。其のはずみに笑ひかけてゐた留吉の齒は、カッンと音をたてて、いやといふほど腭を上に突き上げられた。留吉の下唇からは、赤く血がにじんでゐた。

留吉はいきなりお芳の脊中を、うんとどやして板の間に叩きつけた。松吉は大きな音をたてゝ板の間に落ちた。

おもんは驚いて、

「何する！」

と泣き叫ぶ松吉を抱きあげた。

お芳も負けてはゐなかつた。

留吉は今朝からの興奮が頂上に達して、夢中になつてゐた。猿の

やうな聲を出す恐ろしさも、腹立たしさ寂しさも忘れて、お芳を憎むことに逆上してあらん限りの聲を出して叫んだ。留吉は殆ど何も覺えてゐなかつた。

どうしていゝか分らないおもんは、唯おろおろと松吉をあやしながら、

「たいがいにしてくれよ、たいがいにしてくれよ」

といふばかりであつた。

武者振りつくお芳との亂鬪が、どちらかゞ殺されるのでないかと思ふほど烈しかつた。

と母親は何かにびつくりして

「おう、留吉よ！」

と叫んだ。其の聲が余り大きかつたので、さすがに夢中になつてゐた留吉も、お芳も、驚いて母親の方を見た。

「留吉よ、お前、口が利けたぞう」

母親はまだ叫ぶやうにいつてゐる。

今は留吉もお芳も喧嘩をやめて母親を見た。

「留吉、もいつぺん馬鹿！といつてみろ」

留吉は思はず

「馬鹿！」といつた。

留吉は母親以上に驚いた。

「馬鹿！　馬鹿！　馬鹿　馬鹿　馬鹿」

お芳はつつ立つたまゝ恐ろしくなつてふるえてゐる。

「おつ母あ！　おつかあ、お　おつかあ」

「留吉よ、留吉よ！」

おもんは松吉を抱いたまゝ嬉し泣きに泣きだした。

留吉は

「馬鹿！　おつかあ、お芳、めし、茶腕、おくに」

と見るもの何でも聲に出していつてみた。吃りながらでも、何でも、いへることに氣のついた留吉は、泣くとも笑ふともつかぬ聲を出して、

「俺あ口が利けた。おつ母あ、俺あ口が利けたあ」

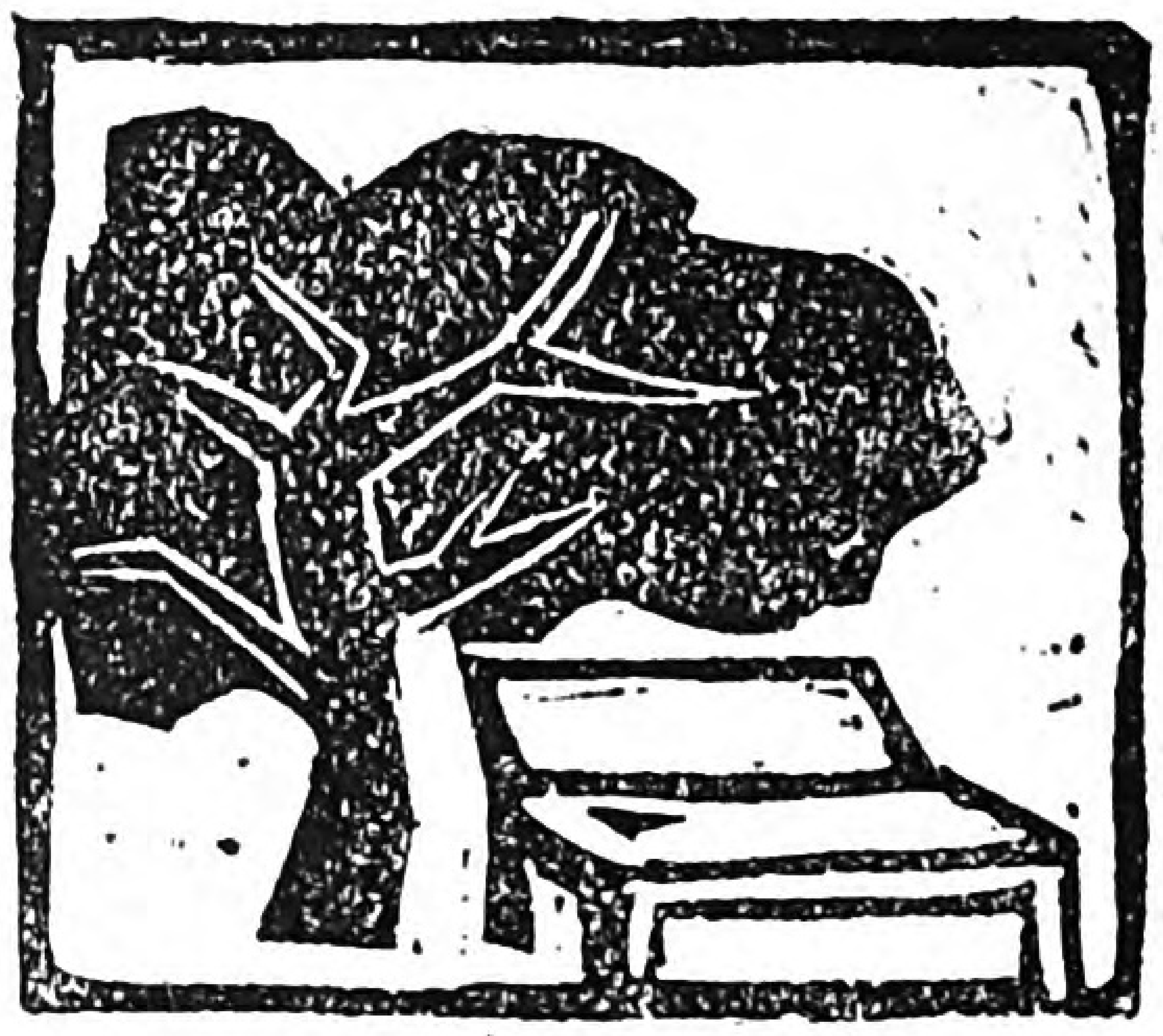
といつて泣きだした。そうして留吉は板の間にうつ伏した。

夢ではないかとも思つた。明るいほがらかな、幸福な天地が彼の前に開けて來た。

余り大きな聲であつたので、隣の人達もびつくりしてでて來た。

留吉は「ありがたうございます。ありがたう」

と無暗みにお叩頭をしてゐる。お芳は板の間に腰かけてたゞしよんぼりとしてゐた。



吉田雅子

終列車 ―一幕―

（「被清算者」の一）

岡田禎子

田舎の停車場の淋しい待合室。
冬の眞夜中。

咲　（入つて來る。時計を見る。闇を透かして外を見る）

驛員　（火鉢を持つて來る）お寒う。

咲　お寒う。上りにはまだ間が有りますか。

驛員　終列車になりますけれなあ。一時間位。――まあおあたりなさいや。

咲　え、ありがと。

驛員　今頃上りでどちらへ？

咲　去にますのよ。

驛員　はあ、はあ……。（去る）

咲　（火鉢に寄る。煙草をふかす。考へ入る。時計を見る。外を透し見る。微笑。愼ましい。が何うやらなか〳〵に幸福らしい。）

孝次　（入つて來る。軍服。お咲を見て、一寸躊躇するが、直ぐ歩み寄る）お訊ねしますが……。

咲　え？

孝次　貴女、城下のお咲さんぢや有りませんか？

咲　貴方は？

孝次　松造からのお使ひです。

咲　えツ？（腰浮く）

孝次　お咲さんですか？

咲　え丶、私はお咲。――松さんから今頃…？

孝次　今夜松造は來られません。

咲　えッ！（突立つ）

孝次　これに、みんな書いて有ります（胸のポケットから封書を出す）

咲　まあお待ちなさい。一體何うしたと云ふふんです？　お前さんは誰です？　今夜のことを知つとるんですか？

孝次　知つとります。私は松造の弟の孝次です。

咲　ほう、弟さん！　――だけんど、何うして松さんが來ずに、弟さんなんぞが來ることに成つたんです？

孝次　兄貴は後悔して改心したんです。もう止める事にしました。これを讀んでお呉れなさい。

咲　お待ちなと云ふに。松さんが後悔したんぢやと？（唇を嚙む）

孝次　後悔しました。今度こそ眞底から眞人間に成ると、皆の前で誓言しました。

咲　誓言？　皆の前で？　御大相に！（肩をゆする）――一體、誰との計らひなんぢや…（呟く）

孝次　え？

咲　松さんはな、誰と相談して後悔なんぞしたんぢや！（歩き廻る）

孝次　（眼で追ひつ丶）兄貴は、自分で悪かつたと氣が附いたんですそれで、今夜私を此處へ寄越して…。

咲　（肩を聳かし）自分の代りに、私と駈落しろとお云ひかえ？

孝次　そんな事は云ひません。お咲さんも、もう兄貴の事は忘れて眞面目に年期を勤めてお呉れと…。

咲　お言傳かい？　ありがと。去んだらそう云ふとくれ。花園町のお咲と云や、これでも城下では賣れた顔、後悔とやらした男にその後のさいきよ迄やいて貰ひますまい！

孝次　この手紙に、色々書いて有ります。

咲　まあお待ちよ。松さんはお前に、今夜斯う／＼ぢやと話したんかい？

孝次　皆の前で話したんです。

咲　おや／＼！（冷嘲）

孝次　それを話したんで、兄貴の心が本當に直つたと云ふ事が判つたんです。

咲　それで、お前が駈落の取消に來てお呉れか…。（ともすれば放心しそう）

孝次　數々のお世話を、貴方にお禮も云ひ度いが、取込み中では有り、皆に疑はれるのも本意ないけれ。と云ふとりました。

咲　ふん。――お前、感心な兄貴ぢやとお思ひぢやらうなあ。

孝次　え？

咲　皆も嘸お喜びぢやらうなあ。

孝次　それはもう、兄貴が無茶やりよる頃は、涙一ッ滾さなんだお

母さんが、泣いて喜んどるんです。
咲　えゝ事をしたとお思ひぢやらうなあ。
孝次　これで、私も安心して御奉公が出來ます。
咲　成程。お前は兵隊さんか……ふん。
孝次　（しよんぼり）お父さんに知らせてやり度いと、お母さんは泣くんで……。
咲　知らせたらよかろ。
孝次　事の後先で、間に合はなんだんで……。
咲　何が間に合はなんだと？
孝次　お父さんは死んだんです。
咲　えゝ？
孝次　溝へはまつて死んだんです。
咲　お父さがかい？松さんの放蕩を苦にしてかい？
孝次　さあ……。
咲　判つたよ。――とんだ狂言を打つたもんぢや。
孝次　兄貴は、一週間住家へは寄りつかなんだそうな、もう來てゝ了う心算の家へ、金の工面にでも戻つたんぢやろ。――そこへ、親父が死んどつた……。
咲　なんぼうならず者でも、ぎくうと參る所よなあ。
孝次　私も前の日曜には戻れなんだ。可哀想なお父さん……。
咲　惨めなお咲……。

次孝　え？
咲　なあお前、松さんは後悔した。それで眞人間に成つた、とお前さん達はお思ひなんぢやろ？
孝次　確かに、今日の兄貴に嘘は見えませなんだ。
咲　所で、初めから眞人間で、今更後悔しやうも無い人間が、若しこの事に關つて居つたら、何うしたらえゝとお思ひだえ？
孝次　え？
咲　まあこのお咲を見てお呉れ。――どないして今日抜け出して來たか……。
孝次　それは兄貴も氣にして居りました。
咲　ほう、氣にしてお呉れかえ？
孝次　門口迄私を送つて來て、親方にようお詫びをして、決して短氣をせんやうにと……。
咲　そうつと言傳て呉れたんぢやろ。
孝次　意氣地なしの松の事なんか忘れて、爲に成る旦那を取つてお呉れと云ふとりました。
咲　可哀想になあ……。
孝次　ほんに可哀想ぢや。お父さんを年寄らせたり、お母さんを病氣にしたりしとつた頃は、憎い男ぢやと思ふたけれど……。
咲　ほう、兄さんが可哀想ぢやとお云ひなのかい？
孝次　私が年上ぢやつたら……。

咲　何うおしだえ？

孝次　何んな苦勞をしてゞも、二人を一緒にして上る。

咲　ありがと。お前さんは可愛い子だよ。何うやら松さんに似て來たやうな。——若い兵隊さん、お使ひを御苦勞樣。もうお去によ。

孝次　えゝ。此が兄貴の手紙です。

咲　もう澤山。お前さんから聞いた丈で充分ぢやよ。お咲にはとつくりと得心が往つて、氣嫌よう別れたと云ふてお呉れ。

孝次　それでも一應は讀んでお呉れなさい。

咲　余計な事ぢやよ。別れ話しに二ッは有るまいぢやないか。

孝次　それでも、兄貴が一所懸命書いたんですけれ‥‥。

咲　何の爲にお書きだえ？　所詮お咲を說得せうと云ふんだらうぢやないか。お咲は說得されたよ。ごらん。

孝次　それでも、此を取つて貰はんと、私のお使ひは半分より出來んことになる。

咲　勝手ぢやなあ、お前逹は。

孝次　えゝ？

咲　考へてもお見よ。今日二人で旅に出やうと云ふのは、二人の都合を、色々喰ひ違ひの多い二人の都合を、折れ合ふて〱談合しての上の事ぞや。それを松さんは、勝手に一人で改心とやらをして了ふた。使ひのお前は又、人の氣心も判らず、自分の役目に夢中に成つて、見度うも無い三行半を、無理無體讀め〱と云ふ‥‥。

孝次　お咲さんは怒つとる。

咲　さあ、怒つても筋は立ちさうぢやよ。

孝次　そんなら、得心はして貰へるんですか？

咲　せんと云ふたら何うおしだえ？

孝次　私は賴む心算で來た。さあ、これを見てお呉れなさい。（封書を押しつける）

咲　（取つて封を切る。書面と金包みとが出る。冷嘲）ほう！（さて讀み始める。終つて、悲痛に）は、は、は、孝さん、さ、見てお呉れ、お前の兄さんは堅いお人ぢや！

孝次　生れは堅い男ぢやつた。改心したら、又そうなるのが當り前ぢや。

咲　（手紙を卷いて袂に、金包は手に）成程、こりや堅いお人ぢや。立派に改心したと見える。

孝次　えゝ、立派でござんした。

咲　本當に立派ぢや。精々みんなで讚めてお上げよ。

孝次　それでもう、納得して呉れましたか？

咲　さあ、せずば成るまいぢやないかな。

孝次　そんなら、これから兄貴を引張る樣な事はせん樣にお願ひします。

咲　（嘲笑）斯う道心堅固なお人が、何うして私らの歯に合ふものかな。——（ほろりと呟く）ほんに立派な男ぞや。

孝次　それで安心しました。

咲　さうぢやらう。お前さん方には、皆得心が往つたらうけれなあ。

孝次　もうお別れします。

咲　御苦勞さん。——所で。佛樣に何か手向け度いが、何の用意も有りませんけれ、此を持つて行つてお吳れ。（金包みを共まゝ返へす）

孝次　え？

咲　私から佛への香奠です。

孝次　とんでもない！

咲　何をそんなに吃驚なさる？　お前達の吝な手切金を、御大相にお返しすると云ふとりやせんよ。佛へのお線香よ。ほんの志よ。

孝次　そりや不可ん！

咲　子供ぢや有るまいし、片使ひ丈より出來んのかえ？

孝次　そんな事は出來ません。

咲　兄さんの言傳てを持つて來たら、返事も持つて去ぬるのがお使者の役目ぢやないか。さあ、これを、私の返事を持つて去んどくれ。

孝次　何うしてもなあ。

咲　さうとも！（金包みを孝次のポケットに押込む）さやうなら。折角お大事に、と云ふてお吳れ。

孝次　——そんなら貰ひます。ありがと。

咲　御苦勞さん。

孝次　さやうなら。御機嫌よう。（去らんとする）

咲　（見送つてゐたが耐えかねて呼び止める）なあ孝さん、お前さん達は、私がこれから何方向いて往くか、そんな事は考へて見た事もなからうなあ。

孝次　町へ去ぬるんぢやないのですか。親方の所へ？

咲　置手紙して飛び出した親方の家へ、逃げた女郎が去ぬるのかえ？

孝次　何うしたんぢや。

咲　男の工面を當に、身ひとつ漸々盗んで來た女子一人が、この夜更に……（獨語調に）さあ、何方向いて行つたもんぢやらう。

孝次　こりや大事ぢや。

咲　まあ〳〵、お前さん達は安心よ。兄さんの改心は見事なものぢや……。

孝次　（再び金包みを取出し）なあお咲さん、やつぱり此は取つて貰ひましよ。

咲　（肩をゆする）ははは。馬鹿らしい。私はこれでも、出した香奠を返へされて、引込める樣な女子ぢやないよ。

孝次　それでも、お咲さんは直ぐ困るのぢやないか。

咲　それと此とは別よ。さあ、あはてずにお去に。村迄二里は有らうがえ。氣を附けてお行き。――暗い晩よなあ。

孝次　それに寒い晩ぢや。――本當に、どうする心算ぞな。

咲　お前が側でわい〳〵云ふて呉れなんだら、直ぐにも決る事よ。さあ、去んどくれ。さやうなら。（孝次に脊を向け、外の闇に見入る）

孝次　（獨語調に）放つといてえゝかなあ。――町迄送りませうか？

咲　（振返り）何處へ？

孝次　お店まで。

咲　阿房らしい！　店、店と、さも其處が私の家みたいに云ふてお呉れでないよ！　さあ、去んどくれ！

孝次　本當に、去んでえゝかなあ。

咲　しつかりおしな兵隊さん。女子ぢや有るまいし……！

孝次　そんなら去にます。

咲　さやうなら。

孝次　（哀訴的に）短氣をせんやうになあ。

咲　苛ら〳〵と）さやうなら！

孝次　短氣をせんやうになあ……。（心を殘して去る）

咲　（目送つたまゝ放心してぼんやり立ちつくす）

榮　（定まらぬ足取で入つて來る。二人乍ら各自の想ひに沈んでゐて相手を氣附かない。）

（暫時。――）

榮　お前さん、お咲さんぢやござんせんか？

咲　おや〳〵、お榮さん？

榮　お珍らしい。今時分、こんな所に、何うしてまあ……？

咲　お前さんこそ何うおしだえ？

榮　そうよなあ。何うやら來る氣も無しに、こんな所へ來て了ふた……停車場ぢやなあ。

咲　そうよ。餘程の道ぢやが、家から出てお出でかえ？

榮　あゝ、家から出て來ましたよ。

咲　（ちつと相手を見て）何ぞ有つたんぢやな？

榮　………。

咲　まあ此方へお出でよ。（火鉢の側に掛ける）

榮　（亦寄つて來て、火鉢を挾んで掛ける）

咲　何ぞ有つたと見えるなあ。

榮　――色んな事が有るもんでなあ。

咲　お久しいなあ。虎さんはお達者かえ？

榮　ありがと。

咲　小さいのも元氣かえ。お前さん幾人に成るのかなあ。

榮　三人生れたんぢやけど、誕生すまん中に二人は死んで了ふた、乳が足らんのでなあ。

咲　可哀想に。——お君さんは、まだ家にお出でかえ？
粂　あの人は一生出て行きやせんよ。
咲　まだぶく〳〵膨らんどるかえ？
粂　あの病氣は癒らんそうな。
咲　やれ〳〵。お婆さんはまだ生きとるのかえ？
粂　私の方が、先に濟んで了ひそうぢや。
咲　可哀想に。虎さんも骨ぢやらうなあ。
粂　あの人も不仕合せ者よ。くしや〳〵するのに無理もない……。
咲　——お前さん、今晩逃げてお出でぢやらう。
粂　さい〳〵の事ぢやけど、辛抱のならん事が有つてなあ。
咲　辛抱者で評判のお前がなあ。——世の中は辛抱甲斐の無い所よ。
粂　私もこの頃そう思ふ。
咲　私も今晩そう思ふた、
粂　え？
咲　馬鹿な話しよ。
粂　お前さんにも、何ぞ有つたんぢや無いのかえ？
咲　大した事は有りやせんよ。私らの様な者に、お前さんの様な事の出來やう筈が無いがな。
粂　ほんに、お前さんは仕合せ者ぢや。村の女子らは、皆お前さんを羨やんどるがな。
咲　阿房らしい！
粂　何時も綺麗にして、着物の好みでも云ふとりやえゝのぢやらう。
咲　ほう！
粂　我儘氣儘に、男を好いた嫌ふた云ふとりや日が暮れるのぢやろ。
咲　（可笑しがり）成程。
粂　米の値も知らず、——爪の手入れ迄すると云ふなあ。（お咲の手を取つて見入る）
咲　ふん。そんな風に、村では噂するのかえ？（ふと相手の手を見て）ほんにお前の手は非道い！
粂　私の胸の中は、まだ非道からうと思ふがな。
咲　（お粂の手に染々と見入つて）ほんに苦勞をすると見えるなあ。
粂　馬鹿に成るがなあ。
咲　（突然相手の手を握り締め、切なく）あゝ。それでも……！
粂　（驚いて）えゝ。
咲　（相手の手を放し、佗しく微笑んで）御亭主は喜んでお呉れぢやろ？
粂　（佗しく）それがなあ……。
咲　差向ひに成つた時は、劬つてお呉れぢやらう？
粂　それがなあ……。

咲　虎さんの優しいのは、お前の辛抱强いのと一緒に、村での評判もんぢや。

粂　昔は、これでもちつとは増ぢやつたが……。私、そう思ふんよ。男には二人お神さんが要るらしい。

咲　何ぢやと？

粂　一人ではなあ、何うしても出來んやうな事を、男はして貰ひ度いのよ。

咲　阿房らしい。

粂　いゝえ。お前らはそんな事御存じ有るまいが……今晩もなあ。

咲　女子でも引張つてお出でかえ？

粂　出て行けと云ふんよ。何うしても。

咲　何かの行きがゝりぢやろ。

粂　うゝん。もう毎日の樣に云ひ罵るのよ。ちやんと判るのよ。私が不足に成つたんぢや。――それでも、私が出たらやつぱり困るぢやらう。

咲　當り前よ。

粂　それでも、私丈では足らん事が有るんでなあ。

咲　虎さんが、そんな事をお云ひかえ？

粂　男は、鍋釜の爲に女房持つとるんぢや無いと云ふのよ。

咲　（皮肉に）男らしう出たなあ。

粂　（心細く）それでも女子は、家の事してゐると、身づくろひなんぞ構ふては居れんがな。

咲　それを、せいとお云ひかえ？

粂　私を見てゐると……第一この手からして氣に喰はんそうな。

咲　これは面白い。あの虎さんがなあ。

粂　本當にお前なんぞは美しい。そんなに綺麗にして居つて、ちやんと親を養ふて行けるんぢや。村の者が城下へ出ると、ようお父さんの所へ寄るそうな、何時でも素手で戻した事は無いと云ふとる。お咲さんは働き者ぢやと戻つては噂をするのぢや。

咲　そうかなあ。――お咲は働き者か、それで悦に入つとるのはお父さん丈ぢや。

粂　お前さんにしても、この上の仕合せは有るまい。

咲　（少時皮肉な顔に沈默して突然自棄に）私はお前が羨しいのよ。

粂　何をまあ！

咲　羨しいとも！　苦勞の仕甲斐が有るものな。

粂　何の！　私の不仕合せは底抜けぢや。

咲　お前には御亭主が有る。

粂　その亭主が苦勞の種に成る。

咲　私には、亭主の無いのが苦勞の種ぢや。

粂　えゝ？

咲　私の樣な女子には、女子らしい喜びと云ふものが無いのぢや。

粂　それは私の云ふ事ぢや。――精一杯身を磨いて見る事もせず、

忍ひ切り着飾つて見る事も出來ず…ほんに、家の女子は鍋釜とひとつぢやもんなあ。

咲　まあお聞きよ。——私がその鍋釜とひとつに成り度かつたら?

榮　え〻?

咲　（ふつと、押戻されて默す。——長い〳〵沈默の後）こんな事は一體まあ誰のお仕込みなんぢやろ。學校の修身の先生か親か。村の人か。女友達…男…?

榮　何ぢやな、お前?

咲　とまれ、私らは不仕合せに仕込まれたよ。これで、何うして仕合せになれるかい!

榮　え〻!?

咲　私は何時も思ふとつた。思ふ事と云へばそれ許りぢやつた。—え?　若し私が、町の男にかさねを揃へて貰ふより、亭主と云ふ者の爲に裸にされた方がえ〻と思ふたら? お客に撫でられて暮すより、自分の亭主と云ふ者に打たれて見度いと思ふたら?

榮　それは、それはいかいもの喰ひと云ふものぢや。

咲　亭主と云ふ者の世話を、頭の先から足の先迄、みつちりとして見たかつたら?

榮　そうかなあ…。

咲　亭主と云ふ者の爲に、心迄お前の手の樣に成る程、苦勞をして見度かつたら?

榮　お前も年をとつたなあ。

咲　とし?

榮　お前の樣にしてゐたら、長年の間にはえ〻旦那も見つかるぢやらう。

咲　旦那は見つかるぢやらう。が、亭主は見つからんのよ。

榮　お前は町でも全盛ぢやと聞いとる。持つ氣なら、亭主に成り手は多過ぎやう。

咲　亭主氣の有る樣な男は、私の眼の屆く邊へは來んと見える。

榮　そんな筈が有るもんかな。

咲　たまに亭主氣を起して見ても、直ぐ後悔するそうな。

榮　お前の樣な女房持つて、後悔する樣な罰當りを見度いもんぢや

咲　一足早かつたらな、そんな男の弟が見られた。

榮　え〻?

咲　私は、今夜駈落ちする所よ。まあ〳〵、そう吃驚せいでも…しやうとした所よ。——それを、男に斷られた。

榮　え!——もう厭ぢやと云ふのかえ?

咲　弟と云ふのが使ひに來てな、兄貴は後悔したと云ふのよ。たまに亭主氣の有る男と云ふとこんなものよ。女子一人放り出すのを、世間では改心と云ふそうな。

榮　その男と云ふのは、お前さんの御亭主に釣合ひそうなお人ぢやつたんかえ? 何んな家のお人ぢや。

咲　らちも無い百姓よ。これならと思ふたんぢやが、それでも此方が釣合はんそうな。ふん、改心か！
榮　そのお人も、一度はお前さんと一緒に成らうと云ふたんかえ？
咲　まあな。
榮　お前も、そのお人なら一緒に苦勞して見やうと思ふとつたんかえ？
咲　そうぢやとしたら？　可哀想と、お思ひぢやないかえ？
榮　お前さんがなあ。
咲　その男の爲に、お前がした樣な苦勞を喜んでする覺悟ぢやつたら？
榮　……。
咲　可哀想とお思ひぢやらう。（默。——）棄てられとる事も知らず。このお咲は今日一日樂しい夢を見たよ。何にも知らんのを苦にしたりしてな。——お針の道、朝晩の炊事雜用…やつぱり遊女上りは不可んと云はれて、泣き出したよ。
榮　お前まあ、何を云ふとるんぢや。
咲　え！——あゝあ、私は泣き度いよ。
榮　（慰めて）男には、不實者が多いけれなあ。
咲　（考へ深く）不實などと云ふのとは違ふよ。
榮　違ふものかやつぱり不實なんぢや。
咲　——一時は、ほとぼり冷しに高飛びはしても、早う身を落ちつけて家の人を呼んで、皆を、奉公する氣で世話せうと思ふとつた……。
榮　可哀想になあ。
咲　それこそ、女子らしい樂しみと云ふもんぢや。
榮　さあな。
咲　男が改心したんで、皆泣いて喜んだそうな。
榮　お前の所へ、通ひつめた人でゝも有つたんかえ？
咲　それ程でも無かつた。
榮　親内の身に成りや、心配でも有つたらう。
咲　男は改心すりやえゝ。女子は何うすりやえゝのぢやらう。
榮　ほんに、何うする心算かな。
咲　私に、何ぞ改心のし所が有らうか。
榮　さあ……。
咲　叩き込まれた女子の道を、忘れず覺えとつて、生涯の願掛けにしたと云ふ丈ぢや。
榮　それで、店の方は何うして出てお出でぢや。默つて逃げて來たんかえ？
咲　そうよ。
榮　そんなら、今頃は大騷ぎぢやらう。
咲　そんな事ぢやらう。
榮　斯うしちや居れまいがな？

咲　斯うしちや居れまいな。

咲　困つた事に成つたなあ。それより、お前は何うする氣かえ?

榮　さあ……。

咲　早う去なんとなるまいがな。

榮　追ひ出された家へかえ?

咲　御亭主の所へよ。

榮　――それは出來ん。さい〳〵の事でなあ。繰返へすのは、もう厭に成つた。（少時。――）私は、何でも鐵道へ出さへすりや、一切片が附く樣な氣がして歩いて來たんぢや。

咲　えゝ?

榮　お前の話しを聞いて、私は物が判つた樣な氣がするよ。

咲　何が判つたんぢや。

榮　――私、死んで了ひ度い。

咲　御亭主を置いてかえ?

榮　それが苦にも成らんやうに成つた。

咲　子供も殘るぞえ?

榮　勝手に生きて行くぢやろ。

咲　お前は、私の欲しい物を皆持つておゐでぢや。私の話しを聞いても、お前にはそれが惜しうは成らんのかえ?

榮　お前の話しを聞いて、餘計何とも無う成つた。

咲　お前の云ふ事は判らん。

榮　（考へ深く）　ほんにさうぢや。お前の云ふ通りぢや。亭主と云ふものは少ないものぢや。

咲　えゝ?

榮　男を亭主にするのは、骨の折れる事よ。

咲　お前、正氣で居るのかえ。

榮　何うして?　こんなに正氣に成つた事は、生れてこのかた無かつたよ。――（獨語調に）私はもう、何の心殘りも無うなつた。……（ふと耳を澄し）上りが來るのかな?

咲　え?（立つて耳を澄す）あゝ、ほんに、……。

榮　もう何も、心殘りは無うなつた。（ふら〳〵と立つ）

咲　お前の云ふ事は判らんけれど、私も何の心殘りも有りはせん。

榮　（ふら〳〵と出て行く）　これが終列車ぢや。

咲　さうぢや。終列車ぢや。（お榮に跟いて、吾にも非ず出て行く）

（長い、重苦しい間。――列車轟々と轟き入る。車掌の寂びた呼聲。――急に四邊が騷々しく成る）

――飛び込みぢや!

――二人ぢや!

――心中ぢや!

――女同志ぢや!

喧騷の中に、乘客、驛員等プラットホームに集つて來る。）（幕）

一九二四、三、一三〇



加賀の千代 —二場—

弘津千代

時 享保年間

處 加賀金澤及松任

登場人物

福田彌八の後家 千代 二十六七歳
藩主加賀中將前田吉次 三十七八歳
藩士 本多頼母 三十歳位
藩士 篠原監物 四十五六歳
千代の父 福増屋六兵衛 六十歳位
同妹 きみ 十七八歳
魚屋松蔵の妻 類 二十四五歳
同悴 竹松 六歳位
同若い者 寅吉 十七八歳位
番頭 幸八 四十歳位
丁稚 三太 十四五歳
瓜賣の百姓 久作 七十歳位
花賣女 あき 三十歳位
茶店の女 藤 二十三歳
庄屋 五郎兵衛 五十餘
隣の婆 六十歳餘
浪人風の男 三十五六歳
宗匠風の男 五十歳位
其他供連(ともづれ)、群衆等

第一場　金澤

舞臺上手よりに大きな橋が斜にかゝつてゐる。その向つて右袂に柳の古木。その下に百姓久作がみの瓜をもつこに入れた儘土の上に据えてぽつねんと捨石に腰かけてゐる。傍に風呂敷包を背負つた丁稚三太が立つて瓜をたべてゐる。その隣に花賣女あきが桔梗、女郎花等少しばかりある荷を下してゐる。橋より下手に駒止石。櫨の木二三本。程よきところに川へ下りる石段がつゞいてゐる。下手に葭簀がけの茶店、「名物雪の氷」のビラを下げ、飴湯の釜がかけてある。床に二三脚。茶店の女藤盆を拭いてゐる。その下手に小さな祠。正面川向は町家の家並をみせ、遙に金澤城の天守閣を望む　盆の十三日の朝四つ時分。櫨の木で油蟬がじり〳〵と鳴き出した頃。

幕が開くと、橋に最も近い櫨の木のかげで黒絽の紋付の着流しで編笠をかぶつた浪人風の男が駒止石によりかゝつて、見物席に背を向けた儘、扇をぱち〳〵と披いたりすぼめたりしながら橋の下をじつとのぞき込んで、小聲で謡をうたつてゐる。

へ寳や船ぎほふ堀江の河のみなぎはに來居つつ鳴くは都鳥それは難波江これは又隅田川の東まで思へば限りなく遠く來ぬるものかな――隅田川

舞臺は始終中元の贈答品をもつた小僧、仲間といつた風のものや、掛取に廻るらしい商人。棚經に歩く僧侶、墓參に行くらしい藩士の家族、町家の男女といふ風なものが行つたり來たりすること。瓜を買つてくれといつて母親に叱られる子もある。花を求めて行く娘もある。浪人風の男に目をつけて近づいて行つて同じ様に橋の下を覗きこんで「なあんだ。」といふ顔付で行きすぎる男がある。編笠の下から顔をのぞき込む様にして行くのがある。それで浪人風の男は謡をはたとやめる。

浪人風の男　ハヽヽヽ（低く）加賀寳生と音に名高い城下へ來て觀世を謡ふとは、こりや笠の下から覗き込まれるのも無理はないわ。ハヽヽヽ（低く。又じつと橋の下に見入る。）

あき　お花はよろしうござりまするか。野田山へお持ちなされませ。お墓參りにお持ちなされませ。

久作　あーあ。（大きくあくびして）姉さ。四つを過ぎたばかりでから照りつけられちやあもう半時もこゝにかうしてゐたら霍亂を起してぶつ倒れるだらうの。

あき　ほんにまあ、お盆といへばもう秋だのに、この暑さは何といふ事だらうねえ。川つぷちでさへこれだもの町家の暑さが思ひやられるよ。あれ〳〵とう〳〵これだよ。（花を指す。）

久作　萎れるだかね。俺が瓜も煮えるだよ。あゝ兄さん（三太に）

忘れとつただ。庖丁貸さうか。

三太　いいや。もうこれだ。（半分がた噛つた瓜をみせる。）

久作　ハ、、、、若い人は歯がいいだからな。

この時番頭幸八橋を渡つた風で出て來て三太をみとめ

幸八　おゝ、そこにゐるのは三太ぢやあないか。

三太　や！　番頭さん！　（噛りかけの瓜をもつた儘下手へ入る。）

幸八　まだこの邊(へん)をうろつきくさつて。晝迄に三十八軒廻らにやならぬのを忘れたのか。この炎天にぐづぐづし居ると折角ちらしにくばる團扇が、うぬが背中の汗でしみだらけ(いい)になるぢやあないか。十五にもなり居つていつまで世話をやかす餓鬼だ。（怒りつつふと頭に手をやつて）あゝ、あつい。あつい。（櫨の木を見上げ乍ら）あの蟬の鳴き樣では今日も亦晝下りにはどの樣な暑さになる事か（扇をひらいてかざし、歩きかけて茶店のビラをみとめ）なに？「雪の氷」あゝもう三太めを叱つたが、あれをみてはたまらぬわえ。（茶店へ入る。）

藤　おいでなさいまし。

幸八　（ビラを指して）あるのかね。

藤　はい。はい。ございますとも。

幸八　一つ（と指で示して）ああ、あつい。暑い。（扇でやけにあをぐ）

藤　かしこまりました。ほんにいつまでもお暑い事でござりまするな。（と云ひ乍ら笹に包んだ雪の氷を盆にのせて持つて來る。）

幸八　（うけとり乍ら）それでもゝ今迄よくとつておいたな。

藤　お盆をあてこんで問屋さんがしまつておいたのでございます。どうぞたんと召上つて下さいませ。

幸八　（それには答へず一口たべて）あゝ善い心持。善い心持。わしはな、夏になつてこれを食べる時丈はしみじみ加賀の國に生れてよかつたと思ふのだよ。

藤　江戸にもないさうでござりまするな。

幸八　勿論〳〵。公方樣とても加賀から献上するからこそ召し上がれるので、それとてもたつた六月朔日一日だけといふはなしだ。夏場は加賀の町人の方が公方樣より食物(くひもの)にかけては奢(おご)つてゐるといふわけさ。ハ、、、、

藤　ホ、、、、まあたんとおごつて下されませ。（ふと正面をみて）あれ番頭さん。お前がいつか見たいといふておいでなさんした俳諧師の千代樣がこちらへみえます。

千代揚幕から出る。手に珠數をかけて日傘をさし、切子燈籠と風呂敷包とを持つてゐる。

幸八　あゝ俳諧師の千代といふのはあの女か。

あき　お花はよろしうござりまするか。お墓參りにおもちなされませ。

千代　（あきの聲をきいてその方へ近づく。）その桔梗いくらでござ

んす。

あき　五文でござりまするが、もうおしまひ故四文に致しておきます。

千代　少し弱つてゐる樣だが（獨言の如く）

あき　いゝえ御新造樣。かう見えましても山の桔梗でござりまするから、水にお挿しになりますと、すぐとピンとして、三日や四日はこの暑さでもびくともしは致しませぬ。

千代　それではもらうて行きませうか。

あき　有難うござりまする。ついでにこの女郎花もおそへ致しまする。

千代　それは、それは、（錢を渡して花を受取る。）

あき　有難うござりました。あーあ、これで荷も空になつた。どれ去ぬとしやうか。爺さん。お先へ（荷を仕末して次の臺詞の間に橋を渡つて去る。）

久作　（あきの言葉をきいて急に悲しさうに）　御新造樣、瓜買うて下さらぬか。ずんと安うしときますでな。お願ひしますだ。

千代　あゝ、みの瓜でござんすな。（懷かしさうにみる。）

久作　（以下言難さうにぼつ〳〵といふこと）　これ甘い瓜でござりますだ。俺が畑は他の畑とはちがひましてな。それに今年あ滅法界な日でりが續きましたでな。

千代　甘ければ五つばかり貰ひませう。こりや荷物が大さう重うなるが（獨言の如く）……いくらでござんす。

久作　十五文だが十三文にまけとくだ。御新造樣、十買うて下さらんか。二十五文にしますだ。俺早う荷をしまうて去にたいでな。街あ田圃と違うて照り返しがひでえので霍亂が起りさうだよ。

千代　甘さうな瓜だから買うて上げたいのは山々だが、この通り兩手がふさがつてゐる上に、御城下のものではなし、はるばる重い思ひをして持つて歸つても喜んで食べる子供が居るでもなし、まあお墓へ供へたり、魂棚へ上げたりしようと思うて買ふの故……では十三文（錢を渡す。）

久作　御新洪樣あ、子供を持たねえだかね。そんなら仕樣もねえ。俺も孫が生きて居りやあ、暑い思をしてお城下まで來やあしねえだよ。孫にみんな食はしてしまうだよ。

千代　それではお前の孫も？

久作　はい。去年の秋疫病でとられましたよ。

千代　それはそれは氣の毒なことでござんしたな。新盆ちや。折角弔うてあげなさんせ。

久作　はい。有難うございますだ。

千代行きかけてふと振返り

千代　もし爺さんえ。お前早うその荷があけたいのなら、そこにじつとしてゐてはらちがあくまい。町家では忙しうてまだ魂棚を飾らぬ向もあらうし、子供も多勢遊んでゐやうから、この橋を渡つ

てちと呼賣をしてみたがようござんせう。それに街には片陰があつて却て涼しからうもしれぬから。

久作　さうかね。それではさうしますだ。俺御城下にも商にも不慣れだでな。大きに有難うござりましたゞ。お前様ほんに親切だな。

この時橋の下をみつめてゐた浪人風の男、「あつ！」と叫ぶ。そして振返つて千代に

浪人風の男　卒爾ながら某の大小暫時御預り戴きたい。（といつて編笠をぬぎ手早く兩刀をぬいて、着物をぬぎ、くるんで千代に押しつけて川の中へ飛び込む。）

水の音、

千代　（はつとして川の中をみて）　あつ！（といつて驚き、欄干をつかんで川中をみつめる。

水音に驚いて、幸八、藤をはじめ、通りすがりの人達は一せいに立止つて川の中を覗きこみ「あつ！」とか「おう！」とかいつて片唾をのみながら下をみつめるのみである。

――どうしたんだ。

――身投か。

…――水獺か。

こんな臺詞を言ひ乍ら次第に人が集つて來る。この中に宗匠風の男もまじつてゐる。久作ももつこを天秤でかつぎ上げて群衆の方へ近づき、後から川の中を覗き込まうとするが人が多くてみえないのであきらめて、今度はより集つて來る人人に向つて

久作　瓜買うてくれねえかな。うまい瓜だ。安うしときますだ。（二三度繰返していふ。）

群衆の一人　ええ、瓜どころぢやあないぞ。（ひぢで久作をついて群衆の中へ割り込む。）　久作よろめく。瓜、橋の上にこぼれる。

久作　あれ、何するだ。

瓜は轉がつて川の中へ落ちて行くのもある。久作泣顏になつて瓜を拾ひ、恨めしさうに群衆を見返して橋を渡る。

群衆の中には石段から川の方へ降りて行くのもある。

と、そこへ帳面をもつた魚屋の若い者寅吉、橋を渡つて來た心持で出て來て、群衆の中へ割り込んで行くが、すぐに、

寅吉の聲　あつ！　大　だ。竹坊だ。うちの竹坊だ。親方〳〵。おかみさん、おかみさーん。（群衆を押しわけて上手へ入つて行く。）

この時花道より

先供の聲　えゝかたよれ。かたよれ。

群衆　――おゝ野田山からもうお歸りとみえるな。

――がうぎに早えぢやあねえか。

――何さあんまり暑いのでざつとおがんでお　りになるのよ。

――太守様だつてから暑くつちやあ七面倒な儀式もやつてゐられねえんだらう。

――ハ、、、、

――しつ！ しつ！

先供揚幕から出る。

先供 えゝ、かたよれ。かたよれ。

群衆水の上に心を引かれつつも仕方なく編笠をとつたり、日傘をすぼめたりして土下座する。千代も稍よきところに坐る。

揚幕より本多頼母、篠原監物以下の供連に前後をかこまれて藩主加賀中將前田吉治の乘物が出る。挾箱には梅鉢の金紋がついてゐること。先供が本舞臺迄來た時、上手から魚屋松藏の妻類狂氣の如く走り出る。

類 竹や〱。竹松や。竹松や。

寅吉 （つゞいて出て類の袖を捕へ）おかみさん。いけねえ。〱。太守樣のお通りだ。お通りだ。（必死になつて止め樣とする。）

類は何物も目に入らない樣で寅吉を引きづり乍ら遂に行列の中へ割りこんでしまふ。

侍一 あつ！ 道切！

頼母 狼籍者！

監物 それ方々、

供連一統きつとなる。すぐにばら〱と供連の中より侍二、三、四、五、出て類と寅吉とを捕へる。

侍二、三、四、五、 無禮者め、

侍二 お供先を何と心得居るぞ。

侍等二人を縄でからめる。

類 おゝ 竹や、竹や、竹松や （身をもがいて泣く。）

侍四は類の口に手を掩うて聲を立てさせまいとする。

この時千代亢奮した樣でいざり出て、本多頼母の袖を捕へる。

千代 もし、お願ひでござりまする。

頼母 えゝ 又しても狼籍者！

千代 お願ひでござりまする。この橋の下で今人が溺れかゝつて居るのでござりまする。子、子供が死にかゝつてゐるのでござりまする。その女はその子の母に相違ござりませぬ。もし御慈悲でござりまする。どうぞその子を‥‥

頼母 何と申す。すりやこの橋の下に？

千代 左樣でござりまする。子供が溺れかゝつて居るのでござりまする。

吉治の聲 乘物止めい。

乘物止まる。この聲には騎馬供一せいに馬より下りる。

千代 （乘物が止まつたのには氣がつかずいひつゞける。） お武家らしいお方が助けんと飛びこみはなされましたが、丁度この下は渦を巻いてゐる淵でござりまする。どうぞお情には、その子の無事な顔を一目なりともその母にみせておやり下されました上での御成敗をお願ひ申上げまする。

頼母　（千代の聲に聞覺えある如くしきりに思ひ出さうとする様）

監物　ええ、下賤の、しかも女子の分際で御前をもはゞからぬ無禮者へのかばひ立、大膽と申さうか、不敵といはうか。それ、この女もからめよ。

侍六　はゝッ。（千代をからめぐつと後から繩を引く。）

これにて千代の顏上る。

頼母　おゝ、そなたは千代女殿であつたか。

千代　おゝ、あなたは本多の御前様。

吉治　（しづかに乗物の中より）　これ頼母、（頼母引戸の傍へよる。）盂蘭盆會の廟參の歸途ぢや。穏便に取計らうてつかはせ。

頼母　はゝッ。これは恐れ入りましたる御上意。

吉治　溺れ居る小兒とやらも助けてつかはせ。

頼母　はゝッ。返す返すも勿體なき御仁慈、それ　（侍等に目配する。）

千代、類、寅吉等繩目をとかれ、供連の中の足輕等五人石段から下りやうとする時、ぐつしより濡れた浪人風の男が竹松を脇に抱えて上つて來て、舞臺上の光景をみてはつとして、又石段から下りかける。

類　（竹松をみて、）おゝ竹、竹！　（奪ふ様にして抱く。）

浪人風の男は群衆の一人に何かさゝやいて石段から下りて姿を消す。

竹松「わあーつ」と泣き出す。

類竹松を抱いて茶店のかげにかくれる。寅吉もつゞく。

群衆の一人は千代の傍にある浪人の衣服や大小や編笠をとつて石段の下へ渡す。

吉治　無事であつたとみゆるな。

頼母　御仁徳をもちまして。まことに恐れ多い次第でござりました。いざ、御歸城を。乗物上る。

吉治　待て、

頼母
監物　はゝッ。

吉治　これ頼母　（頼母引戸の傍へよる。）　そちや今あれなる女に千代とよびかけた様であつたな。

頼母　はゝッ。如何にも御意の通りにござりまする。

吉治　すりやあの者がかねて聞及ぶ俳諧の名人、そちの母が師と頼むといふ千代であるか。

頼母　左様にござりまする。

吉治　うむ。……その女の今のはたらき殊勝ぢや。目通り許す。

頼母　御前をもはゞかりませぬ振舞おとがめなきのみか有難き御諚。

吉治　苦しうない。近う。

頼母　はゝッ。（引戸をあける。）千代女殿、御聞及びの通りでござ

る、いざ、これへ。

千代　はゝッ。おそれ入りましてござりまする。（二三歩前へいざる。）

吉治　これ千代とやら、とかく風韻をめづるやからは山川草木の美はしさにのみ心を引かれて、人情に疎きが常とさゝ及ぶが、今そちのはたらきをみるに、俳諧師も亦人情の外には棲まぬと見ゆるな。

千代　はゝッ。（平伏する。）

頼母　千代女殿、折角の御たづね。御答を申上げられたがよろしうござる。御遠慮は却て恐れ多うござるぞ。

千代　はゝッ。……賤の女風情を俳諧師の列にお加へ戴きまするなれば、恐れ乍ら俳諧師も亦人の世に棲み、人の子、人の親、人の妻にてござりますれば、山川草木も人情に托してこそはじめて美はしきものかと心得ましてござりまする。

吉治　うむ。すりや人情ありてこその俳諧と申すよな。

千代　はゝッ。逝きし聖、芭蕉の翁は「俳諧に古人なし」と申されたやに聞及びますればおこがましい申事にはござりますれど、千代はたゞ千代一存にて俳諧は御意の通りにござりますると申上げたうござりまする。

吉治　うむ。して、そちやいかにして俳諧をすさぶな。

千代　はゝッ。悟に遠き凡愚の身にござりますれば、悲しい時に泣き、嬉しい時に笑ふに他ござりませぬ。耳にきゝ目にふれまする物事につけまして、心に浮び出づる儘を口ずさみ居りまするにすぎませぬ。

吉治　はて羨やましい身の上よなう。悲しい時に泣き、嬉しい時に笑ふ。心に浮び出づる儘を口ずさむと申すか。これ千代、余も俳諧師になりたいぞ。ハ、、、、（淋しく）

千代　おそれ入りましてござりまする。

吉治　これ千代、今日のかたみに、又余が城への土産に一句仕れ。

千代　はゝッ。

吉治　彼に筆紙をつかはせ。

頼母　はゝッ、（供連に）御近侍衆筆紙。

供連の中の小姓紙と硯箱とを千代の前に持て行き、紙を千代に渡し、硯箱を持て傍に控える。

千代一禮して紙をいたゞき、一寸考へた後書いて頼母に渡す小姓の席へ歸る。

吉治　（件の紙を頼母より受取つて）「飛で出て梅に手をつく蛙かな。」「飛で出て梅に手をつく蛙かな」うむ、ハ、、、、（輕く）面白う仕つたな。文字は持明院流とみゆる。美しい手ぢや。これ頼母、千代に何かとらせよ。

頼母　はゝッ。（供連に）御近侍衆料紙。

侍七、小判を入れた料紙入を持つて出る。

頼母、料紙に小判を包んで千代に渡す。

頼母　太守樣よりの御かづけ物、有難くお受け召され。

吉治　千代とやら、益々斯道にはげむがよからうぞ。

千代　有難き御上意、賤の女にはもはや言葉もござりませぬ。

吉治　乘物たてい。

供連　はゝッ。

頼母引戸をたてんとする。

吉治　いや、待て〱。とんと失念するところであつたわ。監物、水に入つて小兒を救ひし者あるやに見受けたるが‥‥

監物　はゝッ、御惠眼の程恐れ入りましてござりまする。

吉治　いづく、如何なる者か、たゞしてまゐれ。

監物　はゝつ。（石段の方へ近づいて）おゝそこなる者、一寸これへ、

浪人風の男　（衣服をつけ、大小を帶して上つて來る。）はゝッ。如何なる御用か存じませぬが、諸國を流浪の者、何事も平におみのがし下されまする樣、

監物　（引き返して來て）はゝッ。諸國を流浪の者何事も平におみのがし下されまする樣にと申しましてござりまする。

吉治　何？　すりや當藩のものではないと申すか。ならば尙更のこと、是非に聞いて參れ。

監物　はゝッ、（浪人風の男の方へ行つて）太守のたつての懇望でござる。いづ方の御藩中、如何なる御仁か是非とも御洩しを願ひたい。

浪人風の男　いや、かく兩刀帶すれども、主とてもなき浪々の身、御たづね下さらぬが却てお情でござりまする。

監物　いや去りながら、當城下の小兒の一命身を以てお救ひ下されし御芳志、御姓名を承らいでは改めて御挨拶も出來かぬる儀にござれば。

浪人　ハ、、、、改まつて御挨拶なんどとは、水邊にて遊ぶ小兒の愛らしさにみとれゐる折ふしの出來事、たゞ後先の考もなく飛び込みしまでの事でござりまする。某とても故鄕には一子を殘せし身、人の親は相みたがひでござりませう。先を急ぎまする旅にてござりますれば、もはやこれにて御免を。（一禮して下手へ入る。）

監物　（引返して）はゝつ、申譯もござりませぬ。故鄕に一子を殘せし身、人の親は相みたがひと申して行きましてござりまする。

吉治　何？　故鄕に一子を殘せし身と申したか。‥‥はて心にくい男よなう。

千代ほろ〱と泣く。

頼母　おゝ千代女殿には（低く）御子息の新盆でござつたな。

吉治　これ頼母、千代とやらも子を失うたか。

頼母　はゝつ。御耳を汚しまして申譯もござりませぬ。

吉治　さうであつたか。（じつとなる。やがてしやんとなり。）乘物

やれ。

供連　はゝつ。

吉治　頼母、監物……恩愛の情の前には加賀中將の供先の亂るるを笑うてくれるな。ハヽヽヽ（寂しく。）

頼母
監物　はゝつ。（暗然となる。）

　頼母乘物の引戸をたてる。

　行列しづしづと橋を渡る。

　千代はじつと平伏した儘でゐる。

　群衆ざわめき出す。

――ああ、どうなることかと全く冷々したよ。

――あの浪人も變つた男だな。

――あれが名高い千代か。

――いい年增だな。

――後家でおくのは惜しいものだ。

――太守樣も氣があつたらしいぞ。

――ハヽヽヽ何を馬鹿な。

――女はとくだな。

――いい女はとくだ。

――あれがいい女かよ。御乘物の前にはひつくばつて赤くなつてゐた樣子はまるで蛙、いや、赤蛙の樣だつたぜ。

――だから「飛で出て梅に手をつく蛙かな」といつてるぢやあないか。

――ハヽヽヽ

宗匠風の男　ふふん。あの樣な句を。

――おゝ、これは柿木畠の宗匠。

――それではあれは大してほめる程の句でもござりませぬかの。

宗匠風の男　苦々しい次第さ。

――宗匠め妬んでやがる。

　宗匠風の男ぷいと上手の柳の下へ行く。

――俳諧師等といふものはうはべは淡泊な樣でなか〱功名心の强いものよ。

――あゝいやにかつかつと照り出した。

――今日もあついらしいぞ。

――あの蟬の鳴き方はどうだ。

――歸らう。歸らう。

――だがいい見物をしたな。

　群衆次第に去る。宗匠風の男だけ去らず。群衆の臺詞の終る頃、竹松を抱いて類飛んで來る。寅吉もつゞく。

類　もし御新造樣。

千代（漸く顏を上げて）あれ、お前はやつぱり魚松のおかみさんでござんしたか。

顯　ありがたうございました。有難うござりました。（手を合はせておがむ。）

實吉　御新造様、有難うござりました。お蔭で命拾ひを致しました。

千代　まあ坊や、助かつてよかつたなあ。（竹松の頭をなでる。）

顯　有難うござりました。お前様がおいでなさらなんだら…‥此の子の顔はもう見られぬところでござりました。（竹松を抱きしめて泣く。）

千代　私ははじめお前といふ事に氣がついたのではないけれど、ただ子供衆が助けたい。一目でも無事な顔を母御にみせたい一念で…‥だが、ほんに本多様がおいでなさらなんだら…‥ひよんな事になるところでござんしたな。竹坊や、ほんにめでたい事であつたなあ。あゝ、これおかみさん。暑さの折柄とはいへ濡れた儘ではうるさからう。おゝまだ唇が紫色をして、

顯　まあほんに、もう何が何やら、嬉しいと恐ろしいとが一緒になつて…‥どれ竹松ぬぎや。もう〳〵蜻蛉などつりに行くではないぞえ。盆のうちに殺生する故、佛様がおこらしなされたのぢやぞえ。（といひ乍ら着物を脱がせる。）

千代　何やら寒さうぢや。水はすつかり吐かせたのでござんすか。

顯　はい。先程の御武家様が吐かせて下されましたさうにござります。

千代　そんなら何か暖いものでも飲ませたら、おゝそれ〳〵あの茶店に飴湯があるさうな。どれ竹坊や、おいで。（竹松の手を取る。）

顯　いえもうそれでは重ね〳〵の御迷惑。これでおいとまを戴きまする。今日はあいにく掛取に出かけまして留守でござりまするがお禮はいづれやどもともどもに。

千代　いえもうお禮なんどと堅苦しい事は（手を振つて）先程の御武家も人の親は相みたがひとお言ひなされたではござんせぬか。

顯　おゝそれ〳〵私とした事が我身にかまけて申しおくれて居りました。今年は旦那様も彌市様も新盆で…‥その後はさぞまあお淋しい事でござりませう。して今日は專光寺様へお墓詣りにでも？

千代　あい、涼しいうちに濟して歸りたいものと六つ前に立つたのでござんしたが、松任からは三里、女子の足ではとう〳〵この有様でござんす。ホヽヽ、（淋しく。）

顯　まあそのお心ぜきのところをなが〳〵と御厄介をおかけ申しまして、

千代　いえ〳〵。これもやつぱり佛のみちびきでござんせう。

顯　おたつしやでござりまするど、これ（竹松を指して）よりかも。

千代　彌市でござんすか。たしか半年あまり早かつたかと思ひますが。

顯　左様〳〵。ほんにさうでござりました。御利發な御子でござりましたに（二人じつとなる。）…‥御新造様、御察し致します。私

は……いまの、あれ程の事にさへ……お察し致します。お察し……（泣く。）

千代　有難うござんす。夫に殘され、子にさへ先立たれてから金澤の一人住居も何かにつけて思ひ出すのが悲しくて、よびよせられる儘に松任へ歸つたのでござんすが、あちらでも里方とは住居が少しはなれて居りまする故、此の頃の朝夕は念佛よりほかに物いふこととても少なうなりました。

二人しんみりとなる。間。

類　これはしたり、又しても御佛參のおさまたげを、ほんにお禮は言葉に盡されませぬ。いづれ改めて（禮をする。）

千代　さうでござんすか。では私も御免蒙つて專光寺へ詣りませう。坊やを呉々も氣をつけてあげて下さんせ。

類　有難うござりまする。そんなら寅や、お前御新造様のお荷物をお持してお供をしたら、

寅吉　へい、かしこまりました。

千代　いえ、それには及びません。どちらもお忙しい折柄でござんす。それに微祿の者の後家が佛參に供でもございますまい。お〻それ〳〵この瓜をたつた一つだが坊やに。

類　いえ〳〵その様な事を。命を助けていたゞきました上に頂戴物を致しましてはやどに私が叱られまする。

千代　まあお前瓜一つ位で、彌市の好物でござんした故裾分でござんす。（竹松にもたせる。）それでは御免なさんせ。

類　有難うござりました。又御目にかゝりまする。

千代橋の方へ行く。類寅吉等上手へ入る。宗匠風の男つと柳の蔭から紙にしたゝめたものをもつて出て千代に渡す。

千代　（受取つてよむ。）「名木の中とも知らず行々子」……（暫く思ひ入れ。）ぶしつけながらお矢立を。

宗匠の男、無言の儘矢立を渡す。千代受取つて件の紙にしたゝめて男に渡す。

宗匠風の男　（よむ）「ふみつけられて匂ふ茶莚」

千代　御免下されませ。（靜に一禮して橋を渡つて行く。）

宗匠風の男苦々しく千代の後姿を見送りつゝ件の紙をこなどなに裂いて川へ捨てる。（幕）

第二場　松任

千代の住居、舞臺や〻上手よりに粗末な二重屋臺。屋臺の下手のはづれに夕顔棚、その下竹の濡椽、上手の方入口。留守居の様で雨戸が閉つてる。舞臺の前景は低い四つ目垣。朝顔をからます。垣の外は路。内は庭。秋草少しばかり。入口の前あたりで四つ目垣され、傍に井戸、振釣瓶を置く。釣瓶の繩にも朝顔の蔓がまきついてゐる。舞臺下手の方は小さな蓮池でその奥に隣家の背戸口をみせる。日暮近き七つ過ぎ。

幕があくと隣家の背戸口から婆が出て來て千代の住居の庭の方へとぼ〳〵と歩いて來て一寸腰を伸して額の上に手をかざして空を見上げながら、

婆　もう七つをすぎたか。‥‥(千代の住居の方をみて)　まあ千代さんとした事が、まだ戻らぬとは‥‥後家といふてもまだ三十に間のある身、今日の墓參りも、本當の墓參りやら何やら、ふふ(輕蔑した笑)　しれたものぢやあないわえ。(自家へ入る。)

すぐに上手から千代の父福增屋六兵衞出る。

六兵衞　はて、まだ戻り居らんか。噂は晝過ぎにこの松任までひゞいて來たに。本人がまだ戻らぬとは、えゝまあ、氣をもませる子ではあるわい。(上手へ入る。)

下手より庄屋五郎兵衞登場。手に風呂敷包を持つてゐる。

庄屋　はてな。まだ戻らぬか。今迄戻らぬといふ筈はないが‥‥はて、それでは親爺の六兵衞が方へでも行つて居るのかな。(後戻りしかけて、隣家の背戸口に近づき)　婆さんや。婆さんや。助んとこの婆さんや。

婆　おい〳〵(と出て)　おゝこれは〳〵お庄屋様でござりましたか。存じませいで御無禮を致しました。はい。まことに結構なお盆でござりまする。

庄屋　あゝ　ときに千代はまだ戻らぬ樣子かの。

婆　はい〳〵。あの千代さんでござりまするか。それがあなた樣、けさ夜があけると間もなくお城下へ、

庄屋　あゝそれは先刻承知ぢやがの。御城下からまだ戻らぬかときいてゐるのぢや。

婆　はい〳〵。ほんにまあ今時の若い者は氣樂な事ではござりませぬか。私共の若い時分は三里や四里の道は朝涼(あさすゞ)の中に行つて戻つたものでござりまするが‥‥はい。

庄屋　噂はとうの昔にこの松任にとゞいてゐるのにな。

婆　?‥‥あの噂‥‥と仰つしやりまするると。

庄屋　お前まだ知らぬのか。

婆　さてはやつぱり間男でもこしらへて居りましたか。

庄屋　ハ、、、馬鹿をいふではない。馬鹿を。お前はやつぱりお前の知慧でしか物を云はぬな。

婆　はい。どうせ私共は千代さんとは違うて馬鹿でござりまする。

庄屋　ハ、、、、これや千代と仲違ひした　みえるの。

婆　はい、私共は馬鹿は馬鹿でござりまするが、三日も四日も釣瓶を繕はずに貰ひ水ですます樣なだらしのない事は致しませぬ。

庄屋　ハ、、、千代は俳諧師ぢや。それ位の事は大目にみてやれ。な、大目に。とかく俳諧師等といふ風流人はな、臺所元や井戸端の事はあまり氣にとめぬものぢや。それも千代はの、並々の俳諧師ではないのぢや。今日といふ今日は愈々折紙付の俳諧師になつたのぢや。

婆　折紙付だか塵紙付だか存じませぬが、夏場の水の入用(いりやう)が多い時分に行水の水から庭の打水まで汲みに來られましてはこつちの釣瓶がかなひませぬ。私共のやうな貧乏人には桶屋の手間代もなかなかのいたみでござりまするでな。ひねかけた素麵の十把位中元の祝儀に貰うても引きあひませぬ。はい。

庄屋　ハヽヽ、これやお前にかゝつては、庄屋はおろか、お城のお殿様のお行列の中へ割りこんで、道切りのとが人のお赦を願うておとがめを受けなんだばかりか、御ほめに預り、御所望で句をよんで御褒美まで戴いたといふ加賀一の俳諧師、いや／＼どうしてどうして加賀で一番どころか日本中に十人とはあるまい俳諧師もたまつたものではないわい。それもお前男ではない。女子(をなご)ぢや。女子の身でぢや。ほんに女子では日本で一人であらうわい。あゝ偉いものぢや。偉いものぢや。

婆　それではあの千代さんは？

庄屋　さうよ。

婆　お城のお殿様から御褒美を？……ハヽヽ、庄屋様、じかに私が馬鹿ぢやといふて今日からお盆でござりまする。おなぶりなさるのはそれやあなたちと罪が深すぎまする。ほんに私の樣な馬鹿はそれでは何かよい土産物でも來るかとあてにして待たうも知れませぬでな。ハヽヽヽ

庄屋　ハヽヽヽ、お前もなか／＼聞いたよりは手强(こは)いの。だが燈臺下くらしとはほんにこの事ぢやわい。これ婆さんや、その樣に惡口をいはずと仲善うして句の一つも書いておいて貰うたがよい。今に釣瓶の代はおろか、短册一枚が田地一反にならうも知れんぞ。

婆　（全く信じない風で）左樣でござりまするか。でもやつぱり私共には先の百兩より今の五十兩の方が有難うござりまする。それにあの千代さんのお蔭で田地持にならうとも思ひませぬでな。それよりも釣瓶を……

庄屋　又しても釣瓶か。千代は又どういふ料簡でかうまで嫌はれて居乍らも釣瓶を繕はぬのか。（と井戸に近づいて釣瓶をとりあげ）おゝこりや大さう朝顔が卷きついてゐるわ。

婆　使はずに放つておきまするので、朝顔はよい事にして卷きつく一方でござりまする。

庄屋　はてかうみたところどこも痛んではゐぬ樣ぢや。どれ、お前一度汲んでみたがよい。

婆　はい／＼。（と井戸を覗きこんで）まあこの蜘蛛の巣をごらんなされませ。（釣瓶を井戸の中へ落す。水の音、朝顔の莖切れる。婆はその莖を邪慳に引きはなして水を汲み上げる。）

日漸く傾く。千代汗を拭き／＼花道より出る。

庄屋　ほう格別洩りもせぬな

婆　呆れたものでござりまする。痛んでも居りませぬに。ほんに若いに似合はぬ吝い事でござりまする。

庄屋　（千代をみとめて）　お丶戻つたぞよ。〱。
婆　ええ？　（とみて）　あの仔細らしい顔をみても虫づがはしる。
（大急ぎで自家の方へ行き下手へ入つて釣瓶をもつて出て背戸口へ入る。）
千代　（本舞臺へ來て）　これは〱。どなた様かと思ひましたら、
庄屋　お丶千代殿。戻らしやつたか。あ丶待つてゐたぞよ。待つて居りましたぞよ。
千代　あのそれでは何か私に急の御用でも？
庄屋　いやまあそれよりも、まづ今日はめでたい。めでたうござつた。
千代　それでは？
庄屋　お城下での事一部始終聞きました。松任のほまれぢや。六兵衞殿は鳶が鷹を生んだといやもう大した取沙汰。
千代　まあ何を仰つしやりまする事やら。みんな太守様の御憐愍と本多様の御引立故でござりました。まあこれは私とした事が、立話ではお暑うござりまする。むさくるしい所でも只今雨戸をあけまする故。
庄屋　いや〱かまうて下さるな。お前こそさぞまあ暑かつたであらう。
千代　（住居の方へ行き乍ら）　つい思はぬ用があれこれと出來まして、朝涼の中にと思ひました事がとう〱炎天をよつて歩いた様な仕末になりましてござりまする。ホ丶丶丶（入口の戸をあけて足袋をぬぎ屋臺の中へ上つて雨戸を繰る。）
屋臺の中は下手よりに佛壇があつて、その前に魂棚をかざつてある。椽に近く切子燈籠千代薄べりを出して程よき所に敷く。
千代　まだお煙草の火とてもございませぬが、
庄屋　（上つて坐り乍ら）　いや〱。お丶それ追付け風呂が沸かう。入りに來なされ。
千代　有難うござりまするが、私風情がお庄屋様のお湯殿なんぞへ勿體ないことでござりまする。
庄屋　いや〱遠慮に及ばぬ。今日からはもう日本一の俳諧師ぢや。
千代　はてまあ。私の俳諧が急に上進したといふわけでもござりませぬに……して御用の筋は？
庄屋　いや、今日の今日頼むのも異なものぢやが……
千代　……如何様事でござりませう。
庄屋　（風呂敷包を千代の前へ置いて）　これに何かお前の句を……わしも子孫の爲に殘して置きたいと思ふでな。
千代　ホ丶丶、まあ私にその様な大したものが書けますでござりませうか。
庄屋　これ、何を言ひなさる。百萬石のお城の中へさへ收まるもの

が、ついちよい〳〵と道端で書けるお前ぢやあないか。その様な偉いお前と同じ所に生れ合せて居乍ら、句一つ貰はなんだといふては、わしも子孫に顔向けが出來ぬでの、これ、千代殿、どうかわしの顔を立てゝ下され。たのみますぞや。ぜひ聞き入れて下され。

千代 折角ではござりまするがどうも私には御子孫のお爲になるやうなものはとても‥‥

庄屋 これ〳〵何をいひなさる。女子は高ぶらぬのがよいとは言ひ乍らそれではあまり度が過ぎるといふものぢや。(風呂敷包を千代の方へ押しやる。)

千代 (詮方なく開く。短冊、繪絹等出る。) こりや、絹もござりまするが‥‥

庄屋 ハ、、、、(てれて) それはその、何ぢや。繪をな、竹でも杜若でも夕顔でも、いやお殿様の前でよんだ句は梅であつたな。それでは梅がよからう。その梅を是非。つい一刷毛ぢや。ちよいとかいて賛をな。ハ、、、、(益々てれて) まゝ頼みましたぞ。お前も遠歩きでくたびれた所へいかい邪魔をしました。どうぞよろしう頼みましたぞ。(下手へ入る。)

千代 (呆れた様な寂しい様な顔で見送り乍ら) はてまあ昨日迄は路で御挨拶をしてもろく〳〵振向きもなさらなんだ庄屋様があのお言葉‥‥金の爲や義理の爲に、繪を描いたり句をよんだりする俳諧師にはなりたうないと思うてゐたが、私もやつぱりその仲間へ入れられる事となつたのか‥‥興も湧かぬに頭の中で文字を十七並べてそれで俳諧の命があるといへやうか。‥‥あゝ千代は命のない句だけはよみたうない。

間。蜩の聲。上手より六兵衞出る。

六兵衞 おゝ千代。

千代 あれ、父(とと)さん。

六兵衞 待つて待つて待ちくたびれたぞ。晝過ぎから行水の湯を沸して待つてゐたぞ。

千代 それは〳〵。私も早う戻りたいのは山々でござりましたが。

六兵衞 それでは又お城へでも呼ばれたのか。

千代 あれまあ父さんとした事が、それではお前もやつぱり御存じで?

六兵衞 おゝ〳〵聞いたとも聞いたとも。惡事千里を走るといふが善い事も束の間に聞えて來る。めでたい。めでたい。わ、わしも今日迄生きてゐて‥‥(涙ぐむ。) 生きがひがあつたぞ。

千代 ほんに何から何迄有難い事ばかりでござりました。これといふも一つは俳諧の德にしても、一つは本多様のお蔭、もしあの場にあの方がおいでなさらなんだら‥‥物事は皆倒になつてゐたでござりませう。それでともかくも專光寺から眞直にあちらのお邸へ上りましたら、御後室様がそれはお喜びなされてあれこれとのおもてなし、御酒が出たり等してすぐにお暇ともいはれず‥‥

六兵衛　おゝ〳〵まあ、さうであらう。さうであらう。それにしてもお前さぞ暑かつたであらう。まゝ、四方山の話は晩の樂みにして、どれ、わしは戻つておきみに行水の湯をとらせやう。すぐに來いよ。（去りかける。）

千代　あれ父さん。一寸待つて下されませ。何はさておいてもお前にみせるものがござります。

六兵衛　何？　わしにみせるもの？　うむ、さうか〳〵（引き返す。）

千代風呂敷包より前場の金包を出す。

千代　あのこれがお殿樣からいたゞいた……（六兵衛に渡す。）

六兵衛　（恭々しくいたゞいて）あゝ長生をすれば有難い目に逢ふよなう。あゝ、勿體ない。勿體ない。これ千代、わしよりもまづ佛壇へ、彌八殿にも、彌市にも見しや。

千代　あい〳〵。（佛壇に供へて線香を立てる。）

六兵衛　（一寸佛壇の方をおがんで）ほんに二人とも、いや一人でも生かして置きたかつたなう。

千代　…………

二人ほろりとする。間。

千代　おゝ、それから父さんにもあげたいと思うてこの瓜を（といつて風呂敷包から出來ず。）

六兵衛　おゝみの瓜か。ほんにこれはうまさうな瓜ぢや。彌市が大好物であつたな。おゝそれ、これもまづ佛壇へ、佛壇へ。

千代　あい。（佛壇へ供へ乍ら。）父さん、「去年まで叱つた瓜を……た、手向かな。……」

六兵衛　うむ。……

間。

千代　お殿樣も本多樣から彌市のことをお聞きなされてほろりとなされた御樣子でござりました。わ、若君樣をたつた此の間……

六兵衛　そ、さうであつたな。

千代　こ、この瓜を賣つてゐた爺さんも、去年の秋孫を死なしたとかいうて……

六兵衛　そ……さうか。さうか。

二人しめ泣きに泣く。

六兵衛　いや〳〵泣くでない。泣くでない。逆緣にあうてゐるのはわし達ばかりではないのぢや。と、との樣でさへ、百萬石のお殿樣でさへ……これ泣くでない。泣くでない。めでたい日ぢや。めでたい日ぢや。

千代　いえ〳〵。父さん。泣かせて下さりませ。泣かせて下さりませ。悲しい時には泣き、嬉しい時には笑へるのが、身分の低い者の仕合せでござりまする。賤の女が加賀中將の御目に止つて有難い御諚を蒙つたといふて、それが夫と子供の墓參りに行く道での事であつてみれば、お殿樣には勿體ない申事ながら、何で、め、めでたい事でござりませう。……泣いて泣いて泣いた揚句でなけ

れば、千代には悟はおろかあきらめさへも來ぬのでござりませう。どうぞ泣かせて下さりませ。

六兵衞　も、尤もだ。尤もだ。泣け。泣け。（泣く。）

上手より味きみ出る。

きみ　父さん。父さん。

六兵衞　あゝ　おきみか。

きみ　おゝ　姉(あね)さんは戻つてかえ。大そう待つてゐたわいな。夕まゝの支度も出來ました。行水の湯も沸きすぎた程ぢや。

六兵衞　おゝ　さうか〳〵。御苦勞だつたの。（千代に）精進ながら心祝ひの膳をこしらへさせたでな。

きみ　それでは姉さん。父さんの行水が濟んだら又膳をかけますから、すぐ來て下さんせや。

千代　あい、ありがたう……（かすかに、）

きみ　それでは父さん。（六兵衞の手をとる。）

六兵衞　おゝ（立つ。）

きみ　わたしや早う夕まゝにして姉さんの話がきゝたいわいな。

六兵衞　おゝそれ〳〵お殿樣からいたゞいたものはうちの佛壇の婆にもみせてやりたいでな。もつてきてくれよ。

千代　あい…ほんにさうでござりました。

六兵衞、きみ上手へ行きかゝる。

千代　父さん。暮れかゝりました。おきみ、足許を氣をつけてあげて、

きみ　あい。

六兵衞　おゝまだ一つ忘れてゐた。迎へ火の麻(を)がらはあるかや。

千代　あいござります。

六兵衞、きみ去る。蚊が出て來る樣。千代濡椽に蚊いぶしをかけ、佛壇に燈明をつけ、切手燈籠にも灯を入れ、水向の碗を持つて土間に下りて、手桶をさげて隣家の背戸口へ行く。

千代　をばさん〳〵。

婆　……（返事なし。）

千代　只今もどりました。留守中はいかいお世話でござりました。

婆　……

千代　どなたもお留守でござりまするか。毎度の御無心乍ら又水をどうぞ。

婆　……

千代當惑して立つてゐるがつと下手へ入る。が、すぐに出て來て、

千代　をばさん、釣瓶がござりませぬが……

婆　……

千代仕方なく歸つて來る。そして自家の井戸端へきて、釣瓶をみて驚く。

千代　こりやまあ。どこの心なしが引き離したか…それとも子供

のいたずらか・・・・（暫く忘然としてゐるが手桶をそこにおいて屋臺の中へ入つて別の手桶を持出して來る。そして水を汲んで一方には朝顔をさし、一方を持つて入つて佛壇に水を供へる。）

夕顔の花咲きそめる。

婆の聲　福や〳〵。福太や。夕まゝぢや。夕まゝぢや。福はどこへ行つたかや。精靈とんぼとるでねえだよ。福や福や、早う戻らんと婆が素麵皆食ふぞや。

千代　（この聲を聞いて、）あの子も蜻蛉をつりに行つたのか。・・・・

（暫く間。やがて佛壇の前に坐つて木魚をたゝき念佛をはじめる。）

上手よりきみ出る。

きみ　姉さん。姉さん。

千代聞えぬ樣。

きみ　（入口迄來て）姉さん。

千代　おゝ　おきみかえ。

きみ　父さんが待かねてぢや。

千代　あい、今行かうわいの。

きみ去る。千代佛壇の灯も消して、金包を懐に入れ、雨戸を繰り、浴衣と麻がらとをもつて出て、入口で迎へ火を焚きはじめる。

婆　出て來て）とう〳〵〳〵。とう〳〵とうとう。（千代をみて）牝鷄(めんどり)が一羽とひよ子が一匹まぎれ込んでゐねえかな。

千代　あゝ、をばさん。今日はいかいお世話でござりました。（あたりを見廻して）鷄(とり)らしいものも居りませぬが・・・・御心配なことでござりますな。

婆　（それには答へず）とう〳〵〳〵。

此時上手より「コケッコココケッコ」と鳴き乍らひよ子を追ふか樣にして牝鷄出て出る。

千代　あれ、まだ目が見えるのでござりませうか。

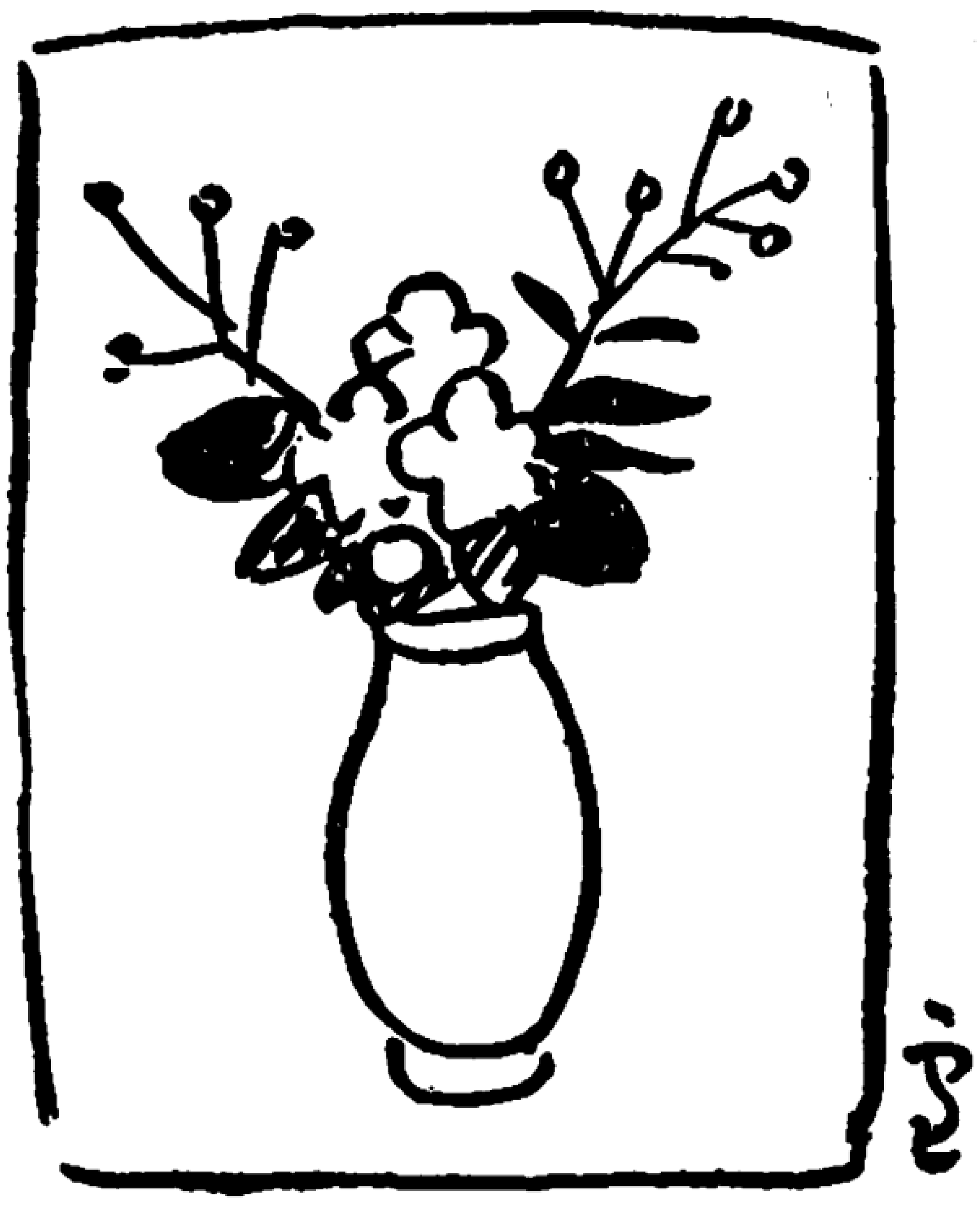
婆　（千代には答へず）とう〳〵〳〵（鷄他へそれる。）えゝ、どこへ行きくさる。とう〳〵〳〵。

庄屋　もう見えぬのでござりますな。それでもひよ子とは離れぬ樣にして・・・・

婆　とう〳〵〳〵（下手へ入る。）

迎火消えかゝる。夕闇せまり蟲の聲起る。空に高く鷺の聲。

（幕。）



吉田雛子

みちづれ

ヴイクトオル・マルゲリット

望月百合子 譯

第一章——六

遲れてゐたルウソオのアトリエ訪問は六月の終り頃と決つた。彼等の戀の父であるゼロノフはいかにも、愉快さうな顔をして、ボナパルト町の美術學校の廣庭で彼等を待つてゐた。

アニックは古い建物や、圓天井の下や、浮彫で裝飾された弓形の迫持の下や、樣々な時代の建物を繋いでゐる長い廊下を面白がつて通つた……お庭や、圍ひ地が澤山あつて、殆んど小さな都會程の廣さだ。彼女はこゝに住んで學生や、才氣に滿ち〳〵た顏や、活々とした眼の男や女が通るのを見てゐるのはいいなあと思つた。

『いいお仕事です事！生命を組立てたり、創造したりする事……お互に分離する事の出來ない美や醜さを以て』とアニックはゼロノフに言つた。

アメデエは趣味としては、もつと精選され、理想化された藝術の形態を好んでゐたけれども、彼女に贊成した。彼等は常春藤に縁どられた綠色の小徑の中心の大きな木立の下にある膨大な校長のアトリエに着いた。ジヤン・ルウソオは閾際で紙卷をくゆらしてゐた。

彼はその輝やかしい生涯の終りに、素朴な藝術家肌を殘してゐる老畫家らしい親しさで彼等の方に手を伸べ乍ら寄つて來た。彼はブルタアニユのつまらない職人の息子であることゝ——自分の作品に就て誇りを抱いてゐるばかりだ。六十歲になつても、敏捷で、小柄で、いたづらげに輝く眼のせいで、五十位にしか見えない。

アニックはアトリエにはいると、到る處に山のやうに畫布が展げたり積んだりしてあるので、どこから見始めていいか分らなかつた。粗雜な浮彫の生々としたスケッチ、また時としては、表現や人目を惹く色調を研究する下圖などが到る處にある。正面の奥に、あらゆる勞作に君臨するやうに、『元帥達』の巨大な壁畫が壁全體を占領して、長さ十メートル、高さ五メートルの三曲畫を展げてゐた。

ルウソオは、一九二〇年のサロンの騷々しい雜閙の中で、この戰爭とその醜惡とを想起させる驚くべき畫を發見した時と同じ暗默の讃美に打たれてゐるアニックの感動した眼をみて、びつくりした。

『えゝ、まだこゝにありますよ！ソルボンヌのために描いたんですが、ソルボンヌではいらないと言ふんです。秩序紊亂的ださうで！私が免職にならなかつたのはまだしもなんです…兄がゐなかつたら、私はとうに解雇されてゐたでせう。第一番に！』

兄のピエール・ルウソオは過激社會主義の老功者の一人で、巴里の代議士で、戰爭前、幾度も大臣になつた…。ジャクマンは——議會の狼といふものは意見が一致しない時でなければ、彼等同志でいがみ合はないこと——(とピエール・ルウソオは自分の意見が通らない程若い狼でないこと)を知つてゐたので——打ち消して言つた。

『彼等にそんなことが出來るもんですか！』

ルウソオは肩をすぼめた。そして三曲畫の左の畫を指して

『だつてこれがいけないつて云ふんですよ』と言つた。

それは——恐ろしい構圖に集められた——戰爭のあらゆる醜劣極まる狂亂の圖であつた。第一圖には喪服をつけ悲しみに滿ちた顏をした女達が廣い斬壕のやうな屍の堆積の上に蹲まつてゐた。生命の淸新さから死の腐敗へ、肉は垢の中に、泥や、血膿や、血や、繪の具皿のあらゆる色をさらけ出してゐた。其上には煙と火焰との空があり、戰火の合間に怒號する群衆が狂亂してゐた。薙ぎ倒され潰滅して仕舞つた列…地獄に落された人達は毒ガス帶と火焰の噴出とに包まれて苦しみもがいてゐた。…怪物大砲の雨…悲しい混亂のあらゆる恐るべき騷ぎがあつた。そして、遙か向ふには、絶えず援軍がほの靑い雲のやうに群がつて來て醉つた者の樣に戰火の渦の中に飛び込み、飛び込み、飛び込みする…職業上、或は恥づべき利得の僥倖で盲目的になつた人々の樣に此一九一四年の戰爭に參加するには余りに老ひてゐた畫家は、すぐ——最初避け難い災難だと信じ込んでゐる民衆を熱中せしめた暗い熱情について——、此戰爭が愛國心の名の下に行はれた國際的經濟變動に過ぎない事を覺つた。

其時から彼は只一つの願ひしか持たなかつた。それは戰爭が最も速やかな平和に依つて滿足な條件の許に終ることであつた！そして一九一九年に、戰爭が二年も前に終ることが出來たのだといふ確信を得たとき——一九一七年にアルサス・ロオレンをフランスに返し、ロイド・ジョオジの感情に從はずに、大統領リボや、ポアンカレが、イタリイと共に、悪い信念を、或はオーストリイ皇帝によつ

てなされた無力な提供を信じようとしなかつたならば――あらゆる大殺戮者に對する憤りが、どうしても彼の心から去らなくなつた。

そこで彼はこの三曲の繪を描いたのである。

中央は聯合軍の巴里歸着の光景だ。巨大な凱旋門はシャンゼリゼエを登つて行く行列に向つて扉を開放してゐた。その周圍の一方には見物人の波がひしめいてゐる。赤ら顏の彌次馬だの、氣取つて何か囁やき合ふ娘達だの……そして好奇心と有頂點の熱の中に此大都會は湧きかへり縺合つてゐる……そして他の一方には看護卒達の間に澤山の哀れな盲や、負傷者や、病人や、病後の人や、ちぎれた手足を動かしたり、松葉杖を振つたりしてゐる不具者達がゐる。……崩れた顏、縫目だらけの顏、非難と憎惡の眼がある。それから、榮光の門から行列の先頭が進出する。ブルウ・オリゾンの服を着たフオッシュ元師と、古い軍服を着たジョッフル元師とである。

馬上の勝利者――フオッシュは華美で、尊大で、元帥杖を腿の上に立てゝゐる。ジョッフルは元師杖をもてあまして、しつかりと手綱にしがみついて、落馬しはしまいかと恐れてゐる樣子だ……。その後に、樂隊と軍旗とを先立てゝ、外國軍の長い長い一隊がつゞき、その後に、この歸還のために眞實に働いた、ペタン元帥を先頭にフランス軍がつゞく……アヴニユウ・ド・ラ・グランダルメエの遙か彼方に消えて行く波のやうな隊列……最初の數列だけが嚴肅な顏をした生きた兵隊の姿で描かれてあるが、あとは果てしない、悲しい線である。……死人達！この終りのない行列に、落ち窪んだ眼窠と、白い頭盖骨とをもつて、參列したあらゆる死人達である……

三曲の右の繪は聖櫃を粉碎する場面でそこには凋んだ花の冠や、パラ〱になつた眞珠が積み重つてゐた。こゝにも又物々しい凱旋門があつた。石壘を持上げて髯の蓬々と生えた男が出て來た……それは――最近の戰爭で元師になつた人達が馬に乘る爲に自動車から降りてゐたり、又その他の元師達や軍隊が新らしい道にはいらうとしてゐるのが見えたりする群衆の集つてゐる道の方に腕を差延てゐる――凱旋門の支柱の頂きにも屆くかと思はれる程背の高い骸骨である。骸骨が痛ましい椎骨を東の方に向けるとその身振は未來を聖める樣に見える。そして自分を見本にして力の限り、未來の戰爭に向つて『止めろ！』と叫んでゐる。アニックとジヤクマンは愕然として眼を見交はした。彼等はお互に魂の底までも理解し分つてゐた。立體派にその表象の力を藉り樣としない繪畫に對しては非難するゼロノフだけれ共、ルウソウに對しては深い尊敬を抱いてゐた。そして一歩後じさりしながら此有名な畫布を指さした。

『此事では安心して可なりですよ。若し國家主義が喜ばないにしても國民と其上人類とが貴下の爲に殘ります』此お作は貴下を永遠に生かすものです』ルウソオは氣難かしい顏をしてぶつ〱言つた。彼のほんとに謙遜な心は讃辭も、興覺めのした作品も好なかつた。彼はカルトンを開けて數枚の新らしいデッサンを見せた。そこには

ソドムゴモルとが、巴里風の服装で、世界の如く古い風習があのサラバンドが社會的變革の後に來たデカダンス時代の様に近代化されて描かれてあつた。

『もう一つ他の三曲畫のスケッチです…さうです矢張この…『戰爭の後』程の大きさです…酒場や…女や若い娘までが病院や工場から出るとダンシングに行く…サロンの嘘僞、女性の眞の理想がある傍らに放蕩と逸樂との一般的な要求がある。幸福と愛情の理想…最後はアダムとイヴが和睦して、原始單純さに歸つて裸體で手をつなぎ合つて未來の市へ向つて歩いて行く場面です…』

アニックは熱心に聞いてゐた。アメデエとしつかり手を握り合つたまゝ。ルウソオはかうして思はず彼等を一層しつかりと結びつけた。黄金の輪よりももつとしつかりと、もつと確かに、彼等の信念の一致は彼等をお互の撰擇の中に結合した…

いたづら好きなゼロノフは二人を横目でみてゐた…歸りにはルウソオも廣庭まで見送つて外に出た。ゼロノフは愉快げに、いつかの夜、譯して聞かせたスラヴの唄を小聲で唄つた…『鳩は夕映の中を舞ふ。私の心は重い…これが戀であらうか？…』

思ひ出が二人の眼を輝やかせた。その眼は本能的にお互の同じ光を探した。輝きは徐々に火と成た。そして、今一日々々と養はれた彼等の魂から、二重の焰が其黄金色の光で、美しい日の夕暮と共に出で立つた新らしい道に素晴らしい明日に火を放ち乍ら迸り出る。

アメデエは彼女に對する悶々の情にかられ乍らも、尙露はにそれを出し得ないで、明瞭した言葉や態度を躊躇してゐた。彼は二人の間の同じ強さに引き合ふ力を感じなかつたのではないが、併しアニックに對しては、愛の行動が今迄、他の女に對して且て考へた事もない重大さを持つのであつた。彼女は處女とは名ばかりの娘達や、又はまだ半ば處女であり乍ら早く處女で無なりたいとしか思はない様な娘達とは全く異つてゐる。アニックが彼の爲にとつて置いたものはそれはほんとに婚禮の贈り物であり、無垢な人間の供物であつた。

社會黨の代議士ではあるが矢張ブルジョアの息子である彼はある愼しみを持てゐた。併しそれは要心ではない何故なら彼は喜んで全責任を負ふ程熱中してゐたのだから。そして其責任は戸籍簿に記入されて市長の裏書がしてあるのと同様に有効で確實なものだから。

併し、それは確かに、アニックも無些の要心もなしに處女を捧げるであらう事、そしてそれが自分の自由意志を彼女が誇る程明瞭した意志で行はれる事を彼はよく知つてゐたので、わざと彼女が自分から來る儘にしておいたのだ。彼は此時が來るであらう事を、非常に速やかに來るであらう事を信じてゐた。彼等はゼロノフと別れてから、或訴訟事件の爲の面會でヴエルサイユに行つた。それはアニックが準備した事件だから彼女も一緒に行つて呉る様にと彼が希望したのだ。面會が四時に濟んだので、彼等はマドモアゼル・アルデイを訪問して吃驚させようと思つた。

『それからブランシエ夫妻にも會ひに行けるでせう。丁度いい機會です。貴女はあの人達を知りたがつてゐらしたんだから。私にとつても貴方があの人達と友達になることは嬉しいですよ。何故つて、貴女も私のやうに、きつとあの人達を愛するやうになるに違ひないから……』とアメデエが言つた。

學校はアヴニユウ・ド・パリに、新らしい大きな建物と、老木の欝さうたる中庭とをひろげてゐた。教會は空つぽになつてゐた。彼等は放課後に行き着いたのでマドモアゼル・アルデイは丁度、薔薇の木の手入れ最中で、萎んだ花を摘みとつてゐたが、彼等を見つけると、嬉しさうに叫んだ。

『これは、これはようこそ!』

アニックがルポオに對して考へてゐたことに就いて反對であつただけ、それだけ彼女はアニックが遂にアメデエの方に惹きつけられて行つた傾向については喜んでゐた。こんな男とでは彼女が幸福であるための、あらゆる幸運がある、と彼女は思つた。

彼女はいそ〳〵と學校を彼等に參觀させた。そして最後に、二階の自分のアパートメントを見せた。田舍風の質素な家具だけれども輝やくばかりの清潔さと、古めかしい魅力とに心を惹かれる。食堂には大きな鳥籠があつて、カナリヤがゐた。そしてこの老孃をみつけると、小さな黄いろい小鳥達は嬉しさうに囀り出した。細い宿り木の端を飛んだり、キユイ、キユイと叫び乍ら口を開いたりした。小さな小さな眼さへも彼女を呼ぶのであつた。

彼女はローザの事件はどうなつたか?と訊ねた……――彼女はいつでも同じ狀態で、反抗するか氣ぬけがしてゐるかだ…岩のやうで、まだ涙のやさしい泉が逆り出ない、…訴訟は?――十月二十一日の裁判に決つた。ルポオは、ローザが訴へようとしてゐることを知つた。…そんな會話の後で、

『あの男は、私が訴えることを引受けたので迚も怒つてゐますの』とアニックは笑ひ乍ら言つた。『あの男はラッペルの昔の私の朋輩だつた編輯書記の一人をよこして私を强迫させたんですよ…迚も恐ろしい!…若し私が不幸にして訴訟を決定したり、少しでも仄めかしたりすれば、私の未來を臺なしにすると云ふんですの、私の女辯護士としての生涯を粉碎すると言ふんですの…中傷、恐喝として反訴を起すと云ふんですの』

『さうしたら面白いですね』とジヤックマンは平然と言つた。

『えゝえ!例へ貴方がゐらして下さらなくつたつて、私はちつとも恐れはしませんよ、しかも貴方と御一緒ですもの…』

彼女は彼の手を執つた、彼となら、世界の果迄も、恐れる事なく彼女は行くであらう。マドモアゼル・アルデイは滿足相に、澄んだ視線で二人を包んだ。二人とも、この淸新な魂を通して降りかゝる優しさを感じて同時に二人の愛情を彼女に報ひた。彼女はアニックの方に兩腕を擴げた。アニックはそこに子供の樣に飛びついて行つ

た……『私は、お許し下さいますか？』とアメデエは彼女達の抱擁が濟んだ時に言つた。

彼は無器用に彼女に近づいた。彼女は彼をも息子のやうに抱擁した。彼は老ひた頬の上にアニックの脣の跡を見出して、最初のそして最も壯嚴な接吻を、アニックと交はしたやうに思つた……――それは彼女が『小母さん（メレット）』と呼び、彼女の眞の母であり、家族であつたひとの同意で、未來に彼等をつないだ接吻であつた……

『おや、もうお歸り！こんなに速く！私と一緒にお夕飯を食べてはくれないの？』とマドモアゼル・アルデイは悲しさうに言つた。

『今日はだめ又來ますわ、では近いうちに』とアニックが言つた。

彼女は無暗に彼と二人丈になりたかつた。彼女は巴里に歸る前にヴエルサイユの綠園を散歩する爲には喜んでブランシエ夫妻訪問をも犧牲にしたであらう。けれども彼等は直近所に住んでゐた。弓形の長押と、苔むした石の甕とを持つたルイ十五世式の高い門……

『まあ美しいこと』と彼等は入り乍ら感嘆した。

芝生の奧に何百年を經たマロニエに圍まれてゐる物々しい古い家は長くて低くて屋根には屋根裏部屋の窓があつた。常春藤の葉の中に切り開らかれた窓毎に薔薇色のジエラニユムが咲き亂れてゐた。

彼等は花盛りのアカシアの木の下に腰かけて何か讀んでゐる若い婦人を見附た。その婦人は明るい色のローブを着て兩腕を出してゐた。其傍にはうば車があつた、訪問を知らせる鐘の音で彼女は顏を上げた。同時に中央の出入窓にこの家の主人が姿を現した。遠くから彼は親友ジヤクマンを認めて愉快さうに手を振つた。彼等は師範學校時代の學友で戰爭中は又千九百十五年のシヤムパアニユの最初の攻擊の後の撤兵の偶然から、步兵卒のブランシエと砲兵卒のジヤクマンとが、病院の隣り合つた病床に不思議にもめぐり合つたのであつた……

二人の女は互に紹介された。

『司法省の女辯護士で、私の勞働者ラムベエル孃です……こちらはモニック・ブランシエ二人の男達は腕を組合つて、芝生と家の間の廣い道を縱橫に行つたり來たりした。彼等は艱難を一緒に受けて來た事から一層親密になつた學友のまゝの氣輕さで元氣にしやべつた。

すぐ、モニックは、そのブロンドの美の輝やきと、生きた花そのもののやうなそのひととなり全體から迸り出る卒直さで、アニックを惹きつけた。アメデエから、彼女について――生れた家を出てからの彼女の冒險や、彼女の、ブルジヨアの娘としてやゝ極端な（と彼は考へた）個人の自由に就ての考へや（併しそれは曾はない前から彼女に好感を持たせた）――聞いてゐたことがあるにも拘らず、アニックは彼女を見て鄙劣な、僞善な、そして意地の惡い世の中の判斷と、幸福がひとゝなりを麻痺させなかつたこの輝やくばかりの若い女との間には、眞面目な魂にとつて非常な深淵があり、そしてその深淵は嘘と眞實とを分けるものであることを知つた。

モニックはうば車の中に眠つてゐる子供を見せた……――『十五ケ月になりますの……』人形のやうにつやつやしい、圓い小さな顔は健やかに息づいてゐた。彼女は誇らかであつた。母性は彼女を和やかにし、力と平靜の鎧のやうなものを彼女に着せた……彼女があれ程やさしく、あれ程純粹に愛して來た夫と、彼女が熱愛する子供達との間に、かつてはあれ程不安定であつた彼女の全生活が、しつかりとした連絡をもつて靜かに落ついてゐる……

アニックに對しては、本能的に打ちとけられて、彼女に小さな女の子を見せることもまたひとつの誇らかな喜びであつた――生れてから一ケ月目ですの！と言ひ乍ら、モニックは育兒室までもアニックをつれて行つた。……白蚊帳を張つた搖籃の中に、年とつた婆やに見守られて、小さな赤い塊が、强情に泣き乍らうごいてゐた……『咽が渇いてゐるんでございますよ』と婆やが言つた。

モニックは衞生の注意の指針である、壁の大時計を見た……

『無理もないわ、もうすぐお乳の時間だもの……幸ひとお乳人が來合せてよかつたね……一寸失禮！』

彼女はローブの一方の肩のところのホックを外して胸をひらげた。それは靑い靜脈の網のある美しい肉の引きしまつたまろやかな胸であつた。お乳は白い皮膚やぴんとした乳首を盛り上らせてゐた。そのお乳を小さな赤んぼはがつがつと吸ひ始めた。モニックは恍惚として、がつがつする唇や、彼女の胸をまさぐる小さな手を眺めてゐた。アニックはこの神聖な交流、この、只一つの生命に息つくやうな、幸福な母から滿足する子供への生命の流れの前にすつかり感動してしまつた……

『ねえ』と彼女はアメデエとアヴニウの果ての綠の框の中に壯麗な一劃を聳立てゝゐるお城の方に登つてゐる時言つた。……『モニックをどうお思ひになつて？……あのひとはほんとに幸福よ……』

『そしてその幸福を守らうとする意思を持つてゐますね……』

『あの人は平和に幸福を享樂する爲には隨分な犧牲を拂ひましたわ！だけどあの人位の事はどれ丈の女達がして來たか分りはしないのよ只他の女達は隱してゐる丈、そしてそんな事は忘れつちまつて威張つて生活してゐるんですわ！下らない人達の評判なんか！……』

彼女はそのまゝ言葉を切つた。幸福！彼女もまたすぐ自分の傍にその幸福を持つてゐる。そして彼女もその幸福を守り、他人の侵略から防ぐことを知るだらう！……ある豫感が彼女の心をかすめた。彼女はあらゆる偏見や、あらゆる古い力と鬪はねばならないだらう……併し愛の精力は、彼女の靑春の精力を增しつゝ――朗らかな、同時に深くも混亂した――彼女を、運命に向つて疾走せしめた。

彼女は、かつての娘達にとつては、女として母としての大役のまもりを厚くとり圍んでゐるあらゆる祕密を知つてゐるつもりでゐた。けれども實際は何にも知らないのだつた。そして彼女の心にマ

ラルメの詩の『私は未知なものを待つ！』――といふエロデイアードの言葉が不思議に囁きかけた。だから彼女はアメデエに何か問ひかけられても意見を話されても只ぼんやりと答へてゐた。

いつの間にか彼等はブラス・ダルムの鐵柵の處まで來てゐた。二人は無意識に庭園に行く段々を登つてしまつた。一片の雲もない青磁色の空に傾く太陽は、壯嚴なヴエルサイユの上に、手にも觸れない程細かい黄金の粉を、やさしくふりまいてゐた……

『後園の中はいいでせうね、少し散歩しませう』と彼女は囁やいた。

『私もさう思つてた所です、それからレゼルヴアルで晩餐をとつてもいいですね……この素晴らしい背景の（彼は池や、その彼方のオランジユリイの柵や、森のエメロオドの中に埋もれたスイス池の遠景を指さした）一番美しい時は、夕方です……太陽が少し沈みかけてもつと熱を放射しなくなると、特別な風景になるんです……』

黄楊で幾何學的な線を描かれた庭の株や、苔に蝕まれた美しい甕や、青ばんだ胸背等にそつて、淋しい後園の方に行くに從つて、彼はしめつけられるやうに落つきを失つた。彼はそれをまぎらすやうに、ある花壇の中の三段程の段々を降り乍ら『これは薔薇色大理石です！』と指さした。印度カネーションのほろ苦い香がエリオトロープの滑らかな匂ひとまざり合つた。彼等は過去のあらゆる詩、あらゆるメランコリイを呼吸するやうに感じた。彼等の周圍にはまた思ひ出や、熱情や、榮光をもつた大きな輝やかしい影と、かつては在り、今は更らにない虚榮とが漂つてゐた。

美麗な場所から、輝やかしい陽から湧き出るやうな、幸福であれといふ言葉に、ふと、一歩毎に死に近づくのだといふ聲と、生への激しい呼びかけとが加はつた。有名な人々の幻しや、こゝで苦しんだり、樂しんだりした名も知れぬ人々の幻は、死んで迄尙彼等に、時は果物のやうに摘みとられるのだ、と囁やいた。

みんなが季節の短かいこと、そして自然の偉大な平和さと、その窪みに冬が來て、そこからまた春が甦へることとを語つた。忘却、――青銅や大理石が藝術品として不朽ならしめたにも拘らず、若し彼等の想像でかつての幻が現はれなかつたならば、この墓場にひとり漲ぎり渡る――人間の運命を豫言するやうな忘却は、彼等の喜びを悲しみに沈ませるどころではなく、却つて彼等を全的に刺戟した。……彼等は生きてゐるのだもの！生きてゐるのだもの！……本能的に二人は抱き合つた。そして束の間の生命を思ふさま味はうやうに同じ步調で歩いて行つた。彼等の前にははつきりとした未來がひろがり、長い長い愛の道がひろがつた。

ラビリンスもコロナアアドも、ジヤルダン・デユ・ロアも、熱望に夢中になり乍ら彼等が通つて行くのを見た。彼女は彼に體をもたせた。あかしでの眞直な並木も、葉越しに空を映してゐる池の淀みも彼等の眼には入らなかつた。……靑、綠、黄金の色で、この夕暮は膨大な花束であつた。そしてそこから息のやうに、土の力強い香り

が立ち昇つてゐた。
彼等はタッピ・ヴェールを通り過ぎた。そしてこの最後の散歩者達はグラン・カナルに沿つた人氣のない小徑にはいつて行つた。
まるで世界の果てのやうだ。草はかつて王路を埋め、只何百年の並木が新綠の高い天蓋で路の跡を止めてゐるのみだ。彼等は一歩毎に生きた寺院の半影の中にはいつて行くやうな感じを受けた。
鳥がピイと啼いた。葉の茂みの上では、黄色い蝶々が舞つてゐた。亞麻靑のひるがほが灌木の茂みにはびこつてゐた。彼は身を屈めて一輪の野生の花をつんでアニックに與へた。
『今日の散歩の記念に！』
彼女は手を差し出した。彼はその手をとつて接吻した。それからその手を引つぱり乍ら、
『一緒に花束をこしらへませう…』と言つた。いたづらつ子のやうな調子ではあつたけれど、聲は震へてゐた。
『えゝ、ぢやお花を私に投げて下さい！…』
彼女は苔の上に腰を下ろした。彼もその傍に並んだ。そして貪るやうな眼で、彼女のすんなりと投げ出された體を眺めまわした。輝やくばかりの脚は、絹の下から彼の心を恍惚ならしめ、胸は皷動でふくれ上り、口は同意するものゝやうに開らかれた。
『アニック』と彼は哀願するやうに言つた。
彼女は彼の肩に頭をもたせた。
『可愛いい…』
二人の唇は一つになつた。
『僕は貴女を愛する…貴女は？…僕を愛してくれますか？』
彼女の顏の上に身を屈めて、彼は彼女の『ええ』を飲み込んでしまつた。彼はしつかりと彼女を抱きしめて陶然とした。
『幸福だ！幸福だ！僕のものになつてくれる？え？…』
答へるかわりに彼女は彼を抱きしめた。
『づつと〱前から、僕は貴女を欲しかつた。だけど僕は貴女自身からくれるのを待つてゐた…僕の戀人…私の妻…』
デリケートな結合が成就された。
アニックは眼をみ開いた時、激しい本能から再びアメデエの唇に縋つた…今經驗した苦痛に、自分が喜びの、同時に限りない感謝と、陶醉に疲れた塊でしかない様な快感がまざり合つた。…
『私は貴方を愛する。私は貴方のものです。…私の肉體の凡てが私の心の凡てが』と囁やいた。
『僕も貴女を愛する。僕は貴方のものだ』と熱情をこめて彼も言つた。彼女が立ち上つた時、もみくちやになつたひるがほが、彼女のスカートの襞から落ちた…アメデエはもう一つ他の花を摘んだ。
『この時の記念に…』彼女はか細い花辨に接吻した。
彼等は一緒に同じ誇りを、自然の面前で彼等の心の宗教に從つて、彼等の自由結婚の式を擧げたといふ誇りを感じた。

婦人彙報

◇女理學士の學位論文

理學士黑田ちか子さんは大正十三年から滿四年のあひだ研究室に籠つて「紅」の研究中だつたが今回完成し、學位論文を東北帝大に提出した。これが通れば日本最初の女理博となる譯だ。べには昔から植物性のものとされ印度の特産物だつたのが近來獨逸の人造紅に壓倒され植物性のべにの正體は今日まで學問上化學上判らなかつたのが、今度黑田さんの研究でその構造、性質まで究められたのだ。

◇帝大から最初の婦人留學生

東大附屬病院整形外科にたつた一人研究中の若き女性――竹澤貞女(二七)さんは昨年の醫學大會外二三の醫學會で幼兒の脫臼研究について論文を發表してゐた篤學の婦人だが、今度文部省留學生としてドイツへ二年間留學する事となつた。醫學研究のため帝大から海外へ行くのは貞女さんが最初で九月二十二日に橫濱出帆の船ときまつた。竹澤さんは大正十五年吉岡女史の推薦で東大に依託研究生となつに人、渡歐後はクリッペル・ハイム(不具者の醫學)を研究の筈で日本最初の女醫學博士になる由。

◇英國の婦人新議員

今回の英國總選擧には勞働黨二八七保守黨二五五自由黨五五その他九といふ結果で勞働黨の勝利に歸し、婦人の立候補者中當選十四名、內勞働黨九名、保守黨三名、自由黨一名であるが主なる人――ボンドフイールド女史は前勞働次官。ヘレン・ウイルキンソン女史は社會事業家で女流小說家。スザン・ローレンス孃。ジエニー・リー孃は廿五歲の最年少者で抗夫の娘に生れエヂンバラ大學卒業、文學、法學の兩博士號を有つ。エシル・ベンダム女史は女醫で博士。保守黨のアゾール公爵夫人は前文部次官。アスター夫人は英國最古參の婦人議員、かんしやく持ちで知られてゐる。自由黨のメガン・ロイドジヨーヂ孃は黨主ロイド・ジヨーヂ氏の愛孃で父親の懷刀、壓倒的大多數で當選した。無所屬のエリノア・ラスボーン孃は全國平等市民權同盟の會長で夙に婦人運動家として知られ、著述家としても有名な人。

◇獨逸で出版される古事記

福岡市外香椎宮宮司の息でいまベルリン大學に留學中の木下毅氏は多年努力の結果今回古事記の獨譯を完成、あちらの書店から出版する事にしたが印刷費が高價で途方にくれてゐたのを前駐日ゾルフ大使が聞き出版後援會を組織して支出することになり、九大文學部鹿子木員信博士は今度獨逸から歸朝すると文部省、日獨文化協會を歷訪しその出費を依賴する事になつた。歐洲で古事記の完譯が出版されるのはこれが始めてゞある。

◇新議員ウイルキンソン孃

英國勞働黨から再選した同孃は水ぎわだつた婦人鬪士だが今度の總選擧の少し前から「爭鬪」と題する小說を一新聞に連載し文名を走せた。舞臺を一九二六年のゼネストにとり女主人公の權力の虛榮とその愛人に對する愛慾との深刻な葛藤を描きその間各政黨の軋轢階級鬪爭を巧に織り交ぜてゐる。堅苦しい演說よりも今回の選擧には遙に利き目が多かつたやうだ。

◇大妻女史全財產を寄附

先日、校主で夫君であつた良馬氏と永別した大妻高女校長、大妻コタカ女史は嗣子のないところから大妻家を廢家し、高女、技藝女學校の敷地校舍その他を加へた全財產四十一萬一千餘圓全部を寄附して新たに財團法人大妻學院を設立することになつた。何良馬氏の生命保險金及び恩給扶助料合せて七萬二千餘圓は全部教職員恩給基金に加へ大妻女史は身一つになつて將來は一校長として努力する事となつた由。學校經營者の財產もかうして見ると成程小さくない。

◇海外へ行く婦人達の集り

南米その他の地に鍬をとらうとする婦人達が十八日靑山會館で集つた。この會は、日本棋院の岩本六段一家がブラジルに渡り「愛の村」を建設中なのでその趣旨に同感した人々がブラジル以外にも發展を試みやうといふ意氣で集つた。渡航は今秋以後。中で實業家田中寬氏方に女中をしてゐる西端幸子さん(二一)林千代子さん(二一)は看護婦で產婆さん　東洋女子齒科醫專に在學中の鈴木まり子さんはビルマへ渡つて特產のルビーサファイヤ琥珀瑪瑙などの寶石を拾ふのだとまるでお伽話の樣だが、同地では殆ど仕事の一つださうで林さんは夢を見てゐるのではない由。

◇少年工の指の價

王子電線合資會社に雇はれてゐた藤井茂といふ少年工が、同會社を對手取つて、慰謝料損害賠償金五千圓の請求訴訟を起した。茂はかつて、電線中ゴムねぢり機械付きといふ非常に危險な仕事にまわ

されて、ゴムを投入中ロールに右手をはさまれて指を三本失つたが會社ではろく〳〵手當てもしないで不具になつた少年を解雇してしまつた。茂の家は父親が亡く、唯一の働き手である茂が不具失職といふ悲慘な狀態で、慰謝料も九千五百圓が相當なのに、印紙代がなくて五千圓を請求した有樣だ。

◇生徒を毆り殺した先生

鹿兒島縣下和田小學校の訓導竹下弘は、五年生の池田廣が教室內で賭博のまねをしたのに腹を立て亂暴にも毆打、死亡せしめたとて問題を起してゐたが、死體解剖の結果打僕致死の事實明白となり、同訓導は令狀を執行された。

◇取拂はれにお局部屋

昔から男子禁制、樣々物語りの種をかもした官城のお局部屋が、女官制の改正で通勤制度になつた爲に取こはされる事になつた。お局部屋といふのは約一千五百坪の廣大な建物で全部檜造り、一戸には居間、客間、書齋、化粧室、女中室、臺所などで、これ等が取拂はれた跡には下級女官の官舍が建てられる豫定である。

◇市の衞生人夫の怠業

本所區內の衞生人夫久保田與三郎外六名が解雇されたについて、市內九十二名の衞生夫が結束猛烈な復職運動を起した。規定のゴミ取り七十五貫を百五十貫に增しても取り切れぬのに解雇者を出すとは怪しからぬと左の要求書を出した。

一、七名無條件で復職せしめよ

二、勤續年限を通算した解雇手當てを制定せよ。

◇丸の內ホテルの爭議

つね〳〵とかくの評の多い丸の內ホテルで、雇人の爭議が持上つた。原因は同ホテルの松浦總務部長が帳場係の女事務員小島と關係した事を女給達が知つて評判になつたので驚いた松浦總務は狼狽、十四名の男女雇人を無斷馘首したためで、從業員等はその無法を憤慨して、無警告馘首反對、解雇手當要求等の決議をした。

◇東京市のガス値下げ問題

二百萬市民に高い、空氣の多いガスを使はせ乍ら、多額の配當をつゞけてゐる東京ガス會社の橫暴振りに對して、今市會にガス値下げ問題が提出され論議されてゐる一方、各所にガス値下げ運動が猛烈に起されてゐる。市民の生活に最も密接な台所の問題であるだけに、會社の不誠實に對する非難反感の聲はます〳〵高く、婦選獲得同盟、婦人市政硏究會、社民黨のガス値下期成同盟など各婦人團體が盛んに活躍してゐる。なほこの際東京ガスの獨占事業反對運動が起つて、ガス會社設立願ひが續々と提出される有樣である。

◇北海道の電燈値さげ運動

北海道江差町の電燈爭議は二ケ月餘に渡つて係爭中であるが、兩者の態度强硬で、江差電燈會社では六百六十燈の消燈を斷行し、ますます惡化の形勢である。爭議は更に近隣の町村をも喚起させ、中頓別村では全村一致廢燈を決議した。

◇本所で新興大和繪展覽會

江東美術展では、松岡映丘氏の贊成を得て、本所柳島の帝大セツツルメントで、新興大和繪會を開いた。中に榊原綾子さんが唯一人の女性の出品者である。

◇大富豪連の空約束

市內の細民世帶二万五千、人口十萬人の救濟事業として方面事業後援會といふのが設立され、寄附金募集をしてゐるが、三井、三菱、安田、大倉などの大富豪は、約束ばかりで一向お金を出さないので、大分困難してゐる。方面委員は、社會事業後援デーの名の下に寄附興行を行つておぎなふといふ。

◇堺氏の無產市「新聞發刊

普選劈頭の東京市會議員に當選した堺利彥氏は毎月一回「無產市民」と題する小新聞を發行して、從來秘密の多い市政の大小事を一般市民の前に報導するその一號が出た。「堺は無產黨員ですから、世間一般の事を語るにもすべて無產黨の立場からやります」といふ。小市民、——勞働者、被雇人、小月給取などに呼びかける面白い試みで、一號には市會の日記が出てゐる。

◇宋慶齡女史支那へ歸る

國民政府の政策に飽たらず海外に去つてゐた故孫逸仙の夫人宋慶齡女史は、故孫文氏の移柩式に參列のため南京に歸つた。尙女史は移柩式に間に合はすためベルリンから飛行機でモスコウに到著シベリア急行列車に乘つたのだつた。

◇邦人の婦女子監禁

支那福建省、福州南方第三百支里の山奥に邦人の婦女に約五十名が誘拐監禁されて、牛馬の如く酷使されてゐるといふ報導がある。彼女等はいづれも南方支那から內地に入り込んで來た支那行商に誘拐され、農奴として賣飛されたものであるといふが、アジア谷第一課長は、知らないといつてゐる。

編輯後記

一ぱいの力をこめて――私の心が私に命令した時、私は今日だけの命だと思つて事にあたる。いふに足らない微温的なものではあらうが。先日哈爾賓へ歸られた栗栖蔦子さんから一時なくして殘りしものあるを聞かず」と誡められた。何とやらん急ぐ心を感知されたかと、六月の夕風のやうなほゝえみが胸を流れる。「女人大衆」は十錢位で別册につくるのが、「女人藝術」が生れた時からの約束であつたが、まだ別册のものをつくる餘裕がないのでフロクにした。お妹さんに、お女中さんに、おとなりのお娘御さんにあげて下さい。來月はもつとよくする。

創刊記念祝賀藝術祭は卷頭豫告の通り盛んなるプログラムである、賑々しくあの廣い音樂堂を埋め氣勢を添て下さい。此際「全女性進出行進曲」を合唱したかつた。プログラムには既に合唱するやうにさへ記したが、別記の如く勝れたものがなくて一同遺憾やる方なし。時雨脚本集が賣れてすこしでも儲けがあれば女人藝術がふとるわけです、買つて下さい。(時雨)

今月は女人藝術の誕生月です。雑誌の成長振りをよく見て頂きたい。ふだんより五十頁も増頁したのに、まだ豫告までした宮本氏のらいてう論其の他を組おきにしなければなりませんでした。(葉子)

藝術祭の準備は殆ど出來上つた大雨の中を私は某孃を訪問した。そして私達全女性の爲の此の會に是非ピアノを彈いて頂きたいと鄭重に御願ひしたが極簡單な言葉で退けられた。又芝居の方も私達の手でと努力してみたがさう簡單にゆかない事がわかつた。私達はまだ社會的にはほんの微弱な存在に過ぎないのだ。(熱田)

「全女性進出歌」は當選作がなかつたので第二回募集をする。口語體のもほしいものである、藝術祭の劇も出來るなら女流作品にしたかつた。(その子)

稀にみる充實した紙面――女人大衆も生まれました。この廿二日の藝術祭を前にして編輯室はみな活々とした緊張ぶりを示してゐます。女人聯盟も發表後新らしい加入者がだん〳〵殖えてゆきます。來月號では聯盟員に親しみを持つ事や研究の方法などについて、具體的なことを申上げ得られるでせう。地方に住んでおられる多くの友よ、本誌を中心としてお互にかたく手を握りあひませう。女人の前途は多難で、そして明るい。本誌の前途も海のやうに洋々としてゐることを、喜びます。(秋子)

開け放つた窓から夏の風が吹きこんで綠葉の匂ひが室の中にむれる。夏がきた。女人藝術が生れた夏が來た。一年前に蒔れた種が、雨風の中に深く地に根をはつた。(私はそう信ずる)そして之から地上に高く伸びてゆこうとしてゐるのだ。女人よ！ 友よ！ 之から伸びてゆく私達の女人藝術を祝福して下さい。愛しいとしみ支持して下さい。女人よ！ 友よ！ 手をつなぎ合つてゆきませう、私達女人の幸はせのために(みどり)

女人藝術もいよいよ一週年を徴へて實に喜ばしいことである。なほはるかに多幸なるべき前途を控へて、この一週年の喜びは早い小さい喜びであらうことは勿論であるが、然し大に喜ぶこと卽ち生氣を湧き立たすこととなる。社のこの際の種々の試みに對して廣く大方の御聲援をまつ。全女人行進曲の歌については、地方僻遠の女人の應募に熱望的な全力的なものの多かつたのは嬉しかつた。女人藝術が都會に於いて歡迎され支持されてゐることに倍加して地方女人の協賛がのぞましくおもはれてゐる際だからである。一人より二人へ、二人より更に四人に四人よりさらに八人に、ネズミ算をもつて女人聯盟の大多數にならんことを、子の年女深くこひのぞむ。(花世)

振替御送金の場合にはかならず送料を加えて下さい。切手送料の場合は一割増にお願ひいたします今月は増額をいたしましたから年決めの方達には差引いて御通知をいたします。(營業部)

昭和四年六月二十日印刷
昭和四年七月一日發行(毎月一回一日發行)

送料一部 壹錢五厘

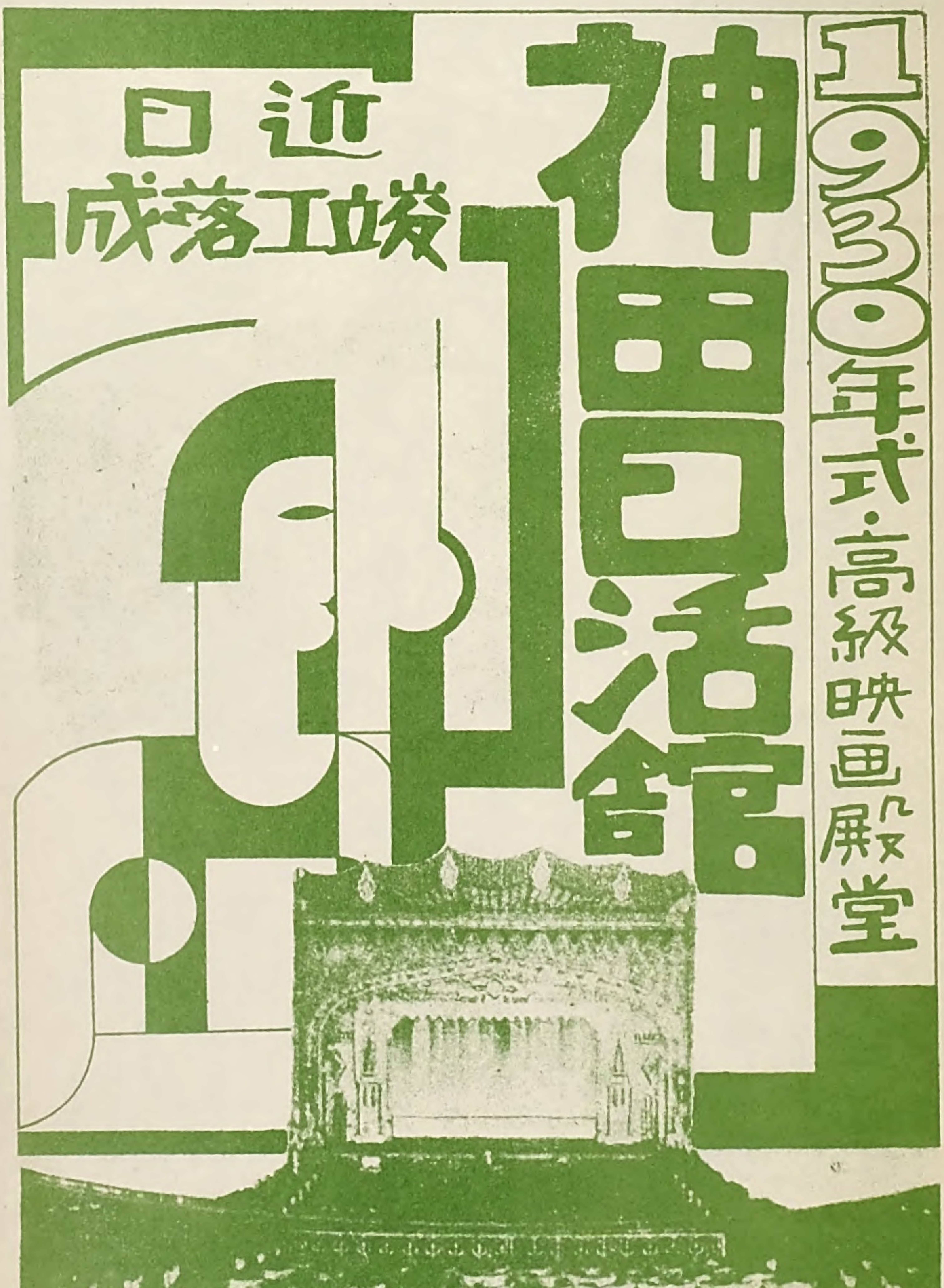
定價	
1部	……40錢
6部	……2.30錢
12部	……4.50錢

□誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ。
□郵便切手代用は一割増の事。

發行兼印刷者――長谷川時雨
編輯者――素川絹子
印刷所――秀英舍
大賣捌――東京堂――大東館
――北隆館――東海堂

發行所 東京市牛込區左内町三十一地番 女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京 七五八二五

本號ニ限リ定價四拾五錢


1930年式・高級映画殿堂
神田日活館
近日
竣工落成



三越の中元大賣出し

七月一日より全店一齊に開催致します

御中元御贈答用には何方様もお喜びの三越の品をお用ゐ遊ばすに限ります

三越では御贈答に相應しい流行品や實用品を各種澤山に取揃へて居ります。何卒御用命の程偏に御願ひ申し上げます

商品券

三越の商品券は御贈答用として贈るに御便利、受けて御重寶であります

東京市 三越 日本橋